熊本県文化財調査報告　第20集

黒橋

熊本県下益城郡城南町黒橋貝塚

1976

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第20集

黒橋

熊本県下益城郡城南町黒橋貝塚

1976

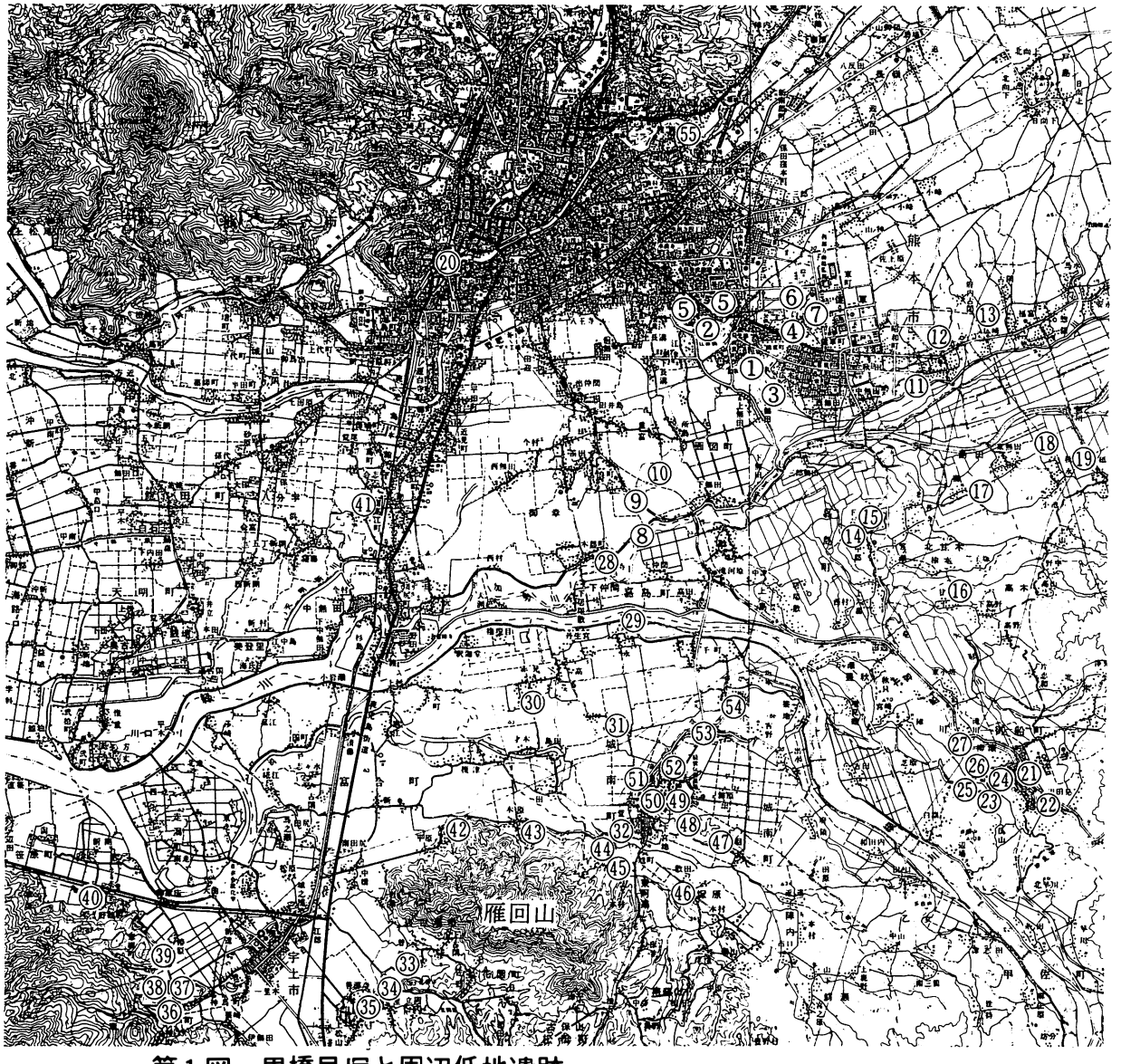
熊本県教育委員会

○ 黒 橋 貝 塚

（　　）内縄文

①	江津湖東岸遺跡群	（晩期）弥生　前～中
②	上江津湖遺跡	〃　〃
③	江津湖中の島遺跡	（晩期）弥生　前
④	健軍遺跡群	（〃　）
⑤	神水遺跡	弥生中期
⑥	健軍神社遺跡	（晩期初頭）
⑦	上の原遺跡	（〃　前半）
⑧	八幡塚遺跡	弥生前期
⑨	二石（にこく）遺跡	弥生前期末
⑩	重富遺跡	古式土師
⑪	沼山津（ぬやまず）貝塚	中期末～後期
⑫	沼山津遺跡	（縄文？）弥生末、土師
⑬	古閑遺跡	（縄文晩期）弥生、土師
⑭	カキワラ貝塚	（曽畑）
⑮	下六嘉遺跡群	弥生中期
⑯	甘木貝塚	（後期）
⑰	櫛島遺跡	（早、前）
⑱	秋永（あきなが）遺跡	土師、須恵
⑲	八反田（はっただ）遺跡	弥生前期
⑳		遺跡かどうか判定不能
㉑	六丁目遺跡	弥生後期
㉒	辺田見貝塚	（後期）
㉓	岩屋堂Ａ	（後期、晩期）
㉔	下山神（しもさんじん）Ｂ	（後期）弥生後期
㉕	南原Ａ	（早期、後期）
㉖	〃　Ｂ	弥生後期
㉗	今城大塚	古墳
㉘	加勢川河底遺跡	弥生前期
㉙	永遺跡	弥生中後期
㉚	赤見遺跡	〃
㉛	碇遺跡	〃
㉜	黒橋貝塚	（後期）
㉝	曽畑貝塚	（前期）
㉞	古保里（こおざと）貝塚	（後期）
㉟	境目貝塚	弥生
㊱	石橋貝塚	〃
㊲	轟貝塚（西岡台貝塚）	（前期）
㊳	〃	（〃）
㊴	樽原（つばはら）遺跡	弥生
㊵	野鶴貝塚	（後期）
㊶	白藤（しらふじ）遺跡	青磁
㊷	ソビエ石貝塚	（後期）
㊸	木原遺跡	（ドルメン）
㊹	阿高貝塚	（中期～後・晩期）
㊺	御領貝塚	（後期末～晩期）
㊻	敷田貝塚	（後期）
㊼	沈目遺跡	（早期）土師
㊽	下宮地（向憍現）貝塚	弥生・中後期
㊾	隈庄遺跡	弥生・中後期
㊿	中尾貝塚	弥生・中後期
51	囲貝塚	弥生・中後期
52	宮地遺跡	〃
53	今村貝塚	〃
54	平野遺跡	〃
55	渡鹿（とろく）貝塚	（後期）

0　　4 km



第１図　黒橋貝塚と周辺低地遺跡

序

昭和47年７月６日熊本県下を襲った大豪雨により発見されました黒橋貝塚は、表採資料より阿高貝塚と御領貝塚の中間をうめる時期の貝塚であることが学術的に位置づけられた貴重な遺跡となりました。

この黒橋貝塚が、浜戸川災害復旧助成事業による河川改修が実施されるにあたり危機に瀕することになり、県土木部河川課と県教育委員会とが協議し、県教育委員会で発掘調査を行いました。

今回、昭和48年３月に実施致しました確認調査および昭和50年に行いました発掘調査の成果を報告し、今後の学術研究の資料の一助となれば私どものよろこびとするところであります。

発掘調査にあたりましては、ご理解とご協力をいただきました県土木部河川課および地元教育委員会をはじめとする関係各位の方々、ならびに多大のご教示・ご支援をいただきました諸先生方に深く感謝いたします。

昭和51年３月31日

熊本県教育委員会

教育長　林　田　正　恒

例　　言

本稿は浜戸川災害復旧助成事業に伴う緊急調査として、熊本県土木部河川課の委託により、熊本県教育委員会が実施した黒橋貝塚の調査報告書である。

本稿の執筆は西田道世が主として行い、一部協力をうけた。また専門的立場からの調査所見について、山口大学教授小野忠熙、九州大学助手木村幾多郎、県立宇土高等学校の森通保、林行敏の各氏から玉稿をいただいた。

遺物の整理、実測は文化財収蔵庫で行い、製図は西田と島津陽子氏があたり、写真撮影は白石巌氏に負うところが多い。

報告書の編集には、隈昭志、西田道世、西町圭子がこれにあたった。

調 査 団 の 編 成

調査責任者	田 辺 哲 夫	熊本県教育庁　前文化課長
	境　　信三郎	熊本県教育庁　文化課長
調 査 総 務	隈　　昭 志	熊本県教育庁　文化課文化財調査係長
調　査　員	西 田 道 世	熊本県教育庁　文化課文化財調査員
	安 達 武 敏	熊本県教育庁　文化課文化財調査員
専門調査員	国 分 直 一	梅光女学院大学教授
	乙 益 重 隆	国学院大学教授
	小 野 忠 凞	山口大学教授
	白木原 和 美	熊本大学教授
	小 谷 凱 宣	熊本大学助教授
	佐 藤 伸 二	国立八代工業高等専門学校文部技官講師
	木 村 幾多郎	九州大学文部技官助手
	森　　通 保	県立宇土高等学校講師
	林　　行 敏	県立宇土高等学校教諭

調査協力者　上野辰男、緒方　勉、杉村彰一、島津義昭、松本健郎、高木正文、江本直（文化課）

地元協力者　徳本　明（下益城郡城南町教育委員会庶務課長）

調査作業員　白石　巌、宮本正成、林　末男、秋芳あや子、秋芳光美、井芹恵美子、鋤崎ユキエ、田畑美佐子、原フタエ、村中初子、村中弥生、米村トメ子、米村政子、山城仁恵、本郷二三子、石橋律子、上村喜美子、照屋とみえ、徳永雅子、山下千栄子、浜田秀子、笠間イツ子、小早川真弓、平川恵美子

調査事務局　浜田　勝、前田利郎、栗崎辰之、松本　巽（文化課）

河　川　課	九反田 利 秋	熊本県土木部河川課長
	荒 牧 延 夫	熊本県土木部河川課長補佐
	山 下 義 一	熊本県土木部河川課維持係主幹
	稲 生 宏 一	熊本県土木部河川課維持係参事

本　文　目　次

序　章……1
　Ⅰ　調査に至る経過……1
　Ⅱ　遺跡の位置……2
　Ⅲ　黒橋貝塚の表採資料……4
　Ⅳ　城南町黒橋遺跡予備調査報告……16
　Ⅴ　調査経過……21

第一章　遺　　跡……23
　Ⅰ　調査区と調査対象……23
　Ⅱ　層　　位……25

第二章　遺　　物……28
　Ⅰ　土　　器……28
　Ⅱ　石　　器……60
　Ⅲ　小　　結……75

第三章　理化学的調査……76
　Ⅰ　自然遺物及び人骨……76
　Ⅱ　宇土半島基部における縄文・弥生の境界について（予報）……81
　Ⅲ　熊本県黒橋貝塚の考古地理……85

第四章　総　　括……92
　Ⅰ　黒橋貝塚の総括……92

あ　と　が　き……94

挿　図　目　次

黒橋貝塚と周辺　航空写真……口絵

第１図　黒橋貝塚と周辺低地遺跡……口絵
第２図　黒橋貝塚周辺図……3
第３図　黒橋貝塚表採の土器……5
第４図　〃　……7
第５図　〃　……8
第６図　〃　……9
第７図　〃　……10
第８図　黒橋貝塚表採の土器および土製品……11
第９図　〃　土製品……12
第10図　〃　土器復元図……13
第11図　〃　石　器……14
第12図　〃　石器および石製品……15
第13図　黒橋貝塚地形図……17
第14図　黒橋貝塚試掘トレンチ東壁断面図……20
第15図　黒橋貝塚調査区……24
第16図　黒橋貝塚層序……27
第17図　東貝塚土器図（A・B形）……29
第18図　〃　（B形）……31
第19図　東貝塚土器図（C形）……33
第20図　〃　（D形）……35
第21図　〃　（D形）……37
第22図　〃　（E・F形）……39
第23図　〃　（D・F形）……41
第24図　〃　……43
第25図　〃　……45
第26図　〃　……47
第27図　〃　……48
第28図　西貝塚土器図（A・B・C形）……50
第29図　〃　……51
第30図　〃　（F形）……52
第31図　〃　（G形）……53
第32図　〃　……54

第33図　西貝塚土器図……55
第34図　〃　……56
第35図　〃　……57
第36図　〃　……58
第37図　黒橋貝塚朱塗土器……59
第38図　剥片石器、錘形石器……61
第39図　東貝塚斧形石器、磨石器……63
第40図　東貝塚磨石器、敲打器……65
第41図　西貝塚磨石器……67
第42図　〃　磨石器、敲打器……69
第43図　〃　磨石器、錘器……70
第44図　〃　〃　〃　……71
第45図　〃　敲打器……72
第46図　〃　〃　……73
第47図　〃　錘器、浮子……74
第48図　獣骨層位別出土部位……80
第49図　黒橋貝塚調査地点および地質略図……81
第50図　黒橋地域の化石珪藻による分布……82
第51図　黒橋地域の化石珪藻群のおもな構成種……84
第52図　文化小期別出現頻度……90
第53図　熊本市東南部の低湿地遺跡分布図……91
第54図　黒橋貝塚層序模式図……93

序　　章

Ⅰ　調査にいたる経過

昭和47年７月６日の大豪雨は、熊本県下の各地に多大の災害をもたらした。[注1] 城南町を貫流する浜戸川の氾濫はとくに激しく、各所で堤防決壊等の不運にあい、城南町の中心街一帯は床上浸水 733戸という大被害[注2]をうけたのである。

この大洪水によって、陽の目を見たのが黒橋貝塚である。水田下に存在していたため、従来貝塚があることは誰ひとり気づかなかったのであるが、堤防決壊の濁流によって水田下の貝層が一部えぐり取られ、貝層が露出したのである。

城南町教育委員会の徳本明氏（庶務課長）は、露出した貝塚のすぐ北側に居住しておられ、一夜にして出現した貝塚に驚異の眼を見張られて、早速遺物の採集をなされて県教育庁文化課に通報された。ただちに文化課から現地に出向き遺物等の検討を加え、文化課学芸員高木正文を中心に採集遺物の整理を行った。その結果、この貝塚は従来この地方で著明な阿高貝塚（縄文中期）と御領貝塚（縄文後・晩期、国指定史跡昭和45年３月９日）の時期の中間をうめる中期後半〜後期の時期の貝塚であることがわかった。この一帯の地名が一般に黒橋（クロバシ）というところから「黒橋貝塚」と呼ぶこととなった。

貝塚のおおよその時期は把握できたが、貝塚の範囲および層序等については不明であったので、文化課は昭和48年３月13日〜21日熊本大学の国分直一・小谷凱宣・佐藤伸二氏に依頼して確認調査を実施した。その報告によると、貝の堆積層は約1.5m に達し、しかも貝層の分布は浜戸川の河床にも広がる可能性が強くなった。ちょうど河川改修事業も計画されている段階であったので、文化課では上記の確認調査の結果を、土木部河川課へ非公式に連絡した。

一方、遺跡の重要性から、露出した貝塚を中心とした水田２カ所（地主山崎重喜氏および奥村駒吉氏）の2651m^2について、県指定史跡にした。（昭和47年８月21日）

昭和49年12月９日、文化課の 安達武敏調査員から、 河川敷内の 工事が始っているとの 連絡があった。ただちに隈が現地へ出かけ、工事現場において、二カ所の貝層を確認し、河川課に工事の一時中止を申し入れ、調査等について万全の対策を要請した。当初の改修計画（浜戸川災害復旧助成事業）[注3] どおり進行すれば約100m×50 mの全域について発掘調査が必要となり、現地調査だけでも１年半を要すると予想された。水害の常襲地帯であり改修事業は急を要することであり、河川課でも文化財保護か、人命尊重かという点で苦慮され、建設省とも協議の結果、従来の堤防線を補強する方法で改修可能という結論に達せられた。したがって、文化財も保護でき、河川改修事業も一部設計変更で実施するということで、貝層断面調査と排土された貝および文化遺物、自然遺物の調査を実施するということとなった。経費等については河川課のご努力によって計上され、調査については文化課で実施することとなった。（発掘届は昭和50年４月３日付教文第４号で文化庁長官へ進達）　　（隈　昭志）

注１　集中豪雨　時間雨量90mm/時　日雨量350mm/日　推定洪水流量600m^3/秒

注2　◦被害総額　　◦被災世帯　743（2,881人）

◦家　屋　全壊　2　半壊　6　一部損害　62　床上浸水　733　床下浸水　1,203

◦田　流失　104ha　冠水　1,000ha　◦畑　流失　10ha　冠水　200ha

◦道路欠壊　66カ所　◦橋流失　19カ所　◦堤防欠壊　104カ所

注3　全体計画（昭和47～50年度）4,650m のうち、昭和49年度事業2,364.4m、昭和50年度600mの護岸工事。計画日雨量53mm/時　367mm/日　確率$\frac{1}{50}$（50年に一回の豪雨）計画雨量400m³/秒

Ⅱ　遺跡の位置

黒橋貝塚は熊本県下益城郡城南町下宮地字萱木（かやのき）に所在する。（第1図）

熊本平野の南部地域は緑川とその支流とによって形成された沖積低地である。この沖積低地に面した山麓や低平な洪積台地上および低地内の微高地上には数多くの遺跡が存在している。

城南町は熊本市の南南東10kmのところにあり、城南町の中心街は浜戸川右岸の、舞ノ原台地の西側に発達した集落である。集落の南端、県道熊本一松橋線を南下したところで橋（浜戸川橋）を渡るが、この河川が浜戸川である。ここから現海岸線までは西方約12kmほどの距離である。

黒橋貝塚は、浜戸川橋の下流の約 500mの沖積低地内にあり、河川敷内および堤防外の水田下（この水田下の貝塚については先述のとおり県指定史跡となっている）に広がるもので、その分布範囲は南北約140m、東西約210mにおよぶものと推定される。

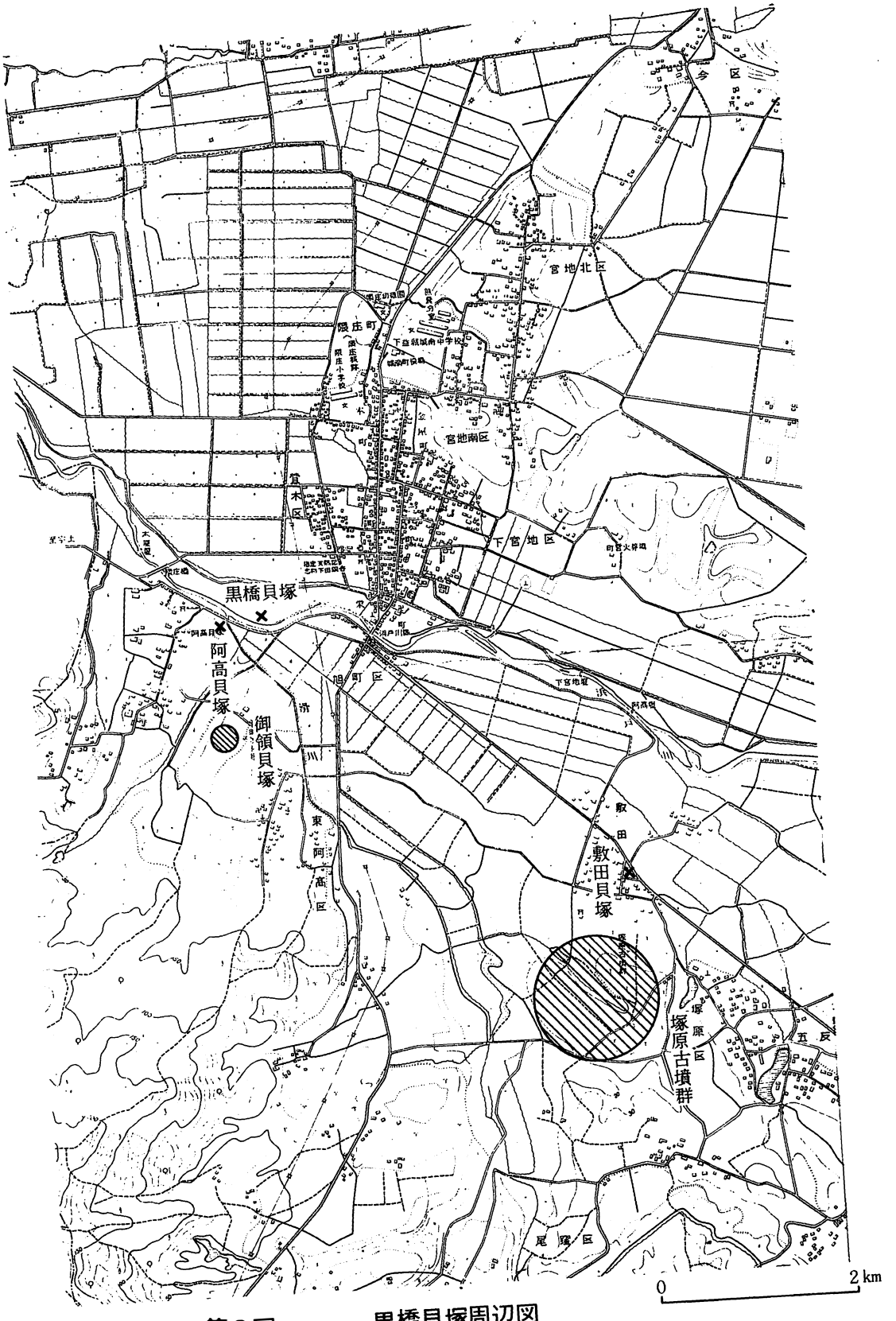
黒橋貝塚の南側の台地上には国指定史跡の御領貝塚（45）があり、同じ台地の北斜面には阿高貝塚（44）が存在している。黒橋貝塚から阿高貝塚までの距離はわずか 100mであり、その両者間に現在の浜戸川の流路が流れている。阿高貝塚の北端部は浜戸川によってかなり浸食をうけており、河底内にも貝殻の散布がみられる。したがって、両者は時期的にも、距離的にも非常に近い関係にあるといえよう。

つぎに、黒橋貝塚周辺の縄文時代遺跡および貝塚の所在について記してみたい。

雁回山（海抜 288m）の周辺には前述の御領、 阿高貝塚のほか、 その西方にソビエ石貝塚（42）、さらに西へ回って宇土市の曽畑貝塚（33）、古保里貝塚（34）などがあり、御領貝塚の上流に敷田貝塚（46）がある。黒橋貝塚の東北方、舞ノ原台地の縁辺では、沈目遺跡（47）があり、台地の西縁に弥生時代の遺跡、貝塚群が連なっている。

北方の緑川および浜戸川の沖積低地内では、 自然堤防上に弥生時代の 遺跡群が 知られており、緑川および浜戸川流域における沖積低地の形成の時期を把握するうえで、きわめて重要な遺跡群の密集地帯ということができよう。

そのほか、周辺の遺跡として著名なものは、黒橋貝塚の上流約4km、塚原台地上に5世紀初頭～6世紀の方形周溝墓、円墳を主体とする塚原古墳群、浜戸川をはさんで北方舞ノ原台地における同時期の住居址群（沈目遺跡―縄文遺跡と併存）、さらに上流では古代の肥後における最初の国府といわれる益城国府と関連の深い陳内廃寺跡などがあり、熊本県下でも、もっとも遺跡の密集する地域の一つである。（隈）


今区
宮地北区
隈庄町
下益城城南中学校
宮地南区
宮木区
下宮地区
黒橋貝塚
阿高貝塚
御領貝塚
旭町区
東阿高区
敷田
敷田貝塚
塚原古墳群
塚原区
五反
尾塚区
0
2 km

第2図　　黒橋貝塚周辺図

Ⅱ　黒橋貝塚の表採資料

昭和47年７月６日の大豪雨は、流出土砂の再堆積によって水田を一夜にして不毛の地としてしまった。砂礫はもちろん、一帯は貝殻等でびっしりとなった。その際、貝塚の発見者である徳本明氏によって、表面採集された遺物はおびただしい量におよぶ。

その種類としては、土器・土製品、石器・石製品、獣骨・骨角器、人骨等があげられるが、ここでは土器・土製品、石器・石製品の主なものについて略述してみたい。

１　土器・土製品（第３図〜第10図）

阿高式系土器

赤褐色または黒褐色を呈したやや厚手の土器で、指頭または先端の太い施文具によって連点文・曲線文を描く。口縁部は直行するものが主体で、一部にわずかに外反するものがあり、口唇部は指頭またはへらによって凹凸をつけ、波状になるものが多い。文様は口縁部にのみ施してあり、無文の部分との間に太い沈線でもって区別しているのが特徴的である。（第３図１〜21）

南福寺式系土器

上記の器形・文様構成の系統をひくが、文様はさらに畏縮する。肥厚のいちじるしい口縁部に、へら状施文具によるＳ字（第４図39･41）や斜線を併列させ、中には太い把手（第３図26）を有するものもある。（第３図22〜41・48・49）

出水式系土器（第４図42〜47・50〜56、第５図、第６図94〜104）

表採資料のうち主体をなすものが、出水式系および磨消縄文系の土器である。

口縁部は直行またはやや内弯して、口縁の下端にくびれを有するものもあり、口唇部は波状になるものもある。 文様は先端の太いへら状の施文具でもって、 口縁部を主体に 描かれている。平行沈線状のものと渦巻状のものを併用したり（第４図42）、平行沈線を縦または斜めに施したり（第５図57〜62）、くの字の並列の構成（第４図46・47・91）、平行沈線をＵターンさせたもの（第５図75・82）がある。また口唇のやや下部または口縁の下端部に凸帯をはりつけ、その上にへら状施文具による刻目を付けたもの（第６図98〜104）もある。

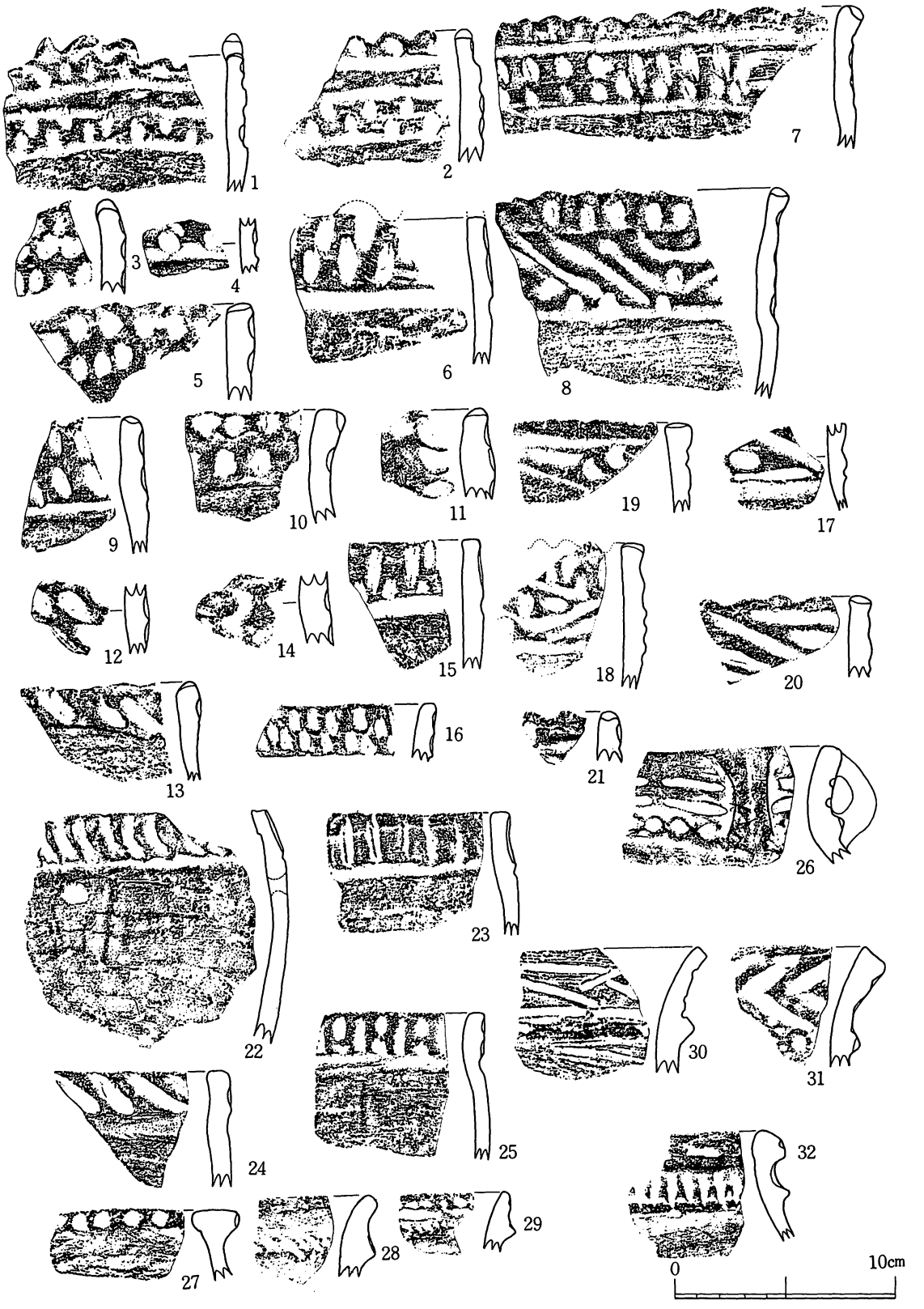
御手洗Ａ式系土器

口縁部が山形をなして直行する。口縁およびそのやや下部に爪形を主体とする連続文を施している。また口唇部にも、同様の文様を付したものもある。（第６図105〜125）

磨消縄文系土器

広口の鉢形土器を主とし、肥厚した口縁部は２〜３の山形を呈しており、文様はへらをもって沈線文と磨消縄文による「の」字あるいは渦巻文を主体にした華麗な文様で、鐘ケ崎系土器とおもわれる。（第７図155・156）

また、口縁部の下部に把手を付け（第８図133）、 そのうえに文様を施したものもある。その他、肥厚した山形の口縁に文様を施した市来式系のものもある。（第７図133）



第３図　黒橋貝塚表採の土器

土製品（第８図１～９、第９図）

ここで述べる土製品は、当初からある目的をもって焼成されたものではなく、破損した土器の底部や胴部の破片を、二次的に加工したものである。種類としては、土錘・円盤形土製品・その他がある。

土器の底部を加工した円盤形土製品（第９図10～15）は比較的厚手で、正円形に近い。周辺を打ちかいで加工しており、大形のものが多い。

胴部を加工したものには、その手法から二種類に区分できる。まず、その一つは周辺を打ちかいで整形したもの（第８図９、第９図16～19）があり、この中には中央に穿孔したもの（第８図５）がある。その二つは打ちかいだのち、さらに磨研しているもの（第８図１～８）である。比較的小形のもので、二ヵ所に切目を付して土錘としたもの（第８図４）もある。

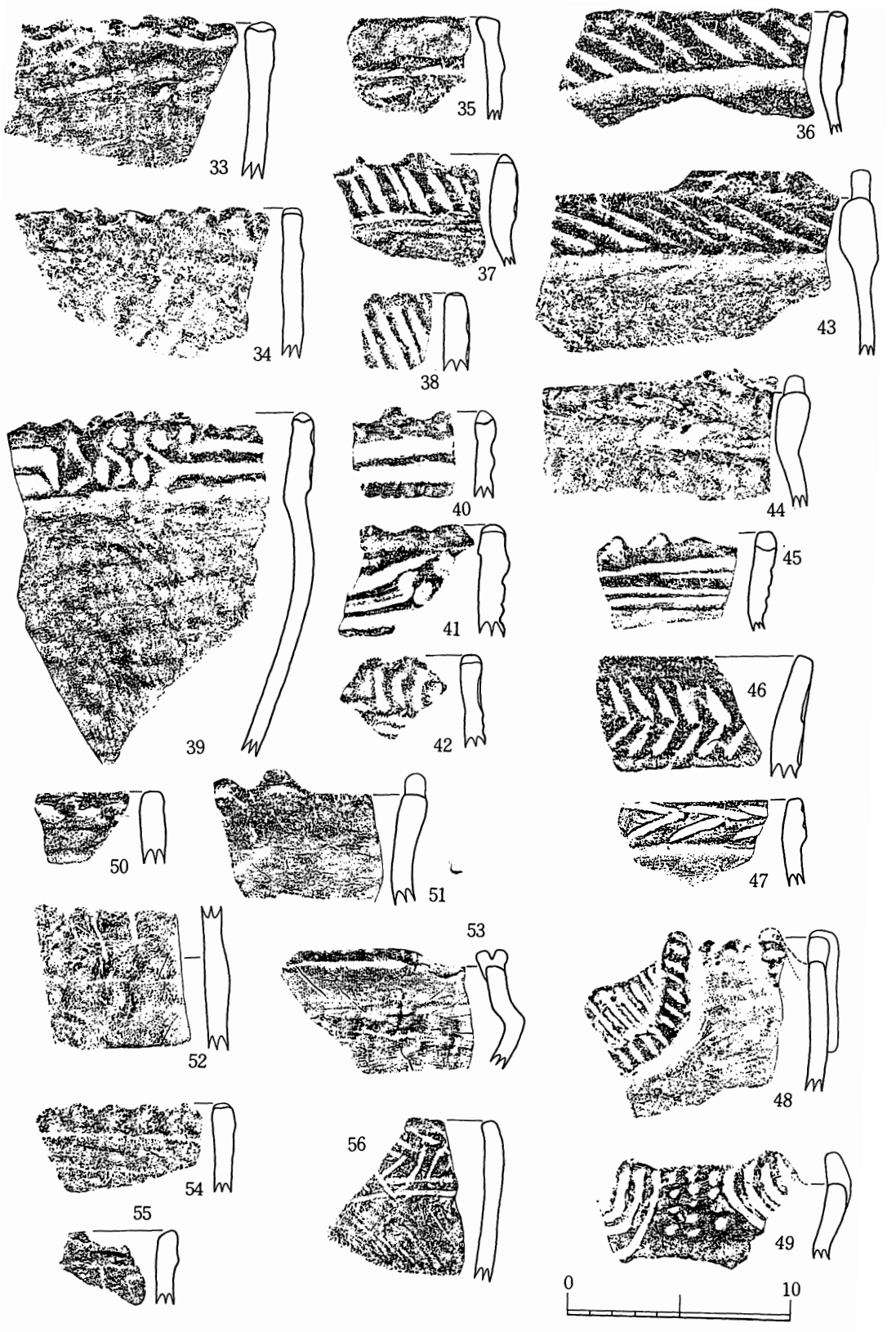
以上の土製品の中には、文様の認められるものも若干含まれている。粘土のはり付けを残すもの（第８図８）、へらによる施文を残すもの（第９図８）、口縁部で縦に沈線を認めるもの（第８図７）などである。

２　石器・石製品（第11図～第12図）

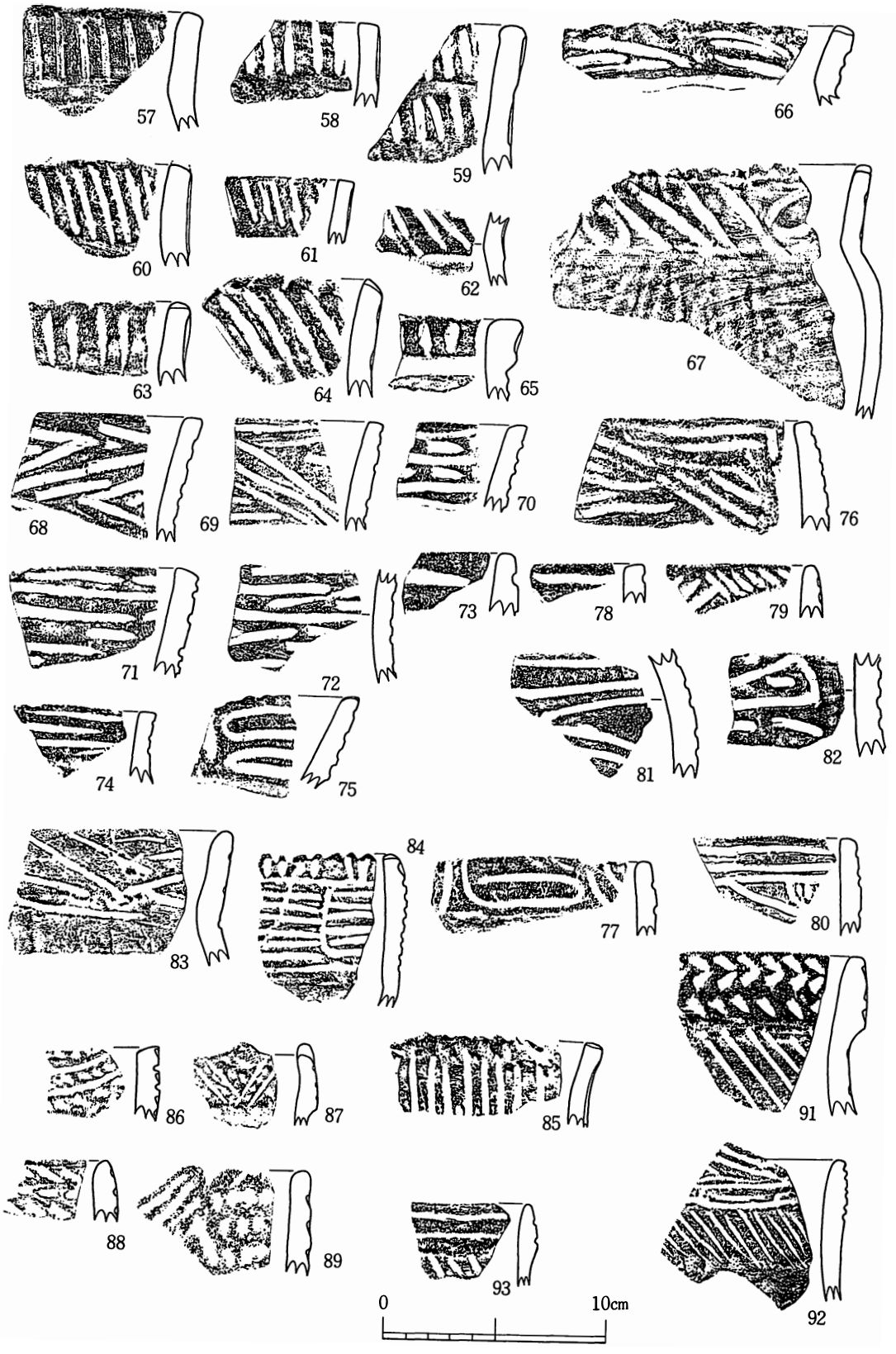
石器のほとんどは石斧で、ハマグリ刃の磨製石斧で、平面形か短冊形（第11図１～３）のもの、柄部が細くなるもの（第11図４～７）、卵形に近い短石斧（第11図８・第12図９）などがある。

石製品には、石錘とスリ石とがある。石錘はほとんどにぎりこぶし大の河原石を利用しており、その加工法には打ちかいだもの（第12図12～17）と、切目を入れたもの（第12図18）の二種類がある。なお、第12図19は矢柄磨研の砥石ではあるまいか。

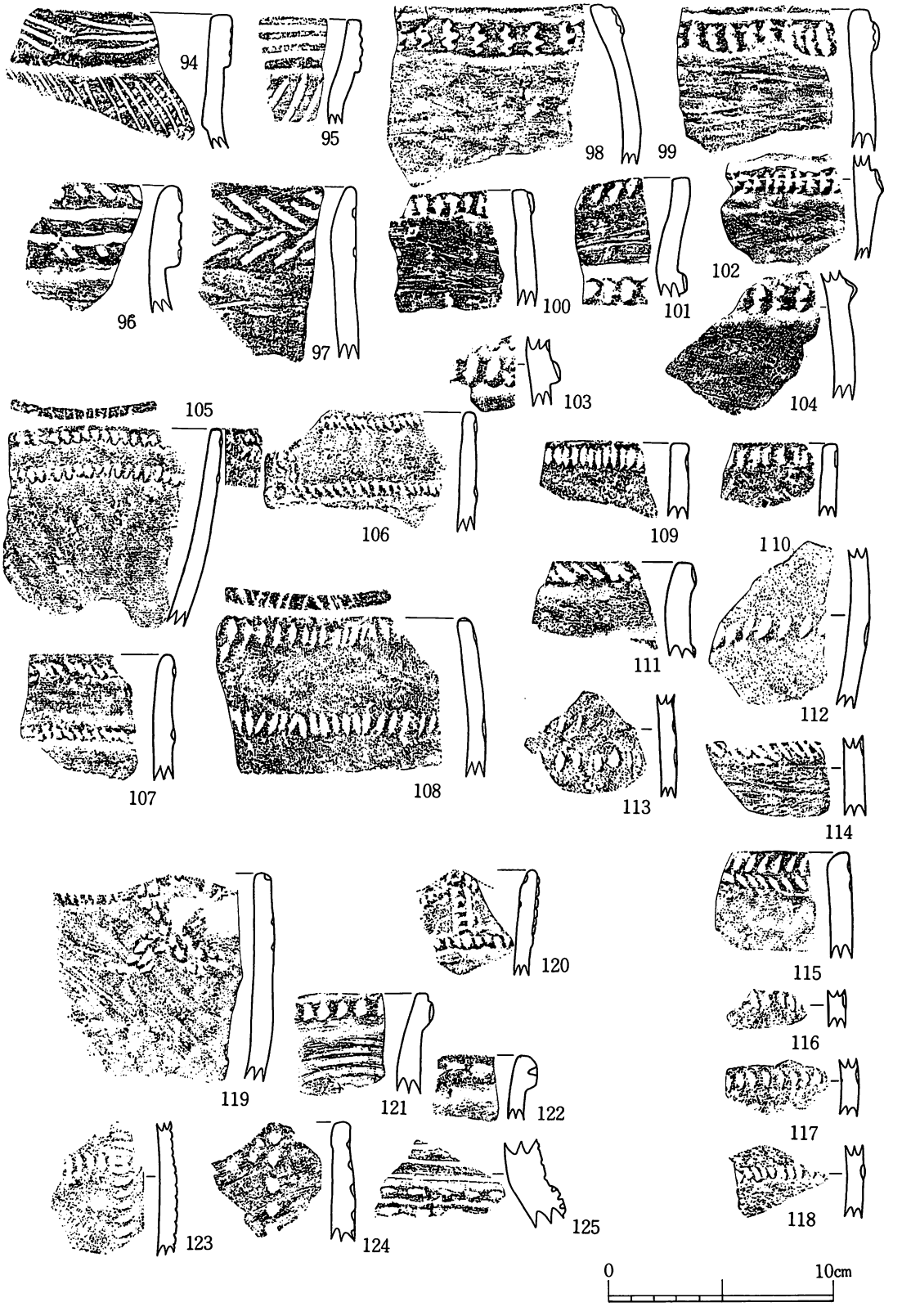
（隈、高木正文、江本直）



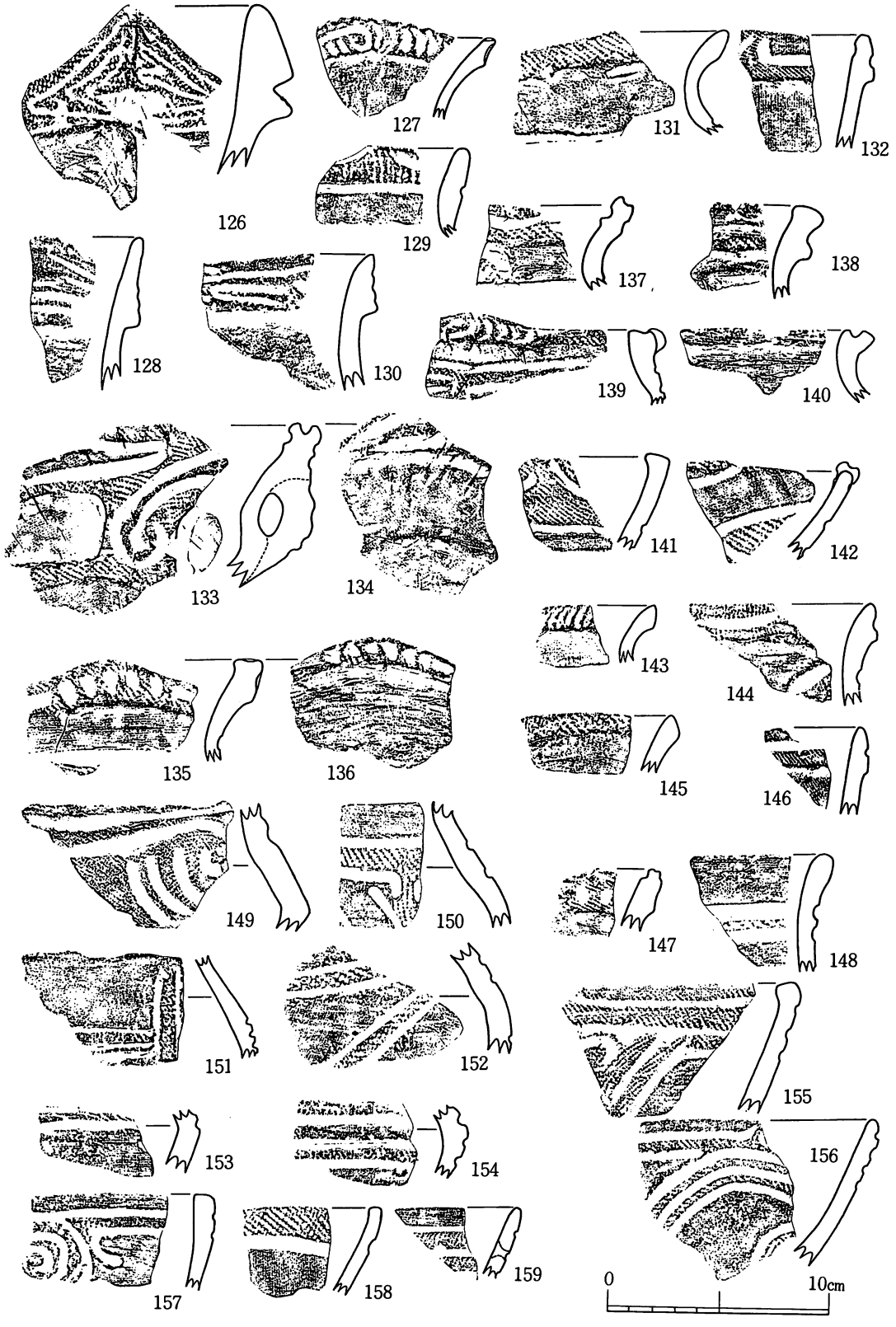
第４図　黒橋貝塚表採の土器



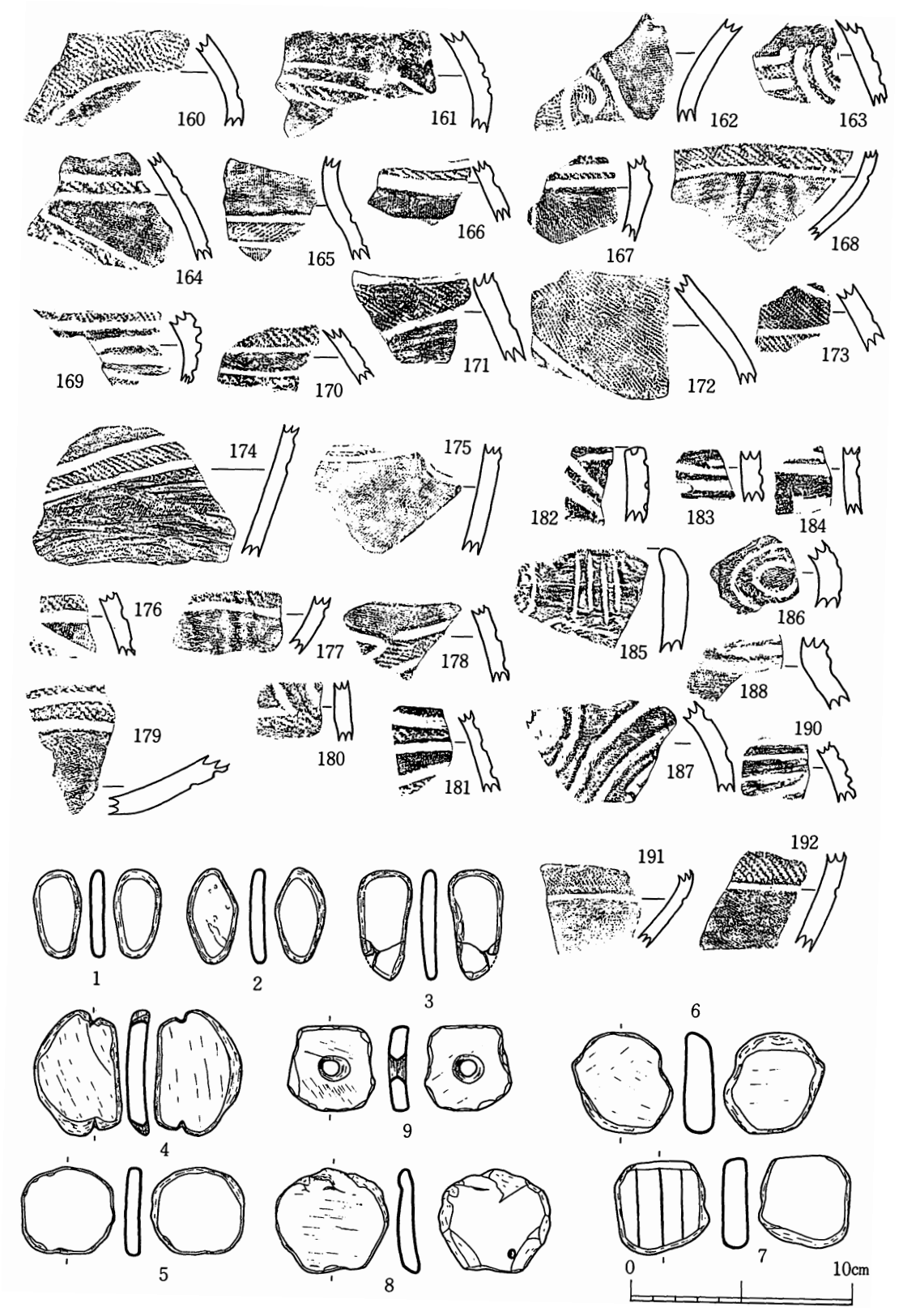
第５図　黒橋貝塚表採の土器



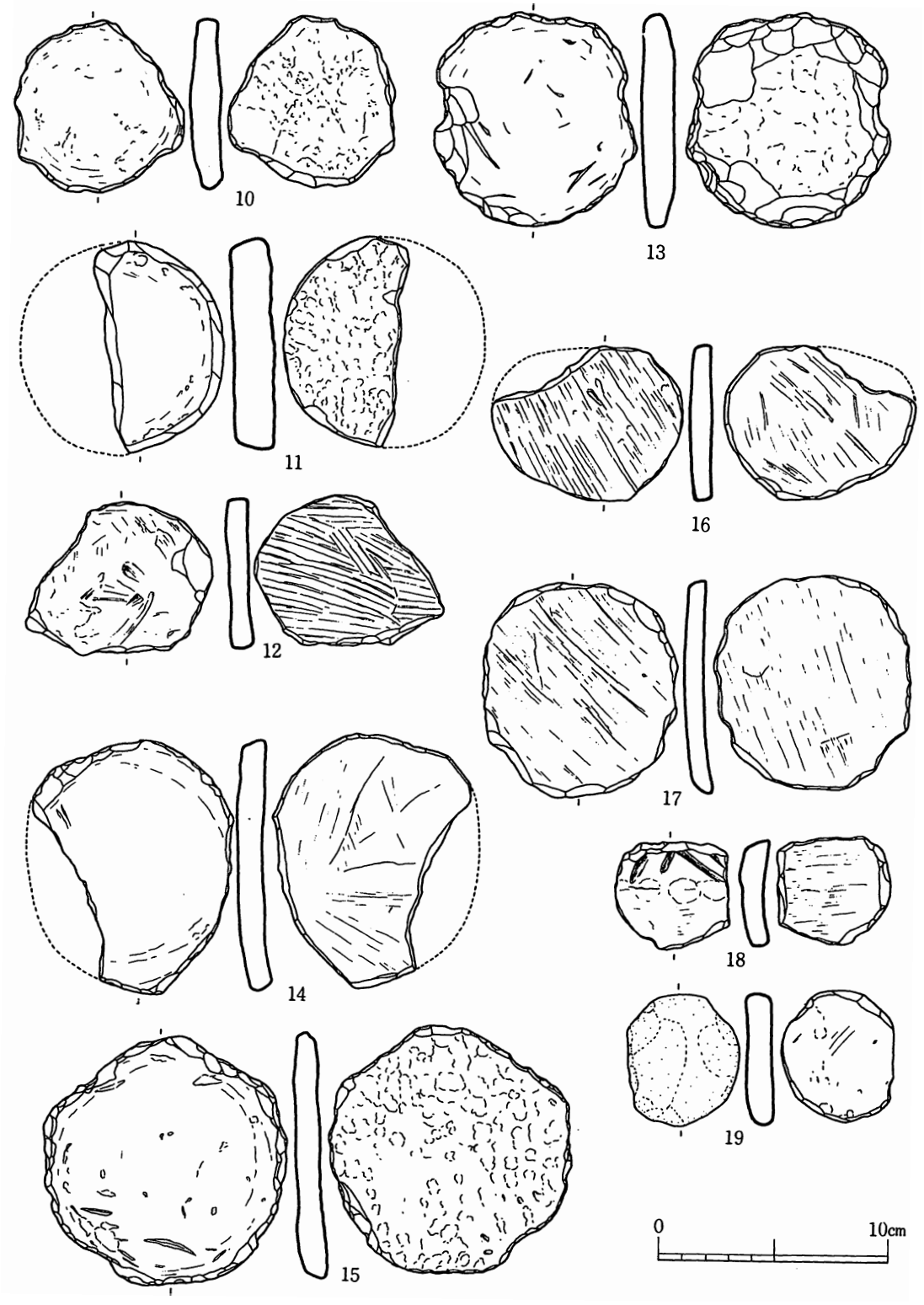
第６図　黒橋貝塚表採の土器



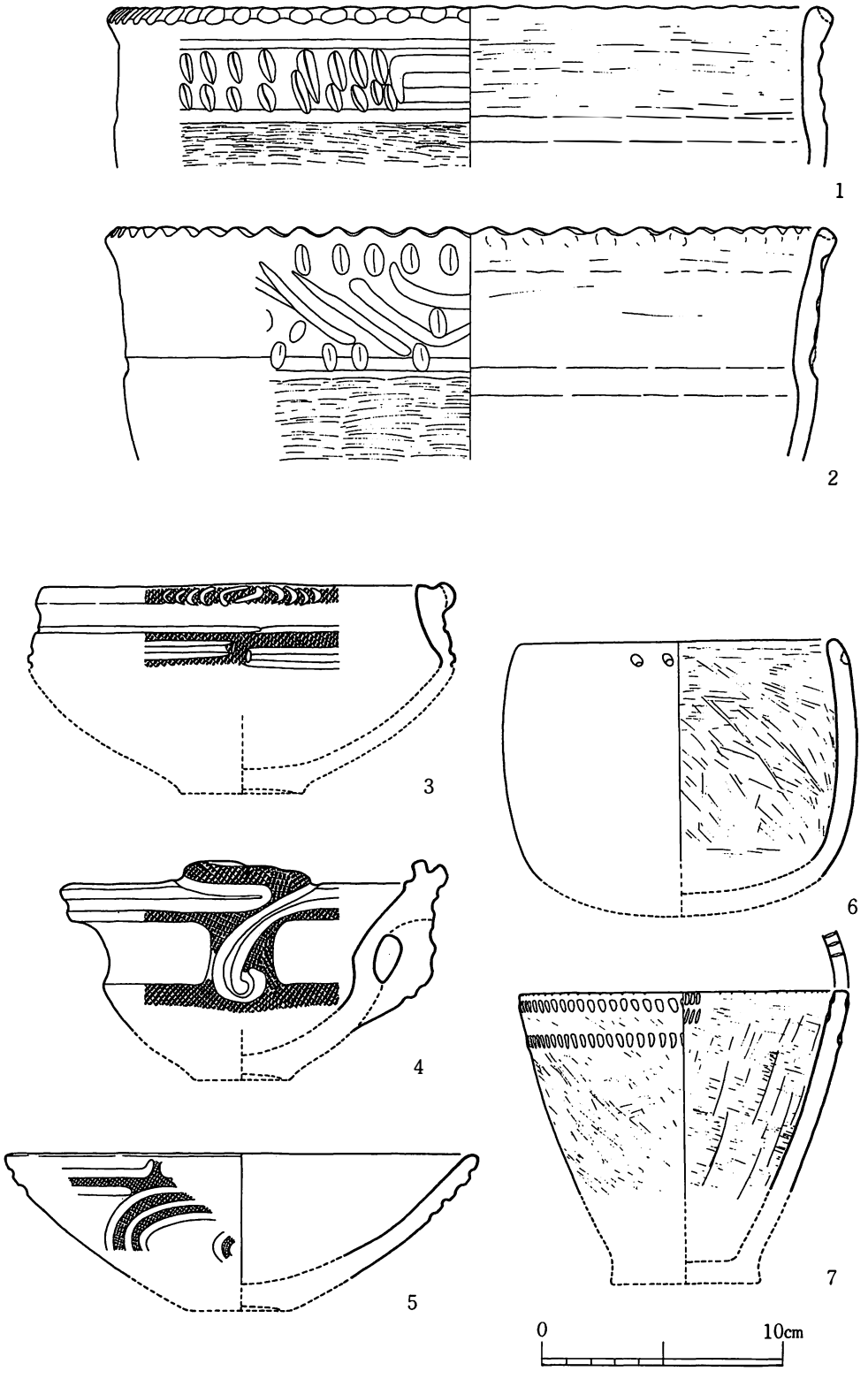
第７図　黒橋貝塚表採の土器



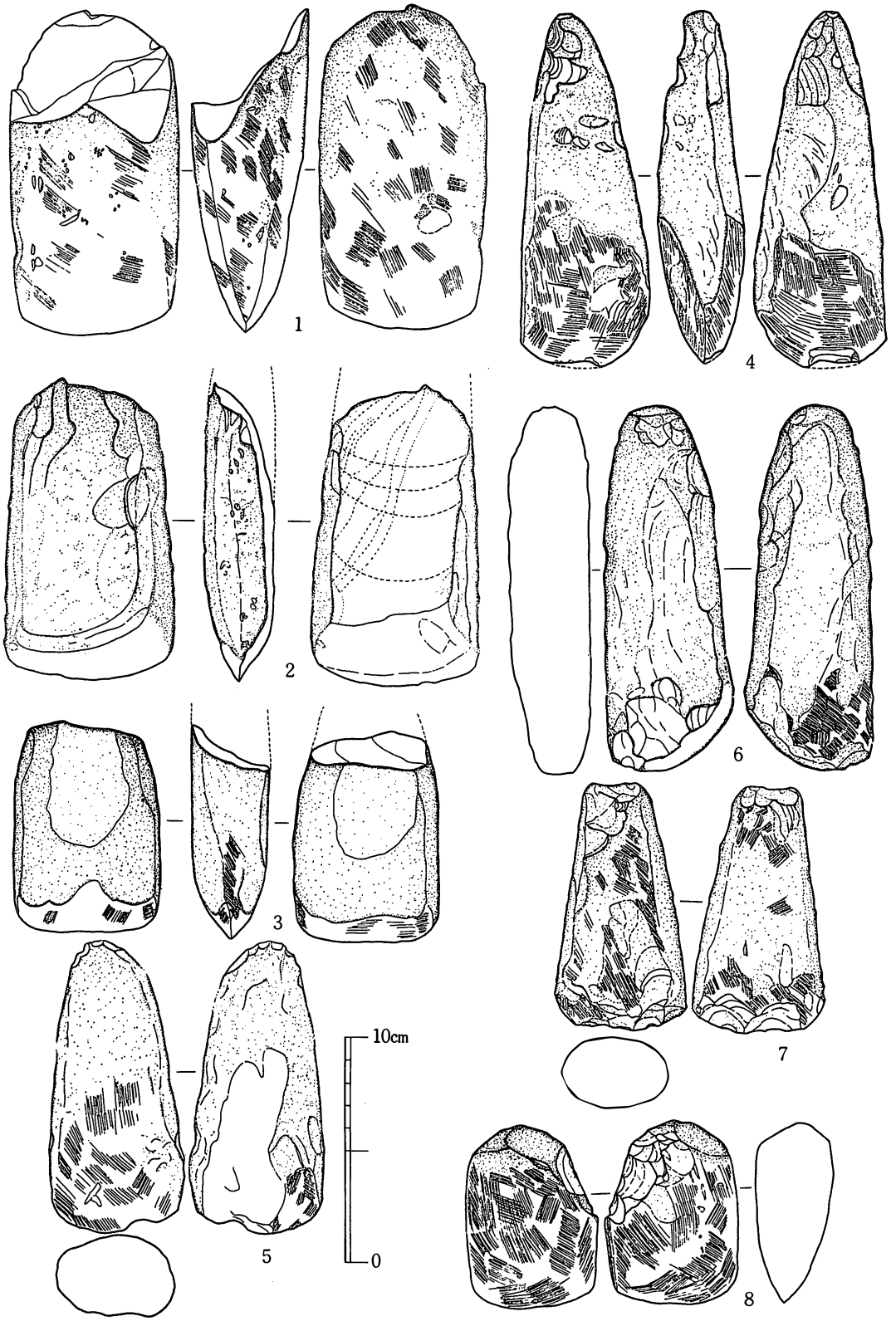
第８図　黒橋貝塚表採の土器および土製品



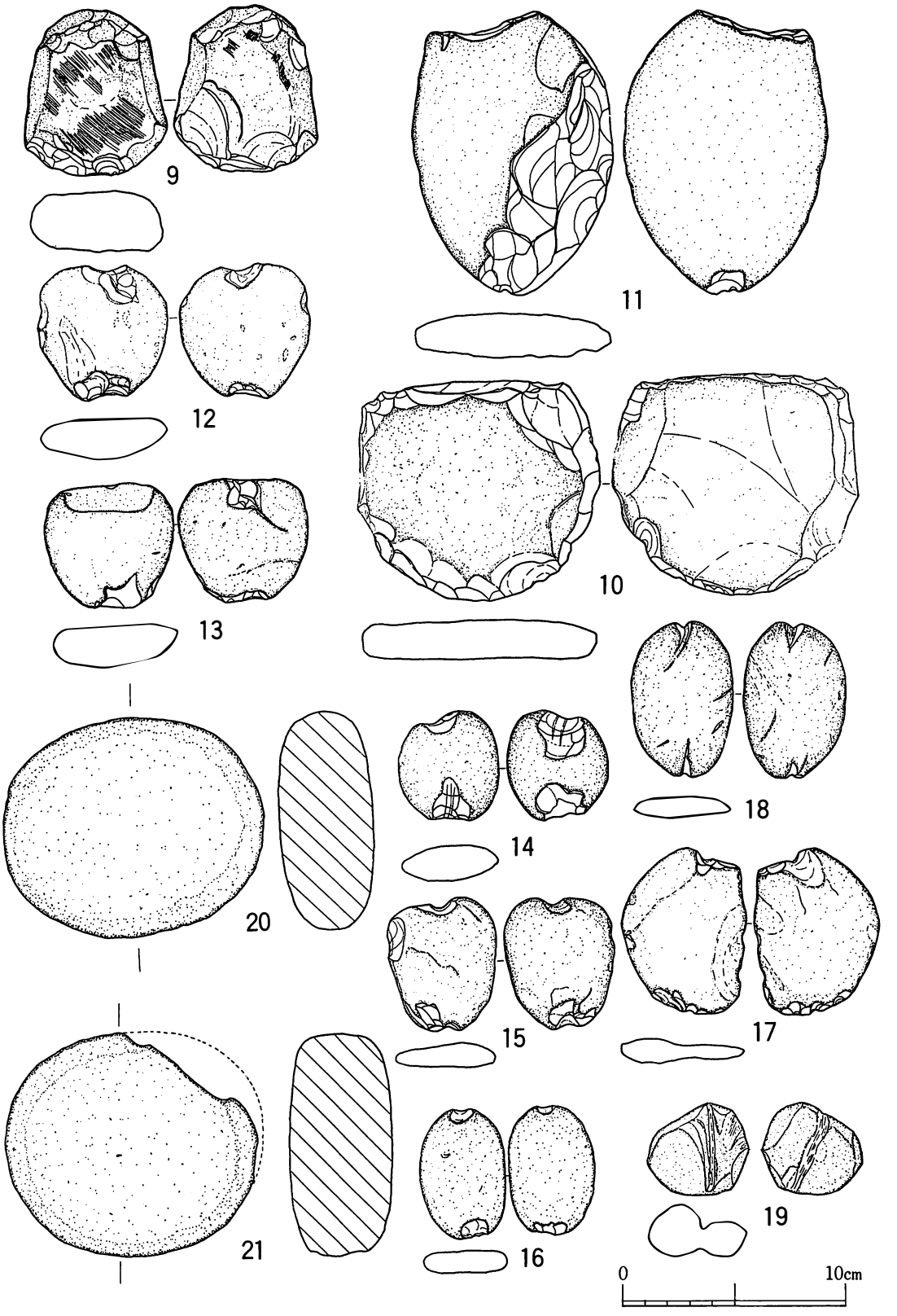
第９図　黒橋貝塚表採の土製品



第10図　黒橋貝塚表採の土器復元図



第11図　黒橋貝塚表採の石器



第12図　黒橋貝塚表採の石器および石製品

Ⅳ　城南町黒橋遺跡予備調査報告

昭和48年７月　　日

熊本県教育庁

田辺哲夫文化課長殿

熊本大学法文学部考古学研究室

国　分　直　一

小　谷　凱　宣

佐　藤　伸　二

城南町黒橋遺跡予備調査について（報告）

別紙の通り、黒橋貝塚遺跡予備調査の概要を報告致します。

予備調査の観察所見に基づき、次の事項を強く要望します。

「要　望」

一　当初の予想より貝層の分布域が広く、浜戸川の河床にも遺跡の範囲が伸びている蓋然性がある。遺跡付近の現状変更の前に、付図（第13図）に示した範囲内の十分な学術的調査を実施するよう必要な措置をとられることを要望する。

別紙

城南町黒橋遺跡予備調査概要

熊本大学法文学部考古学研究室

国　分　直　一

小　谷　凱　宣

佐　藤　伸　二

一　調査日時

昭和48年３月13日より３月21日まで

一　調査区域

城南町黒橋遺跡の遺物散乱地点を中心に、浜戸川河川敷、浜戸川の対岸（左岸）にある阿高貝塚を含む地域。添付した地形測量図に示した範囲である。

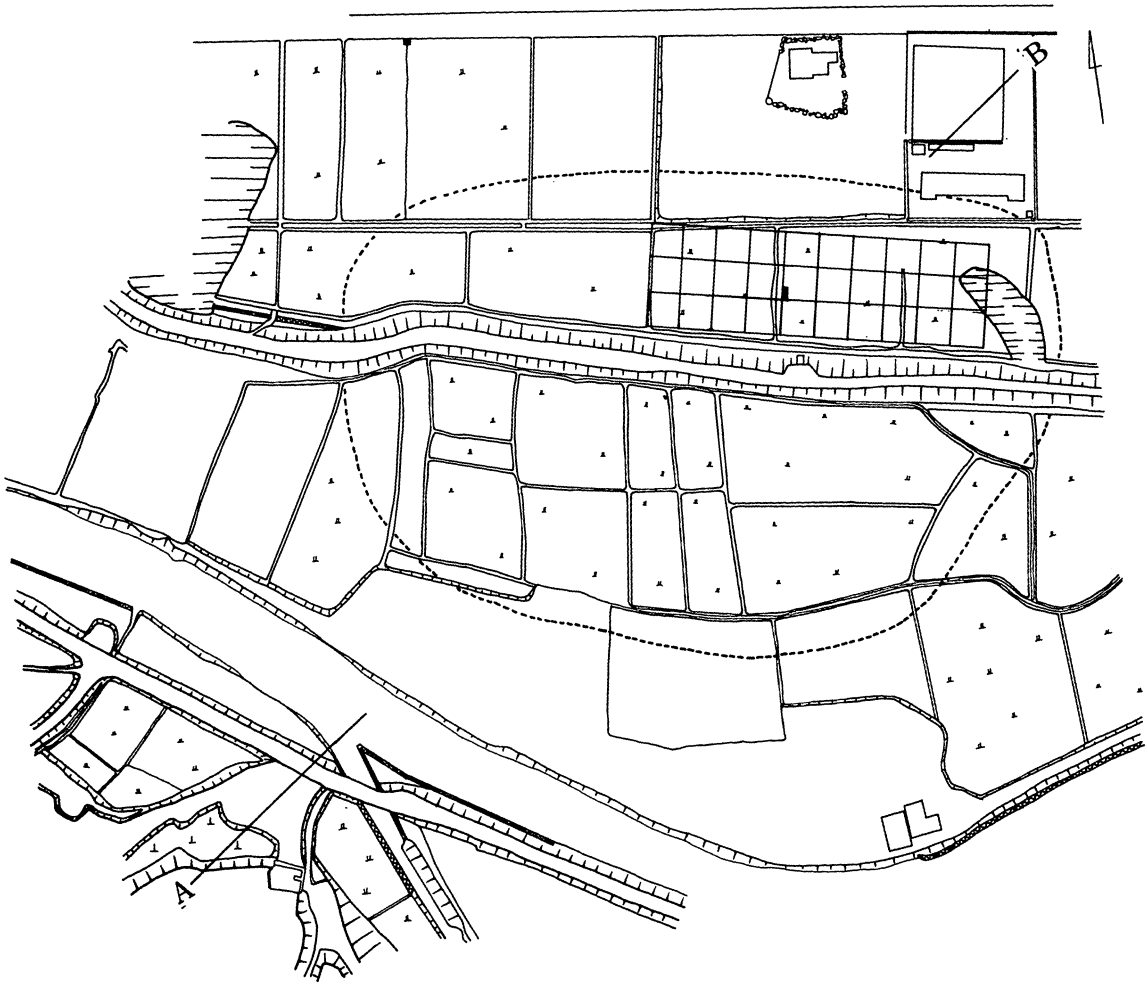
一　調査内容

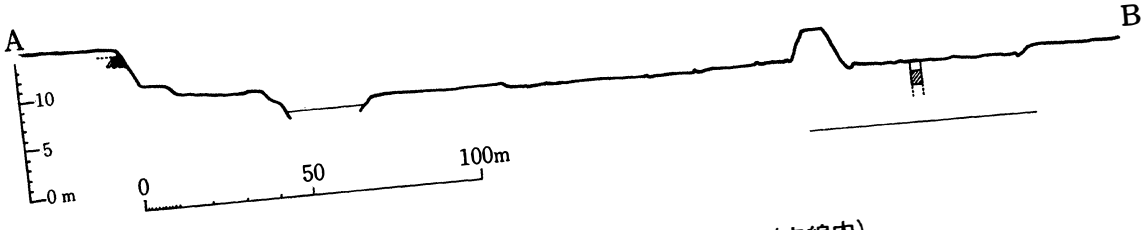
１　地形測量（第13図参照）

洪水時の遺物散布地を中心に、微地形的特徴を理解するため地形測量を実施し、600分の１の測量図を作製した。この図には、各地点の標高を記入し、また遺物散乱地付近に設定したグリッドを記入した。

２　トレンチ調査

付図のグリッド20区付近で、洪水時の侵蝕断面に、城南町教育委員会徳本氏により、約70㎝の厚さの貝の堆積が観察された。この観察に基づき、同地点から西方への貝堆積の広がり





第13図　黒橋貝塚地形図　（点線内）

を確認するために、15区に試掘トレンチを設定した。このトレンチは、２ｍ×４ｍで小林麟也氏所有の土地との境界線に近い地点に設置した。このトレンチの調査に基づき、西方への貝層の分布域を推定可能と判断したためである。

３　ボーリング調査

小型の、堆積物採取可能な棒状ボーリング器具を使用して、遺跡全域の貝層の存在の確認をめざした。そのため、文化課を介して適切な器具の調達を依頼したが調達できなかった。したがって、ボーリング器具による貝層存否の確認は実施しておらず、将来において早急に実施しなければならぬ。

４　遺跡付近の町民より、過去における貝その他の出土遺物の情報を蒐集した。本遺跡以外の遺物出土地の有無を確認することを目的としたのである。

一　調査所見

１　洪水時の侵蝕断面（20 区）の観察は、今回の予備調査で行う予定であったが、この侵蝕面は水中に没しており、排水に要する器具および費用の調達が不可能であったので、実施できなかった。昨年の秋に城南町教育委員会の徳本氏が観察されたところによると、表土下70㎝の付近より貝層があり、その層厚は約70㎝であった、という。

２　地形測量による地図作製の結果、遺跡付近の微地形的特徴が明らかになった。それは遺物散布地点より南方（堤防の付近）に行くにつれ、現水田面がやや高くなっている事実である。また、遺物散布地の北方においては、県道をへだてて、現水田面が低くなる事実である。

これらの事実より、隈庄原の高台から浜戸川の流路に向かってなだらかな沖積平野上の微高地があり、一種の舌状をなしており、この舌状の微高地の北面に遺物分散地点は位置している。

３　15区に設置したトレンチの調査により、次の如く層序が明らかになった。

第１層（表土）

洪水時の流出土砂の再堆積。色調は暗褐色（マンゼル土色表の10ＹＲ4/3）。

第２層（水田面の上部）

粘土質で、暗灰色（５Y3/1）を呈し、植物の根の腐蝕したものも含む。

第３層

砂まじりの硬質シルト。植物の根が垂直方向に伸びているのが認められ、それに沿って鉄分を含む物質が赤褐色に沈着している。色調は暗褐色（2.5Y3/2）。

第４ａ層（貝層１）

第３層と粘土は同じであるが破砕した貝が混じる点に相違がある。暗褐色（2.5Y3/2）の色調を呈す。

第４ｂ層（貝層２）

砂が少なく、シルト質の粘土。色調は暗灰色（10ＹＲ3/2）。貝は破砕したものが多いが

シジミ・ハイガイなど完全なものも混じる。

第４Ｃ層（貝層３）

砂およびシルト分が多く、粘質度を減ずる。色調は暗褐色（10ＹＲ 3/1）。この層の上半はカキが多くなり、下半にはカキの完形のものが多い。他の貝も完形のものが多くなる。

第５層

青味を帯びた粘土質で、色調は５Ｙ5/1（灰色）である。

4　トレンチより出土した遺物について、

本遺跡の主たる包含層は第４層（貝層）である。出土遺物に関する観察により、次の傾向が認められた。

①　貝層上部（４ａ層）には、須恵器片、鉄片、縄文時代後期のものと考えられる磨り消し縄文のある土器片などが含まれる。須恵器など弥生時代以降の遺物は、この第４ａ層に限られる。

②　貝層中部（４ｂ層）には、縄文時代後期と言われている磨り消し縄文のある土器片が多い。

③　貝層下部（４ｃ層）には、縄文時代中期の特徴と言われる太い凹線文をもつ土器片が含まれ、また胎土に滑石を含む土器片もある。

④　石器は、ポイント、石錘、石斧片などが認められた。

⑤　獣骨は、イノシシ、シカのものが大部分で、その他の小形動物の骨はきわめて少ない。獣骨は第４層全体に分布している。

⑥　魚骨は、下顎骨、脊椎骨などが若干数認められたが、その同定はこれから実施しなければならぬ。

⑦　貝層中部（４ｂ層）で、ドングリの炭化物が若干採集された。

5　トレンチにおける層位の観察から、貝層の厚さが約1.5ｍに達していることが判明した。現在の地表面から貝層最上面までの深度は70～80㎝に達する。これらのことから、貝層の堆積は現在の地表面下2.2～2.3ｍ（海抜標高4.6～4.7ｍ）にまで達していることが明らかになった。

6　過去における遺跡周辺での貝の出土について、数人の町民の方から有益な情報を得た。本遺跡の北方および西北方200～300ｍ（県道の北）において、それぞれ貝の出土があったという。その深度については、明らかでないが、いずれも沖積平野の堆積層の中から出土したものであることは疑いない。そのうちの一地点は、隈庄原の台地のつづきが沖積平野に半島状に突出した微高地にある。この微地形的特徴は、本遺跡の場合と同一であることは注目に値する。

一　結　　語

1　黒橋遺跡周辺において貝の出土がみられたことは、本遺跡以外にも貝の堆積層を伴う遺

跡が存在していた可能性を示す。

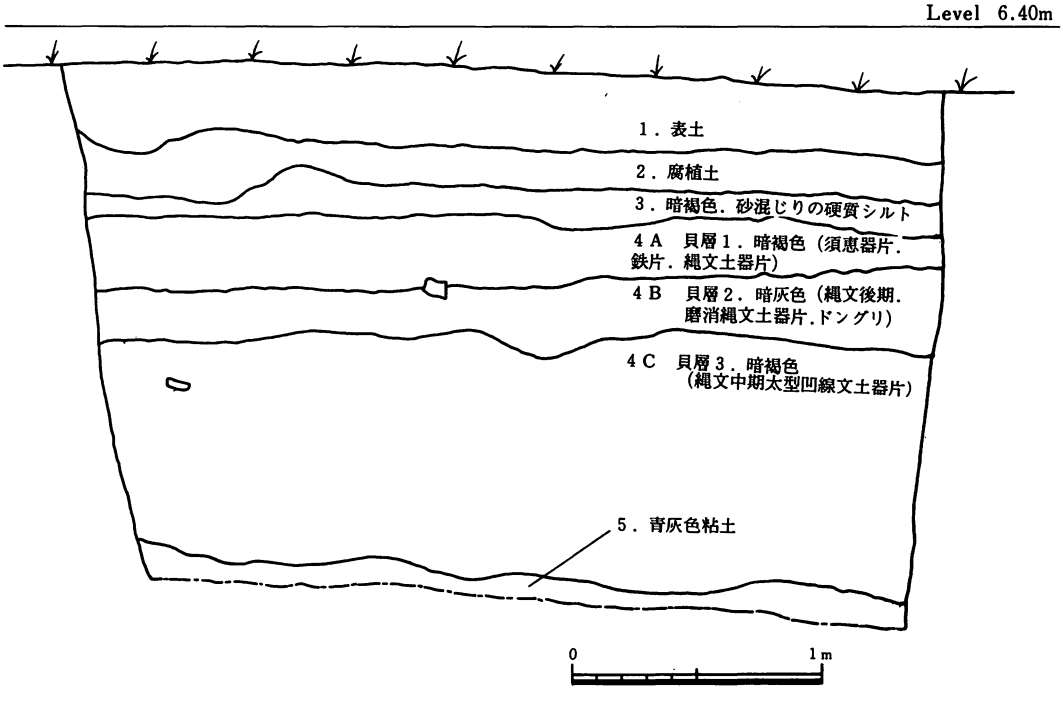
2　トレンチ調査により貝の堆積層が約1.5*m*に達することが判明した。

3　貝の堆積層の分布範囲は、当初の予想以上に広く小林麟也氏所有の土地およびその西方へも伸びていることは間違いない。

4　微地形的特徴に基づいて、貝の堆積は浜戸川方面にも及んでいることが充分に考えられる。また、河川敷内の微高地には縄文時代の住居址など重要な遺構が埋没している可能性が考えられる。

5　本遺跡は、沖積平野の堆積上に埋没した貝塚であることが明らかになった。従来、縄文時代の貝塚は洪積台地上やその末端に位置するものが調査の対象とされており、沖積堆積物下の貝塚の調査は例が少ない。縄文時代後半の生活環境を知る上に本遺跡は重要な資料を提供することになろう。

6　浜戸川の対岸の阿高貝塚と本遺跡は、文化遺物の上で関連が深く、立地条件を含めて、両遺跡の比較研究は学問的に重要な意義を有するものであり、早急に実施されるべきである。



第14図　黒橋貝塚試掘トレンチ東壁断面図

Ⅴ 調 査 経 過

調査に至る経過は、隈が前述した。

昭和50年3月13日、調査用器材を搬入。翌日より、重機によって掘り上げられた東側の貝塚（以下「東貝塚」と呼称する）より、調査を開始する。調査は主に、原貝層の壁面露出を行う。同時に01～10区に区分（後述）。

3月下旬　調査主任の指示により、壁面露出から、重機による山積部の遺物採集に重点を移す。これは、本貝塚が完全保存されるために、貝層自体の調査は将来に期すことが確認されているためと言う。貝層の二地点分離を確認。

4月上旬　降雨があれば2日、ない時でも湧水で半日は原貝層が水面下に没し、壁面の調査は全くの附随的調査に終ってしまった。しかも、この頃より、貝層のない03～04区の砂層の露出に入って、困難さは倍加してきた。

同じ頃、この砂層は、浜戸川の濫流による旧流路であり、少なくとも10数回の小変更があったことが判明してきた。

4月12日　課長を初めとした県文化課調査係全員の出席の下に、現地指導が行われた。問題点として以下を示された。

(1)　二地点の貝層間に出土遺物の相違があるのか。

(2)　東貝塚・西貝塚破砕貝層は二次堆積ではないのか。

この時点での調査員（西田）の上記に対する見解は下記の通り。(1)に就ては、西貝塚採集を行っておらず不明。(2)東貝塚は一次堆積で、二次堆積はむしろ西貝塚。この様な見解の相違は調査員の学術的未熟さによるものであるが、第六感的疑義には納得いかなかった。

なお、今後の調査方針として、現在的調査は継続した上で、(1)黒橋貝塚周辺の微地形的古代地理学的研究。(2)砂層のC^{14}年代。(3)基盤粘土層（グライ層か…西田）の珪藻分析。(4)貝層の拡がりをボーリングにて確認することなどを指示された。いずれも調査員の能力の限界を示すものであるため、専門家・機関に依頼することとなった。

4月中旬　連日の降雨で作業は殆ど進まず。ただ、東貝塚山積部の遺物収集が一応の終結をみた。

4月23日　西貝塚の南側山積部の遺物採集を開始した。無文土器片が多く、出水系の細直線文土器が出土してきた。

4月25日　砂層部の壁面露出を中止して、西貝塚原層の壁面露出に移った。層序が複雑で、山積部貝層と原貝層との対比は非常に困難であることを実体験した。

5月上旬　八代工業高等専門学校佐藤伸二講師、調査指導のため来跡。以降、折にふれ、同氏の指導を得る。

5月中旬　西貝塚の最下部が現われ（3×10×1.5mのヘドロが堆積していた）、西貝塚の層厚は約1.5mであった。

5月19日　現場事務所建つ。

5月27日　ベルトコンベアー使用開始。

6月上旬　08区までは壁面図完了。西貝塚南山積部の採集終了。北山積部の収集を開始。この頃より、連日雨天となり、原貝層の壁面露出は殆ど不可能になりつつあった。

6月12日　安達武敏を加え、調査員二名で調査を続行することとなった。

6月17日　県立宇土高校教諭森通保、林行敏氏に来跡を乞い、珪藻分析用標本を採集した。午後より豪雨。

以後、豪雨による湛水と土砂の流入により、原貝層の調査は不可能となり、北側山積部の遺物採集のみ行う。

7月7日　大量の仕事を残し、悔恨を覚えながら、器材を撤収し、後時の本調査に託することとなった。

7月14日　山口大学教授小野忠凞氏に来跡を乞い、指導助言をあおいだ。

8月7日　国学院大学教授乙益重隆氏に来跡を乞い、指導助言をあおいだ。

なお、現地作業には常時文化課文化財調査係長隈昭志の、電話による指導が行われた。

報告書の作成作業は翌日より開始した。ただし、遺物の水洗と注記については8月から実施した。以降、遺物の整理・実測・拓本等についてはすべて熊本県文化財収蔵庫の調査作業員によって遂行せられ、翌年2月中旬終了した。　（西田道世）

第一章　遺　　跡

Ⅰ　調査区と調査対象

調査対象は護岸工事中、重機によって山積された南北の排土の中に包蔵されている遺物である。露出した貝層自体は参考的に層序を知る程度で、本来の対象ではない。

なお、排土と原層の対比を試みたが、本稿では記述しない。

貝層は東西二ヵ所に分離し（その間45*m*）、山積部の貝層も明確に、二つの山となって、隔絶している。東側を東貝塚と仮称し、西側を西貝塚と仮称する。

東貝塚の東端より更に10*m*東を基点に、10*m*間隔で01～10区を設定し、KB―01～KB―10と呼称した。東貝塚はこのKB―02を中心とした部分であり、西貝塚はKB―08を中心とした貝塚である。貝層の山積は、このKB―02の南側・KB―08の南・北側の三ヵ所ある。採集対象（＝調査対象）はこの山積部貝層中の人工・自然遺物である。

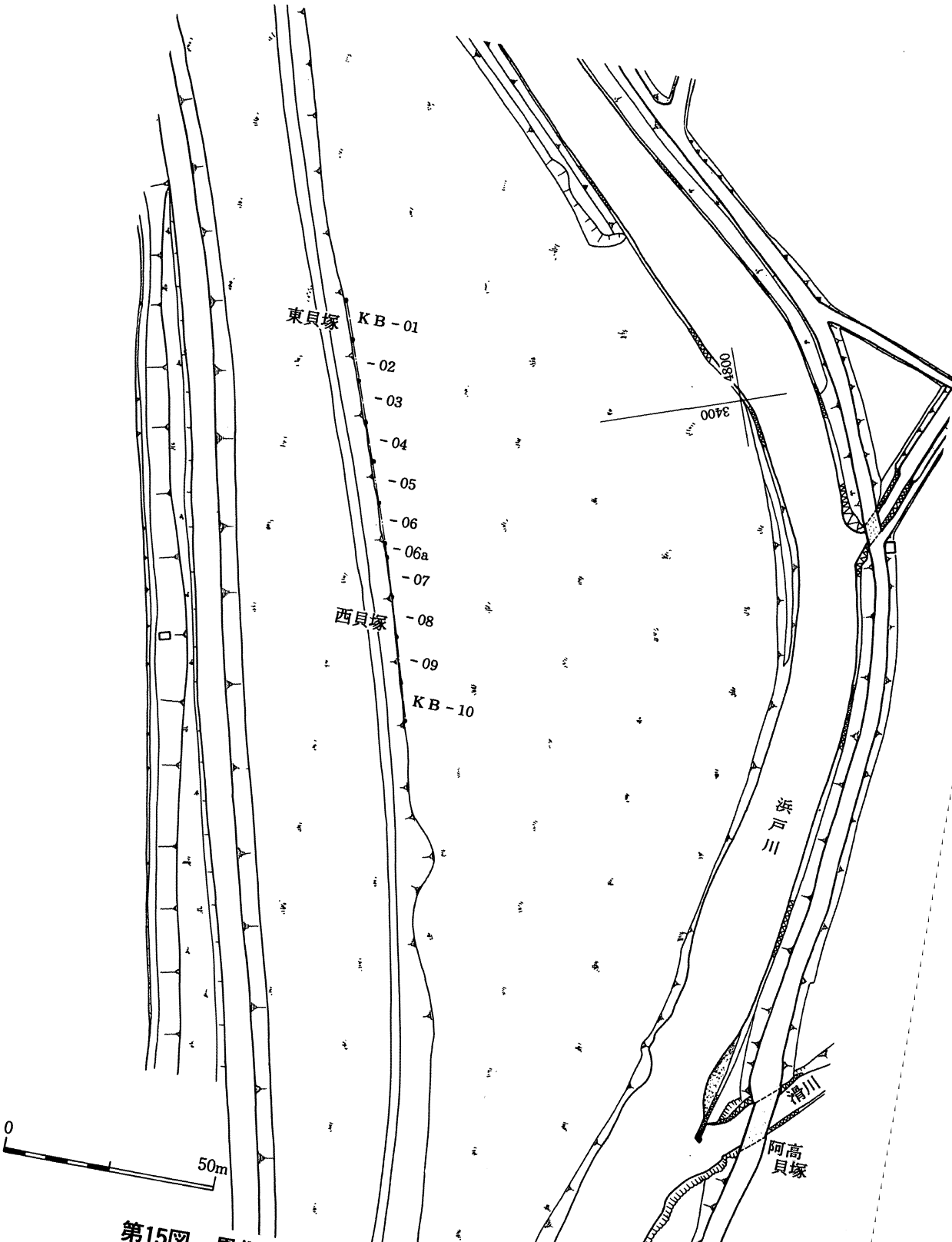
なお、補充的調査対象として、この護岸工事中、重機によって掘削破壊を受け、現在、露出している貝層の断面図を作成することになった。これは、貝塚の形成由来を知る上に必要であり、又、山積部の貝層が、原貝層のどの層にあたるかを検討する上で、ぜひ必要なものではあった。遺物の原貝層層序を決定するには、山積部の包含貝層と遺物に付着している土壌とを原貝層のそれらと対照することによって決定した。東貝塚は、それに十分に応え得る単純な層であったが、西貝塚は非常に複雑であり、この方法にはかなりの無理があった。（調査区名は、第15図、第16図を対照されたい。）

なお、以下の諸項検討は、縄文時代の生活復原を なすには、 いずれも 絶対必要な条件である。

(1　　跡：周辺遺跡との対比、貝層の広がり、貝塚の成立時期の確認、地形図と地層との関係、汀線の確定、低地微地形と遺跡の立地関係、周辺の原植生、土壌成分、貝層ごとの自然遺物の百分率

(2) 遺　　物：土質、土質力学、水圧・土圧等が遺物に与える物理的・化学的変成作用、貝層と土層の土壌生成環境と生成作用、遺物原料の原産地及びその採集地の確認

(3) そ の 他：C^{14}、水和層他の年代測定　　（西　田）



第15図　黒橋貝塚調査区（座標系は第二座標系）

Ⅱ 層　　位

層序は第16図に示した。層序模式図は第54図（90頁）上図

層は大まかに浜戸川によって運ばれた砂層、二つの貝層を中心とした島状の層、貝層堆積の基盤層となった青灰色粘土層、その下層である黒紫色の砂・泥質粘土との縞状層の四層に大別できる。その内、１～４層は浜戸川の旧河川内に堆積した砂層であり、流木流葉の堆積層とともに縞状層を形成する。図示した層はすべて流量・流路の変更によって堆積した層である。しかし、02～08間でそれらを巨視的にみた場合、流路変更はつごう４回である。すべて東側から西へと流路を変更したものである。遺物は阿高式終末期のものから、土師式土器・須恵器まである。３の流路の最下層からは須恵器（赤焼）高坏の坏部が出土した。貝層はそれらの流路によって分断され、02、08の２区を中心に島状に残存している。貝層の形成はこの２区では全く異なった堆積状況を示す。東側の粘土貝層による島には５層を含め４つの主要な層がある。５層の西側は６・７・８層に斜めにくい込んで貝層のほぼ全体を覆っている。色調は西側が08区の黒青色土と同様の色相を持っており、東へいくに従い青緑色の度合が強くなる。遺物は出水式土器と土師式土器が出土する。６層は５層に切断されており、黒色を基調とする３枚の層である。６ａ層は黒色土と炭化物によって成立している。６ｂ層はこの６ａ層の下層にあって白黄色の粘質土と炭化物の混合層であるが、６ｃ層の人為によって落込んだ所に部分的に広がっているにすぎない。７層はマシジミを主体とする黒色純貝層であるが、炭化物を含む。６ａ～６ｃ層はいずれも出水式土器以外の土器を含んでいない。８層はマシジミとマガキを主体とする黄褐色～灰黄色の純貝層である。主に出水式土器を出土している。南福寺土器らしきものもあるが確実ではない。９層は灰緑色のマガキを主体とした純貝層である。マシジミも一尺四方の塊状となって、部分的に存する。層厚は50～60㎝あり、一番厚い層であるが、遺物は非常に少ない。Ａ～Ｄ形が出る。以上の６～８層はおのおの水平に堆積し、整然としている。

西貝塚の層は５の流路によって東側全面が浸蝕されている。６ｆ＝黒青色の粘土層で02区の５層に近似した色調をなし、土師式土器と縄文式土器、弥生式土器が混在している。ただし、縄文式土器が他を量的に圧している。６ｈ・６ｉ＝前者はやや灰質で灰緑色、ハマグリの破砕貝層。後者は濃緑色の破砕貝層である。両者共に、他の貝層の堆積状況と比べると異和感がある。遺物は縄文時代のものばかりであるが、６ｊの濃緑色の含貝土層（弥生後期土器・御手洗Ａ式土器）と相呼応して二次堆積の疑が強い。

以下、６ｋ～６ｑは一次堆積層である。しかし、６Ｐ、６ｑは堆積後、部分的に貝の回転があったようである。又、６Ｐの場合、堆積の最下部は無理なく10層中に消滅しており、更にこの近辺の10層は砂質度が強く、10層中でも特異な部分である。あるいは６Ｐ層堆積の頃のこの近辺の10層は非常に柔かく、土壌そのものが流動的であったのかもしれない。

10層はスコップがなかなか通りにくい程非常に堅固な青灰色粘土層（グライ層か）である。ひび割れは縦方向。08の貝層下で、消滅しているがおそらく、浸蝕によるものであろう。11層は有機物と砂泥とが縞状にほぼ 20：１の割合で、堆積した 黒紫色の泥炭層である。 ドングリ他の植物遺体が多量に埋没している。 この二層は貝層堆積時すでに、 安定した層で あったろうが、植物遺体の存在からみて、地下水位は非常に高かったものとみたい。しかし、生活には支障なかったものと考えている。ただ、10層上面には生活面だと積極的に証し得るものがなく現時点では判定不能である。

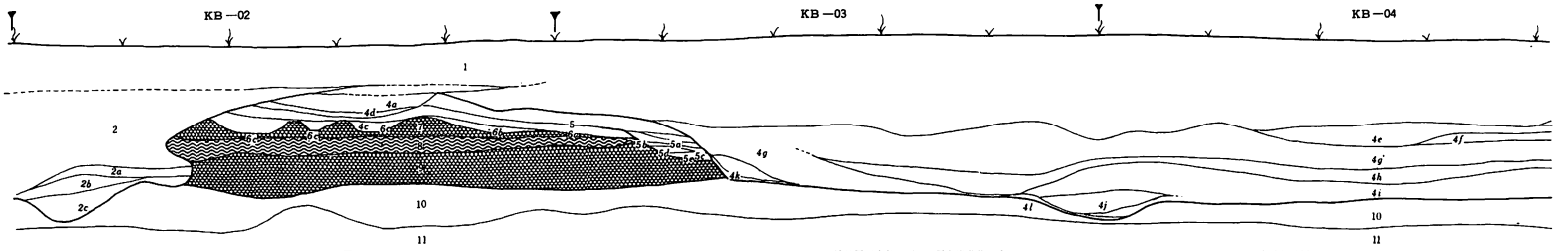
東西の貝塚の堆積順序について 一言しておく。 遺物は原貝層中からは 検出していないが、遺物に付着している土壌から６ｐ・６ｇの層にはＡ・Ｂ・Ｄ・Ｆ形等を包含しているものと観た。したがって阿高式〜出水式が混在しているものと考え得る。一方、東貝塚の７〜９層は、Ａ〜Ｅ形土器が出土し、６ｐ・６ｑと同様である。しかし、９層からはＡ〜Ｄ形土器のみ出土し、Ｆ形の出土はない。したがって西貝層の状態とは異なる。また、貝の種類から言うと、東貝塚がマガキ・マシジミで占められているのに対し、６ｏ・６ｐ・６ｑはハマグリが主体である。

さて、不十分ながら、上記の事情を考慮に入れて、層序を見直す。次の二種の貝塚形成過程の可能性が考えられる。❶東貝塚形成後西側一帯を全て河川によって浸蝕され再堆積する。❷東貝塚形成後、河川によって浸蝕されるが、西側にあった貝層が残存した。二者に就て記す。

❶の場合は6*a*〜９層の堆積後、浜戸川の決壊によって流路が変更し、 KB―10付近まで、一気に浸蝕する。この時、KB―08 付近では10層を浸蝕し尽し、11層が露出する。その後、西貝塚の貝層が６ｋまで堆積する。この場合貝層は東貝塚にまでは達しなかったであろう。その後６ｊの堆積期間がある。おそらく、廃棄空間の転移（居住者の移動も含む）があったものであろう。６ｉ・６ｈ等も、廃物廃棄空間の転移によって他所で堆積した可能性がある。６ｈの灰質の多さは、若干、その可能性を少なくするが、包含遺物の多期に亘る事実を考慮すると、少なくとも、何等かの撹乱があったものと看做し得る。そういう、６ｉ〜６ｋの期間を経て６ｑ〜６ｆが堆積する。この時５・５ｅ〜５ａの各層が堆積する。５層と６ｆ層は同一層と考える。特に５層西側の土質と６ｆ層の土質とは非常に近似している。この後に再度の浜戸川流路による４〜２層の浸蝕と堆積がある。❷10・11の自然堆積後、10層の浸蝕がある。この時、KB―08では10層を完全浸蝕し、消滅する。東貝塚の堆積と、６ｐ・６ｑの堆積がある。更に連続して6o〜６k以高の堆積が進行する。東貝塚西側切断の浸蝕の際、現在の６ｊ層面まで浸蝕する。６ｆ層以高の堆積があり、この時、5層各層も堆積する。4〜2層の浸蝕と堆積で、現状となる。

後者の場合、同時期の貝層に種別差がありすぎる。しかも、混在した遺物を出土する。これらの理由で消極的ながらも、前者❶を本貝塚堆積とする。

尚、考古学で言う一次堆積は地質学上の二次堆積である。また、貝層中に単純な珪藻等がある貝層は考古学上でも二次堆積の可能性が強く、地質学上では一次・二次堆積の可能性がある。東貝塚の貝層中では珪藻化石の検出はないと聞く。本貝塚貝層は人為堆積である。　（西田）



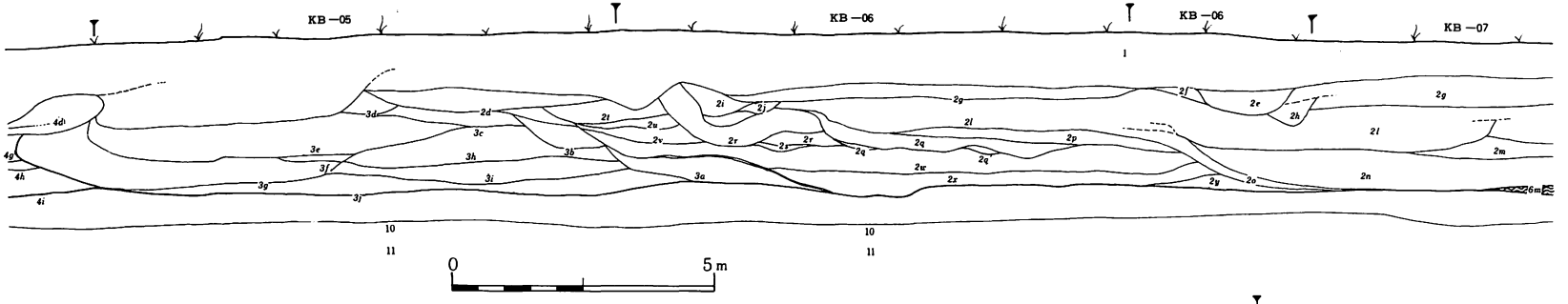
混＞合

1　：表土…黄かっ色砂質土（赤鉄鉱縞状的縞状層）
2′：青灰色粘質砂質混合土層
2a　：青灰色砂層（黄かっ色砂質土を混じる）
2b, 2c：青灰色砂層（境に木質の帯があり、堆積層方向が異なる）
4a, 4b：1に同じ。境に赤鉄鉱層あり
4c　：青緑色砂質土

5　：黒青色粘土（左方は青緑色土強し）
5a　：青灰色粘土（炭化物を含み、黄かっ色の粘土を混じる）
5b　：青灰色粘土（炭化物を混じる）
5c　：黒色炭化物土（火熱による炭化物）
5d　：黒色炭化物土（　＋　、5cに比し少なく5eを含む）
5e　：青緑色粘土
6a　：褐色粘土層
6b　：黒色粘土
6c　：黒色炭化物層（炉跡状）

7．純貝層（主体シジミ、黒色炭化物を含む）
8．純貝層（マガキ、マシジミ、褐色土を含む）
9．純貝層（マガキ、灰緑色粘土を含む）
10．青灰色粘土（上・下層に分れる。下は青緑色土）
11．黒紫色粘土（厚さ0.5～10cmの砂との縞状層）
ドングリ等を含む、泥炭層の一種。
下層に進むに従い砂質度が強し。
川上建設、伊藤氏によるとより下層は
完全な砂泥層とのこと。

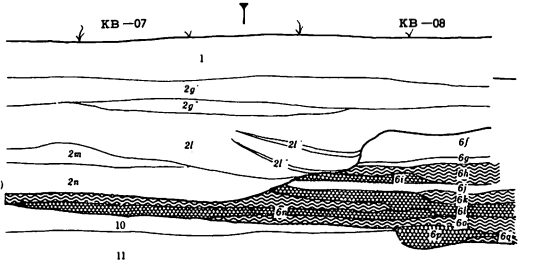
4d　：青緑色砂層
4e　：上位は白黄色砂層主体
下位は青灰色砂層、や・縞状層
4f　：青灰色砂
4g　：縞状層（青灰色砂：黒紫泥炭＝9.9：0.1）
4h　：縞状層（黒紫泥炭（＝柊）：灰色砂＝9.9：0.1）
4i　：荒砂
4j　：黒紫色泥炭と流木、砂利との混合層
4k　：上に同じ（但し流木なく、流藻）



3a　：白黄色砂層
3b　：黒紫縞状層（流藻（＝柊）、灰白層）
3c　（註記せず）
3d　（註記せず）
3e　：青白色白色、縞状層
3f　（註記せず）
3g　：灰白色炭化物縞状層
3h　：白色砂層
3i　：荒砂層（3jより小粒）
3j　：荒砂層（3i間に白色小砂粒あり）

2d　：黒かっ色粘質土
2p　：黄白色砂層（小粒）
2q　：青白色砂、黒色泥炭物、縞状層
2q′, 2q″：白色砂層（小粒）
2r　：暗青色粘質土
2r′：荒砂層
2s　：青白色砂層
2t　：灰色粘質土層
2u　（註記せず）
2v　（註記せず）
2w　：白青色砂層
2x　：黄かっ色砂層
2y　：白黄色砂層

2e　：黒色粘土層（炭化物・灰・植物を含む）
2f　（註記せず）
2g　：黒褐色粘土層（炭化物・泥炭を含む）
2h　（註記せず）
2i　：黒褐色粘土層
2j　（註記せず）
2k　：黒青色粘質土層
2l　：青白色縞状層
2l′：柊藻層
2l″：柊・流木層
2m　（註記せず）
2n　（註記せず）
2o　（註記せず）



6f　：黒青色粘土層
6g　：青白色粘土層
6h　：灰質灰緑色粉砕貝層（ハマグリ）
6i　：濃緑色破砕貝層
6j　：濃緑色含貝土層（ハマグリ、マガキ）
6k　：青緑色純貝層（ハマグリ）
6l　：灰緑色破砕純貝層
6m　：緑青色混貝土層
6n　：緑青色混貝層
6o　：緑青色混土貝層（ハマグリ）
6p　：黒紫純貝層（ハマグリ）
6q　：灰緑色純貝層

第16図　黒橋貝塚層序

第二章　遺　　物

Ⅰ　土　　器

1　分類の原則

下記の理由で、「型式」概念を使用しない。本貝塚採集資料に該当する「型式」名を知らない。次に、いわゆる「型式」概念には、現今、各人各様多種多様の定義が行われており、学術用語としての「型式」概念は成立していない。

以上、二理由により、分類には「型式」概念を使用しない。本稿において、「型式」概念を使用する場合は曖昧ながらも「系統分類」としての「型式」に限定する。

2　分類の方針

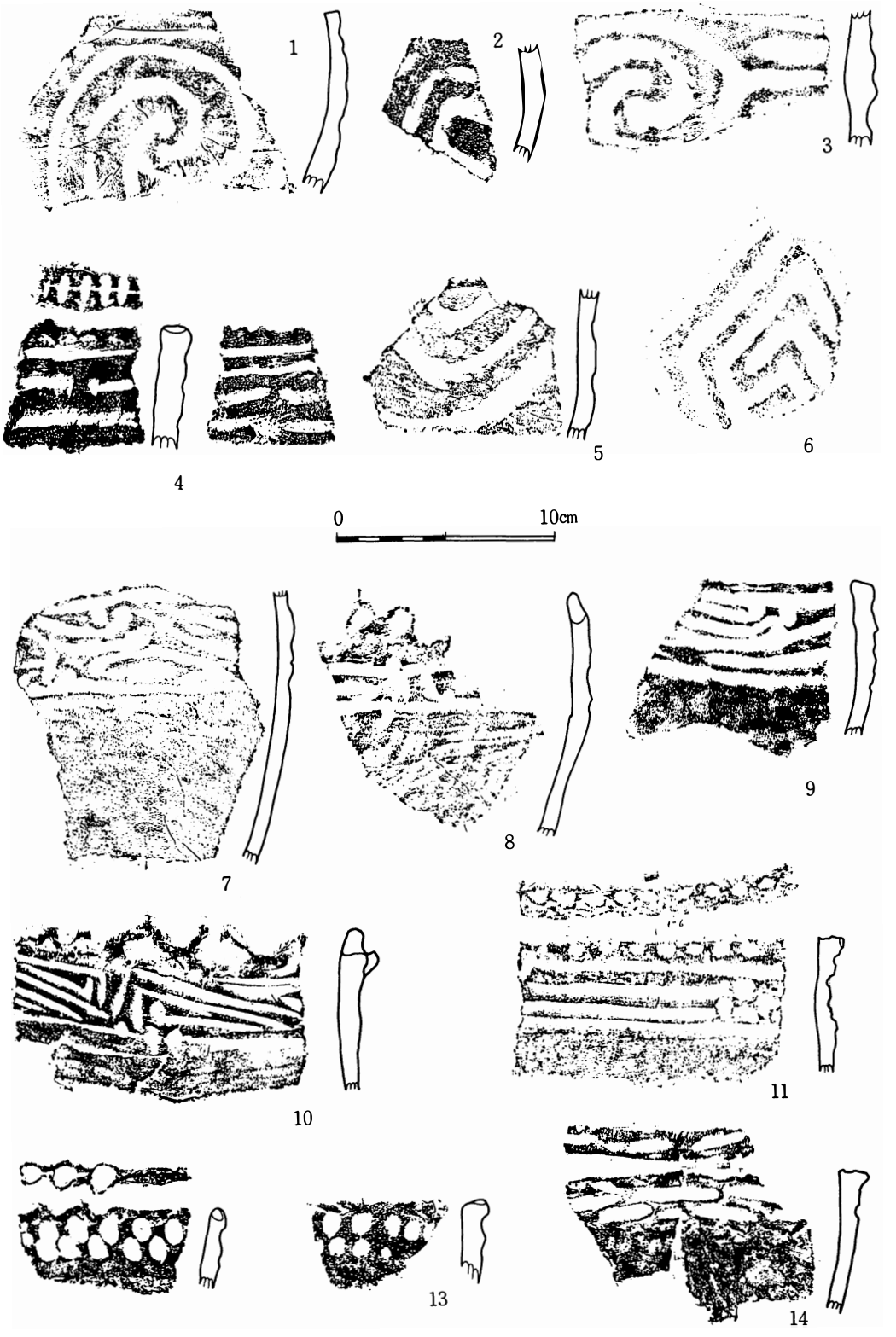
資料採集の条件上、細分には「層序」を用いず、出土地区のみ重視した。したがって分類は形状（器形、製作形態、文様形態 etc）を区分原理とし、機械的「人為分類」に限定した。異分野の用具、用語と対照し得る筆者のイメージ言語を用いた。

分類のおのおのの種差は基本的なものを掲げたが、すべてそれに合致しているとは限らないし、破片の故の観察不可能な物もある。それらは、大勢に従わせたり、遺存部のみによる類推を行ったりした。しかし、以下の事項については、下記の理由で記述を断念した。

(1)　器種の判断。深鉢、浅鉢等を分類するには、それなりの資料数が必要である。本遺跡では、それに必要な絶対数が不足している。器形上、どうしても浅鉢、台付浅鉢としか考えられないようなものもあるにはあるが、完形土器の存在が皆無のため、断定には躊躇せざるを得ない。また、他遺跡の完形土器との対比による推測も、同時期近辺地域の各種形状と器種との組み合せ関係も曖昧かつ未分析の現状である。そのうえ形状と器種との組み合せ関係は形式・地域によって異なるのが当然であり、筆者にとっては「断定」不能である。一方、「深い」「浅い」「広い」「狭い」「高い」「低い」等の形容詞は、如何にイメージ言語とは言え、それらの数的形状差を明示し得ないならば、形状対照語としてのイメージ言語は消滅する。そのため、何をもって「深鉢・浅鉢」と判断するかの基準を持たない筆者には、この断定は不能である。

(2)　文様の文章表現。一部は慣例に従ったが、慣例化前の文様、適切対照語の未探索文様は言語によって受信者のイメージ構築と発信者の筆者とのイメージ差が拡大する恐れがあるために、極力、これをさけた。

(3)　文様と器形・文様と器種・文様と「型式」・器種と器形の組み合せ。これらを判断するには資料の絶対数が、それにたる数量であることが絶対条件である。しかし、今回報告の資料では、その条件に満たない。また、地域差も不明確かつその種の報告の皆無を考えると、これは無理である。しかも、その他の各種現状を考慮すると、この種の問題は、今時報告書



第17図　東貝塚土器図（A・B形）A形1～6 B形7～14

の対照外と信ずるにたる根拠を有していると、まわりくどく認(したた)めておく。

(4) 全形。資料が少ない。

3 分　　類

（1） 東貝塚採集の有文土器

A 形（土器図1～6）

文様が、横断面観カール状で、従来太形凹文と呼称されたものの一部である。口唇は突起がない場合、水平連続の篦押引を行い、平坦である。また、この篦押によって生じた内外面の口唇との境界稜周辺の粘土のはらみを、篦状のもので掻きあげてある。この内 1.3 は砂層出土のものである。

B 形（7～33）

口唇は水平連続の篦押で平坦である。はらんだ粘土の掻きあげはない。この為、口縁部近辺の断面観は、口唇を底とした三角形状を呈する。ただ、篦押のみではなく、内外の一方か両方に、小粘土帯を貼付し、この三角形を意図的に強調したものもある。文様は口唇下に、明瞭な文様帯を設けている。器面仕上げの工程は、①胴部横位の篦削り　②文様帯作出　③文様帯研磨を観察し得る。この内、①は当初器面全体に及んだものであろうが、現在観察し得るものは、文様帯直下のみである。

C 形（34～46）

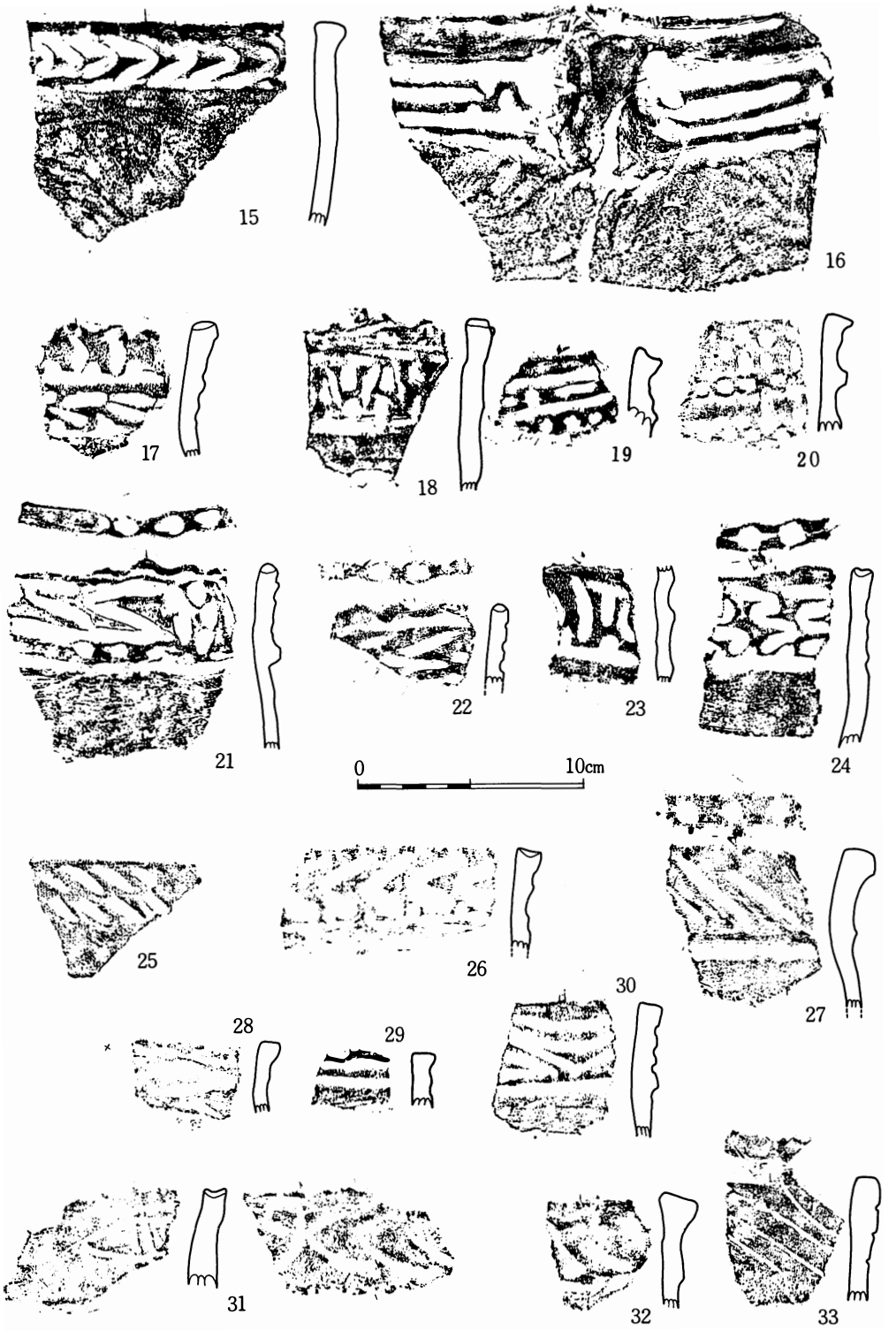
無段有文の土器である。口唇部の作出法は、断続的波浪状の篦押引を行い、それによって生じた口唇界稜の粘土のはらみを処々（又は全部）、篦圧引した所がある。また、文様施文後にその文様帯下方を（土器を正常に立てて見た場合＝以下同じ）左から右方向へ篦削をしている。その幅は2～5㎝である。このため、文様帯は幾分肥厚気味で、口縁帯に近くなる。その後、その下方を下から上へ篦研磨している。また、篦削部分も含めて全部研磨しているものもある。この場合、研磨方向は下から上へのものが多いが、横位のものもある。

以上、口縁近辺の製作工程を記すと、①胴部篦削　③文様帯施文　④文様帯下方の横位の篦削　⑤横位篦削帯下方の縦位研磨（⑤′として文様帯下方の全研磨）となる。但し、②として、文様帯の研磨を行っているようだが、確証はない。なお、B形との相違は④を行い、文様帯の区割を示していることである。

文様は、細形凹文で、工具は篦状のものと考える。旋文位置は口縁に限られ、その内一部は口唇に刺突連点文・沈線文を持っている。

D 形（47～81、100～105、107）

この類は前三者と異なり、明瞭な段を有し、口縁帯が顕在化している。これは、段部に粘土紐を貼付する際に、それ以下の粘土紐よりも太いもの（または、伸し方が少ないも



第18図　東貝塚土器図（B型）

のかもしれないが、その点の推測は不能）を使用した結果である。口唇部の押引は弱く不連続であり、むしろ撫状である。このため、前三者とは異なり、口縁帯の断面観は隅丸の長方形に近い。また、口縁帯下の削りはなく、段と下方の堺となる段の面自体の篦削りと篦研磨を行っている。（＝段部の篦削）

以上により、口縁近辺の器面仕上の工程は、①作段＝口縁帯　②口縁帯研磨＝文様帯　③施文　④段部の篦削りまたは篦研磨　⑤胴部の篦研磨となる。なお、胴部の篦削り（縦位＝下から上へ。以下同じ。）の順位は⑤のために不明であるが、一部に③④間に行っているものがあり、この間に施行したものと推定した。

器形上の特徴としては、外壁段部と対応する内壁に明瞭な稜線を持つものが多い。これは口縁帯の粘土紐の太さが関係しよう。この太さのため、稜ではなく、粘土の研磨残しによる正面観波浪状の低い段になる場合もある。また明瞭な段、稜ではなくとも屈曲するのに変りはない。これは、A～C形の内壁との大きな差である。また、外壁も段下からすぐに外曲しながら底部に至る。

文様は三日月状連続文、斜線文、逆S字状文など曲線文が多い。文様帯はA・Bに比し狭い。しかし、大半は文様横断面観がU字状となる。

E　形（82～83）

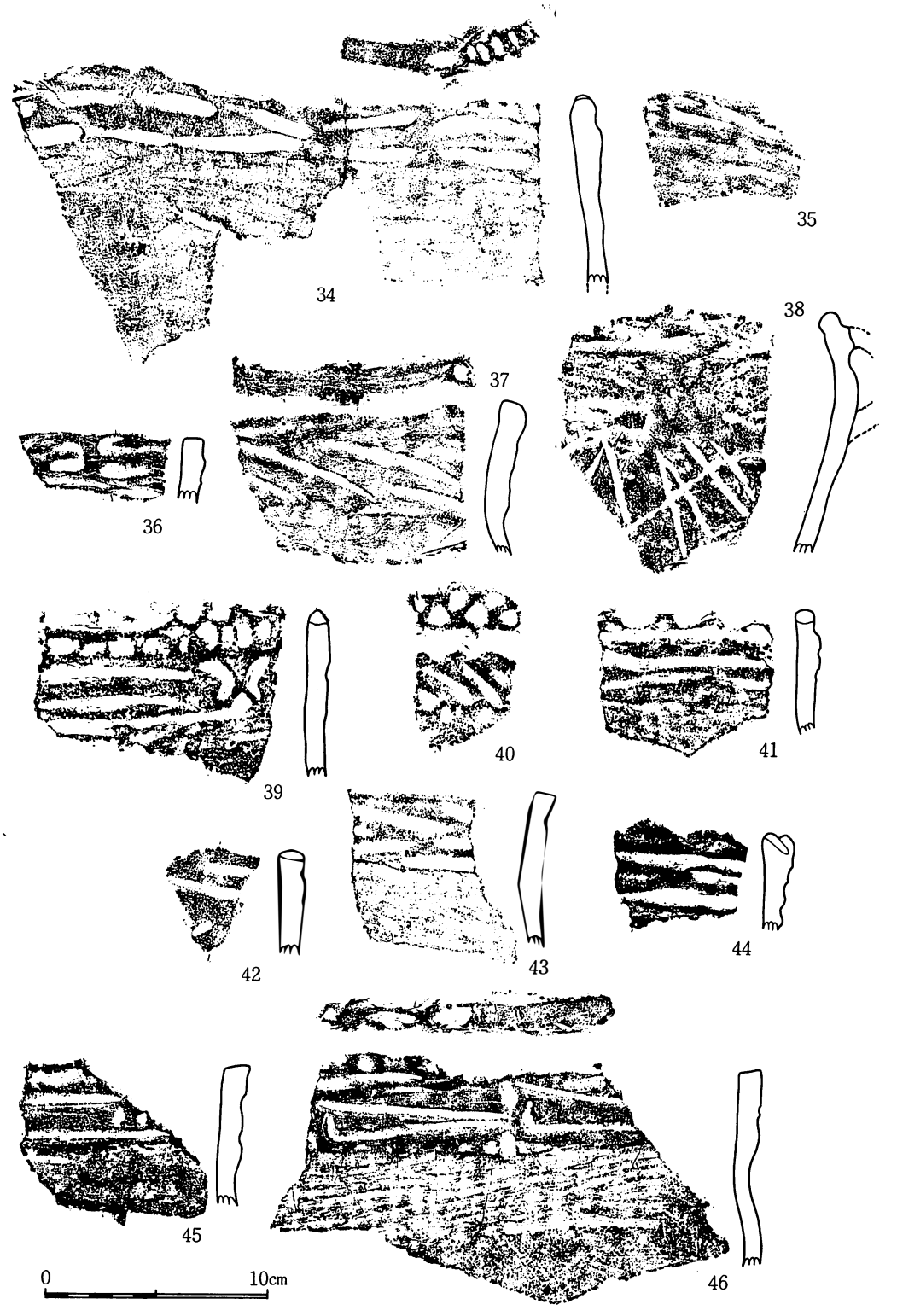
有段有文の土器群である。外壁に紐土帯を貼付し、明瞭な段を作る。この段面とその近辺の胴部を一時（いちどき）に篦削りし、内曲する頸部を生じることになる。また、この段面と段とを削去することによって、内壁の屈折部は、外壁の段よりも1～3㎝下方になる。また、屈折部の稜は、むしろ無に近く、研磨時に粘土を寄せて稜を作出した観がある。しかも弱い。

上記をまとめて工程順を示すと、（前1）作段　②段面段下削り　③施文　④段下研磨　⑤口縁帯研磨　⑥文様周辺篦引となる。D形との相異は、D形が器面調整としての胴部篦削となっているのが、E形はそれも当然あったであろうが観察不能であり、かわりに段面・段下胴部の同時削りとなっていることがあげられる。このため、心持ちD形よりも口縁帯が狭くなる。また、④工程はD形が段面とその近辺の段部の篦削り、もしくは篦研磨となっているのに対し、E形は段面に対しては何の意図も感じられずに、段下のみの篦研磨が施されていることもあげ得る。⑥工程の付加はE形しかない。

文様は複垂線と平行線である。その他の文様上の特徴はD形の項を参照されたい。

F　形（85～99、106、110）

外壁無段、内壁有稜の一群である。外壁の口縁近辺の製作工程は（前2）としての胴部篦削（前1）太い粘土帯の貼付 ⇨ 口縁文様帯　②口縁帯器面調整＝撫で　③施文　④文様帯下篦引となる。この内、（前2）は削りの方向は横位であるが、左右の廻りの比が相半ばする。④は篦引後、全面を入念な研磨を施し、（前2）が不明となっているものもある。



第19図　東貝塚土器図（C型）

文様は、断面U字形が多いが、一方痕跡的なものもある。

（2） 東貝塚採集の無文土器

有文土器は、製作工程を中心に分類を試みた。無文土器も旋文に関する諸工程を別にすれば、製作工程は同一と判断して、分類を遂行してみた。しかし、その過程で器形も有文土器とは異なっているものが多いと感じた。したがって、本項では、無文土器と有文土器の器形類似の資料に限り記述することとし、他は図示に留めた。

A′・B′形（120）

口唇近辺に横撫の刷毛を使用する。

C′ 形（135）

口唇断面観はA形に似る。

D′ 形（109、115、119、121、125、129〜131）

文様関係の工程を除けば、他は殆ど有文土器に一致する。ことに109は有文土器の100と器形が完全に近く一致している。文様帯の篦研磨も入念である。

E′ 形（126

外観上はE形に似るが、製作工程を考慮すると後述のG形に近い。記載外の内、111〜116、119は上方の粘土帯の附着状況が明瞭である。117は縦位の篦削後の刷毛による横ナデが明瞭。この記載（E′形）外のものは、古型式に属する。

（3） 西貝塚採集の有文土器

西貝塚は、縄文時代中期から後期中葉の西平式土器の祖源的な土器までを含んでいる。なお、第6ℓ層以上には弥生時代後期の土器から土師式土器までを含んでいるが、これは今回の報告からは省いた。

A 形（171〜175、176、180、205）

本形式の土器は施文後、入念な周辺研磨を施すことが特徴である。文様は太形凹文の入組文的なもの（171）指頭様凹点文等がある。

B 形（176〜178、181、182、187）

A形の平行凹線文とS字状凹文の組み合せのもの177がある。これは東貝塚にはない。

C 形（183、184、186）

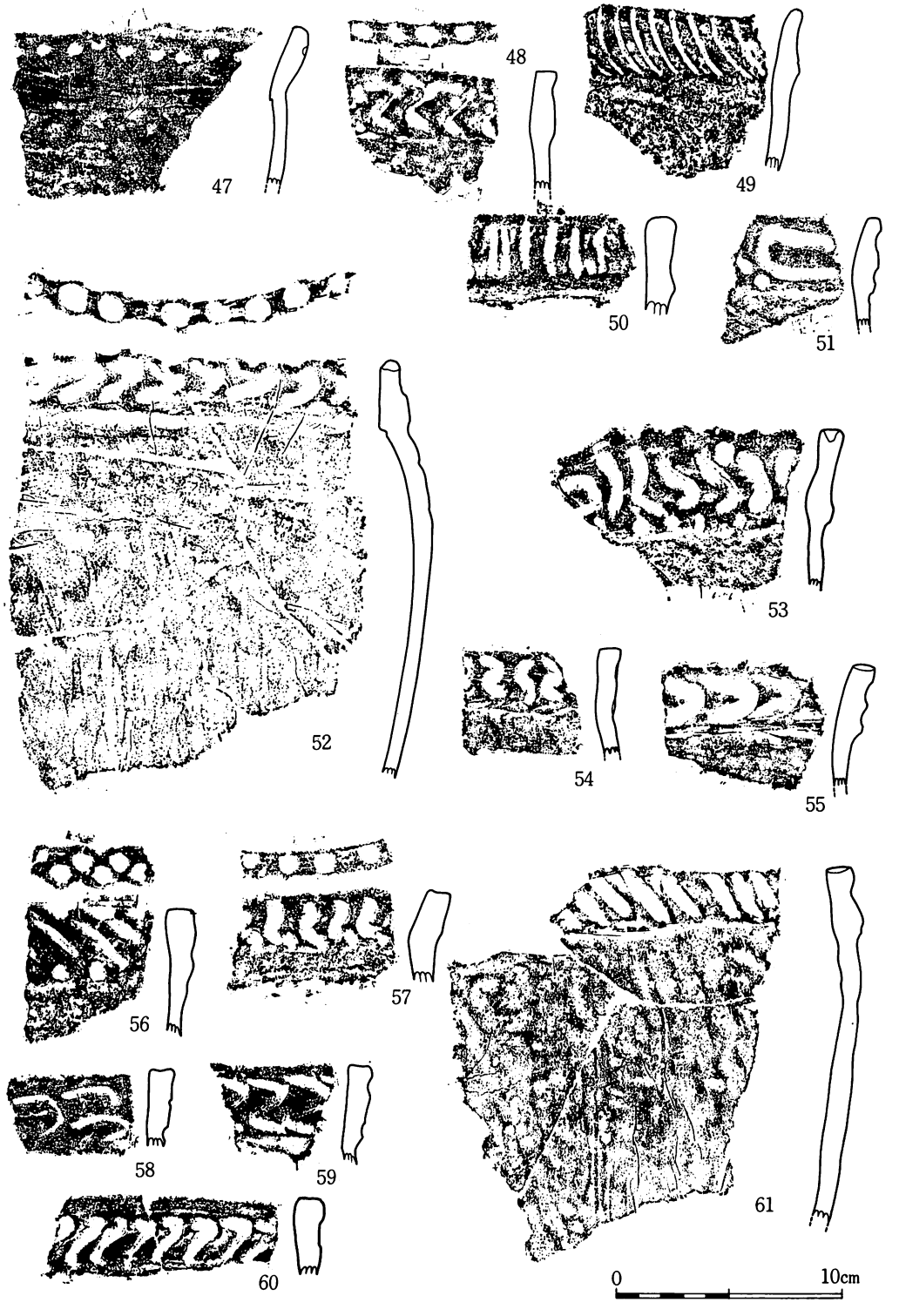
無文粗製の土器で、工程上本形に一致するものを、便宜上ここに記した。

D・E形（207）

東貝塚にほぼ同じ。

F 形（211,213〜225）

沈線が細く痕跡的なもの（214）、明瞭なもの（225）がある。いずれも、周辺研磨を施さない。文様帯下に施文後に引いた沈線、刺突連点文等のあるものがある。これらは文様



第20図　東貝塚土器図（D型）

帯下の篦条痕が粗い。（223,224）型式的に新しい。

G 形

以下、H・I・J形は本地区にのみあって、東貝塚に全くみられなかった資料である。本形は、口縁部が肥厚する。これは前述D～F形と同様であるが、肥厚させる為に貼付した粘土は前工程の粘土紐の上位には付けず、前工程の表面上方に貼付し、口唇部は貼付粘土と前工程粘土帯の両者の粘土によって なっている。 また、 文様帯と口縁帯の不一致もC～F形と相違するところである。これには三形式がある。

G 1 形（228～230,235～238）

口縁肥厚帯の粘土の貼付は、前工程の粘土最上面に薄く貼りつけるのみである。したがって、口縁部の断面観は三角形状を示す。貼付したのちに上下を研磨する。そのため、段も角ばってはいない。ただし228は、Ⅱa文様帯施文時に篦で掻き、一見、角ばった段となっている。235も口縁肥厚帯の状態は同様だが、頚部の研磨は入念であり、焼成とも極めて良好である。形式的には本類ではあるが、型式的異和感を感じる。

文様は山内清男氏の言うⅠ・Ⅱa文様帯に認められるものと、Ⅰにのみ認められるものとの二者がある。[注1] いずれにしても、斜線文、垂線文の組み合せである。ただ、それらの単位性については、把握していない。

G 2 形（231,232）

口縁肥厚帯の貼付状況は、G 1 形に同じである。しかし、以下の点で異なる。貼付以前に前工程として、頚部以下の研磨を行う。 そのため、 段は（232）のように頚部側に張り出し気味となる。また、最終工程として口唇部もしくは口唇部内面を、篦押引あるいは篦削りによって「面取り」を行う。

施文具は先端U字状の細い篦様工具である。文様はⅠ・Ⅱの文様帯に存在し、刺突文、平行線文等がある。組み合せはⅠの場合は平行線文と縦位刺突文で、この刺突文で区切りを行う。この二者で一単位であろう。平行線を縦位（垂線・刺突文）で分断するのは、E・F形と同様であり、二本（又は二個）で一対となるのはE形と同様である。

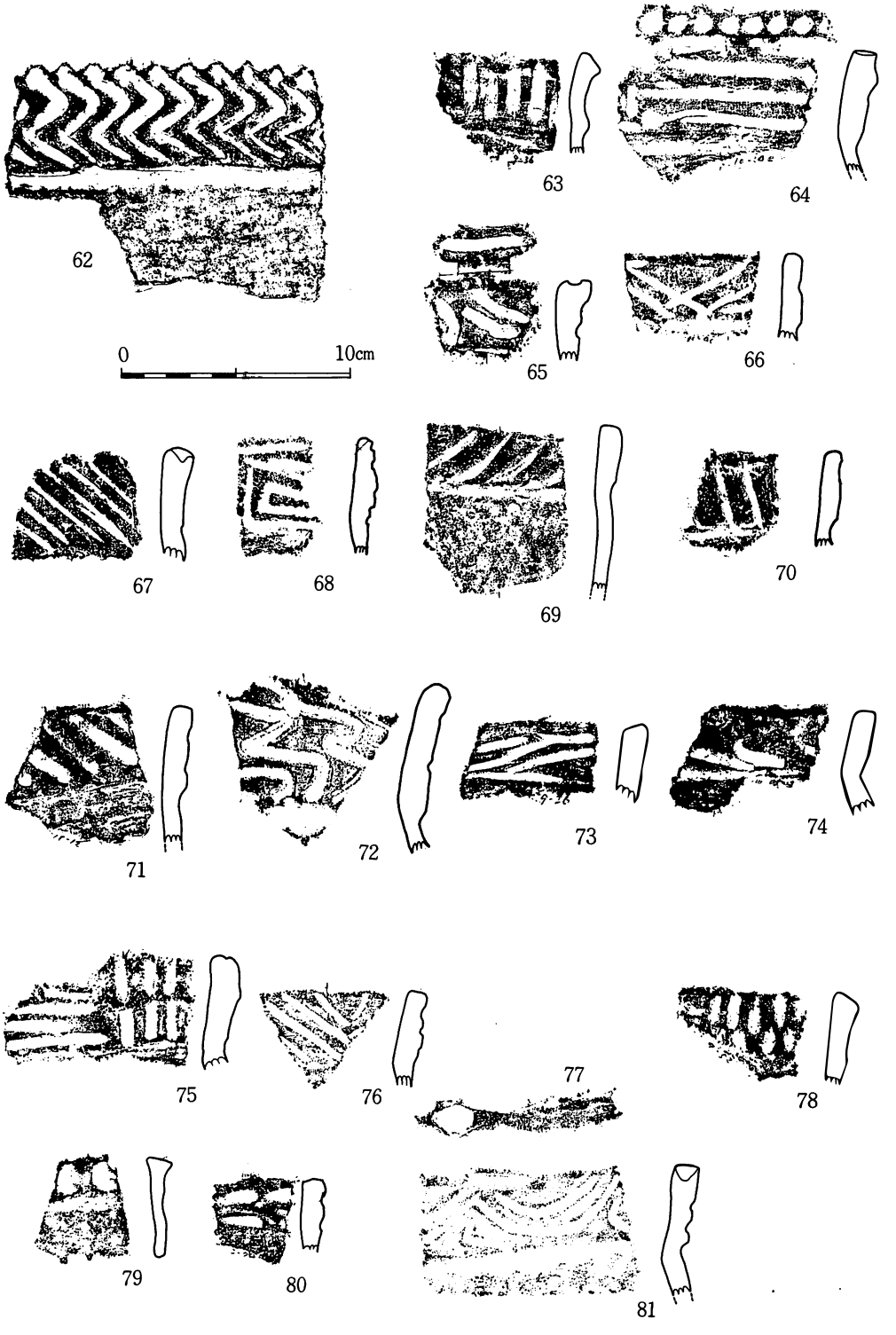
G 3 形（239～245）

器形・製法は殆どG 2 形に一致する。ただ本形は無文である。全形はG 2 形と異なるらしく口縁近辺は外曲しているものが多い。器高の低いものが多く見うけられる。

なお、236,237は貝殻復縁による施文である。おそらく、同一個体であろう。この口縁断面観はG 1 形に一致し、口縁肥厚帯の製作工程はG 2 形に一致する。なお、1点しか例がなく、本稿では所属形式なしとしておく。

H 形（233）

本形は前項の無所属形式と同様に、貝殻復縁によって施文されている。しかし、口縁製法が異なるため、少数例ではあるが、一形式とする。口唇部形成の前段工程による器形は内曲している。そこに、内壁の口唇部下に一条の粘土紐を貼付し、外曲した内壁を構成す



第21図　東貝塚土器図　（D型）

る。このため口唇部は消滅して、前段工程の口唇部は口縁部に昇化する。これが文様帯となり、施文が行われる。第233図は、このような製作工程の為に、口縁部の中央（粘土の接ぎ目）が凹んだままとなっている。

その他の土器

以下の土器については、分析分類の途時を報告する。

(イ) 磨消縄文系土器

磨消縄文は今次資料中では257のみである。他は擬似縄文または充填縄文。

- 339は福田KⅡ式土器と考える。口縁部より外曲しながら、そのまま底部に至る。若干上げ底である。三本を一単位とする沈線が基調ではあるが、下部の一対のみ二本沈線である。この種の土器では朱塗の例が多いが本例では泥土汚洗により不明である。
- 小池原上層式系の土器（247〜253，256〜260）[注2]

260は、鉤手状繋ぎ文、低い山形口縁近辺の沈線、橋状把手の文様構成等からみて頼戸内平城[注3]、小池原上層式の系統の土器とみたい。259も同じく、文様構成に瀬戸内的様相を感じる。この種の文様は、御手洗B式等では非常に稀である。

- その他の磨消縄文系土器

267は北久根山[注4]式に伴出する土器に近似する。口縁部断面三角形の研磨度の高いものである。261は器面調整後に縦位の粘土を貼付し、擬似縄文（施文具不詳）を施している。旋文に至る以前で、成形中断があることに注意した。308は底部である。凹底であるが、その接地面にのみ、擬似縄文を施している。

(ロ) 縄文系の無縄文土器

小池原上層や、その前後に位置する沈線文土器と考える。267は北久根山系の土器である。289は従来は西平系土器と称されているものであるが、より遡源的な形状である。口縁部の製法は、G_1形土器に近似し、頸部の研磨も入念である。刺突文・横位沈線等の状態は西平式土器に類似するが、それより幅広である。

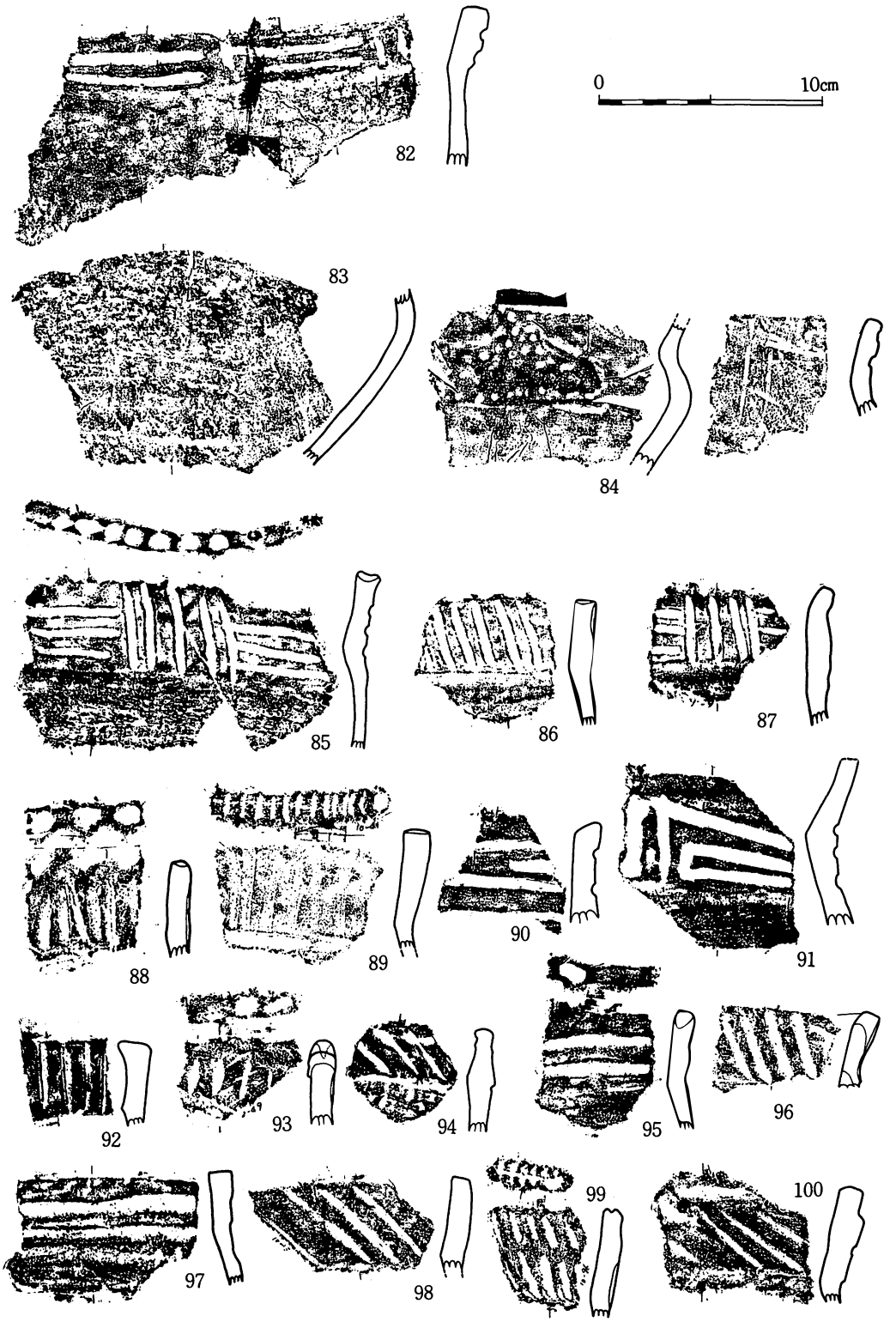
(ハ) 刺突連点文の土器（272〜288，290）

従来、御手洗A式土器[注5]と呼称されている土器に該当する。

器形は鉢形に限られているようである。口縁は平縁が多いが、1点だけ、山形隆起をなしているものがある。しかも、口縁帯が段をもって以下と区別される。その貼付状態はG形土器にほぼ一致する。

（4） 西貝塚採集の無文土器

本地区は東貝塚に比して、遺物の型式・形式ともに多種多様である。一方、それに相反して無文土器の数量は多様性を分析するに足るものではない。器形も単純で、製作工程をみるにはプログラムが少なすぎた。したがって、本項では、口縁部近辺の器面調整の状態で区



第22図　東貝塚土器図（E・F形）E＝82～84 F＝85～100

分しておく。なお、その形状は「基本的に」と言うに過ぎず、下記の「縦位」の場合には「斜位」も含めている。ただし、横位の場合は一定の規律的な幅が認められる場合にのみ使用する。

a　類（314〜317,

本類は口唇部直下に 1〜2㎝の幅で刷毛状工具もしくは篦状工具で、横撫・横研磨を施し、それ以下は縦位の「ナデ」を行っている。口唇部に円形刺突文を持つものがある（322）。

b　類（321，326，328）

本類の横位、縦位の幅は、a類に一致する。しかし、いずれも「削り」である。

c　類（332,

口唇部直下から6〜7㎝の幅広の横削りを施し、それ以下は縦位の削りである。器面・焼成に粗さを感じる。

d　類（322,

全面、横位の篦研磨である。後述e類よりも精製度が高い。一部、篦様工具を押しつけながら引いたものがある。334は、同じ横研磨ではあるが、焼成は極めて良好で、型式的にはやや異型さを感じる。波状口縁のものもある。

e　類

全面横撫の器面調整である。331のように細長い篦条線で調整したものもある。これは胴部に縦位のものがあり、胴部下半では縦位に変化するのかもしれない。

上記a〜e類には、形式・型式ともに無関係に区分したものだが、時間的には、おおむね次の様な関係があるものと考える。

a、b類は東貝塚に多く、東貝塚ではc〜e類の資料は少ない。また、阿高系の土器らしい314などは、a類である。基本的にB〜D形土器は本類の手法を踏襲しているとみたい。口唇近辺の横撫は、文様帯の中心をなす。一方、採集時のこの類の土器に附着した土壌を検討すると、下層方面に近いものが大半である。したがって、a・b類は古型式に多い器面調整と考える。a類が精製、b類が粗製とも考え得る。

c〜e類は、a・b類の反対理由で新型式であろう。330は、古い形の西平式土器に伴出する無文精製の口縁であろう。

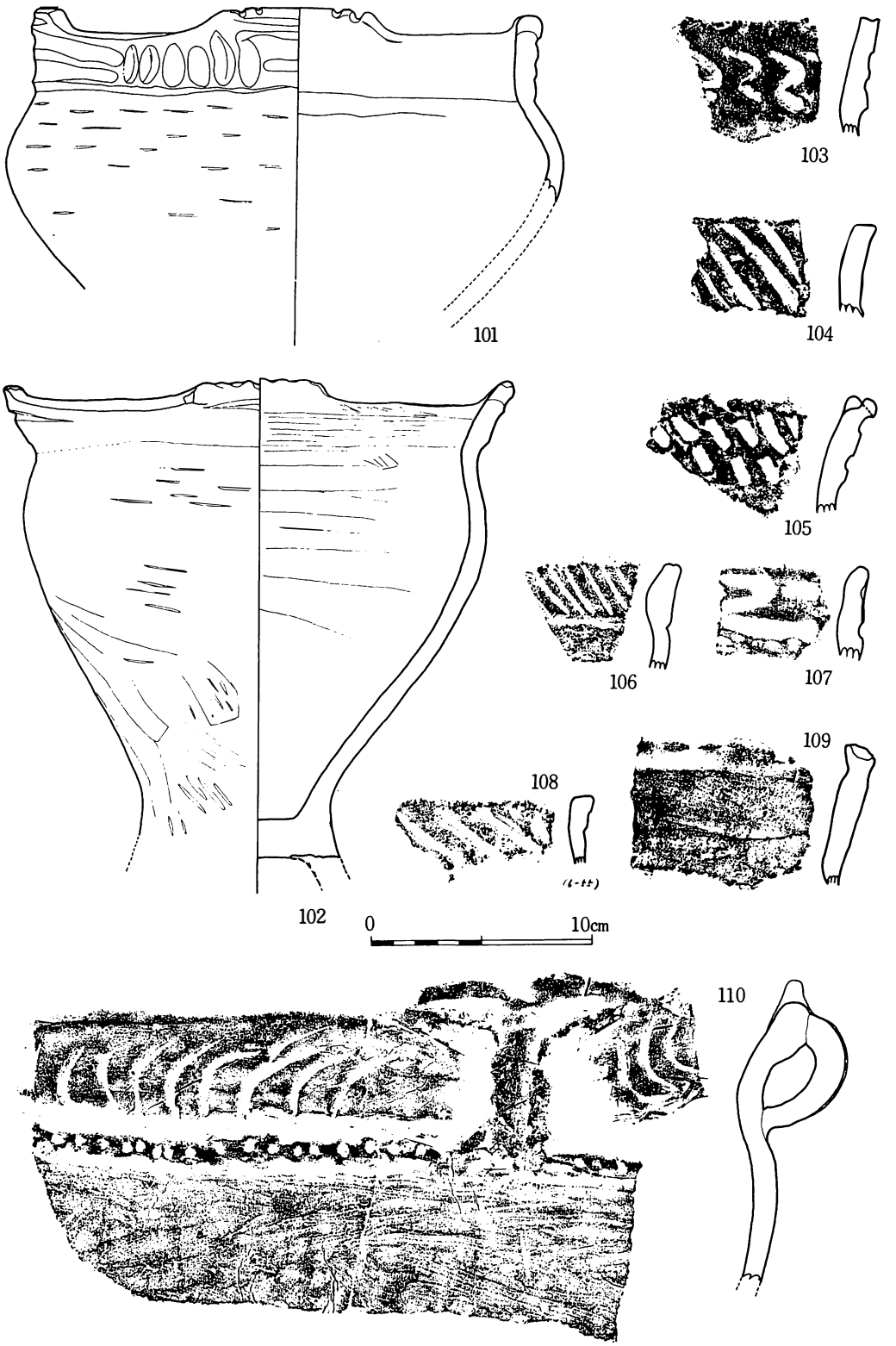
胴部器面調整に条線文がある。この内300,

後期北久根山式土器前後に形式的復活をする留意すべき器面調整である。

（5） 黒橋貝塚出土の土器底部

本項では、黒橋貝塚二貝塚の底部資料に就て言及する。形式との対比を示し得るものが少なく、無文土器同様、類別に留める。

底部は五類七種を製法的に分類した。



第23図　東貝塚土器図（D・F型）

a_1　類（136〜140、297、301）

基底に円盤を据え、その上に胴部粘土帯を付着させていく。接地面近辺で、外壁は内曲する。その後の削りの方向は、下から上に篦にて行う。東貝塚で6例、西貝塚で1（＋2）例を認める。西貝塚の後者の2例（301他）には外壁の接地近辺の辺りを幅1〜2㎝の狭い横撫で（最終工程）がある。この工程は後述のb_2類の工程と同じである。

内壁は、基底円盤との接着点を中心に横撫でが行われる。

a_2　類（141〜145、296）

基底円盤と胴部との接着関係はa_1類と同様である。又、外壁の状態も変りはない。しかし、内壁が異なる。a_1の接着点は単なる撫でであったが、a_2は指頭様の工具（人体のそれも含む。）で抉り状に強く押さえて引く。したがって、太形凹文状を呈する。東貝塚に5点、西貝塚に1点を認める。

b_1　類（149〜154、298）

b_1 b_2類は基底円盤の外側に粘土を付着させ、胴部を成形する。しかし、b_1類は外壁と内壁がa_1類と外観上一致する。篦削りも同様である。なお、通常、基底円盤の外周は面をなし、ほぼ直角に切れる。しかし東貝塚の149、152と西貝塚の298は、外周が線状で尖っている。

東貝塚に6例（4＋2）と西貝塚に1例（＋1）を認めた。

b_2　類（155、159、162、299、303、306）

b_2類は外壁接地面に横撫で（幅1〜2㎝）がある点で、b_1類と異なる。東・西貝塚共に3例を認めた。

c類：（102、163、164、193、304、309〜312）

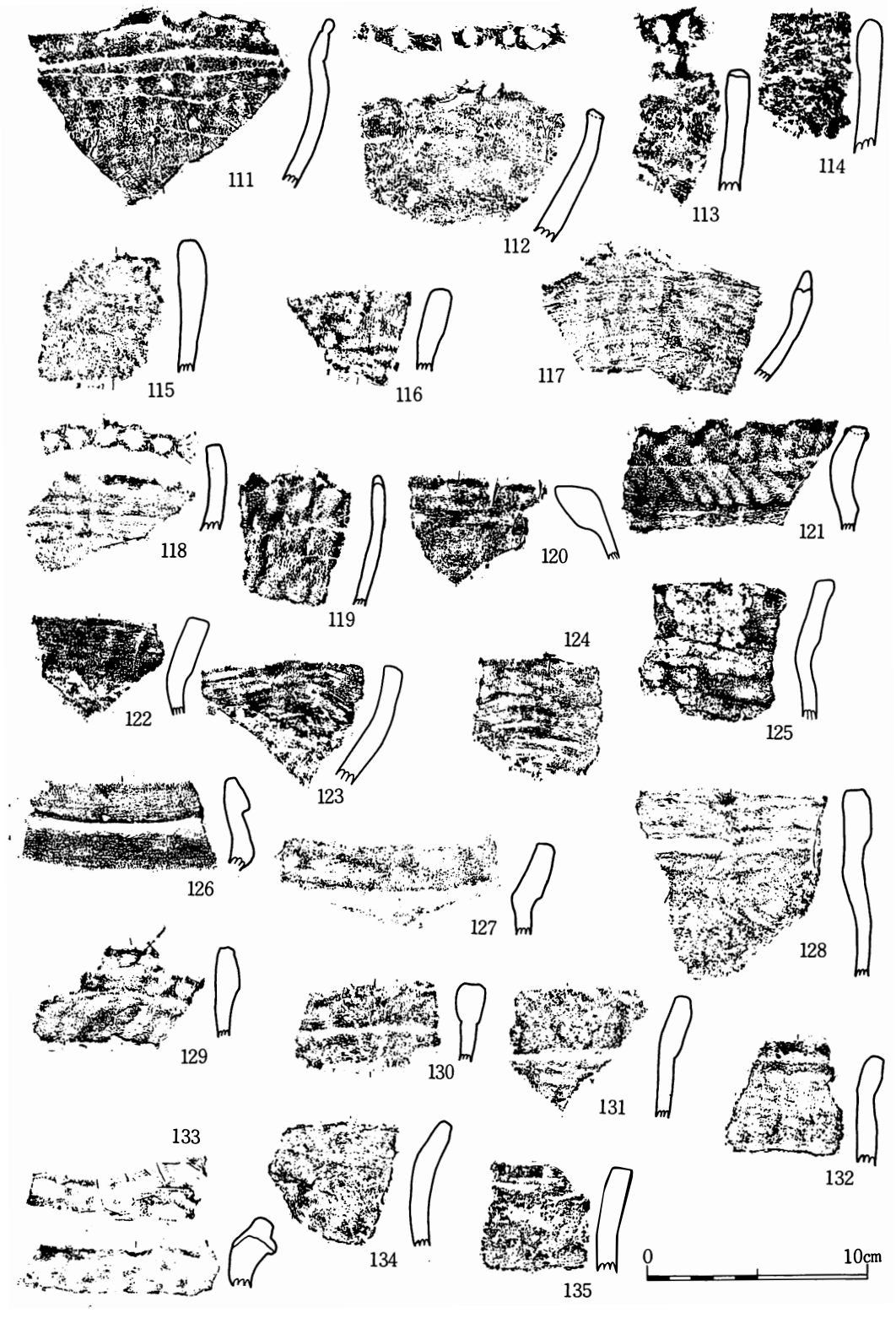
C類は高台をなす一群である。ほぼ完形土器である102も本類と判断した。東貝塚に3例、西貝塚に6例を認めた。

東貝塚の場合は、底部の円盤が器壁と同時進行的に製作されたらしく、接着は器壁の内側（器壁は円盤の外側）でなされたように観察した。西貝塚も1例は東貝塚と同様であるが、他の4例の器壁の粘土の付着は、円盤面内に上、下しており、工程に心像中断を認める。

d　類（156〜158、305）

d類の基底円盤と胴部粘土の付着状態はb_2類に近似する。しかし、その後の所作は異なる。まず、接地面への粘土伸ばしがなく、他面との器壁厚に差はない。又、その結果でもあろうか、外壁は、接地面近辺で内曲することがなく、緩い外曲で胴上半に向かう。底部胴部共に器壁の薄い傾向があるのも本類の特徴である。

なお、本類は東貝塚に3点、西貝塚に1点を認めたが、いずれも朱塗土器である。これは器形と朱塗土器との関係に何等かの規律を推すことが可能である。（本遺跡に限定するが。）



第24図　東貝塚土器図（無文土器）

e　類（160、308）

本類は製作上基本的にa類に近似する。しかし、a類は、凹み底を呈しつつ外縁が線状となっているに対し、前者は平坦面を持って接地している。それと、どのような関係を有するのかの判断の材料に乏しいが、基底円盤は外周近辺で急に部厚となり、その近辺は地に向って、屈折した様な観を呈している。東、西貝塚に一点ずつ出土しているが、西貝塚のそれはその平坦面に擬似縄文を施している。

（6） 朱塗土器

言辞は市毛勲氏[注6]によった。

本項は形式他の分類とは全く関係がなく、単に「道具」中の特殊例として他の土製品と同列に扱っている。

本遺跡でも東、西貝塚に朱塗遺物が出土している。型式上、多型式に亘り、形式上も前記のA～G型に合致するのもあるかと思えば、全く異なった形式をなすものもある。文様も無文例（全面塗彩）朱による文様、全面塗彩ながらも沈線他の文様をもつものがある。又、小破片が多く、全形を窺い得るものも少なかった。便宜的に型式・形式を混用する。

340、341は南福寺式系[注7]のものと考える。器形は八幡一郎氏[注13]が報告した例に近似する。全面塗彩である。157も同式底部である。底部接地面に朱による三角文を付しているようだが、採集時に水中に没していたため洗われており、認定不能である。

349はD形土器である。口縁帯に朱塗をしている。沈刻はその後に行われ，

端が尖がる。352もF型土器であろう。全面塗彩である。後期中葉のものか。

写真図版16（121）は把手である。x字状橋状把手は出水貝塚からも多数出土している。型式は認定不能だが一応出水式土器[注8]としておく。353は出水式土器であろうか。342は沈線内にのみ施朱している。156～158、305等は底部の項で記したので別段記さない。

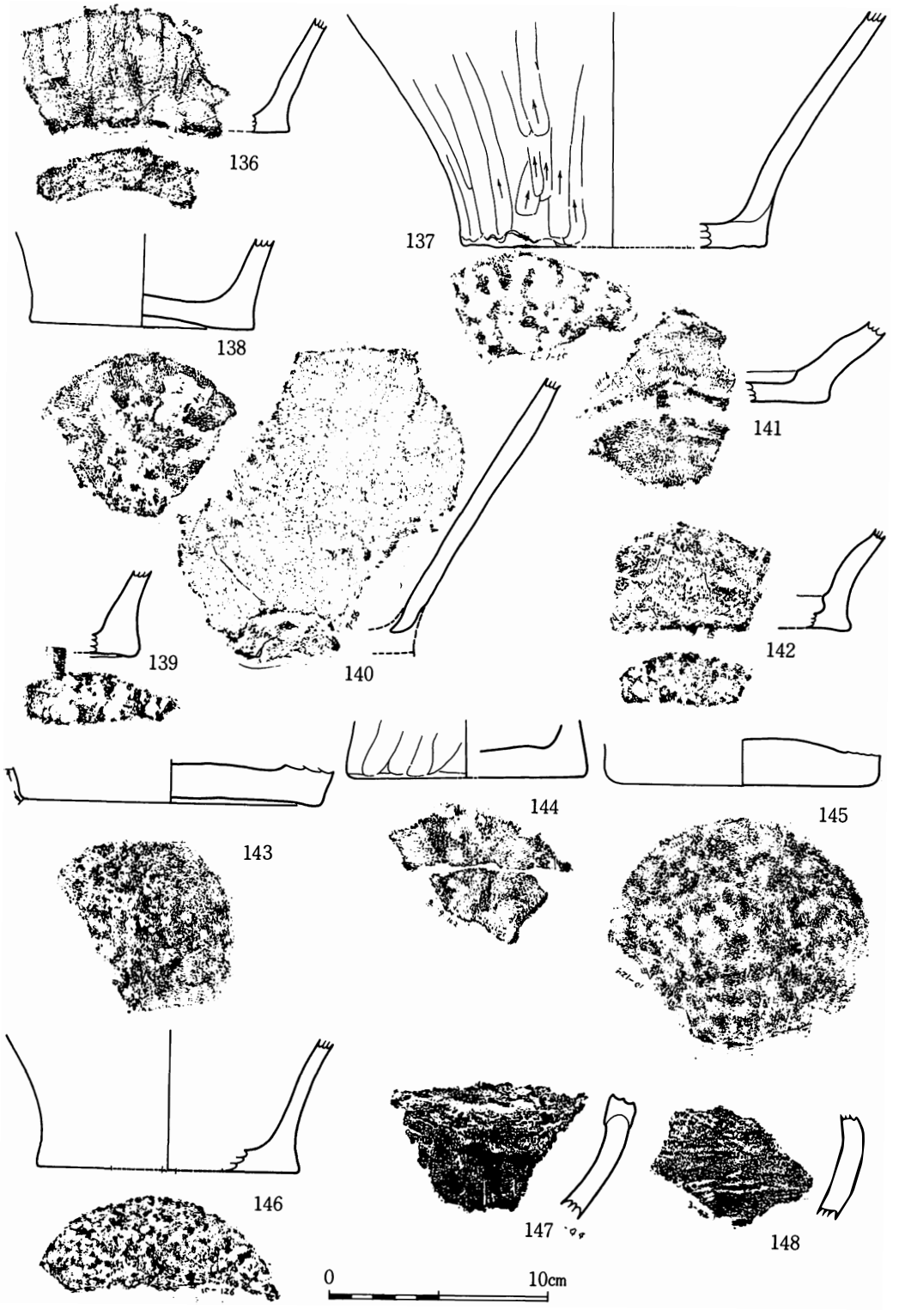
朱塗土器は、九州では早期[注9]に始まる。しかし、朱による文様描写は九州でははっきりしない。中期阿高式期[注10]の朱塗は全面塗彩に近く、文様を構成するものはない。本遺跡でも積極的にそれと認定し得るものはなかった。しかし、157の例から、朱による文様構成があった可能性を、可能性として留保しておきたい。

また、無文で全面塗彩の多さと、349にみる沈線の工程順位から推すと、朱塗は沈線等の文様よりも心像的高位にあったとしておきたい。

（7） 土器分類に関する所感

分類は形状分類、とくに製作形状によった。理由は下記の通り。

土器製作には、発信者と受信者の二者が不可欠である。発信者は彼の思う前世代の土器製作手法を用いる。しかし、彼自身の意図の有無にかかわらず、前世代からの誤った情報と時代による彼自身の新知見と集団規制を心像化しており、土器製作はそれに基き行う。つまり土器製作は情報処理の問題である。個体中の文様の軌跡は、より個性的問題である。ただ、製作の時・用具・手法との関連の中で、単元文様や文様帯の位置・文様帯間の文様構成の



第25図　東貝塚土器図（底部）

相違等との組み合せを参酌する場合にのみ、集団規制として有効であると考える。しかし、本遺跡の例数のみではこれを断念せざるを得ない。したがって、文様と共に発信され、より実体験的な製作手法・工程が本遺跡資料の分析に唯一の方法となる。

この意識下に分類をしたが、統一性（無文土器・底部等）を欠いた。また、文様構成上、他遺跡例との比較対照を意図的に行わなかった結果、異種異型式または同種同型式と考え得るものを同形式として分類した。これは、文様の単位単元文様を考慮しなかった筆者の分析不備でもあるが、形式と型式の差でもある。なお、西貝塚の分類は資料数の関係ばかりではなく、筆者の能力の問題もからんで、形式分類を行わなかった。形式はおおむね、8形式に分類し、別に縄文系土器と御手洗A式系土器を記してきた。ここで、文様構成を区分原理とする「型式」と本稿形式との対比を考えてみたい。（区分原理が異なるため、合致しないのが当然なのだが）（48頁表参照）

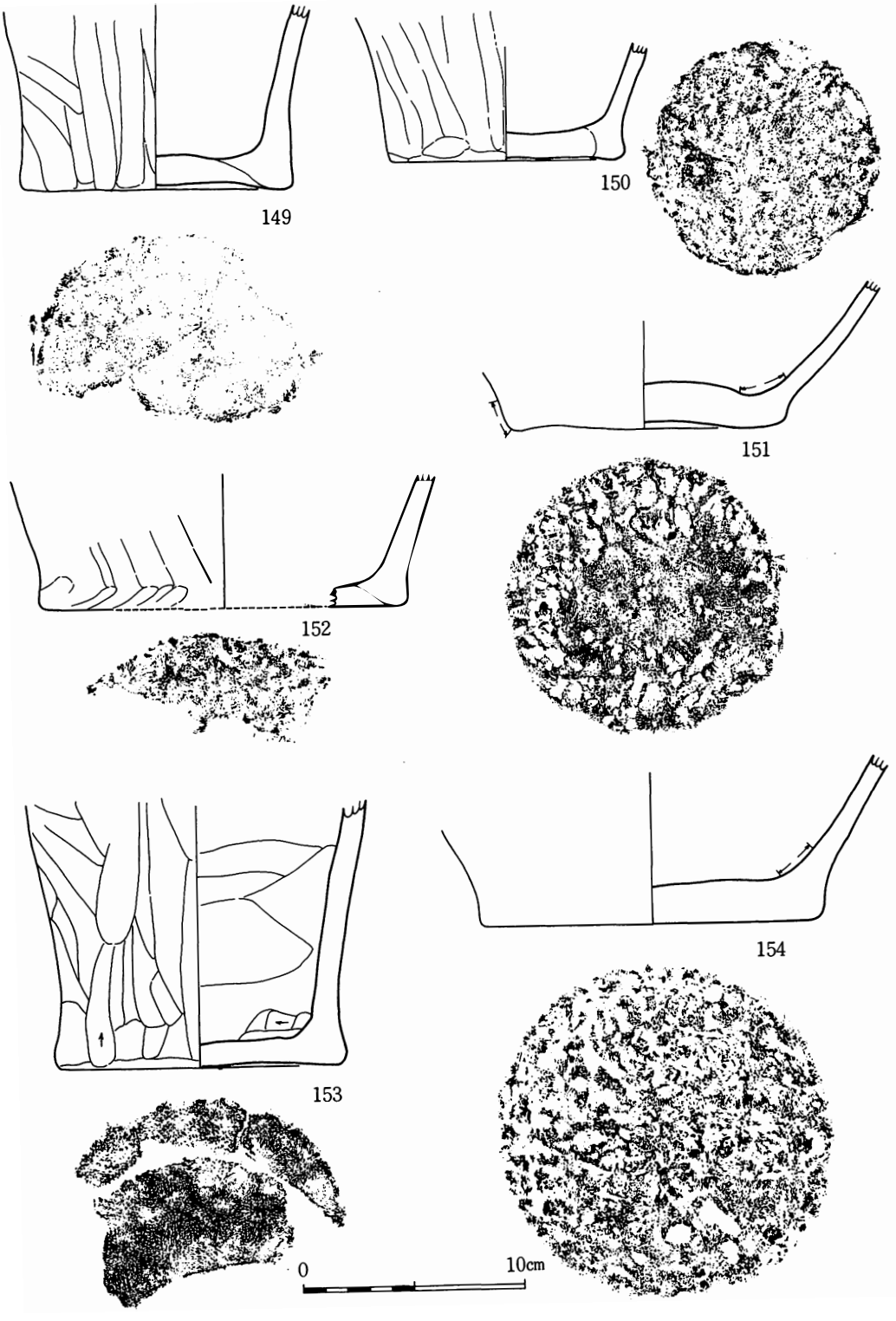
この表によると、機械的分類である形式と系統的分類である型式とは、全くの無関係とは言えない。むしろ、密接な関係を持っているとしか言いようがない。しかし、一方では逆に型式分類には製作手法への考慮が二次的にしか関係していないといえる。この重複と間隙については、次の様な推測をしてみたい。

従来、南福寺式土器と出水式土器は一系統二時期に弁別されてきた。その中の比較弁別作業によって得られた両者の差違を略記すると、第一は曲線的文様と直線的文様である。第二は沈線の幅の大小である。第三は 三角形箆削文の有無。 第四は口縁帯幅の大小。 等々である。これらは一般に、阿高系文様の「後退」と「頽廃」の度合として表現されてきた。

しかし、分類における区分肢は互に排他的でなければならないと思う。上記の種差・種差の意味するものを併せ考えて実見した場合、果して、南福寺式・出水式土器の区分が可能であろうか。文様は確かに土器の持つ本質的属性であるのかもしれないのに、土器個々にあたって感覚的に弁別するしか方法がないのである。先学の与えた概念は、二・三の図と曖昧で混乱した定義？しかない。これは、この両型式が曖昧な内包と検討されたことのない外延によって「規定・抽象」化されてきたためである。いうなれば、これら二型式は概念として成立していないのである。

さらに、このような型式概念の曖昧さの一方で、時間差を表すものとしてのこの二型式は過半を否定せねばならないように思う。つまり、時間差は日常的で潜在的な合理化作用を経ている製作法を検討することが、その把握にはより適切である。と、するならば、前掲表にみられるように、時間差を表すものとしての南福寺式・出水式土器の排他的時間差は否定せざるを得ない。

両者は大半の期間、同時併行的に製作・使用された型式である。もちろん、所謂、南福寺式土器は、それらの中でも古期に多い製作法を持つ土器の一群である。しかし、それよりも従前、出水式土器（出水尾崎貝塚の土器＝出水土器に限定しない。むしろ、出水土器は除外）と称された土器群の一ツの姿であると考えた方が良いように思う。そして、出水土器に代表



第26図　東貝塚土器図（底部）

される出水式土器は、両型式後半期の一地域差であろう。

G形土器は、出水式土器の一型式であるが、地域差と考え得る差がある。口縁帯＝文様帯となっていない点では共通するが、施文は出水式に比べて深く鮮明である。G_1形の垂下（斜）線文も、前期曽畑式土器に近似した幾何学的文様を持っている。頭地下手遺跡のそれとも、出水土器のそれとも異なっている。黒橋近辺の地域性としておきたい。

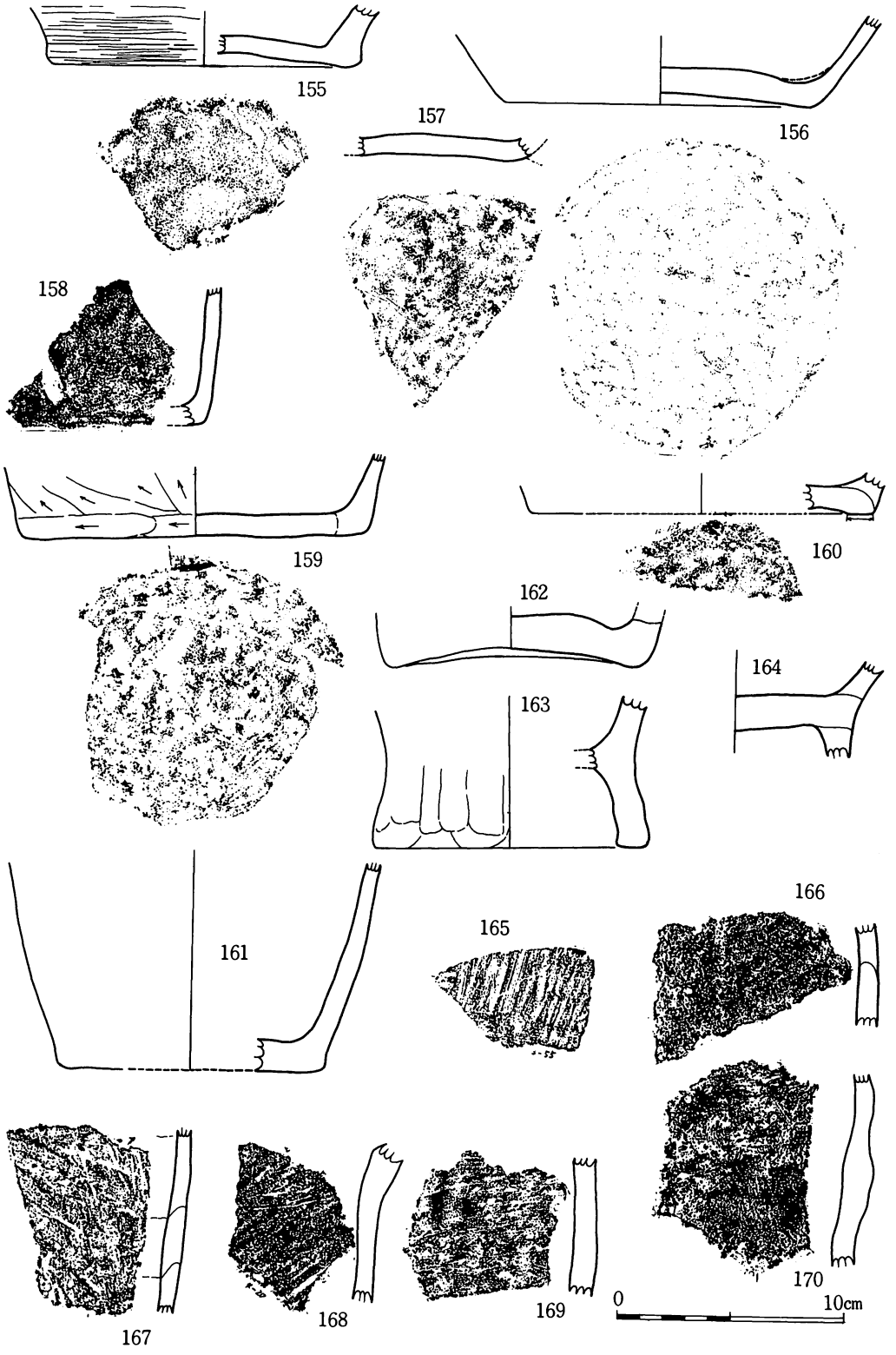
この形式は、F形土器に重なりながら後続するものであろうが、本遺跡では、この形が東貝塚は出土していない。しかも、東貝塚には1点の磨消縄文系土器も出土していない。黒橋貝塚の東貝塚では現在、一点の磨消縄文も出ていないから、黒橋貝塚では出水式期に磨消縄文を知ったとしておきたい。出水式土器も、これによって前後に弁別可能であろう。G_2形土器は、沖の原土器（Kitakuneyama sakata）にきわめて類似している。したがって、北久根山式土器直前の形態を有しているとしておく。

型式 / 形式	阿高		南福寺		出水	
	東貝塚	西貝塚	東貝塚	西貝塚	東貝塚	西貝塚
A	1～6	171. 172 188. 205				
B	7～14.16 28.29.97	173～176. 178 180. 182. 205	15. 17～27. 30	177.181.182. 187	31～33	
C			39. 40. 79	181～183.205	34～38 41～46	184～186
D			48.51～53.56 57.61.62.64. 65	185.191.197	47～50.54.55 58～60.63.80. 81.66～78. 101～105. 107～109	196.198～200
E					82～84	207
F					85～100.106	210～225. 235～237 246
G_1						213.226. 228～230 235～237
G_2						231.232. 238～246
G_3						

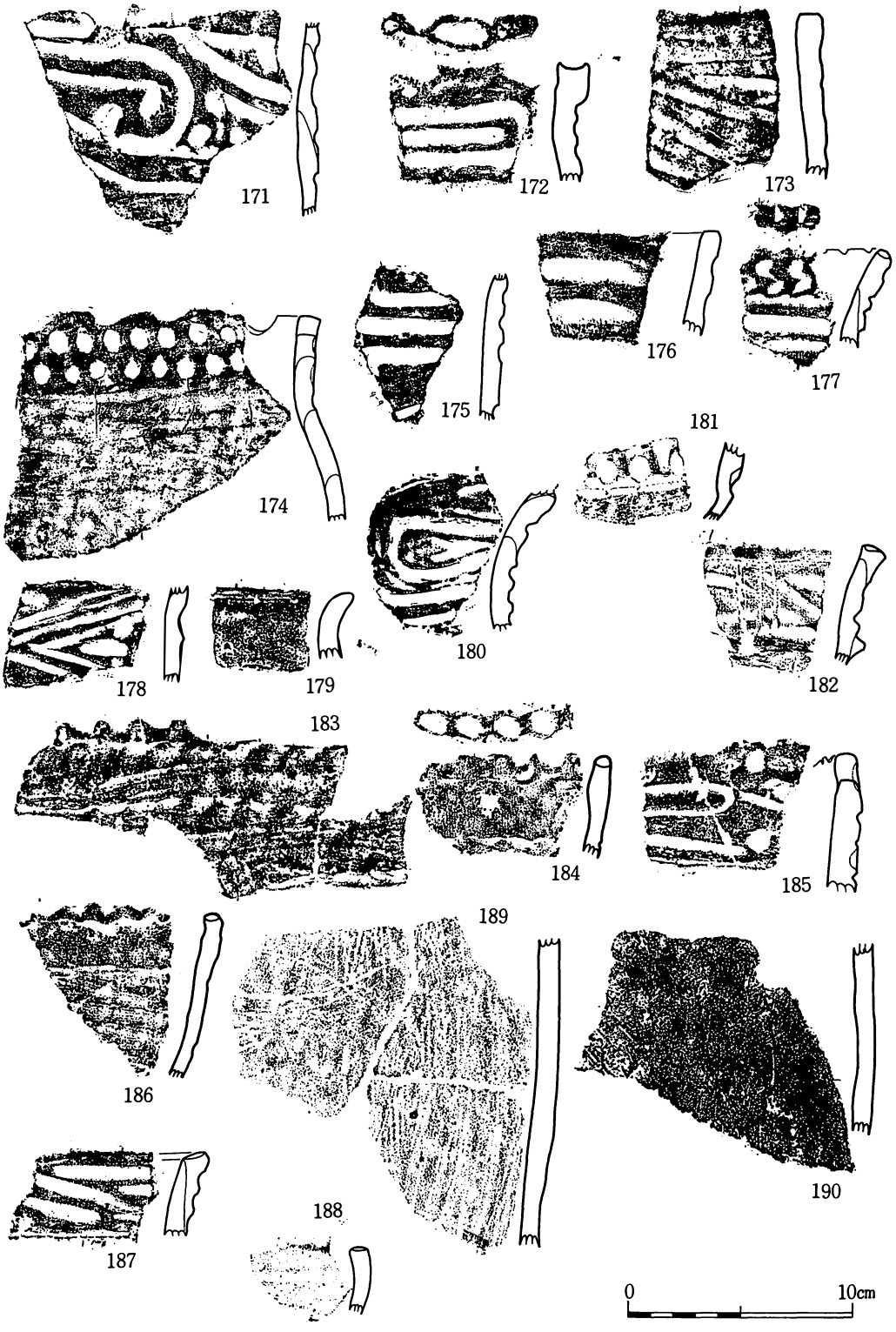
その他

平城・小池原系…250.259.260.266
北久根山式……201.226.254.262.267.268
渡鹿……258.261.269
御手洗B式……249.252
鐘ヶ崎式……247.256.257.263

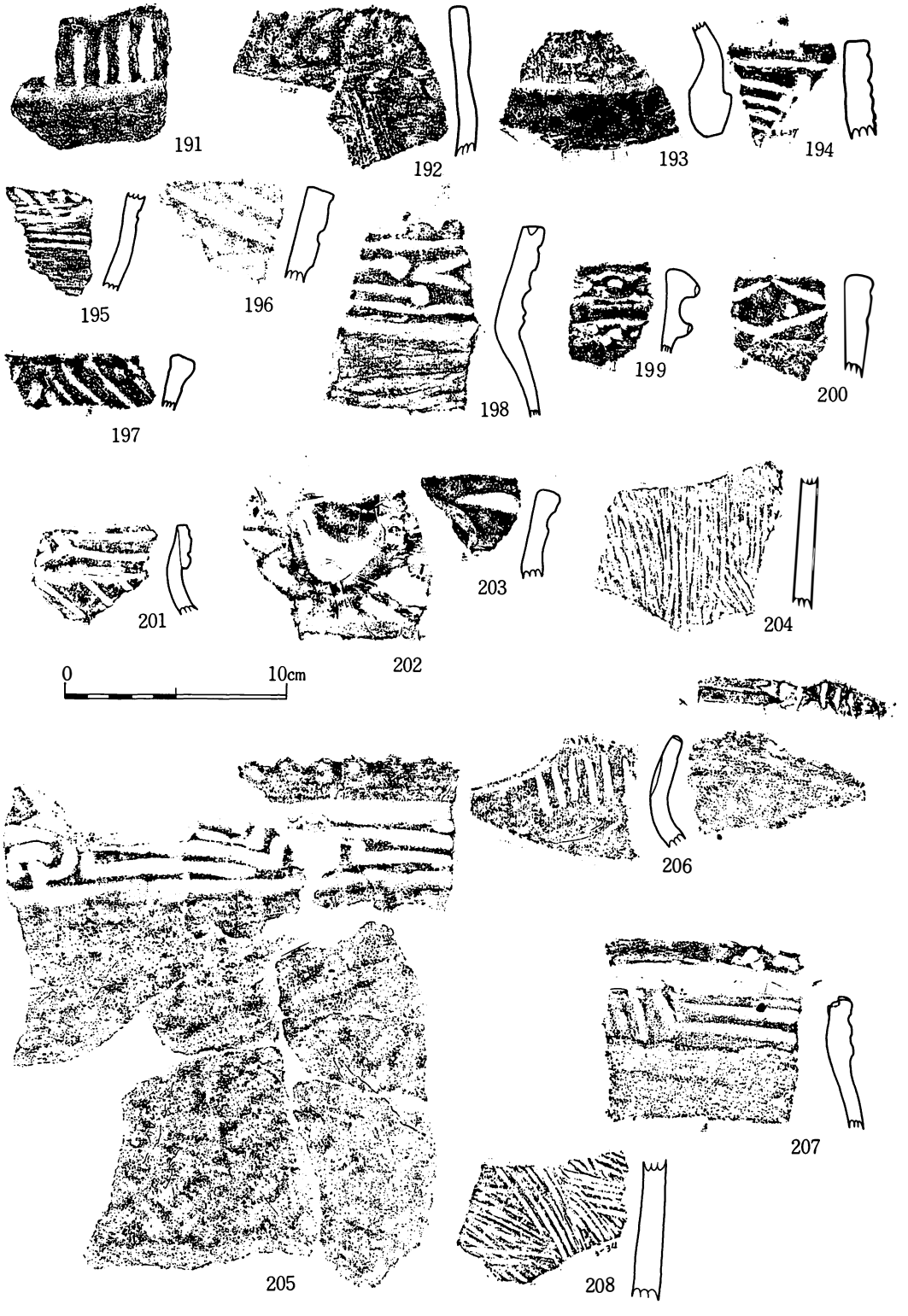
注 339は他地域からの搬入品と考える。他の遺物も、この土器と同時期のものはなかった。



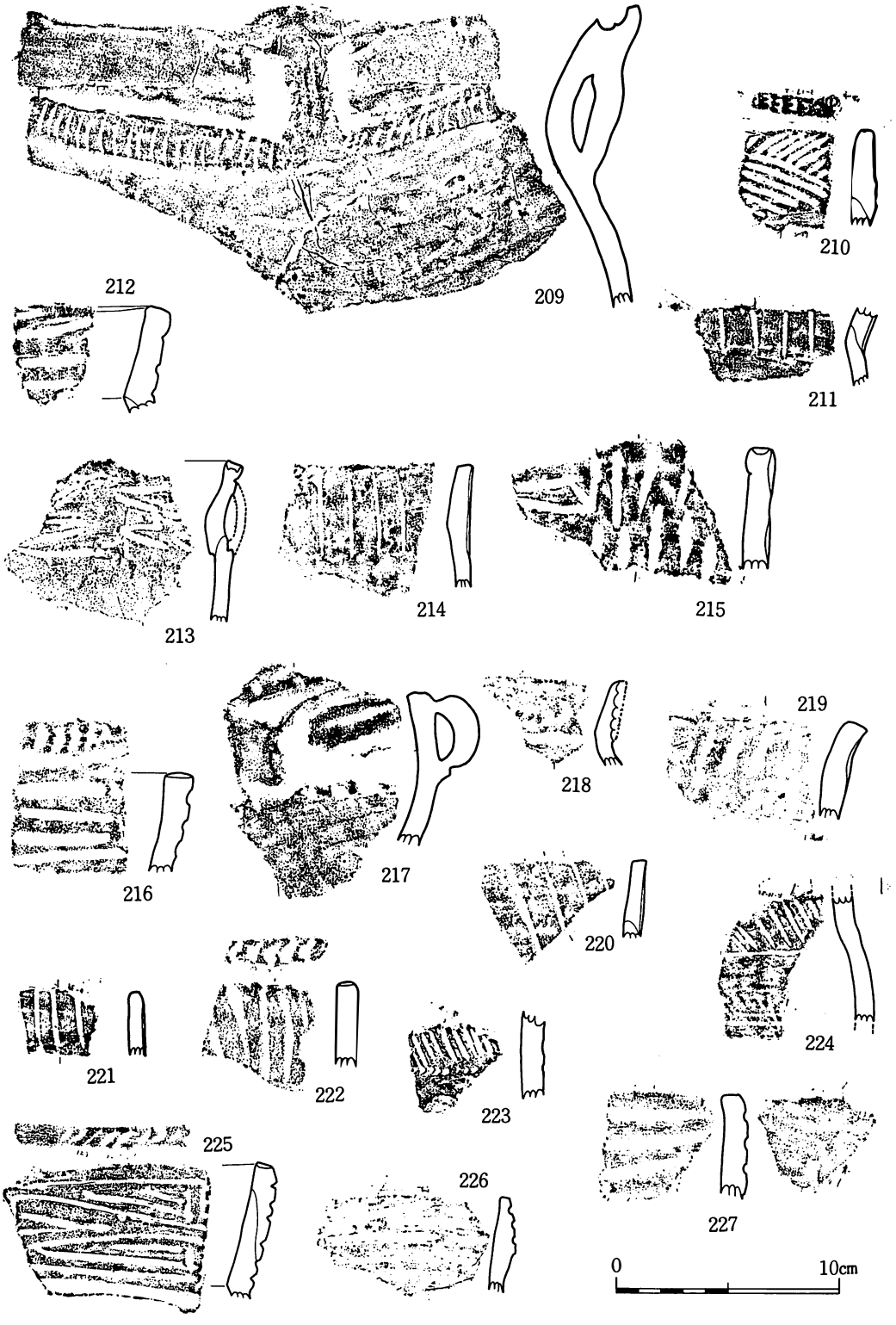
第27図　東貝塚土器図（底部及び胴）



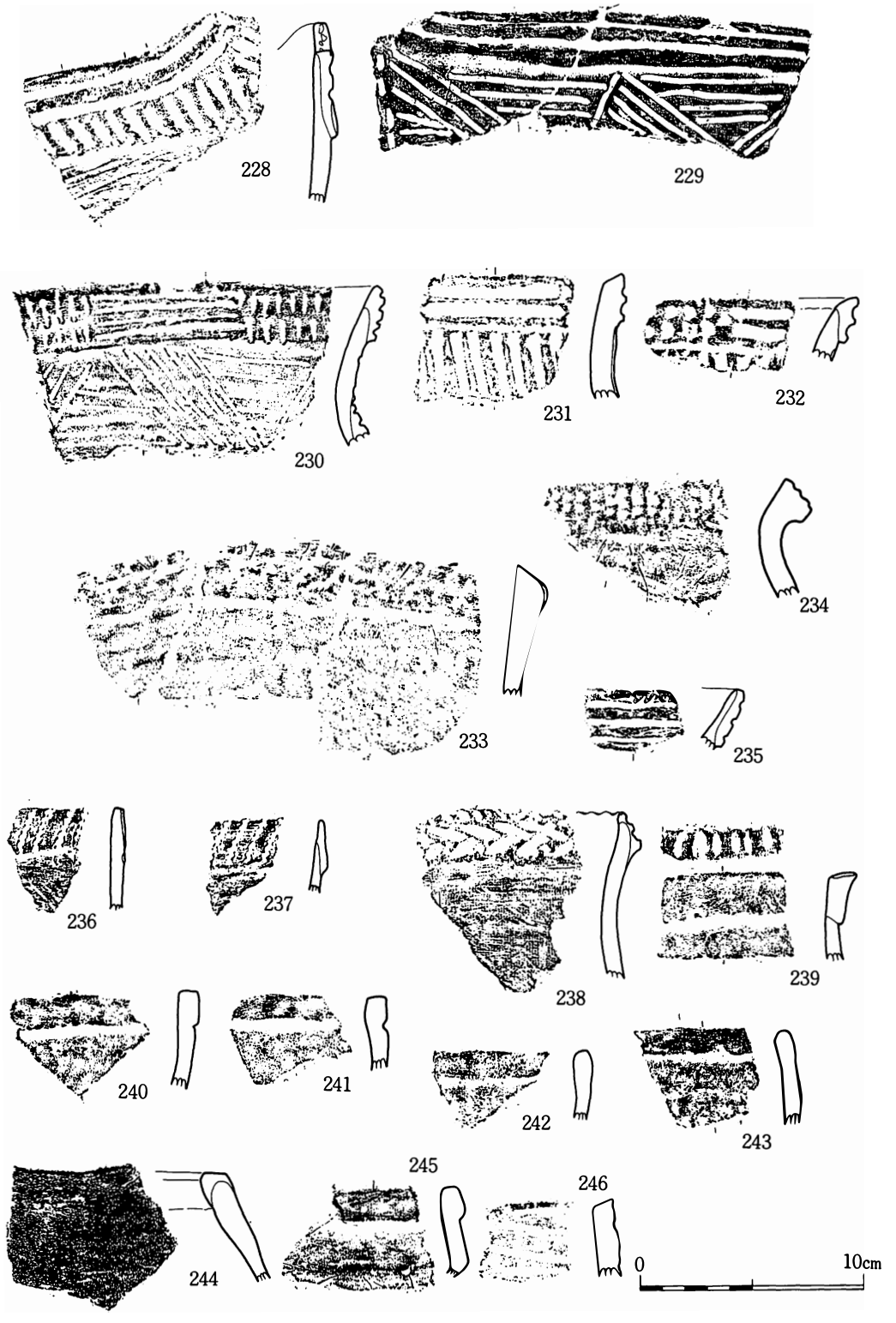
第28図　西貝塚土器図（A・B・C図）



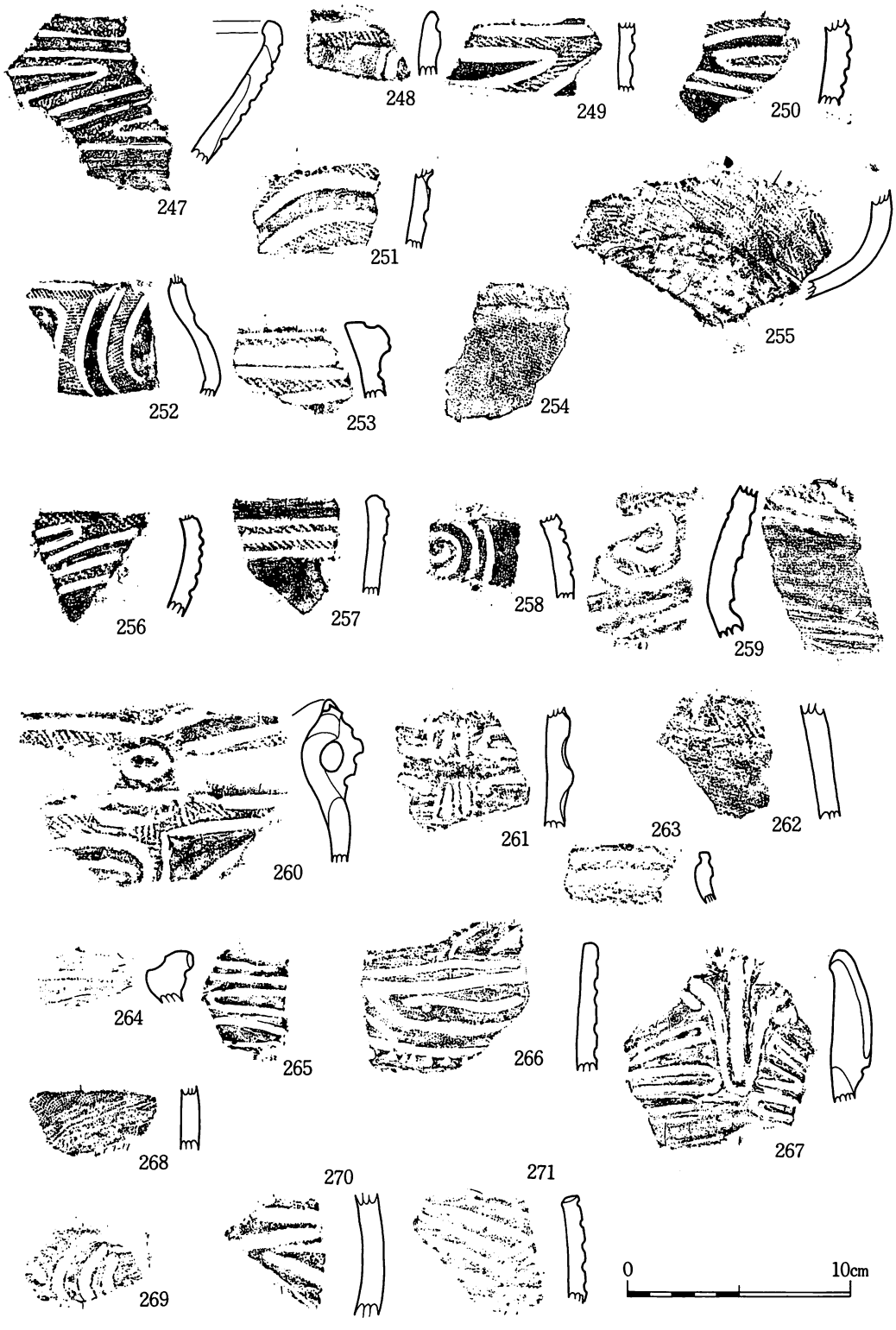
第29図　西貝塚土器図　193＝底部　204 208＝後期胴片



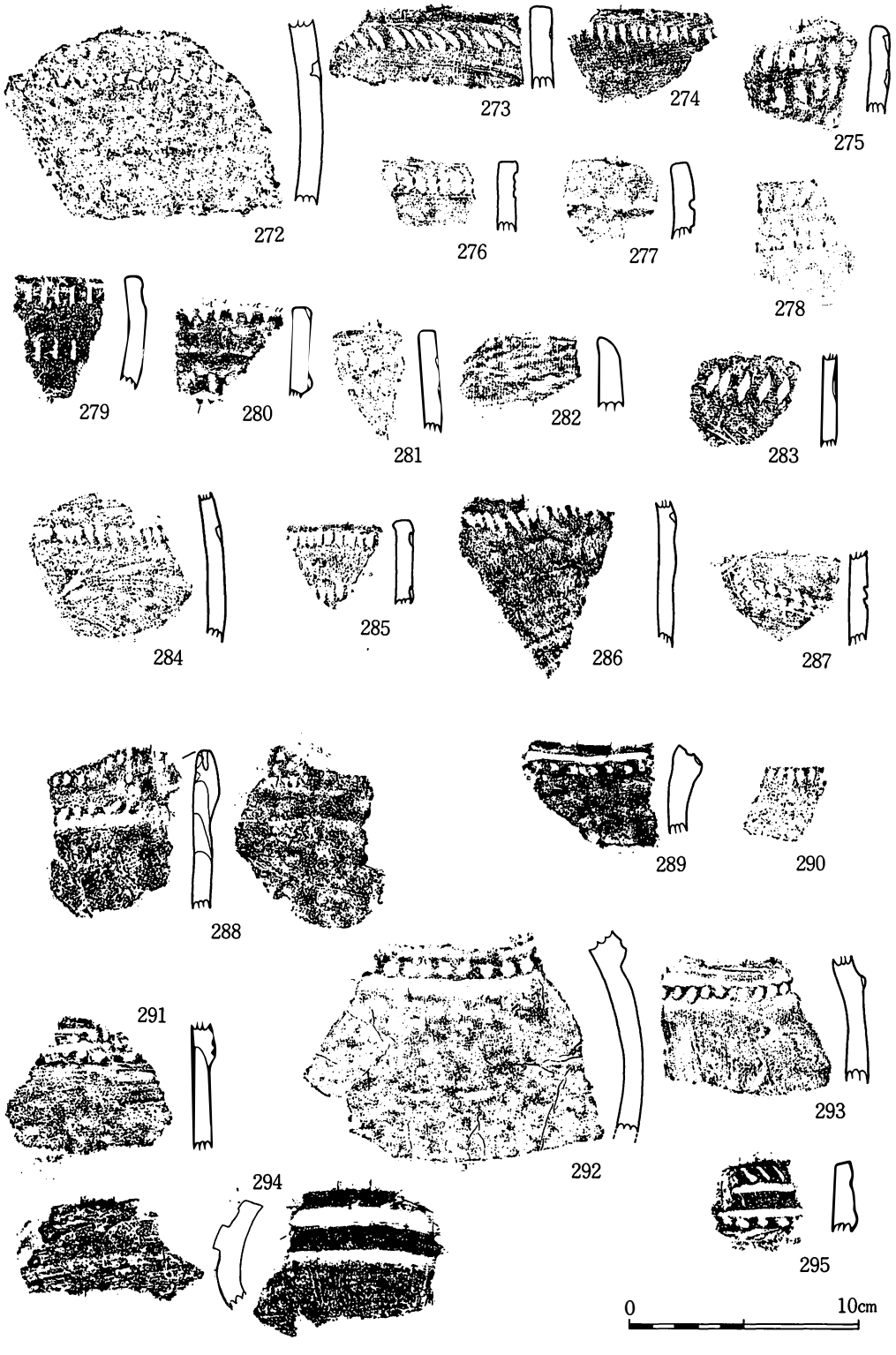
第30図　西貝塚土器図（F型）



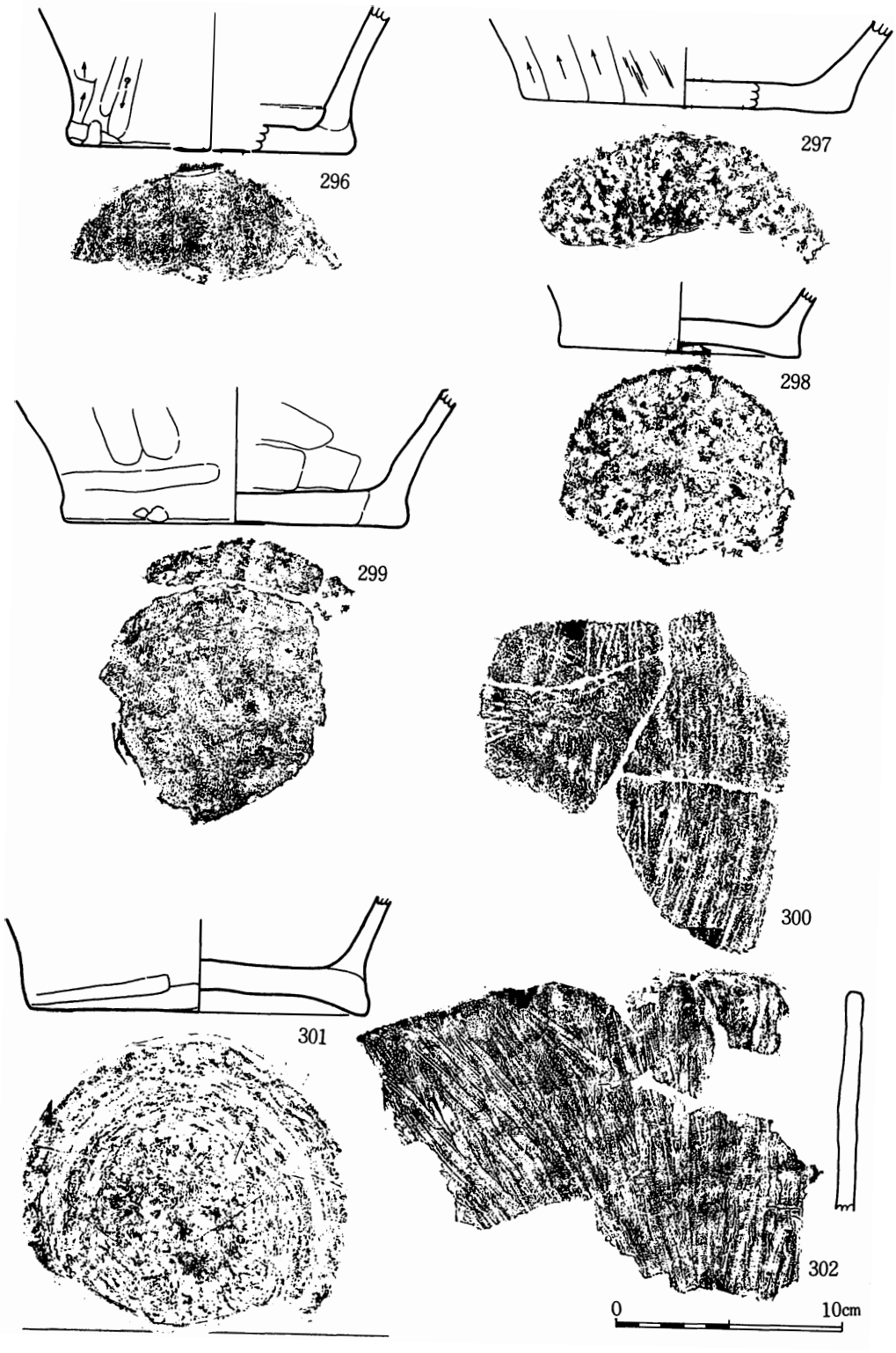
第31図　西貝塚土器図（G型）　G_1＝228～230.235～238
G_2＝231.232　F＝246



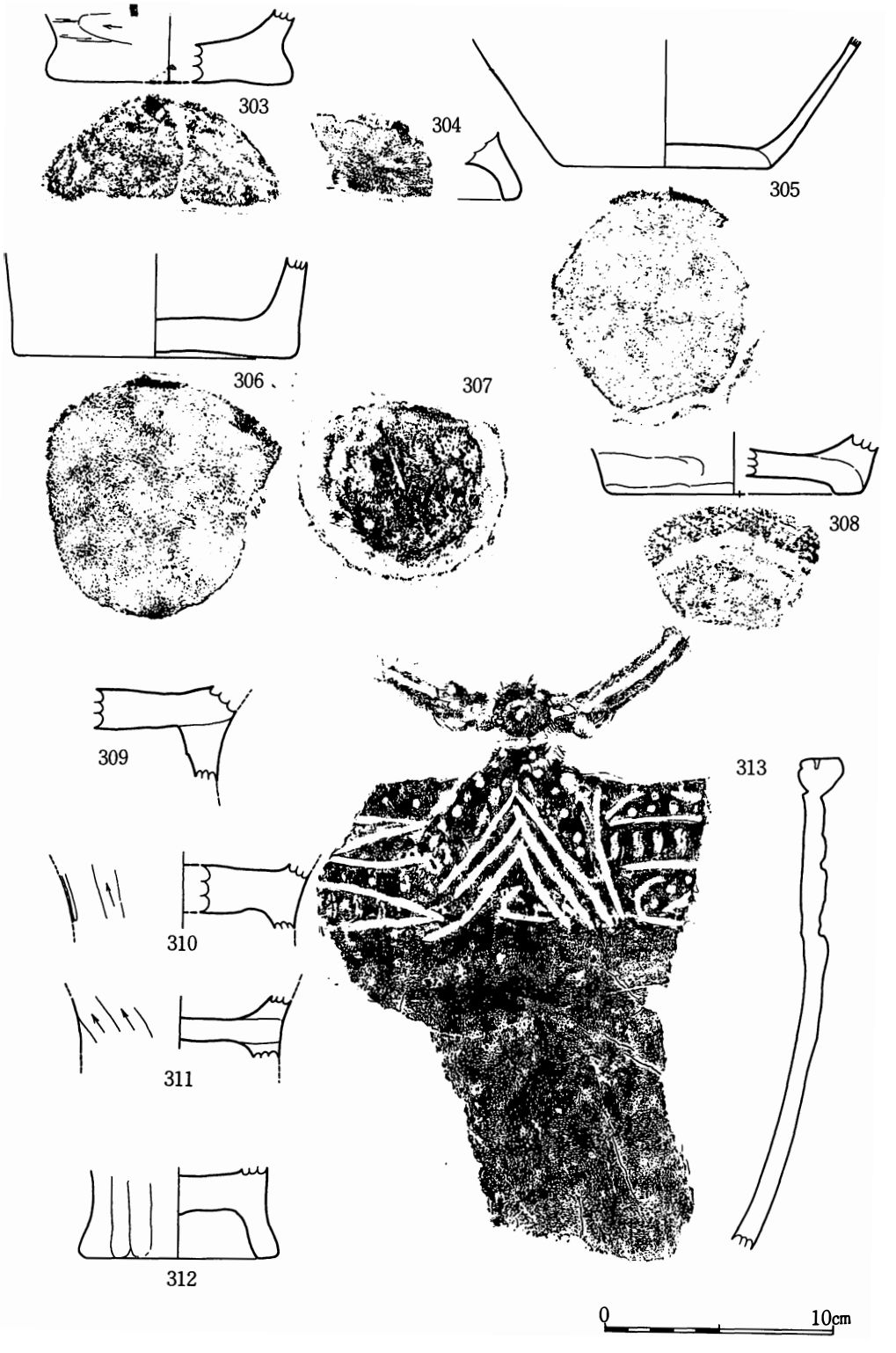
第32図　西貝塚土器図（縄文系土器）



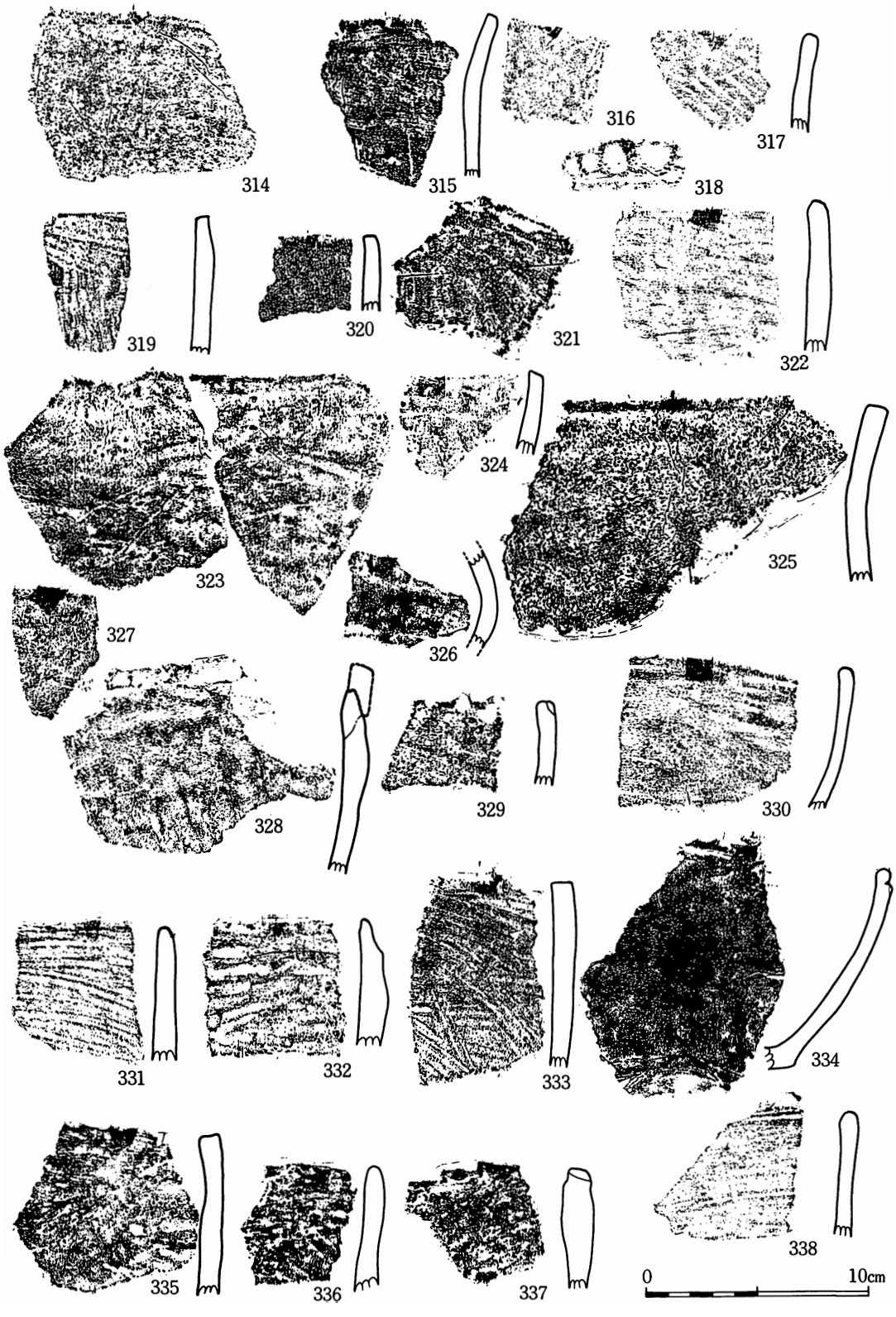
第33図　西貝塚土器図（御手洗A式）272～288, 290



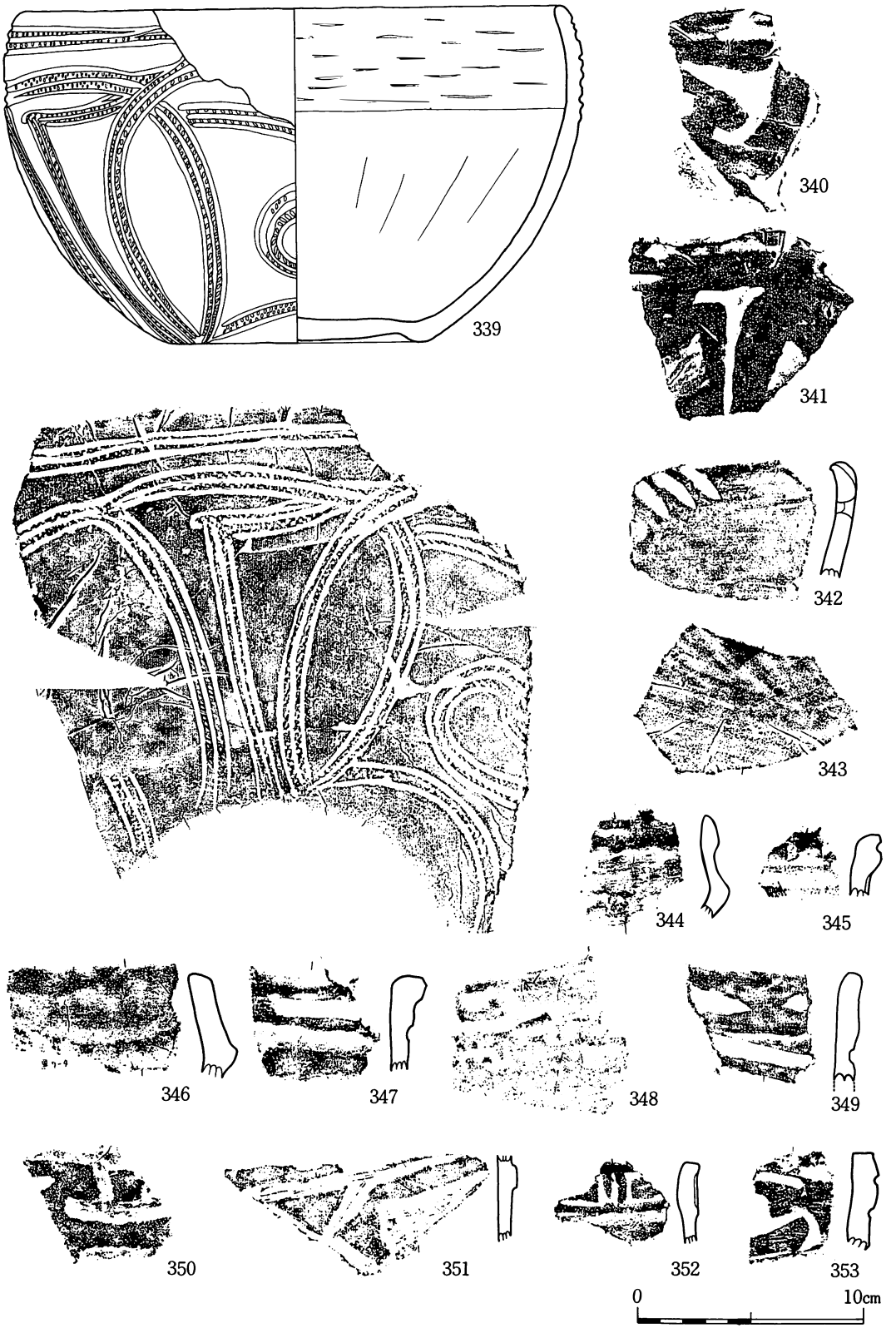
第34図　西貝塚土器図（底部）　300. 302＝後期土器



第35図　西貝塚土器図（底部）



第36図　西貝塚土器図（無文土器口縁部，318＝底部）



第37図　東・西貝塚土器図(福田K Ⅱ, 朱塗土器)

Ⅱ 石　　器

1　分類の原則と方針

分類名は従来の名称に固執せず、区分法には形式論理を採用し、区分原理は形状による事、土器と同様である。用法はイメージ的に想起するものがあったが、用途を顧慮する愚策は極力これを排除した。したがって、名称による用途の想起には筆者と受信者間に誤解発生の第一要因になることに留意されたい。（38図～46図）

2　分　　類

分類は、東・西貝塚共に通じた分類をした。記述は同一にしたが、挿図では区別した。

(1)　楔　　器

断面観が楔状の一見 margin 的な部位を持つものである。

(a)　斧　　形（石器図5.12）

東貝塚より２点。１点はほぼ全形を推し得る。（第39図12）おそらく片刃であろう。

５は剥片となったものである。本形は短軸の一端に使用部を持つ磨製のものである。

(b)　鋤　　形（62）

短軸の一端もしくは両端に使用部を持つことは(a)と同様であるが、打製であり、刃部の正面観・下面観は波浪状である。いわゆる扁平打製石斧。西貝塚より１点出土している。左側面は一次剥離時の力の関係で折損気味である。敲打による打剥が顕著。使用痕は不詳。

(c)　半月形（6,7

従来、中期以降後期初頭に出土している槍先形・石槍・尖頭器等と称されたものの一部である。使用痕の位置は不明だが、半月状に内弯する縁辺と半月の両端尖頭部との二種の使用部と用法があったと考える。従って、本来二形式に分離すべきと考えたが、使用痕の未確認と例数不足のため、本遺跡では一括しておく。２点ともに東貝塚より検出。

(2)　磨　石　器

本器は自然礫の或面に人為らしき擦痕、または磨面を有するものである。

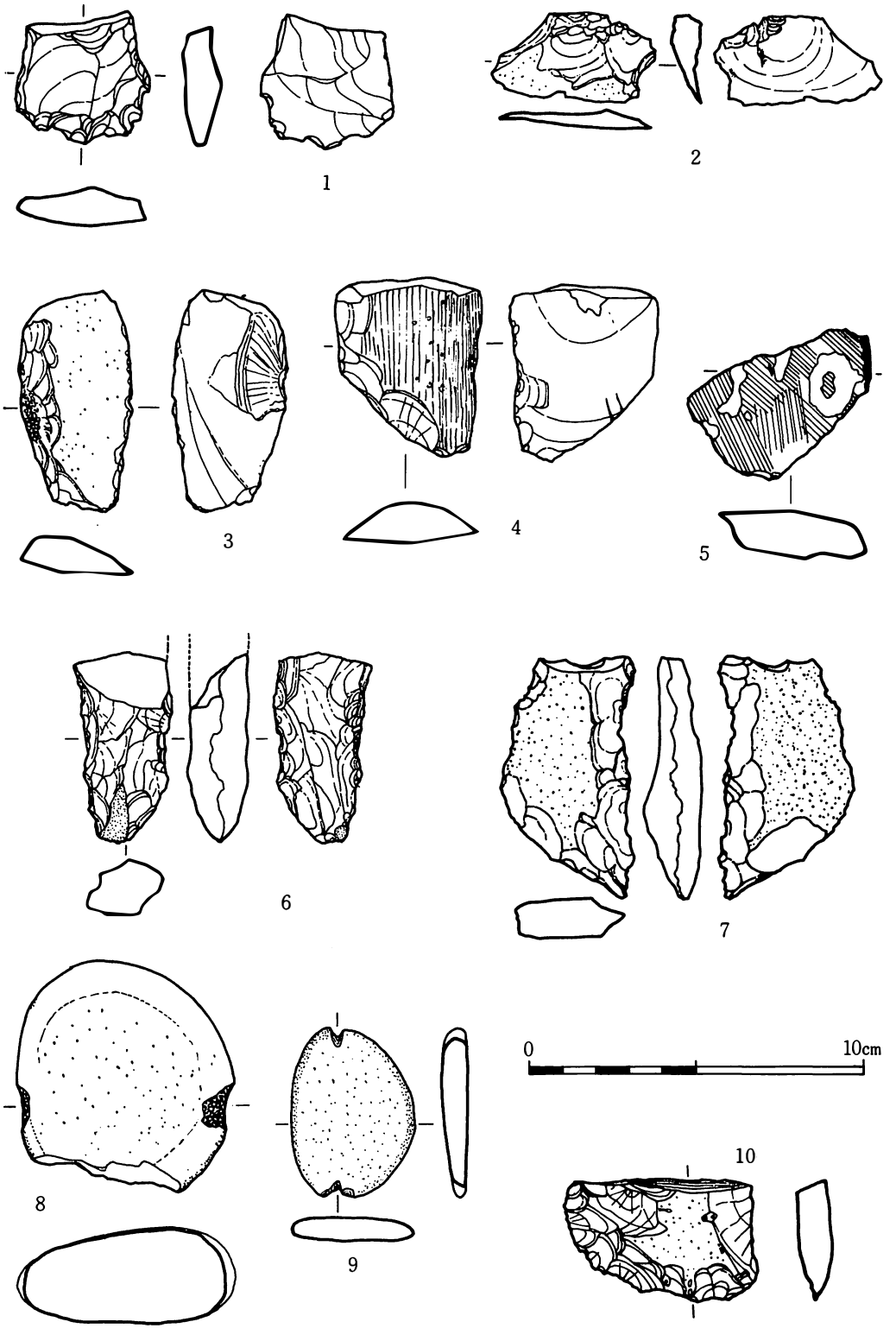
(a)　砥石形（16,17

自然面のほぼ全面に粗条痕を有するものである。横断面観が小波浪状なる。砥式、礪式の二種がある。

砥式は硬砂岩製で擦痕も粗いが、磨光もみられる。礪式は砂岩製であり、磨光はみられない。擦痕は砥式以上の粗さを持つ。

(b)　錯　　形（14,15）

粗条痕の一部にＶ字状の深く顕著な「ミゾ」を有する。研磨器の一種であろう。「錯」とは逆の用法（ミゾの対象物を動かす）であるかもしれないが、用途と名称は一致しない立前であり錯としている。



第38図　東・西貝塚　剝片石器・錘形石器

(c) 皿　　形（11,18,35,39,41,42）

従来、石皿と称されてきたものの他に、俎状の平坦なものも含めた。

磨盤式は周辺が高く中央が凹んでいる。周辺は自然面で、殆ど擦痕の観察ができない。中央面には磨光がみられるが、擦痕は単位が観察し得ず、各種方向に無数の極細条痕が走っている。安山岩製。

磨板式は一見、砥式に似る。しかし、平坦面に殆ど波浪がみられず、一様の磨面に終始している。しかも、擦痕はより細く密である。周辺が敲打によって整形された可能性もあり打剥や敲打痕が顕著である。硬砂岩と安山岩製の二者がある。

(d) 磨 石 形（26,30,31,46,56,59,60,65）

自然礫の一部もしくは全域に磨耗面がある。しかし、前記(a)〜(c)と異なり、その部位が凹むことはない。

この中で、回転運動をしたものと、していないものとが、見受けられる。ただ、両者間に自然礫選択上の差は看取し得ない。敲打器的使用痕を付属せしめているものもあり、彼我の用途的関係上、固定的用法やタブー性はなかったものとみたい。

(e) 連 木 形（22,24,28,44,55）

擦痕は一見 (d) と殆ど変らない。しかし、回転運動したとみられるもので、しかも、位置が自然礫の尖端部にあるものを本形式とした。小形の礫が多く、磨石形と礫選択上の差を感じるが例数不足の為、その数値的的差を明示し得ない。

(3) 敲 打 器

本器の下位概念はまだ命名作業に至っていない。したがって、以下に記すのは「形」概念ではなく「式」概念である。冒頭に注意を換起しておく。

さて、本器は磨石器と同様に礫そのものが用法の決定をするものである。磨石器とは異なり、自然面が人為的・物理的作用によって一点集中的に剥落している。

(a) パンチ式（19〜21,23,43,48,52,53,79）

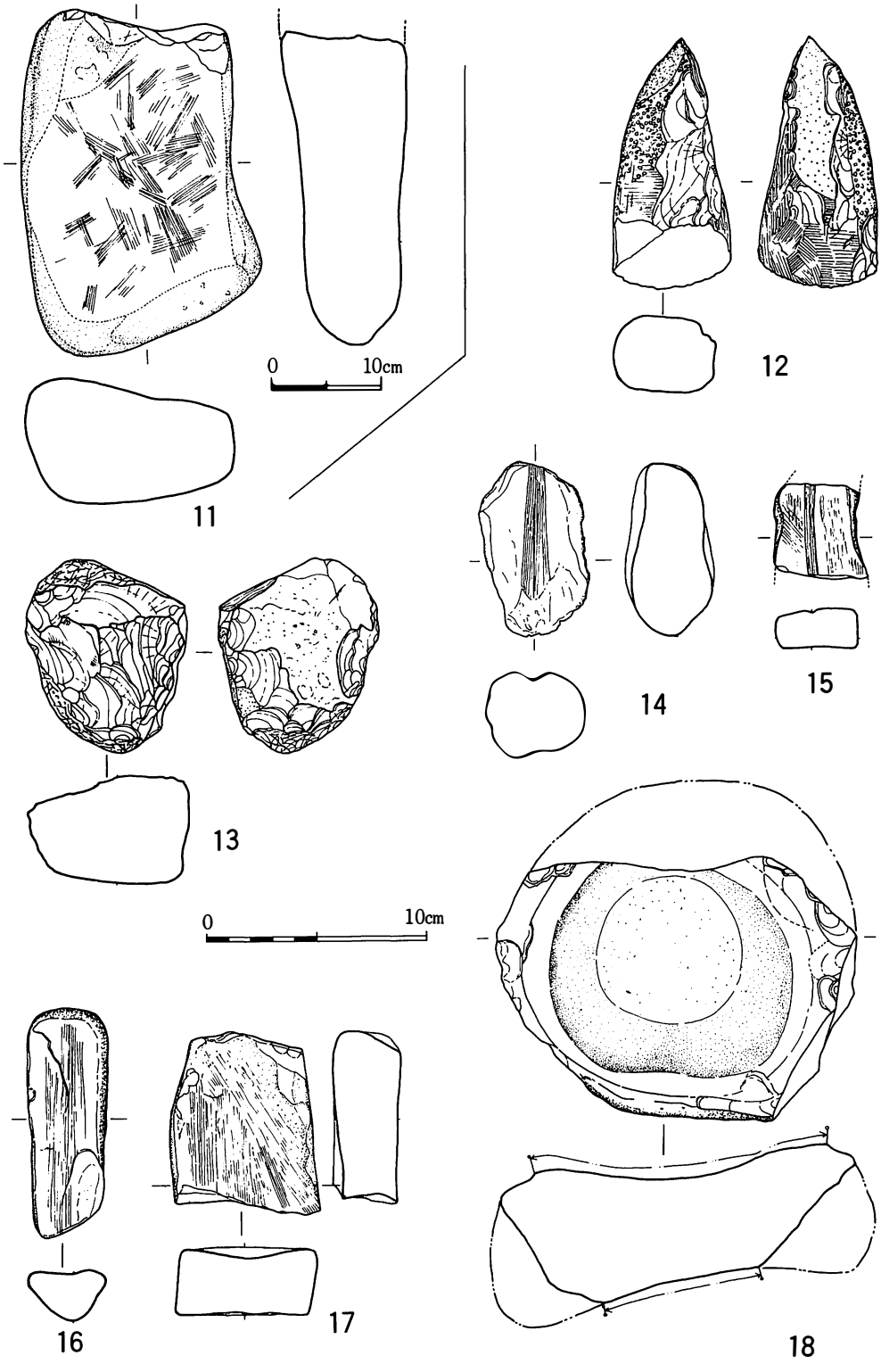
自然礫の先端に小面積の敲打痕を有する。また、この敲打によって誘発的に剥離した部分がある。長軸の両端に使用個所を持つものもあり、礫自体での使用位置は「尖端」に限定されるのみで、一カ所と云う規律はない。小形の礫が多いが、敲打痕面積とともに後述のハンマー式との数値的差は明示し得ない。

(b) 箆　　式（23,28,64,68,77,82）

楕円状礫の変曲点を中心に打痕があるものである。扁平礫の箆式敲打器は時期的に限定されるようだが、本遺跡出土例の様に部厚いものは使用時期に限定性はない。したがって、後期には存在すると云う事しか言えない。敲打痕の面積が点的に小面積であることも特徴だがその上限・下限・平均値の統計処理は行っていない。

(c) ハンマー式（25,27,30,31,45〜47,49〜51,54,55〜57,61,67,69〜71,73〜83）

本遺跡敲打器中、最も特徴的なものである。礫の長軸の一端短辺を「面取」状に、平坦で



第39図　東貝塚. 斧形石器. 磨石器

鮮明な打痕を有している。衝撃も強かったものと見え、亀裂的敲打や誘発剥離も顕著である。

なお、パンチ式・ハンマー式の両者に跨るものだが、礫選択上で特徴的なものとして、三角形礫のおのおの頂点に打痕を残しているものがある（第44図67）。轟貝塚（京大報告）中の三角形石器に形態類似する。ただ、説明によると使用位置が異なっている。写真でみる限りにおいては、頂点に打痕もあるようである。本遺跡の第44図67はこの凹部と頂点三ケ所の敲打がみられ、その点では、轟貝塚例に呼応する。第40図27は単に頂点三ケ所のみである。

(d) 面取鉋式（84,

語感的には「面を作る」の意があるが、この類は「面を作られた」または「面が出来た」ものである。拍子木状を呈する礫の長短軸稜線に当る部分が、面を取られたように細長い敲打面となっている。したがって、礫からみれば斜面が敲打部となり、対象物との接触角は鋭角である。面は磨耗状で、平坦である。周辺の自然面との境も鮮明である。ただし磨光はない。磨石器の可能性も考えたが、これは弱い敲打の集積で充分この種の形状となるため、一応、敲打器とした。ただ、感覚的に縦位の擦痕状の流れが感じられるものもあり、所属は不明とした方が良いのかもしれない。

(e) 砧　　式（80,85,

砧の様に平坦面に敲打痕を有するものを一括する。ただ、削平状に凹むものは省く。いわゆる「台石」とは礫選択上多少の差異があり、「製作台」とは限定して考えてはいない。

(f) 凹　　石（29,32,～

削平状凹部を持つもので磨石器・敲打器の痕跡を有していないものに限った。

前述、磨石器・敲打器と本種とは相互に人為的な組み合せ関係を見て用法が類推されつつあるが本遺跡ではそこまでの分析はしなかった。しかし、その組み合せも一部の有用なものは別として大半が無目的と考えられ、道具としての限定性は感じられない。

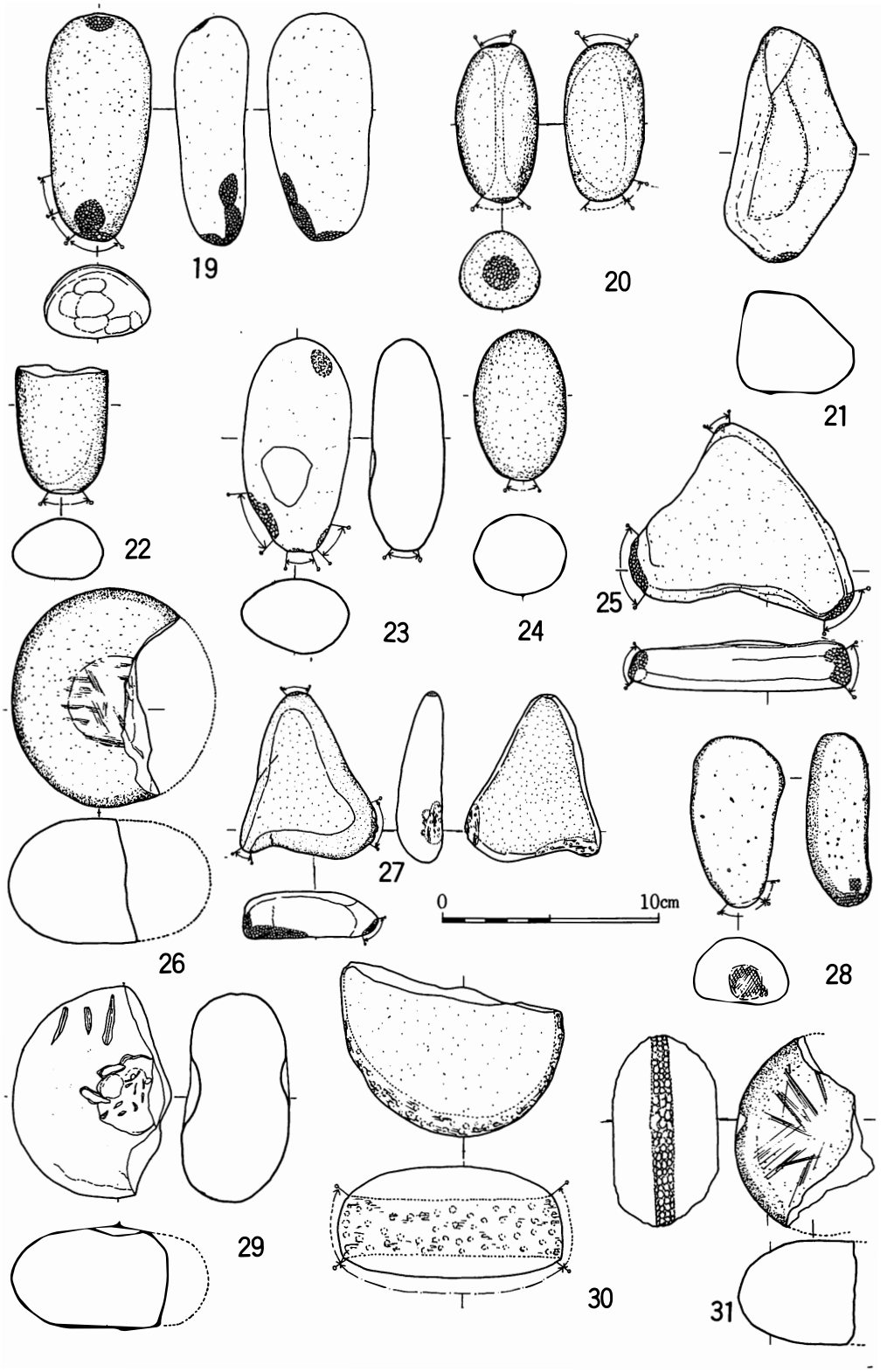
(4) その他の礫器（13）

礫器と云う刃具を想定するよりも、むしろ敲打器の一類として把握した方が良いとは考えるが、打点部の敲打痕だけと云う証拠では不十分である。したがって、一応礫器としておく。

(5) 剥　　片（1～4,10）

ここでは、剥片と使用された剥片を一括した。1とは使用の有無不明。現時点では単なる剥片としておく。1も同様だが剥片そのものに意図性を感じる。3は横長剥片の終縁を edge として使用している。正面にそれによる刃こぼれが顕著である。打点部には敲打痕が観察でき、それが剥離前の可能性が強い所から、一次剥離は直接剥離であったとみたい。そのために一次剥離面自体が bulb 状をなしている。

4の磨面は殆ど敲打に近く、研磨度は弱い。上下の端部は半折しており、主剥離面の状



第40図　東貝塚. 磨石器・敲打器

況からも石器の剥落片であろう。正面と背面の左側辺に錯向的刃こぼれ状の微小剥離があり二次的使用をした石器である。なお、本器の本来の姿を想定すると、男根形石器に最も近い。磨面の横断面観によるカーブや製法には関東後期初頭のそれの体部と相通じるものがある。

3　石器についての所感

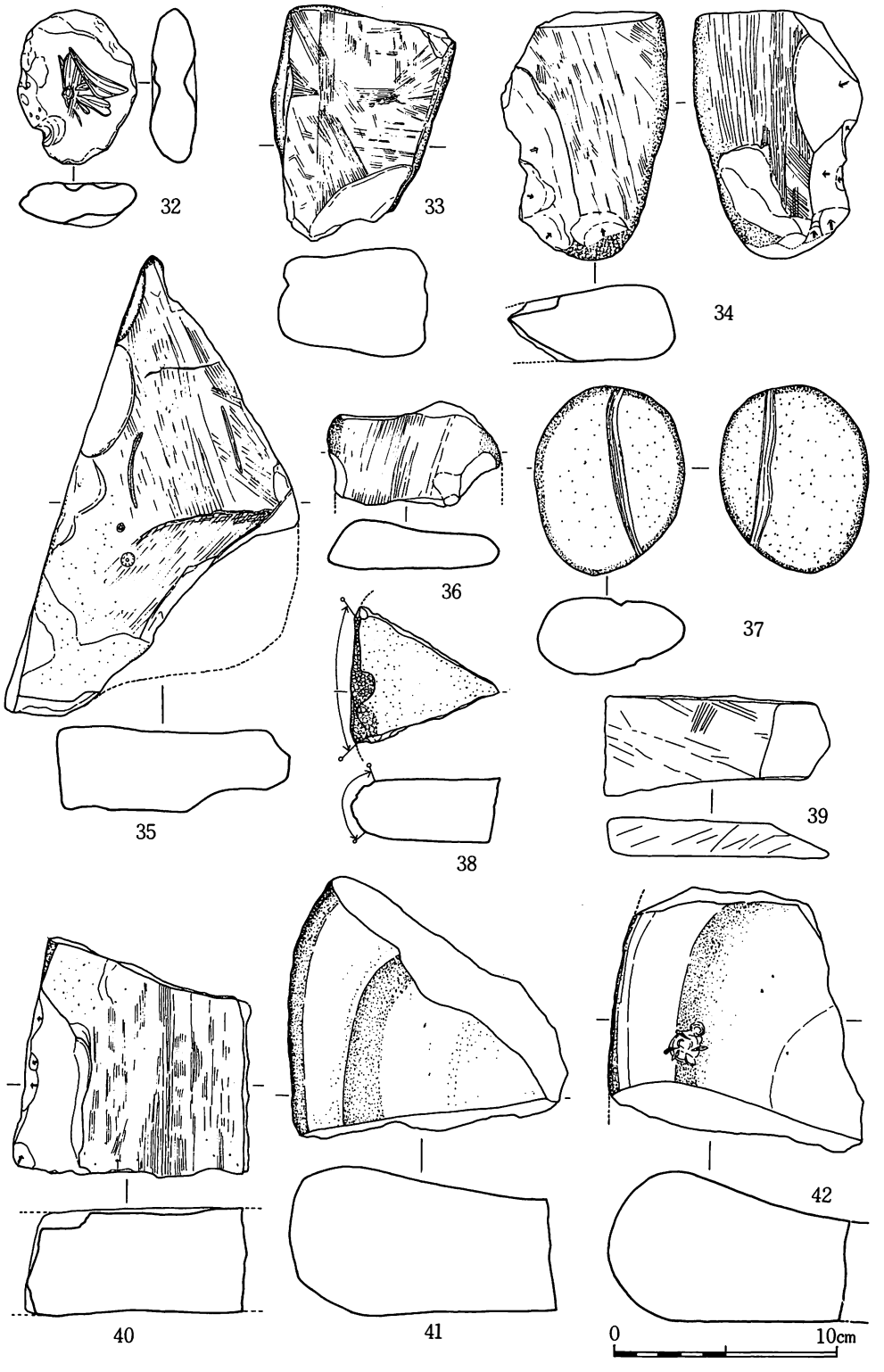
石器の分類には、「具」「器」「形」「式」「種」の五概念を上下関係において使用した。この内「具」概念「種」概念は殆ど使用しなかった。また、おのおのの区分原理・区分肢の状況については別に記す所があったので、こと更本稿に記すことはしなかった。石器も土器同様細分の方向に向うべきで、同じハンマー式敲打器と言っても礫選択と使用部形状には著しい地域差と時間差が感じられる。皿形磨石器についても同様であることは周知の事であろう。種概念には、この地域差・時間差を加味した形状分類を捉えることを企図している。石器の形式分類が進行しないのは、おそらく「石器は生産用具であり、土器は生活用具である。しかも土器は時間差が顕著であるが、石器にはそれが少ない。石器は土器を介してしか時期を知ることができない。石器は用途を知ればよい。その事によって生活の復原が可能である。」とのばかばかしい情念が働いているからであろう。

しかし、石器ばかりが生産用具ではなく、土器ばかり生活用具でもない。また、時間差云々も分類を遂行せずに言える筈もない。分類を遂行せずに、用途や生活の復原がなされる筈もない。第一、用途を知るだけの実験設備・方法論・学的環境等はなんら整備されていない。単に偶然の一致とはいえ、類似結果をもって唯一の用途研究と称しているのに過ぎない。用途類推の前に、使用痕形状（敲打痕・線条痕等）の詳細な観察分類が必要である。その後に、その状態に至る力・方向・石質・硬度 etc を数値的に区分しつつ、多種多様の方法から器械的に行わねばなるまい。その結果も、あくまでも仮説でしかない。しかし、それに耐える報告には接していない。筆者もそれは企図したが、能力も時間も資力もなかった。つまり、分類は形状分類に留まらざるを得ない。筆者がイメージによって記述してきたのは、何よりも、筆者が数値を知り得ず、方法も知り得ないためである。直観と第六感が筆者の記述の総てであり、分類もそれを根拠にしている。したがって、用途的には当然同類であっても別形式となる。

石器自体に関しては、次の事を感じた。

本遺跡貝層中からは、一点の黒耀石も収集できなかった。砂層中からは 2 点収集し、西貝塚上位粘土層からは 1 点収集している。この事実から、貝層中に本来黒耀石を含んでいないことは、五割方確実である。本遺跡形成の石材運搬の経路を考える上に示唆的である。また、黒耀石の有無は時期と関連して、今後の課題でもある。

刃具が極端に少ない。遺跡は、特殊例を除いて刃具が少ないのが通例である。しかし、東貝塚で 4 例、西貝塚で 1 例となり、1 割にも満たない。貝塚遺跡の特徴であるとしても、多分に疑問点として残る。



第41図　西貝塚 磨石器（砥石形・皿形）

第40図27、第46図84・86・88は対象物となす角が、特殊である。筆者は管見にして、この種角度をなす敲打器を知らない。第46図84の場合、これに近い角度で対象物に接する例はある。しかし、その場合、大半が磨光と微細線状痕を持った磨石（磨石C式）であり、地域的にも離れる。第46図88は、半折面内の剥離状況がスタンプ式敲打器（通称スタンプ形石器）の一種に類似するとは云っても、使用部形状は全く異なる。これらの敲打器は、あるいは南福寺式から御手洗B式期までのある一時期の特異な石器であるのかもしれない。実例による御教示をいただければ幸である。

第42図50・51・54・　のハンマー式敲打器の例は、東貝塚にはみられない。その敲打面の平坦さ、自然礫中に占める敲打部位の比率には一種の特異性を感じる。単なる使用頻度のみの問題としてかたづけられないものと考える。時期と地域の問題を後時に択してみたい。

第43図58の錘形錘器は、その大きさからみて通常の石錘は想像し得なかった。しかし、同形状で「石の漁撈錘」が伊勢地方にある由を聞いた。実見してはいないが、石錘としての可能性もあるらしい。

以上で、石器の記述を終わるが個々の石器の説明は実測図によられたい。

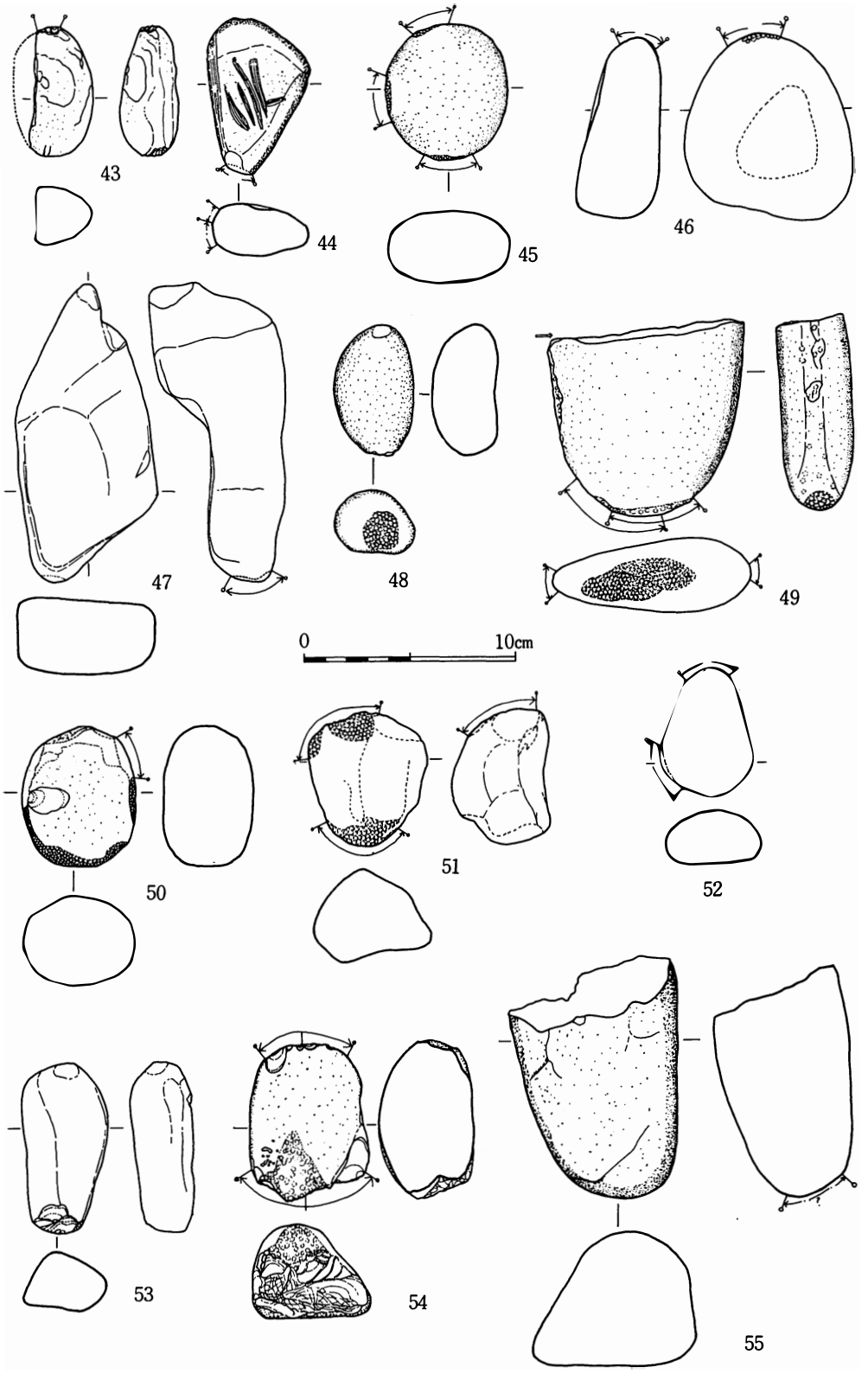
4　その他の遺物

(1)　錘　　器

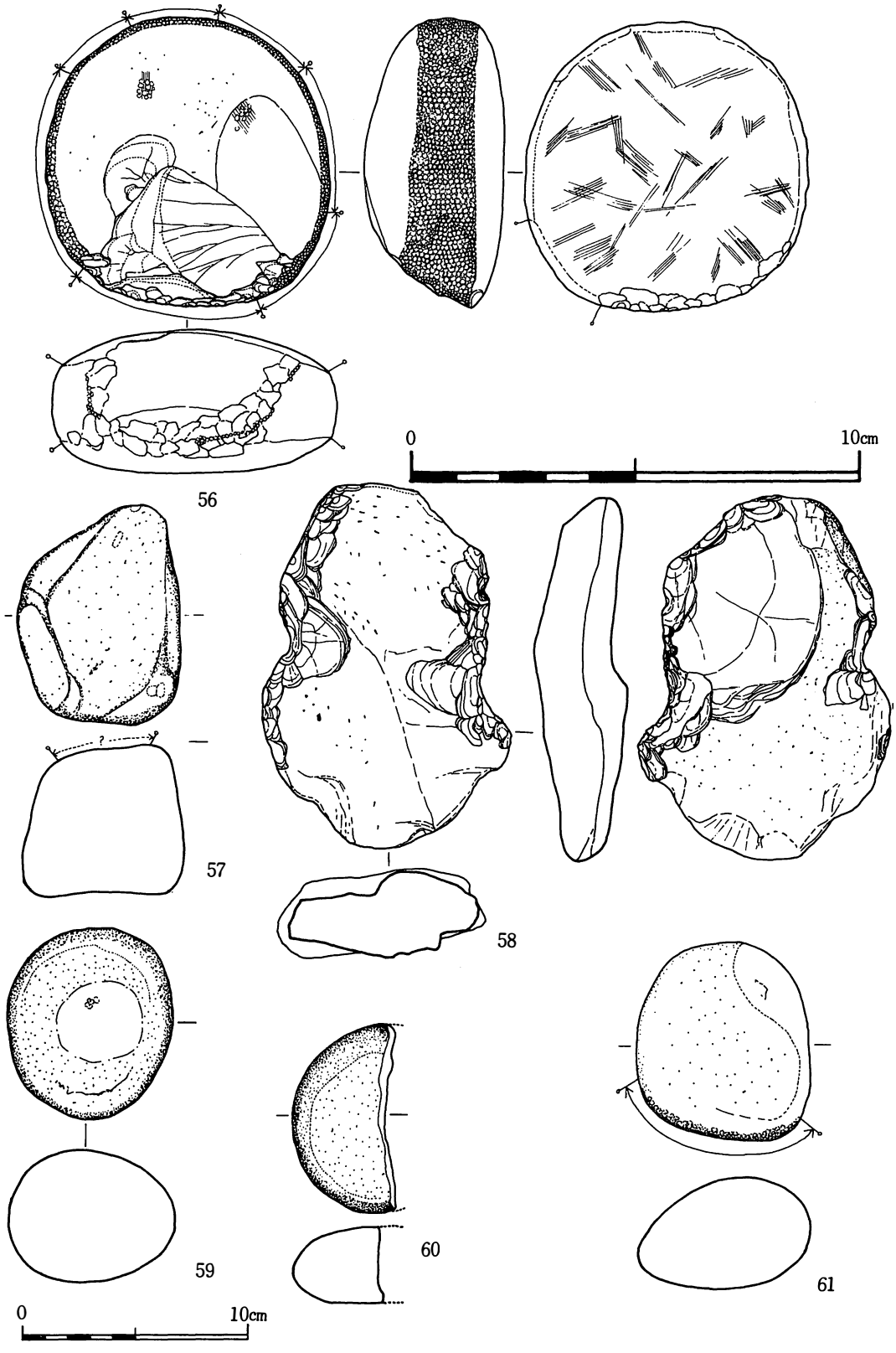
錘器は切目形（38図8,9　47図1〜7,29）と有溝形（26）とがある。有溝形は4層砂層中より出土し、時期は不詳である。一応、弥生時代、古墳時代のものとして処理しておく。切目形錘器は切目部を研磨したものを打剥したものとがある。東貝塚採集資料は38図8,9 西貝塚は47図1〜7,29である。土器片錘も形態は切目形錘器と同様である。

(2)

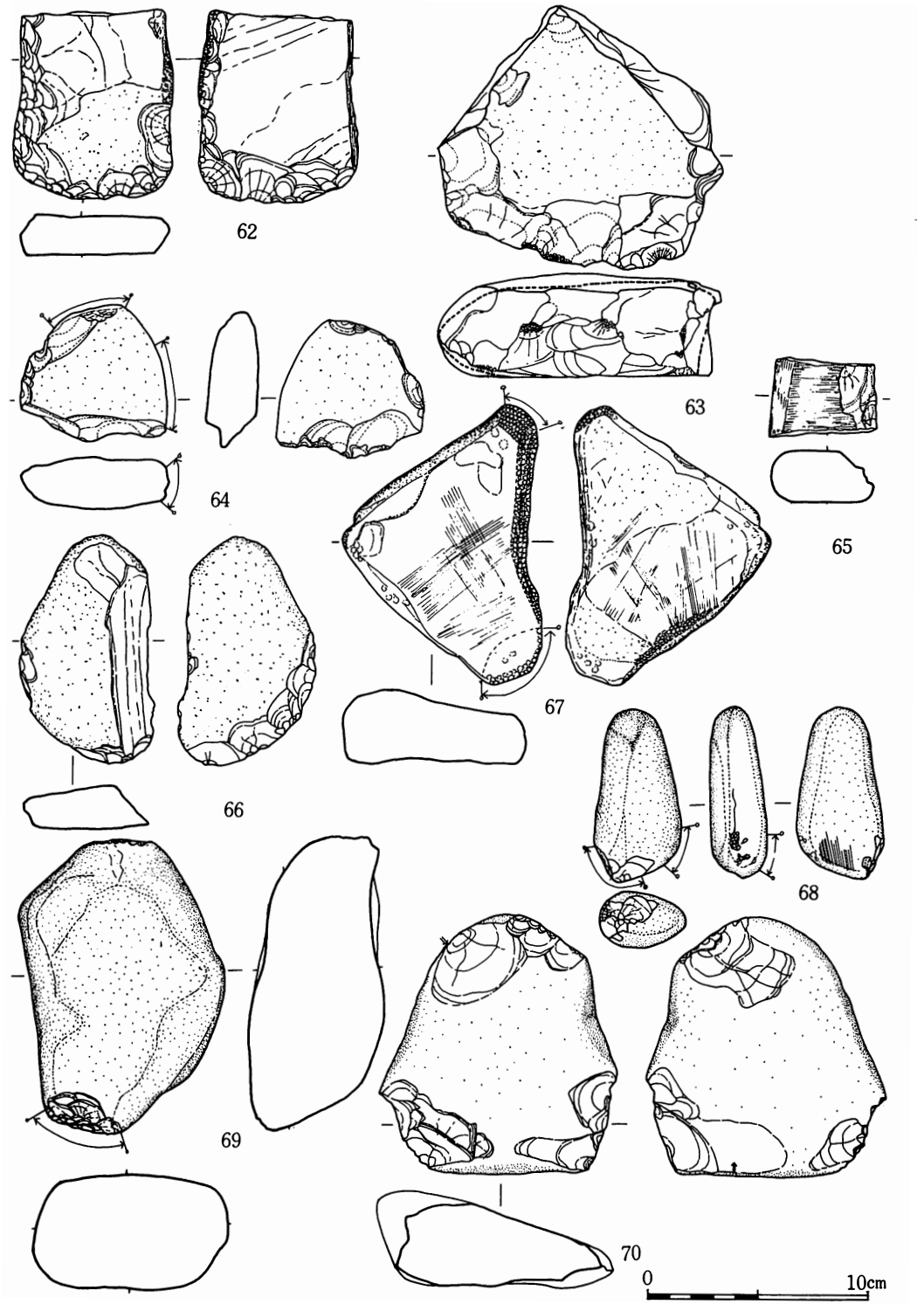
有孔円盤と円形土器製品とがある。用途については不明である。　　（西田）



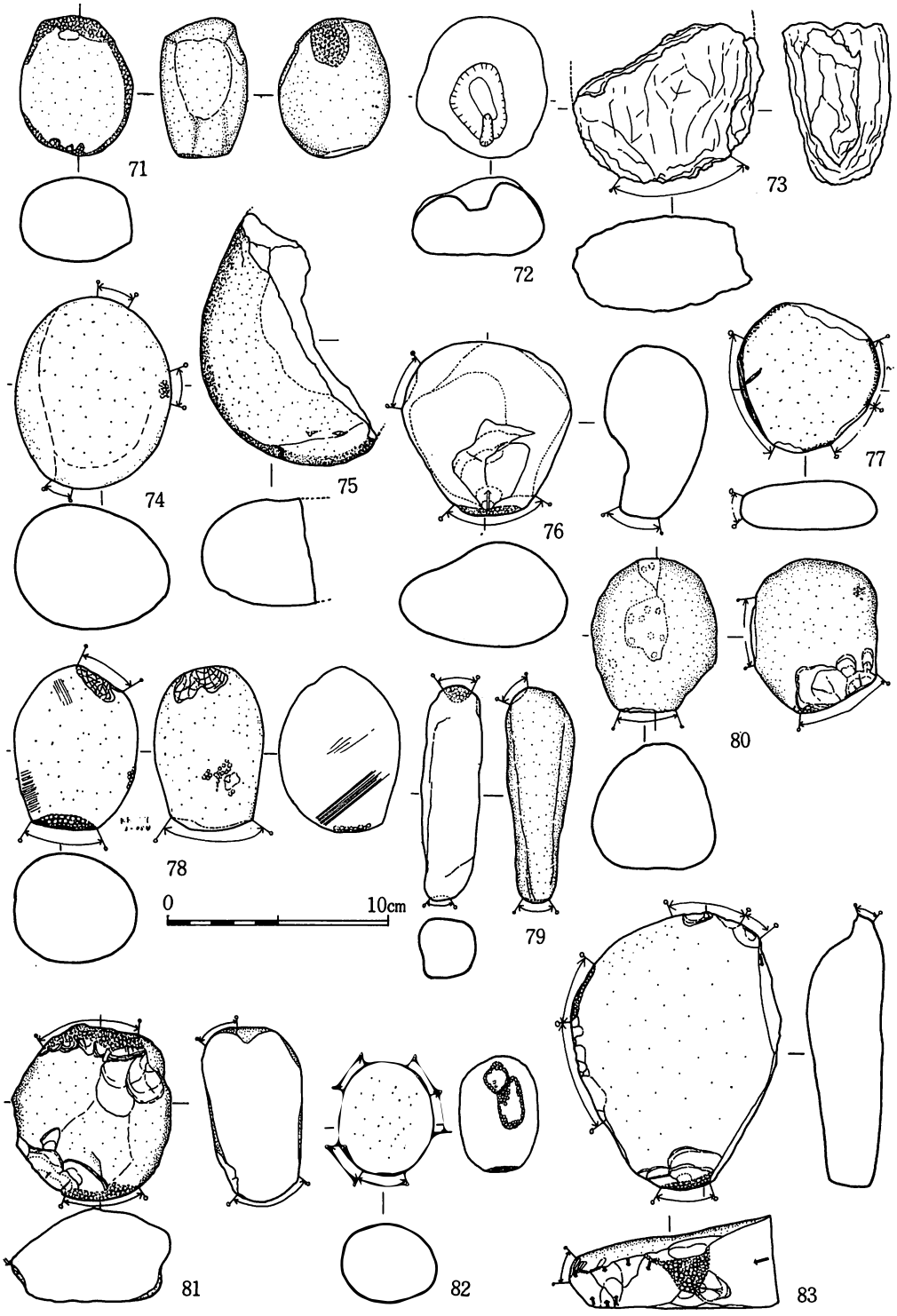
第42図　西貝塚 磨石器（連木形）敲打器（ハンマー形他）



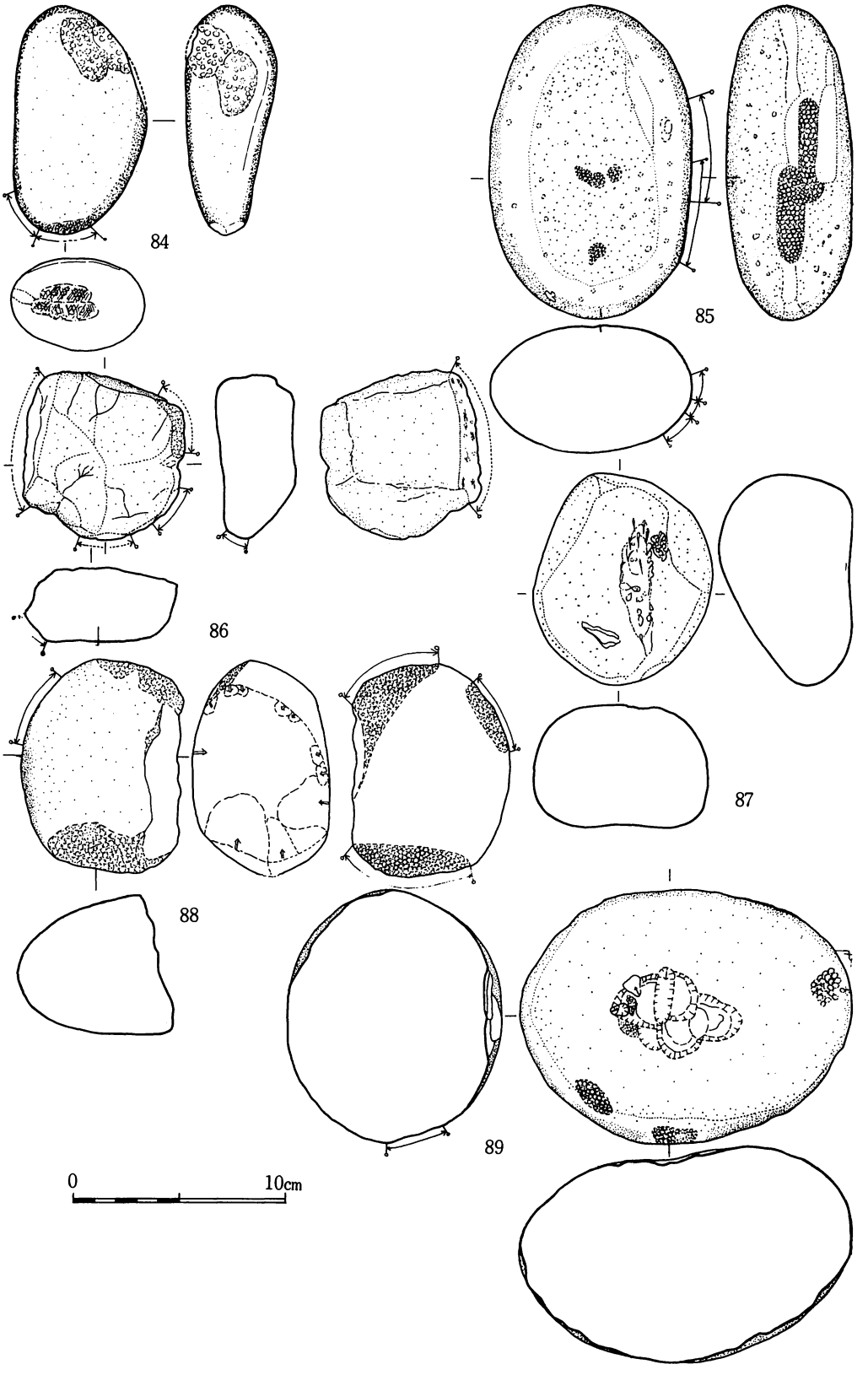
第43図　西貝塚 磨石器. 錘器



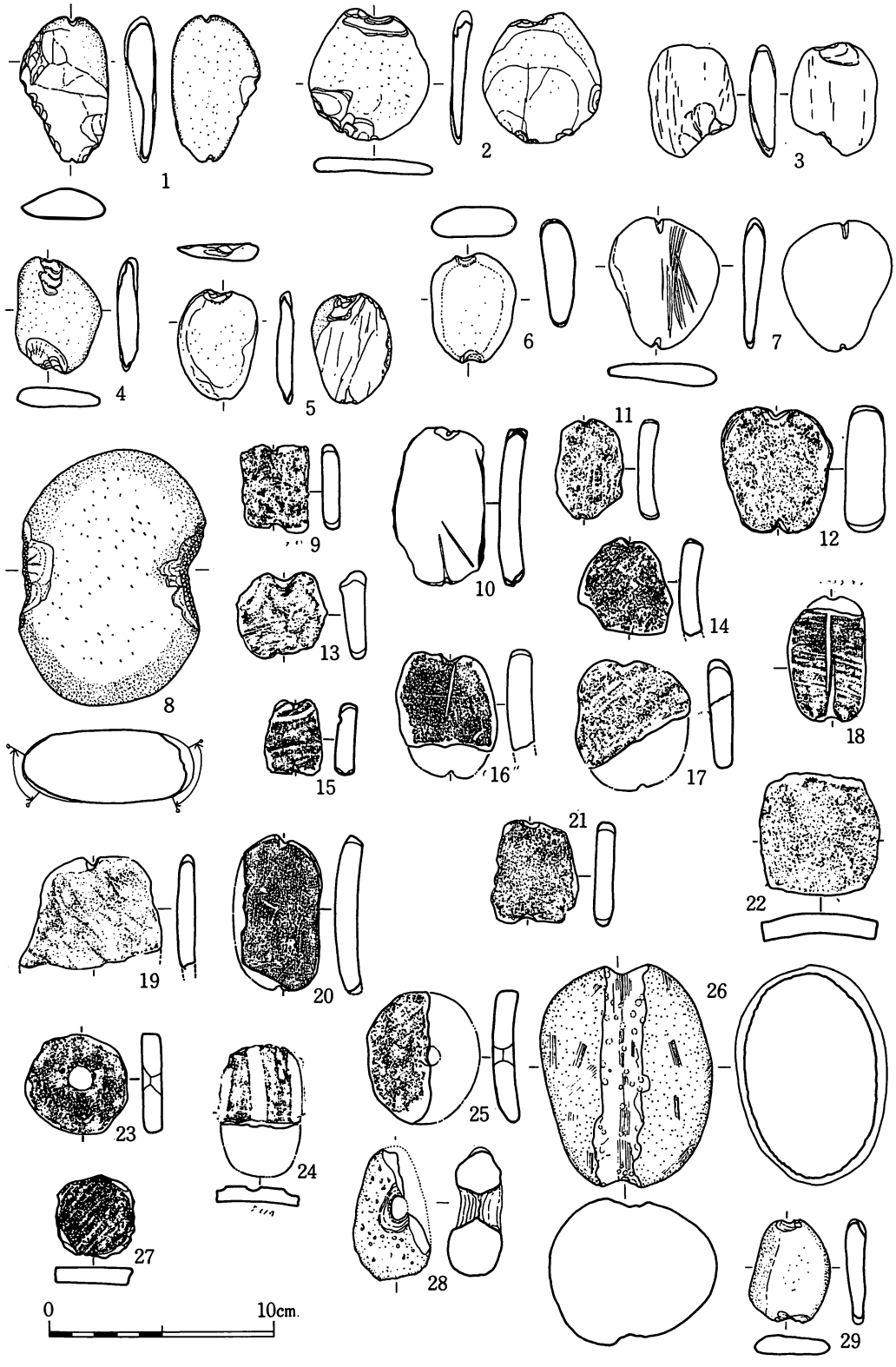
第44図　西貝塚 磨石器・錘器



第45図　西貝塚敲打器



第46図　西貝塚敲打器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10cm.

第47図　錘器、浮子

Ⅲ 小　　結

本遺跡での問題点及び本稿自体の問題点を羅列して小結としたい。

1　宇城地方の縄文系土器の流入時期は何時か。これは、西貝塚の本調査によって明白となろう。地域を細分して再考の余地がある。型式を細分して、年代学的系統学的の序列を確立せねばならない。又、現今の南福寺式土器、出水式土器等も地域差を考慮する段階に至ってはいないだろうか。

2　福田KⅡ式土器以前の縄文系土器は宇城地方にはないのか。中津式土器等の拡がりをおさえる必要がある。

3　御手洗B式土器と渡鹿出土の土器、鐘ケ崎式土器の相互関係とそれらの成立時期は何時か。

4　北久根山式土器の資料はないのか。本稿でも、それらしきものはあったが、明析にこれと断定し得るものはない。原西平式の資料が存する関係上、これは、当貝塚の精査によって明らかとなる筈である。

5　朱塗土器中、朱による文様構成土器はあるのか。その初現時期は何時か。

6　錘器は渡辺誠氏[注11]によると、九州での初現は後期前葉綾式土器に「切目石錘A種」が伴うものとしている。果してそうか。過去の報告書中、「有喜貝塚」「古閑原貝塚」等では阿高Ⅰ式（AdaKa I, Otomasu）に切目石錘が出土しているとしている。発掘精度の関係を考慮して除外しているのかもしれないが、錘器初現を考える上で留意すべきことである。又、有明海沿岸でも錘器が後期前葉にあることは荒田比貝塚例で知られているが、土器片製錘器は現時点では知られていない。正式発掘による確認が必要である。

7　東貝塚、西貝塚、熊本大学発掘地点、表採品採集地点等の各地区別の包含資料に差異がある。これは貝塚形成過程を知るためにも徹底究明が必要であろう。

注1　山内清男「V、文様帯系統論」日本原始美術一、縄文式土器　S、39
2　乙益重隆、前川威洋「縄文後期文化、九州」新版考古学講座3、先史文化。　S、44.5
3　鎌木義昌、西田栄「伊豫平城貝塚―縄文式土器を中心として」瀬戸内考古学創刊号
4・乙益重隆「縄文文化の発展と地域性10.九州西北部」日本の考古学Ⅱ・縄文時代。　S、40.7
・坂田邦洋「縄文時代に関する研究、北久根山式土器の設定」考古学論叢3。　S、50.7
5　小林久雄「九州の縄文土器」人類学先史学講座11、「土器の研究」　S、14.8
6　市毛勲「朱の考古学」考古学選書12。　S、50.1
7　5に同じ、参考寺師見国「肥後水俣南福寺貝塚―南福寺式土器―」考古学10―7　S、14.7
8・島田貞彦、濱田耕作「薩摩国出水郡出水町尾崎貝塚調査報告」京都帝国大学文学部考古学研究報告第六冊　T、10
・河口貞徳「出水貝塚」鹿児島県文化財調査報告書5。　S、33.3
9　賀川光夫「早水台（大分県速見郡日出町所在）」早水台出版部　S、30.6
10　5に同じ
11　渡辺誠「縄文時代の漁業」考古学選書7。　S、48.2
12　木下元治池、「西有田町縄文遺跡（本文編）第四章坂の下遺跡」佐賀県文化財調査報告書第18集　S、44.3によると、阿高系土器に伴出して土器底部を利用した土器片錘があると言う。
13　八幡一郎「肥後発見の一土器」人類学雑誌46―10　S、6

第三章　理化学的調査

Ⅰ　自然遺物及び人骨

1　自然遺物（動物遺存体）

動物遺存体として筆者の手元に寄せられたものは、人骨を除いて全てで1389.5ｇで、その内イノシシ541ｇ・ニホンシカ538ｇ（鹿角を含む）であった。資料はいずれも水路開削時の上げ土より採集し、開削壁面に現われた層との対比により出土層位を推定したものとの事である。同定されたものは次の通りである。

(1)　魚　綱　　*Class Pisces*

1　スズキ　*Lateolabrax japonicus*　　2　サメ類　*Lamnina fami.*

(2)　哺乳綱　　*Class Mammalia*

1　イ　ヌ　*Canis familiaris*　　2　イノシシ　*Sus scrofa leucomystax*

3　ニホンシカ　*Cervus nippon nippon*　4　ウマ類　*Equus caballus*

同定された上記の各々について以下若干の所見を述べる。

(1)　魚　綱

1　スズキ

内湾の代表的な魚であり、KB—02（6層）より左側主鰓蓋骨1個・KB—07（6層）より右側主鰓蓋骨1個が採集されている。いずれも関節窩付近の破片で、KB—07 区の個体は大きい。残存部には刺突によると思われる傷等は認められない。

2　サメ類

歯が、KB—02（7層）より採集されている。歯牙全高は、34.55㎜であり九大解剖学教室アオザメ標本（上顎歯列長210㎜）の歯牙に比べて大きい。

	骨体高	骨体厚	歯冠長	歯冠幅	頬側歯冠高
KB—08					
$\overline{\lvert M_1}$	17.0	7.7	17.0	6.9	10.9
$\overline{\lvert M_2}$	16.0	7.3	5.9	5.5	3.1
KB—09					
$\overline{\lvert P_2}$	—	10.0			
$\overline{\lvert P_3}$	18.9	9.0			
$\overline{\lvert P_4}$	—	10.5			
$\overline{\lvert M_1}$	22.7	10.8			
$\overline{\lvert M_2}$	21.1	9.6			
$\overline{\lvert M_3}$	21.7	9.9			
P_1—M_3（歯槽）歯列長			74.8		
P_1—P_4　〃			38.0		
M_1—M_3　〃			37.0		

イヌ歯牙・下顎骨計測表（単位㎜）

(2)　哺乳綱

1　イ　ヌ

KB—08（砂層 or 6ℓ層）と、KB—09（表 採）より採集されている。前者は、下顎骨・切歯骨・上顎骨の破片であるが、保存状態・色調より判断すれば同一個体であると思われる。下顎骨（L.）は、P_4 より吻側寄りと、下顎枝を欠く。M_1・M_2 は残存植立するも M_3は未萠出である。$\overline{C\rvert}$が遊離して採集されている。上顎は切歯骨

左側（I_2・I_3植立）・右側（I_3植立）と、左側P_4・M_1の歯槽・骨体部と植立した歯が残存している。P_4近心部上部に眼窩下孔が認められる。M_2の萠出については欠損のため不明である。下顎骨の計測によれば小型犬に属するが、$\overline{|M_3}$が未萠出で約6ケ月未満の幼獣であるため判定できない。KB—09区の個体は、左側下顎骨で、吻側はCより先を欠きCの歯槽の半分が残る。下顎枝は三角窩を少し残すのみで下顎孔より後を欠く。残存歯は1本もなく骨体部のみである。計側値よりすれば中型犬に属する。

2　イノシシ

シカとともに本貝塚の主体をなすものであるが、いずれも破片として採集されている。残存部としては、上腕骨・大腿骨の骨体部破片が多く、打割られたり折られたりしたと思われるものがある。頭骨は、KB—08（貝層）より同一個体と思われる破片が採集されている。その各部位は、上顎骨右側CP^1P^2の歯槽骨体部とP^1P^2の歯根・上顎骨左側$CP^1P^2P^3$の歯槽骨体部とP^1P^2の歯根及び植立したP^3・同$P^4M^1M^2$の歯槽骨体部と植立したM^1M^2・鼻骨左側片・前頭骨右側眼窩上縁から眼窩上孔付近の破片である。犬歯歯槽部よりすれば雄獣で、残存歯はいずれも歯頸部付近まで磨耗しており老獣であろうと思われる。KB—02（8層）よりは、上顎骨右側の植立したm^2M^1が採集されているがm^2の植立する骨体内には萠出途中のP^4が認められ1才前後の幼獣であろうと思われる。KB—08（貝層）より$\underline{M^3|}$が検出されているが前述2個とは咬耗度・色調よりして別個体である。エナメル質は磨滅しているが象牙質までには達していない。近心隣接面に磨滅が認められる（歯冠長36.4㎜・歯冠幅16.8㎜）。四肢骨は、採集同定されたものは第49図1に明らかであるが、左右両側に分けて最多数を示すのは大腿骨であり（KB—07〜09区右側3個・KB—02区右側3個）、それからする推定最小個体数は6個体ということになる。骨端が完全に分離したもの（KB—02区第7a層橈骨遠位端）や、上腕骨の断端を研磨しているもの（KB—0区表採）がある。

3　ニホンシカ

イノシシに次ぐ量の骨片が採集されているが、鹿角を除く総重量が358㌘で、イノシシの541㌘と比較すると約2：3の比率になる。シカの四肢骨よりする推定最小個体数4個体（イノシシは6個体）と比べても同率となる。歯牙は採集されておらずそれからする年令推定はできないが、鹿角が3個採集されておりそれより若干の推定が可能である。左側鹿角で第Ⅲ枝は生えておらず骨体も細く約5才と推定される個体（KB—08区6m、n、o層）、右側鹿角で角座と第Ⅱ区で切り取られ鉤状になったものであるが骨体部が太く第Ⅲ枝まで生えたものと推定される個体（KB—07区6n・o層）があり、他に左側角座（KB—07区6n・o層）が採集されている。四肢骨はイノシシと同様いずれも破片として採集されているが割り方に規則性は見られない。同定された部位は表第49図2に明らかであり、それよりする推定最小個体数4個体（脛骨右側）は前述した通りである。中手・足骨が少ないのは骨角器に利用されたためであろうか。橈骨近位端・脛骨遠位端・肩甲骨関節部の計測

よりすれば、解剖学教室標本のホンシュウジカ（♂・体高90㎝）の各計測値と近似する。

4　ウ　マ

KB—02（砂層）より、下顎右側第4前臼歯（$\overline{P_4}$）が採集されている。セメント質は腐蝕しており、歯根部端は欠けている。歯冠長24.4㎜・歯冠幅13.9㎜・現長56.4㎜である。1本の歯よりするのは無理であるが、計測値よりすれば小形馬に類似する。出土層位が砂層であり、後世の流れ込みも考えられ縄文時代後期のものとするには一考を要する。

以上、2綱6種の動物遺存体が同定されたが、他に未同定の骨片が存在する（250㌘）。水路開削時の上げ土よりの採集とはいえ、上げ土（貝層）の量からすると、全遺存骨総量は少ないといえる。又それを推定層位別にすると、各層ともイノシシ・シカの骨片が2～3個というように少ない。

イノシシとシカの総重量の比率が3：2となるのは狩猟対象の比重を示唆するものであろうか。イノシシ・シカとも、幼獣も捕獲しており、又性別については雄獣は確認されるが雌獣は未確認である。成獣は、かなり大形の個体である。

イヌは、2体分検出されているが、山鹿貝塚（福岡県）で見られたように埋葬されていたものか不明であるが、イヌ骨の確認は狩猟犬の存在を推定させるものである。

魚骨については、あまりその採集量が少なく、貝層の状態からすれば（貝種から推定される自然条件等からも）不自然であるが、上げ土よりの採集であることから、自然の状態を示しているものでないといえよう。有明海に近い宇土市西岡台貝塚よりは、スズキ・クロダイ・マアジ（？）が採集されている（筆者表採）。土器も黒橋貝塚に近い時期も含むことから、黒橋貝塚も、西岡台貝塚と同様内湾性魚撈的性格を持っていたものであろうと推定される。

2　人　骨

獣骨と一括して採集送付されたものであるが、点検の結果保存状態・色調等から一個体分が別々に採集されたものであろうと推察されるところから一個体分として扱い簡単に所見を述べる。

KB—08 区の出土で、推定層位は第6ℓ層である。保存状態が類似し、6ℓ層出土部位以外の部位でも、他の層より出土したものについてはこれを除いた。前記のことから埋葬位は不明であるが、右側上肢が上腕骨近位、橈骨・尺骨遠位がほぼ同じ長さで折れて欠失しているところから肘関節で強く屈曲していたと推定される。

性別：前頭骨眉上弓が強く隆起し、側頭骨乳様突起は大きく、寛骨大坐骨切痕は狭いことから男性であると推定される。

年令：頭頂骨矢状縫合が内・外板ともほぼ癒着し（Broca 4°）、下顎骨残存歯の咬耗度（Martin 3°）から熟年であろうと推定される。

身長：完全な四肢骨は脛骨（L.）だけであるが、それからする推定身長は、158.97㎝（Pearson）である。

抜歯：上顎骨は欠失しており不明であるが、下顎骨よりすれば、抜歯の痕跡は認められない。

頭骨：前頭骨・頭頂骨・側頭骨（R.）・下顎骨が残る。各骨体とも厚く頑丈である。下顎骨は頑丈で、オトガイ隆起は顕著であるが、オイガイ結節・歯槽隆起は顕著でない。残存歯は、$\overline{M_2M_1P_2 \mid M_1}$ であるが、いずれも頬側に向って強く斜に磨耗している。

四肢骨：上腕骨（R. L.）は扁平性に富み、三角筋粗面の発達は良い。骨体中央内側縁は明確な稜をつくる。尺骨・橈骨（R.）は骨間縁が鋭く張り出し扁平である。回外筋起始部の発達が良い。

大腿骨（R. L.）の前方への凸湾は中等度、内外への湾曲はほとんど認められない。筋肉付着部粗造は顕著で、粗造線は良く発達する柱状大腿骨である。脛骨（R. L.）は、内外扁平性強く、脛骨粗面は比較的強いがヒラメ筋線はあまり顕著でない。骨体中央前縁に軽度の突出が見られる。

以上の事から、本人骨は従来からいわれている縄文人の性格を比較的良く残しているといえる。他に数個の人骨片が採集されているが、特記すべき事はない。

本報告にあたっては、九大医学部解剖学教室標本を参考にし、永井昌文教授の指導を得た。記して感謝の意を表する。

（木村幾多郎）

第48図　獣骨層位別出土部位

出土層	出土層	出土部位
KB-07～09	6P層	脛骨(R.遠位部・L.近位部小片),胸椎(V or Ⅵ)
	6n.,o層	環椎(完)
	6m,n,o,層	肩甲骨(R.関節窩付近),上腕骨(R.骨体部小片),大腿骨(R.骨体部)
	6j～m層	肩甲骨(L.関節窩付近)
	6ℓ層	距骨(R.完)
	6i, j層	上腕骨(L.骨体部), 大腿骨(R.骨体部小片)
	6f層	大腿骨(R.骨体部小片)
	表採(貝層)	頭骨片, M_3
	表採	上腕骨(L.骨体部),尺骨(L.骨体部), 中手首(Ⅳ.近位部)
KB－02	8層	M_1 n_3 (歯槽に植立)
	7層	中手骨(L.Ⅳ近位部)
	7a層	橈骨(R.近位端)
	砂層	上腕骨(L.近位端),大腿骨(R.骨体部片3個体)
	1～4層	肩甲骨(関節窩),腰椎(Ⅲ or Ⅳ)

イノシシ層位別出土部位 (層位は推定によるものである)

2

出土層	出土層	出土部位
KB－07～09	6P層	脛骨(R.骨体部小片)
	6n,o層	脛骨(R.近位端・R.近位部),鹿角(R), 角座(L.)
	6m,n,o層	上腕骨(R.骨体部), 鹿角(L.)
	6k,ℓ層	肩甲骨(R.)
	6j層	環椎(完), 大腿骨(L.遠位部)
	貝層	脛骨(近位端関節面小片), 橈骨(R.骨体部小片), 中手骨(L.近位部小片)
KB－02	8層	橈骨(R.近位部), 踵骨(R.)
	7層	上腕骨(L.骨体部小片)
	5層	中手骨(L.骨体部)
	砂層	寛骨

シカ層位別出土部位 (同 上)

Ⅱ　宇土半島基部における縄文・弥生の境界について（予報）

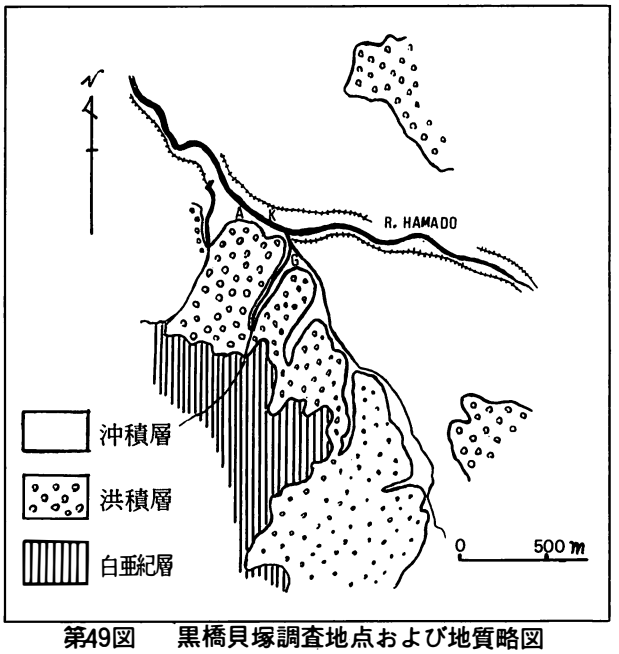
―― 所謂黒橋貝塚の再検討 ――

On the Jômonian - Yayoian Boundary in tne eastern extremity of Uto Peninsula

―― Reinvestigation of so called Kurobashi-Shell Mound ――

1　まえがき

宇土半島基部には、御領・阿高を始め多くの縄文期の貝塚が分布する。これらの貝塚については小林（1931）による縄文土器編年の研究があり、現在も九州における縄文編年の対比に利用されている。最近有明海研究グループ（1965）により有明粘土の堆積環境ならびに堆積時代が解明され、また筆者の一人林（1975）は有明粘土と阿高貝塚の関係を解明し、更にこの有明粘土をおう阿高粘土の存在を提唱した。



第49図　黒橋貝塚調査地点および地質略図
A：阿高　G：御領　K：黒橋貝塚

有明粘土が縄文海進の堆積物に対し、阿高粘土は弥生海退期の堆積物で、堆積環境は互に全く異なる。この堆積環境の相違から阿高粘土を有明粘土と区別し、縄文・弥生時代を層位学的に区分する一つの基準とした。

縄文・弥生期の地質学的研究は人類と環境変遷（特に海面変動）の相互関係を究明するのに最も重要な問題であり、阿高粘土層の分布、堆積環境を明らかにする事は広範囲にわたり縄文・弥生期の境界を対比できることを示唆している。

1972年の浜戸川氾濫の結果、阿高貝塚の対岸に貝塚らしきものが発見され、黒橋貝塚と名付けられた。今度、浜戸川河川改修にともない熊本県教育庁文化課の黒橋貝塚発掘調査がおこなわれ、現地調査の機会を得た。筆者らは臨海沖積層の研究と共に縄文期の貝塚の堆積について調査した結果、所謂〝黒橋貝塚〟の存在は基本的に訂正されねばならぬと云う結論に達したので報告する。

この研究をすすめるにあたり、便宜を計って頂いた熊本県文化課の諸氏に厚く御礼申し上げる。（第49図）

2　層序概説

調査地域の北部および西部は熊本平野が開け殆ど沖積低地よりなる。南部は扇状地性の段丘層がよく発達している。また扇状地から山地（雁回山）への移行は地形的に非常に急激である。この段丘は浜戸川及びその支流によって開析され段丘層の露出は良好である。

第50図　黒橋地域の化石珪藻による分帯

層準		層相	環境	化石珪藻群	サンプル番号	深度
阿高粘土層	A_4	褐色粘土・砂質ミルトの互層	淡水	*Cymbella* *Gomphonema*		
貝殻層	A_3	貝殻（所謂黒橋貝塚）	淡水		1	（海抜 4.10m） 0 cm
有明粘土層	A_2	淡青色粘土	汽水	*Caloneis* *Cocconeis* *Coscinodiscus* *Diploneis* *Gyrosigma* *Hantzschia* *Navicula* *Nitzschia* *Pinnularia*	2	−23
					3	−48
					4	−76
					5	−99
	A_1	暗青色粘土・ミルト質粘土	海水	*Achnanthes* *Aulacodiscus* *Coscinodiscus* *Diploneis* *Hyalodiscus* *Melosira* *Pleurosigma* *Triceratium*	6	−126
					7	−153
					8	−180
		砂礫			9	
?						

有明粘土層は、浜戸川流域では表土におおわれ、河川流域に発達する新期段丘堆積層との関係は不明である。有明粘土層については有明海研究グループ（1965）によって報告されているのでここでは省略する。

黒橋貝塚付近の層序：本地域沖積層の最下位層（A_1）は、主として暗青色の粘土およびシルト質粘土よりなる有明粘土層である。この上位は淡青色の粘土層（A_2）よりなる。この層は堆積環境から推定して有明粘土層の上部とみられる。この粘土層（A_2）を不整合に貝殻層（A_3）がおうている。これが所謂〝黒橋貝塚〟である。この貝殻層（A_3）のさらに上位には褐色の主に粘土・砂質シルトの互層よりなる阿高粘土層（A_4）が分布する。（第50図）

3　化石珪藻群

化石については全く報告はなく、その層準について古環境を論ずるための資料は、きわめて不十分であった。それゆえ、古環境の解析にあたって、珪藻化石の分析により得られる資料の果す役割は大きいと考えられる。

黒橋貝塚を解明するため重要な有明粒土層および阿高粘土層の堆積環境を明らかにする目的で珪藻化石の分析を進めてきた。

産状：有明粘土層（A_1およびA_2）から産する珪藻化石は、約23属50種におよぶ。産出個体数は岩相によって大きく変化するが、泥層とくに泥炭質の泥層のところでは多い。砂質泥層および泥質砂層では少なく、砂層および砂礫層からは、ほとんど産しない。各層準から産出する珪藻化石を第52図に示した。阿高粘土層からの産出は非常に少なく、サンプルによっては全く含まぬ。（第51図）

垂直変化：A_1 下部の砂礫層では珪藻化石をほとんど産出しないが、泥質のところではきわめて多く主として *Coscinodiscus, Aulacodiscus* 等の海棲珪藻化石を産する。またA_2では海水種の他、*Diploneis, Hantzschia, Navicula, Pinnularia, Rhopalodia, Stauroneis* 等の淡水棲の珪藻化石を産する。A_3の貝殻層からは珪藻化石を全く産しない。A_4の阿高粘土層は珪藻の破片を少し含む程度で、完全な珪藻殻をほとんど産出しない。

一般にA_1は海水成の堆積物よりなり、A_2 は汽水成の堆積物と考えられる。A_3 の貝殻層は礫の堆積と同様A_4の阿高粘土層の基部と考えられ、A_2とは不整合の関係にある。これは海水→ 汽水→ 淡水という環境の変化を示している。

4　黒橋貝塚の堆積についての考察

縄文海進時は阿高付近まで古有明海が湾入しており、縄文晩期にはすでに海退が始まり汽水化したと考えられる。これはA_1層よりA_2層が海水種の珪藻化石が減少することからも判断できる。またA_1層下部の砂層はこの付近が古有明海の海岸であったことを意味し、海退が進むにつれ次第に汽水化したと考えられる。この状態の沿岸に少なくとも2回の大洪水があった様で、第1回の洪水で阿高貝塚の一部が黒橋付近まで押流されたものでこれが所謂黒橋貝塚の堆積である。この洪水の後更に第2回の洪水によりこの付近一帯は氾濫し、湖水化したと考えられる。このときの堆積が *Cymbella, Gomphonema* を主とするA_4の阿高粘土層に相当するものである。従って所謂黒橋貝塚は二次的な堆積によるもので始めからの貝塚とは考えられない。

5　結　　論

① 黒橋付近の沖積層の層序は下から有明粘土（A_1、A_2）、貝殻層（A_3）、阿高粘土（A_4）の順となっている。

② 堆積環境はA_1（海水）→A_2（汽水）→A_3（淡水）→A_4（淡水）となる。

③ 所謂〝黒橋貝塚〟の貝殻層は有明粘土層と阿高粘土層の間に挟まれている。

④ A_3層が縄文海進と弥生海退の境界となる。

⑤ 所謂〝黒橋貝塚〟は貝殻でなく二次的に堆積したものである。（林　行敏・森　通保）

参　考　文　献

有明海研究グループ（1965）：有明・不知火海域の第四系、地団研専報、P．1～86。

林　行敏（1968）：沖積世の海水準変動と熊本周辺における縄文海進の問題、地学研究、19巻、8号、P．215～219。

――　（1971）：有明海底コアの珪藻層序学的研究、地学研究、22巻、7・8号、P．187～194。

――　（1972）：有明海周辺の上部新生界―Ⅲ、地学研究、23巻、1・2号、P．13～22。

――　（1975）：熊本・宇城地域における阿高粘土の地質時代、地学研究、26巻、4～6号、P．147～152。

小林久雄（1931）：阿高貝塚及び御領貝塚及び御領貝塚の土器、地歴研究、7巻、7～4号。

第51図　黒橋地域の化石珪藻群のおもな構成種

種名	棲息水域	サンプル番号 1	2	3	4	5	6	7	8	9
Achnanthes brevipes	B	-	-	-	-	-	-	-	-	○
Amphipleura sp.	M	-	-	-	○	-	-	-	-	-
Aulacodiscus oreganus	M	-	-	-	-	-	-	-	-	○
Caloneis permagna	F	-	-	-	-	○	-	-	-	-
Cocconeis granulifera	M	-	-	-	-	-	-	○	-	-
C. placentula	F	-	-	-	-	○	-	-	-	-
C. quarnerensis		-	-	-	-	-	-	○	-	○
Coscinodiscus asteromphalus	M	-	-	-	-	○	-	○	-	-
C. excentricus	M	-	-	-	-	-	-	○	-	-
C. kuetzingii	M	-	-	-	-	-	-	○	-	-
C. marginatus	M	-	-	-	-	-	-	-	-	○
C. sp.	M	-	-	-	-	-	-	-	-	○
Cymbella tumida	F	-	-	-	-	-	-	○	○	-
Diploneis finnica		-	-	-	-	-	-	○	-	-
D. smithii	F	-	-	○	-	-	-	-	-	-
D. splendida	M	-	-	-	-	-	-	○	○	○
D. subovalis	B	-	-	-	-	○	-	○	○	-
Gomphonema rhombicum	F	-	-	-	-	-	-	○	-	-
Gyrosigma acuminatum	B	-	-	-	-	○	-	○	-	-
C. sp.	B	-	-	-	-	○	-	-	-	-
Hantzschia amphioxysis	F	-	-	○	-	-	-	-	-	-
Hyalodiscus subtilis	M	-	-	-	-	-	-	○	-	-
Melosira salcata	B	-	-	-	-	-	-	○	-	-
M. omaruensis		-	-	-	-	-	-	○	-	-
M. varians		-	-	-	-	-	-	○	-	-
Navicula bacillum	B	-	-	-	-	-	-	○	-	-
N. galikii		-	-	-	○	-	-	-	-	-
N. lyra	M	-	-	-	-	○	-	-	-	-
N. marina	M	-	-	-	-	-	-	-	-	○
N. pupula	B	-	-	-	-	-	-	○	-	-
N. radiosa	B	-	-	-	-	-	-	○	-	-
N. salinarum	M	-	-	-	-	○	-	-	-	-
Nitzschia circumustata	B	-	-	-	-	○	-	-	○	-
N. constricta	B	-	-	-	-	-	-	○	-	○
N. dudia	B	-	-	-	-	-	-	○	-	-
N. lancettla	B	-	-	-	-	-	-	○	-	-
N. tryblionella	B	-	-	-	-	○	-	-	-	-
Pinnularia bipectinalis	F	-	-	-	-	-	-	○	-	-
P. latevitata	F	-	-	-	○	-	-	-	-	-
Pleurosigma normanii	B	-	-	-	-	-	-	○	-	○
Raphoneis amphiceros	M	-	-	-	-	-	-	○	-	-
Rhopalodia gibberula	F	-	-	○	-	-	-	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron	F	-	-	-	-	○	-	-	-	-
Surirell fastuosa	M	-	-	-	-	-	-	-	-	○
Trachyneis aspersa	M	-	-	-	-	-	-	-	-	○
Triceratium favus	M	-	-	-	-	-	-	-	-	○

F：淡水　　B：汽水　　M：海水

Ⅲ　熊本県黒橋貝塚の考古地理

1　はしがき

この報告は、考古地理学の見地からみた黒橋貝塚とその周辺地域の自然環境、とくに地形の復元とその変遷についての予察的報告である。考察に用いた諸資料の多くは、熊本県教育委員会文化課の調査係から供与されたものである。筆者は現地を一度訪ねて発掘現場を観察し、附近の関連諸遺跡を瞥見したにすぎないので隔靴掻痒の感があり、今後の課題として残さざるを得なかったところが多い。しかし、与えられた発掘調査の資料は実態をよく記録した実測図と説明文があり、遺跡分布図にはそれに照合する文化小期の一覧表が添付されていたので、堆積の過程とその時期や、地形と気候環境を推考するうえに役立った。

2　遺跡の位置と立地の特質

黒橋貝塚は行政上熊本県下益城郡城南町下宮地字萱木(かやのき)の地にあって、島原湾に面した熊本平野の東南隅に位置し、標高 6.8*m*の浜戸川の河床に埋った縄文後期の低地性遺跡である。貝塚の下底面は標高 3.6*m*ないし 3.8*m*で低く、貝塚の形成後に浸食と堆積を繰り返し、今日では1.3*m*から2.2*m*もの新期沖積層の底に埋った河床下の埋没貝塚になっている。また附近の河岸段丘には阿高貝塚・御領貝塚・敷田貝塚・沈目遺跡などの著名な諸遺跡が群在し、遺跡群を形成している。

貝塚が立地する地点は、熊本平野の東南縁を画する雁回山の東北麓に当り、浜戸川が九州山地の水を集め、城南台地を開析して塚原低地を貫流し、熊本平野に流れ出る谷口に立地する山麓遺跡である。このように現在山麓の河床下遺跡であるが、貝塚の形成の直前に当る縄文中期の末後期初頭ごろにはまだ海域で、その後、後期前半には河口のデルタに変るといった、今日と大きく異なる地形であった。

3　堆積物からみた立地環境の変遷

次に、貝塚をのせる沖積層や貝層とこれをおう新期の沖積層から、黒橋貝塚の立地環境を復元してその変遷をみることにする。

今回発掘した貝塚は KB－02と KB－08の 2 地点で、貝層の厚さはともに約1.5*m*ばかりである。貝殻を捨てた貝塚人の住居址はみつかっていないが、貝塚に近いそれぞれの貝層下底面の延長の地面にあったものと考えられる。堆積の層序が明瞭なKB－02地点を中心に、KB－08地点と照合しながら考察して次の事実を知ることができた。

(1)　貝塚築成以前の地層は下位に鹹水性の珪藻を含んだ紫黒色の粘土層があり、その上位に淡水性の珪藻を含むグライ化された青灰色粘土層が堆積していて、その上部が浸食をうけ、KB－08 地点ではハマグリの単純貝層がある。この状態は、上昇した海面が旧湾口に達したのち海退に転じてバックマーシュの淡水湖を生じ、やがて海退による陸化につれて三角州性の低地になっていたことを示している。

(2)　発掘調査によると、KB－02 地点の貝塚は 3 層に分けられる。その最下層は青灰色の貝層でマガキが大半を占め、汽水性のヤマトシジミが少量含まれているとところから推して、

この期の貝層の築成されたころは、陸化がはじまったがまだ汀線が近く、一方、陸化にともなう河水の流入によって汽水性のヤマトシジミが採れるような地形になっていたことがわかるのである。この貝層に前代の南福寺式土器を出しながらも、その築成期は、出水式土器が語るごとく縄文後期の前半ごろで、地層の層序と考え合せると、この地方での縄文後期小海進は中期の終末から後期初頭にかけてのころとみてよいであろう。

このような状態は本州最西端の下関市潮待貝塚のばあいとよく似ており、響灘沿岸と島原湾沿岸はほぼ同一時期に縄文後期小海進をむかえ、その後間もなく海退に転じて陸化し、後期の前半には貝塚人の集落が営まれるような地形になっていたことを知るのである。

(3) 中位の貝層は、少量の南福寺式土器とともに出水式土器を出す褐色混土貝層で地下水が下っており、貝類の放棄量が減りはじめるがまだマガキが相対的に多く、ヤマトシジミの量が幾分増し、汀線の後退が進行していた海退期であったことを示唆している。

(4) ところが最上位の貝層は黒色土の混った幾分薄い層で貝殻の放棄量が一層減り、出水式土器だけを含む単純層になる。この混土貝層には炭化物や焼土を含み、貝殻は汽水性のヤマトシドミが大部分を占め、マガキが激減して汀線がかなり遠ざかり、陸化が進んだことを物語っている。

黒橋貝塚の築成が止ったのは汀線の後退によって貝類の捕食が困難になったためとも考えられ、その時期は縄文後期の中葉ごろとみることができる。

(5) 貝塚の築成が止まったのち、浸食と堆積がそれぞれ4回行われたことを示す資料が発掘調査者によって報告されている。その層位や層相だけで地形とその形成時期を推考することが困難なので、次に、考察の前提となる熊本平野南東部の遺跡の立地を文化小期的遷移現象との関連においてみておこう。

4 遺跡の文化小期からみた熊本市南郊の沖積地形の変遷

熊本市南部一帯に分布する縄文時代以降の諸遺跡について、まず文化小期からみた遺跡の増減と、白川・加勢川・緑川・浜戸川などの諸河川がつくった三角州性平野と、洪積台地への進出・後退を、地形の変化に対応した集落立地の適応現象と沖積地形の形成過程との関連について考察することにした。取り扱った遺跡は53個所で、このうち、文化小期の不明確な縄文遺跡1個所と弥生遺跡2個所を除いた諸遺跡と、古墳時代以降のもの5個所である。なお文化小期の同定は熊本県教育委員会の文化課の行ったものを用い、復合遺跡は処理の都合上それぞれの文化小期別に1遺跡として教え、73の文化小期の遺跡として対象にした。

(1) 文化小期別瀕度　絶対数の多い順からみると、弥生中期と後期がともに15、縄文後期12同晩期10、弥生前期7、縄文前期5などとなり、弥生時代の中期から後期にかけての遺跡が断然多く、縄文後期がこれにつぎ、縄文中期と古墳時代以後や縄文早期が目立って少ない。（第52図1）

次にこれを縄文早期から中世までの全期間について眺め、さらにそれぞれ相接した前後の文化小期との相対的な増減関係をみると、地形の変化が絶対数の増減と深い関連があって、

筆者が本州西端地方で調べた後水期の海水準変動と極めてよく似た推移を示していることがわかった。

(2) 遺跡立地の地形別瀕度　次に、居住地点を地形と結びつけて考えるため、遺跡の立地をA・河床下、B・沖積低地、C・洪積段丘と山麓斜面との3地形面に分けて文化小期別に出現瀕度を調べてみた。（第52図2）

A　河床下に埋没している遺跡は21遺跡で、このなかには縄文中期以前のものがなく、後期から晩期・弥生前期へと次第に増加していわゆる弥生小海退の進行による汀線の後退と陸化にともなう低地帯への進出を示唆している一方、台地遺跡は弥生前期に全くなく、台地から低地帯への移住を物語っているようである。また、数は少ないが、縄文後期と古式土師器を出土する河床下遺跡が存在することは、この両期にも海水準が低く、当時遺跡地附近の低湿地帯が陸化していたことを示唆している。

B　沖積低地帯の遺跡　山麓の傾斜変換線以下の新期沖積層からなるデルタに立地した低地遺跡は19遺跡で、この中には河床下の遺跡の立地に似た低位置のものもある。標高5*m*以下の低湿地帯には弥生前期の2遺跡と中世に1遺跡がある以外にはなく、河床下遺跡の存在ともよく照応し、このころ低地に進出していることは、いわゆる弥生小海退の時期ともよく一致している。

同じ沖積低地帯でも縄文早期と前期・後晩期、弥生中期と後期や古代の遺跡は標高5*m*から山麓線にいたる10数*m*までの幾分高い土地に立地していて海進期に対応し、反対に、縄文中期と弥生前期、古墳前期と中世には全く見られず、この期の遺跡の立地が海退期に照応していることに気づくのである。

C　洪積段丘の遺跡　低地帯周縁の洪積台地の遺跡は、縄文後・晩期や、弥生中期と後期に多く、これもまた海進期に照応している。一方この低地帯の周辺では、縄文前期と中期・弥生前期・古墳時代や中世の海退期には遺跡が台地にみうけられず、これらの海退期には台地から降りて低地帯へ進出したか、何れかの他の土地に移り住んだのではないかと考えられる。

(3) 貝塚の地形別・文化小期別瀕度　そこで更に一歩を進め、貝類が採れる海浜や河川と関係をもつ貝塚の立地について、地形別文化小期瀕度を調べた。（第52図3）

縄文前期には低湿地に全くなく、3貝塚がやや高い山麓寄りの土地に後退して占地し、顕著ではないが、この期にいわゆる縄文海進があったことを示唆している。また縄文後期にはすべての遺跡が洪積台地や標高5*m*以上のやや高い沖積平野に集り、このころ低湿地遺跡が見られないことと相まって、熊本平野にも縄文後期小海進があったことを察知することができる。この時代につぐ縄文晩期から弥生前期にかけて次第に段丘上から姿を消し、低地へ進出したことと相まって、弥生小海退が生じたこととよく一致する。

弥生中期と後期になると俄然洪積台地に多く出現し、低地帯でも5*m*以上のやや高い山麓寄りの土地に後退していて、海進にともなう卑湿地の出現が台地居住を促したことを示唆し

ている。

5　黒橋貝塚廃絶後の地形変化とその時期

黒橋貝塚の廃絶はKB－02地点で縄文後期前半、KB－08地点では後期中葉で、その後の浸食と堆積がそれぞれ4回であると報告されている。筆者は先にこれらが示す地形の変化とその時期についての説明を留保したが、ここで、前項の結果と考え合わせて考察しておくことにする。これら4回の浸食と堆積の過程には、次の二つの場合を想定することができる。

その一つは、河道の変遷による浸食と堆積の結果とみる見解で、他の一つは、氷河性海水準変動と地盤運動の総和によって生じた後氷期後半の陸成堆積物の形成過程を示すものとみる見方である。

前者の場合4期とも下刻面が毎回ほぼ同じ高度に下ることから推して、地盤変動や海水準変動の影響がなかったものとみ、河道か、河床内の流路の移動による局所的な浸食と堆積の繰り返しとみる仮説である。

後者の場合は層序と層相の特質から、それぞれの浸食と堆積が地形環境や気候環境の変化によるものとの見地から、次のように推考するのである。

すなわち第1回目の浸食は、貝塚の築成が終った縄文後期中葉につづく黒色や青黒色粘土層の堆積が、次第に気候の冷涼化とこれに伴う小海退による下刻現象を示唆し、縄文後・晩期を経て弥生前期にかけての低地性遺跡の顕著な増加と、台地遺跡の激減の一致から、弥生小海退による汀線の後退との関連を考えようというのである。この浸食面への堆積は、弥生中期と後期の台地遺跡の激増から推して、弥生中期小海進に伴う堆積の復活を察知することができる。

なおこの間に、遺物と堆積の状態から推して2回の浸食と堆積がみうけられる。

3回目の浸食は、黒色砂層の堆積が気候の冷涼化を示唆し、古墳期の台地遺跡が全く見当らないことから低地への進出が予想され、汀線の後退による浸食の回春が想定できそうである。また、この浸食面への堆積は、低地性遺跡が姿を消し、土師器と須恵器をともなう台地遺跡が増加することからいわゆる古代小海進が生じたことも考えられ、河川堆積物の堆積との関連を推考できそうであるが、この地域では、この期の小海進を強く積極的に立証する徴証がみつかっていない。

4回目の浸食と堆積についても確かな証拠はないが、中世の遺物を出土する標高4 *m*以下の低湿地遺跡の存在から推して、いわゆる中世小海退による汀線の後退にともなう浸食の復活と、近世以降の河川堆積物が貝塚を埋積して今日に至ったものと推考できそうである。

しかし、本貝塚の廃絶後の地形変化の解明には、積極的かつ直接的な資料が乏しいので、推論による仮説の域を出ないところもあって、今後関連のある諸遺跡の発掘調査や花粉分析などの資料の添加をまって検討しなければならない。

6　む　す　び

以上の知見を帰納し、本貝塚とその周辺諸遺跡のもつ考古地理学上の特質を摘記しておくことにする。

(1) 黒橋貝塚は、現在の汀線から12㎞も離れた熊本平野の東南縁にある縄文後期の河床下遺跡であるが、その占める位置から中部九州の西岸だけにとどまらず、東シナ海東岸における沖積地形の発達史を知るうえのタイプサイトにもなる点で重要である。

(2) 本貝塚の堆積の層相は、縄文中期末後期初頭ごろの海進のピークを示し、いわゆる縄文後期小海進の実在を示唆している。貝塚の築成は、海退に転じて間のない縄文後期前半から中葉にかけてのころである。

(3) 貝層とこれを挟む新期沖積層の形成過程は、熊本平野東南部の諸遺跡が示す遺跡立地の水平的・垂直的遷移現象との深い関連のあることがみうけられる。このような現象は、西南日本とくに本州西端部の海岸でみる氷河性海水準変動ともよく照応し、海岸平野の形成過程が示唆するオシレーションと、人類の居住的適応現象との関連を捉えやすい点からも貴重な遺跡ということができる。 (小野忠凞)

参　考　文　献

中野尊正(1956)　日本の平野　古今書院

山崎光夫(1957)　有明海沿岸を主体とする北九州の沖積層　九大教養学研報　4号

小野忠凞(1963)　本州西端地方における海岸砂丘の形成期の研究　地理学評論　第36巻　第7号

和島誠一・麻生優・田中義昭(1964)　北九州における後氷期の海進・海退について、資源研彙報　63号

地学団体研究会(1965)　有明・不知火海域の第四系　地団研専報　11号

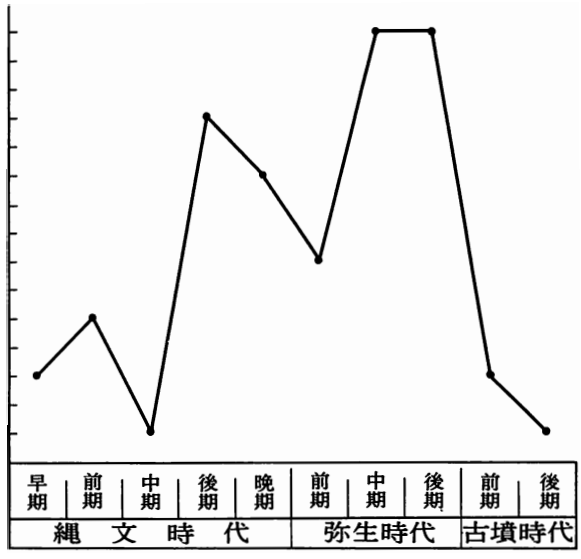
江坂輝弥(1972)　自然環境の変貌　一縄文土器文化期における一　第四紀研究　第11巻　第3号

江坂輝弥(1975)　関東平野における貝塚遺跡から観た沖積世における海岸線の進退　日本大学地理学科五十周年記念論文集

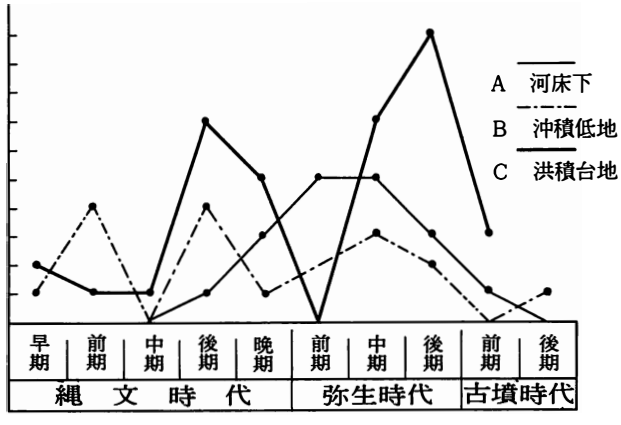
井関弘太郎(1972)　三角州　古今書院

小野忠凞(1975)　考古地理学からみた響灘沿岸の砂質海岸の形成　第四紀研究　第14巻第4号

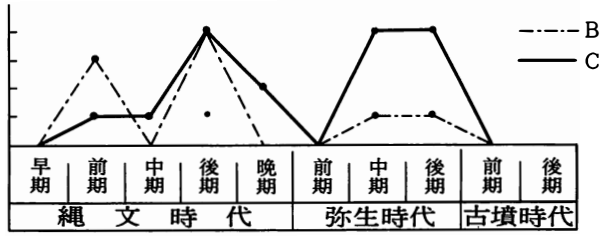
1　文化小期別出現瀕度



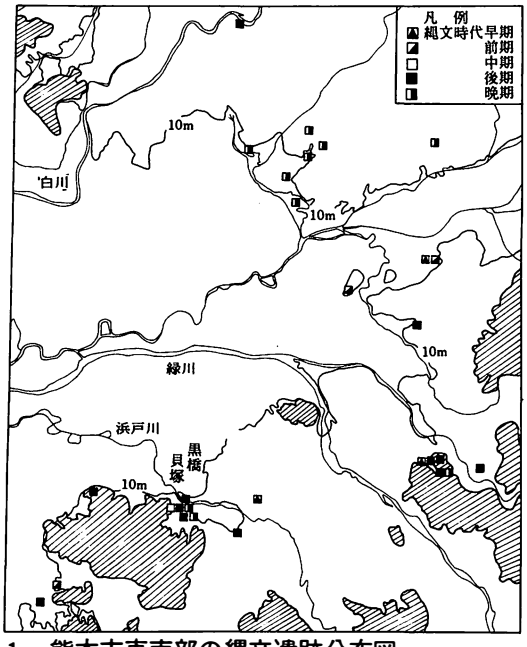
2　地形別・文化小期別出現瀕度



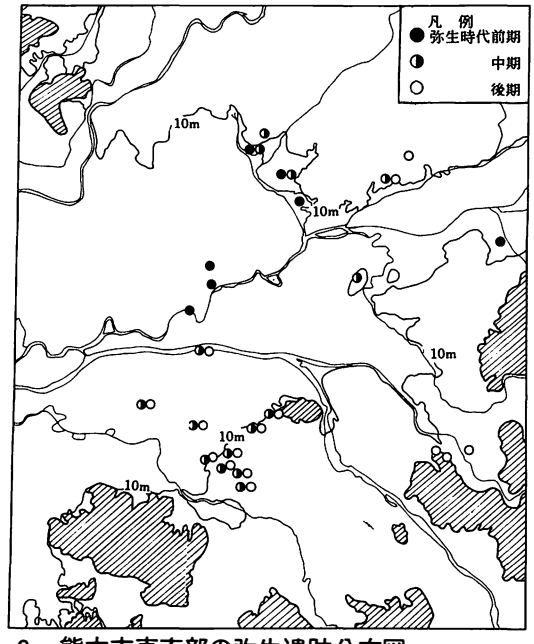
3　貝塚の地形別・文化小期別出現瀕度



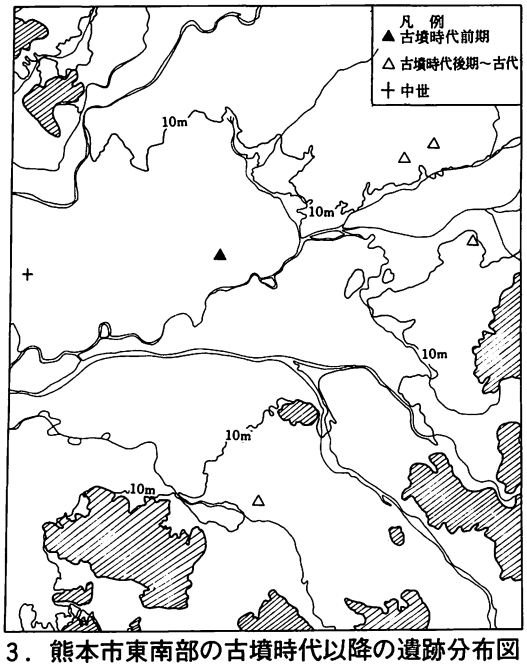
第52図　文化小期別出現瀕度



1．熊本市東南部の縄文遺跡分布図



2．熊本市東南部の弥生遺跡分布図



3．熊本市東南部の古墳時代以降の遺跡分布図

第53図　熊本市東南部の低湿地遺跡分布図

第四章　総　　括

Ⅰ　黒橋貝塚の総括

昭和47年７月の大豪雨は県下の各地に大災害をもたらし、ことに城南町は甚大な被害をうけた。その際、偶然にも濁流に洗われて、水田下に見つかったのが、この黒橋貝塚である。

黒橋貝塚の所在する城南町は熊本市から南南東約10㎞のところにあり、その中心街の南端を浜戸川が貫流している。街並から下流約500ｍ、浜戸川の右岸の水田下および河川敷に貝塚は広がっている。

城南町には全国的に著名な阿高貝塚・御領貝塚があるが、黒橋貝塚は、阿高―（？）―御領の時期の空白を埋める時期の重要な貝塚であることが推定されることから、発見の翌月、昭和47年８月には県指定史跡となった。一方、黒橋貝塚の分布範囲については不明であったので、熊本大学のご協力により試掘調査が行われ、当初発見の水田を中心に河川敷も含めて、南北140ｍ東西210ｍに広がると推定されることがわかった。

その後、災害復旧事業として河川改修事業が行われ、河川敷内の工事現場のうち、東西２カ所から貝塚が見つかった。ただちに工事を中止して調査を実施するとともに、河川課において事業の計画変更がなされ、貝塚の主体部は保存されることとなった。

調査の目的は、掘りあげられた土中からの遺物の検出と、貝層を含む崖面の層序調査であり、全面発掘調査は実施しなかった。

調査によって得た資料は、魚貝類・骨角類・土器・石器類等である。

自然遺物及び人骨に関する木村幾多郎氏の報告によれば、魚類では検出数が少ないが、内湾の代表的な魚であるスズキが含まれ、内湾性魚撈的性格が推察できる。哺乳類としてはイヌ・イノシシ・ニホンシカ・ウマが認められ、とくに、イノシシ・ニホンシカについては幼獣及び雄獣のみが検出されており、このことだけで推察するには不充分だが、雌獣が未確認であることは注目すべきことであろう。

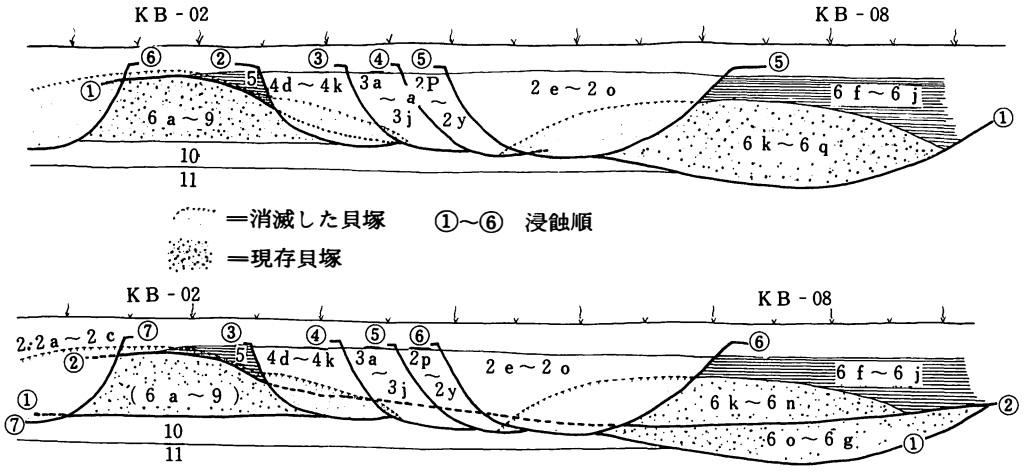
出土した文化遺物については西田道世の報告に詳述してあるとおり、阿高式・南福寺式・出水式系の土器を検出している。ことに、この貝塚の主体となるものは出水式系土器であり、阿高貝塚―（？）―御領貝塚の中間をうめる時期の貝塚であることが確認できた。

なお、検出した土器のうち特異なものとして福田ＫⅡ式があるが、県内では出土例がなく、この時期における他地域との関連等、今後の研究課題であろう。

貝層は断面でみるかぎり、東（KB―02）・西（KB―08）の二カ所で確認できる。この二カ所は出土遺物・層序堆積の状態等から推して、別個の貝塚であったと考えられる。西田道世の報告および小野忠凞氏の所見によると、縄文中期末の頃、陸化のはじまった汀線近くの地形上に、貝塚が築成されはじめ、汀線が著しく後退し、貝類の捕食が困難になったためとも考えられる縄文後期の中葉ごろには築成が終ったと予想される。

その後、恐らく浜戸川による浸食と堆積がそれぞれ４回にわたって行われたものと考えられ

る（第54図）。



第54図　黒橋貝塚層序模式図

なお、林行敏・森通保氏は貝塚の堆積について、有明粘土層の堆積および珪藻分析の結果から、すぐ南に存する阿高貝塚の一部が洪水によって黒橋付近まで流出し、堆積したものが黒橋貝塚であると報告された。これについては、あるいは阿高貝塚と黒橋貝塚がもともと一つの大貝塚であって、浜戸川の氾濫によって切断され、その一部が黒橋貝塚として残存した可能性はあろうが、出土遺物および貝層等の調査からみたかぎりでは、阿高一御領の時期をうめる時期の独自の貝塚とみる方が当を得ていると考える。

黒橋貝塚の立地を中心として、他の低湿地遺跡（第１図）の立地状況から推察すれば、白川・加勢川・緑川・浜戸川などによって形成された三角洲性平野における遺跡の環境変化等の現象を推察できる。

小野忠凞氏によれば、とくに縄文後期小海進があったこと、これに続く縄文晩期から弥生前期にかけての弥生小海退が生じたことが察知できる。この現象は、西南日本とくに本州西端部での現象ともよく照応しており、貴重なデーターが得られたものと考える。

社団法人日本アイソトープ協会に依頼したC—14測定結果報告は以下のとおりである。

コード	依頼者コード	C—14年代	
N－2402	KB－020－004	4040±100　(3930± 95)	貝殻（Ⅸ層）
N－2403	KB－070－039	4050±110　(3930±105)	貝殻（Ⅵ層）
N－2404	KB－030－017	3970±100　(3850± 95)	ドングリ木片　（Ⅺ層）

※年代は ^{14}C の半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B・P.）として示されている。　（隈）

あ と が き

昭和49年12月９日、工事中の現場で山積された貝殻を含んだ土砂を眼のあたりにみたとき、実際どう処理したらよいものか悩んだ。

全域を発掘調査するとすれば、少なくとも１年半～２カ年の期間を要する。水害常襲地帯とあって、工事完成をそれだけの期間を延ばすわけにはいかないということであった。もしも、２カ年の調査中に、水害でも生じたら文化財保護行政による人災といわれるにちがいない。担当の河川課とも協議を重ね、設計変更によって流路は現在のままでやりうる見通しがつき、実のところホッとした。露出した貝層および包含層、山積みされた土砂の調査だけでも５カ月を要した。その間、梅雨期には調査中のハンド・ドーザーが大雨による増水によって水面下に没するという事故まであった。

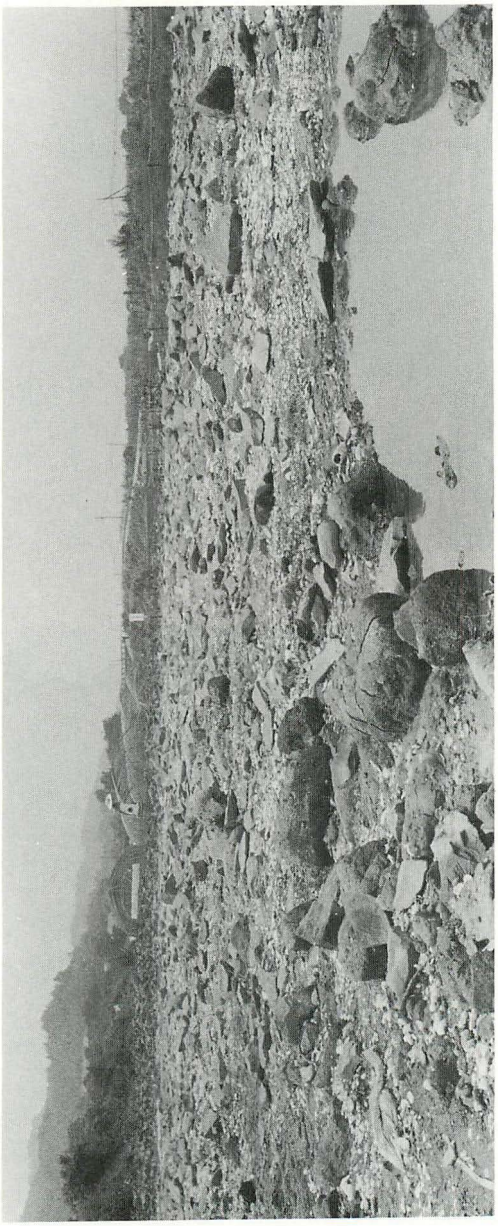
一応の残務処理的な調査は終ったが、河川内にとり残された貝塚の主体部は増水のたびに浸食されていく。したがって、今後大きな課題として、貝塚主体部の保存等について検討が必要である。

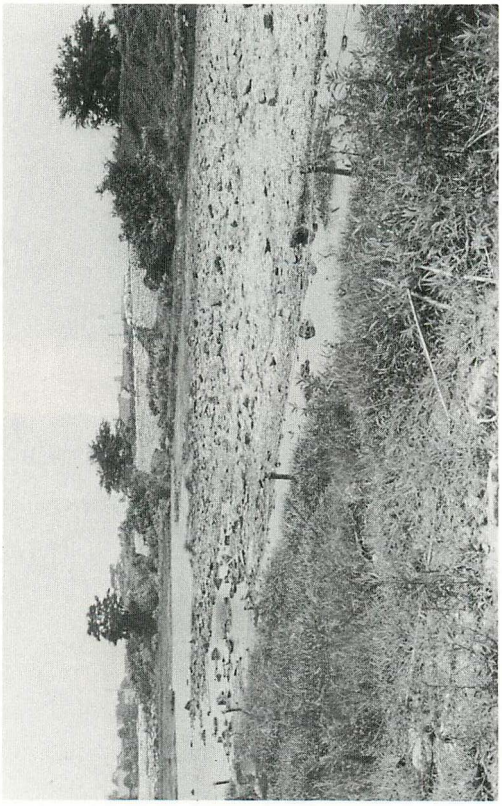
（隈、西田）

写　真　目　次

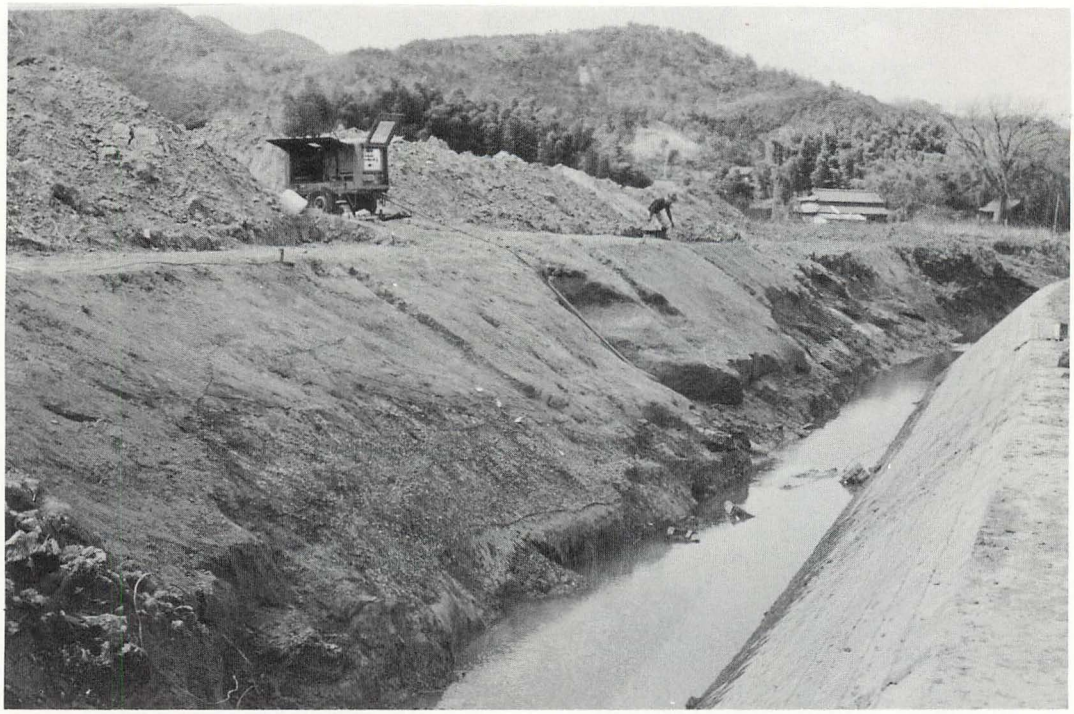
写真 1　黒橋貝塚……97
写真 2　東貝塚全景・東貝塚部分……98
写真 3　西貝塚全景・西貝塚部分……99
写真 4　東貝塚採集土器……100
写真 5　東貝塚採集土器……101
写真 6　東貝塚採集土器……102
写真 7　東貝塚採集土器……103
写真 8　東貝塚採集土器……104
写真 9　東貝塚採集土器……105
写真10　東貝塚採集土器……106
写真11　東貝塚採集土器……107
写真12　東貝塚採集土器……108
写真13　東貝塚採集土器……109
写真14　東貝塚採集土器……110
写真15　西貝塚採集土器……111
写真16　西貝塚採集土器……112
写真17　西貝塚採集土器……113
写真18　西貝塚採集土器……114
写真19　西貝塚採集土器……115
写真20　西貝塚採集土器……116
写真21　西貝塚採集土器……117
写真22　西貝塚採集土器……118
写真23　西貝塚採集土器……119
写真24　西貝塚採集土器……120
写真25　黒橋貝塚採集朱彩土器……121
写真26　黒橋貝塚採集朱彩土器……122
写真27　黒橋貝塚採集各形式土器……123
写真28　黒橋貝塚採集石器……124
写真29　黒橋貝塚採集石器……125
写真30　黒橋貝塚採集石器……126
写真31　黒橋貝塚採集石器……127
写真32　黒橋貝塚採集石器……128
写真33　黒橋貝塚採集石器……129

写真34　黒橋貝塚採集石器…… 130
写真35　黒橋貝塚採集石器…… 131
写真36　黒橋貝塚採集遺物…… 132
写真37　黒橋貝塚採集遺物…… 133
写真38　黒橋貝塚周辺の現況図・黒橋貝塚採集動物遺存体…… 134
写真39　黒橋貝塚採集動物遺存体…… 135
写真40　黒橋貝塚採集人骨…… 136

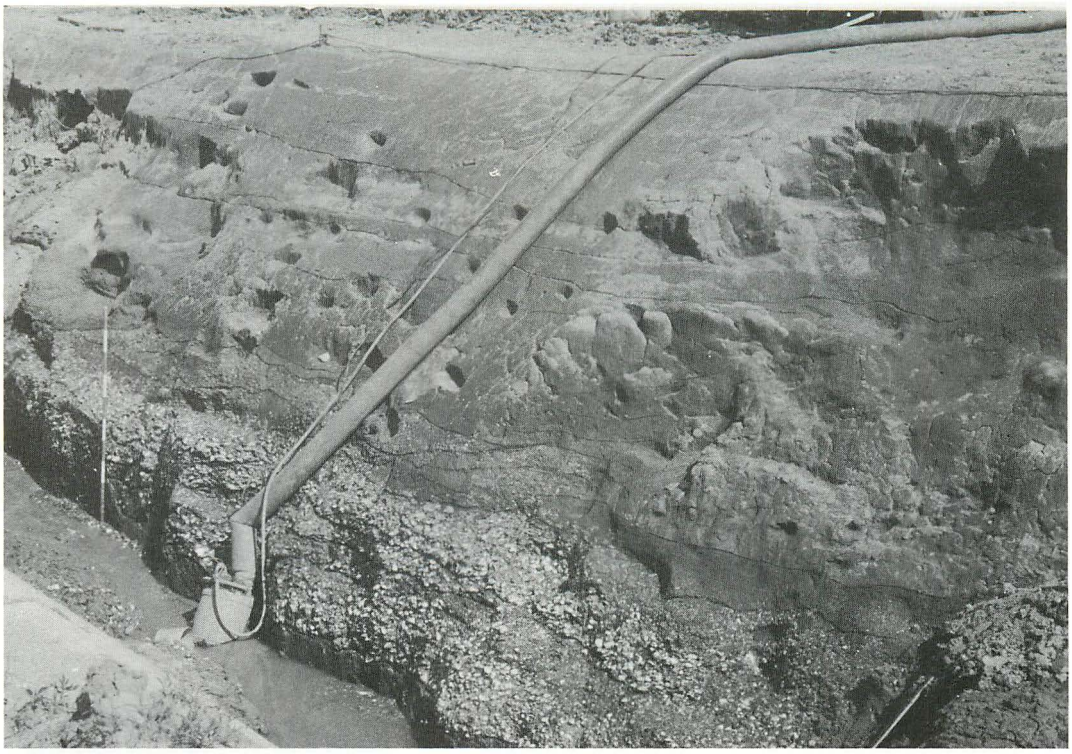




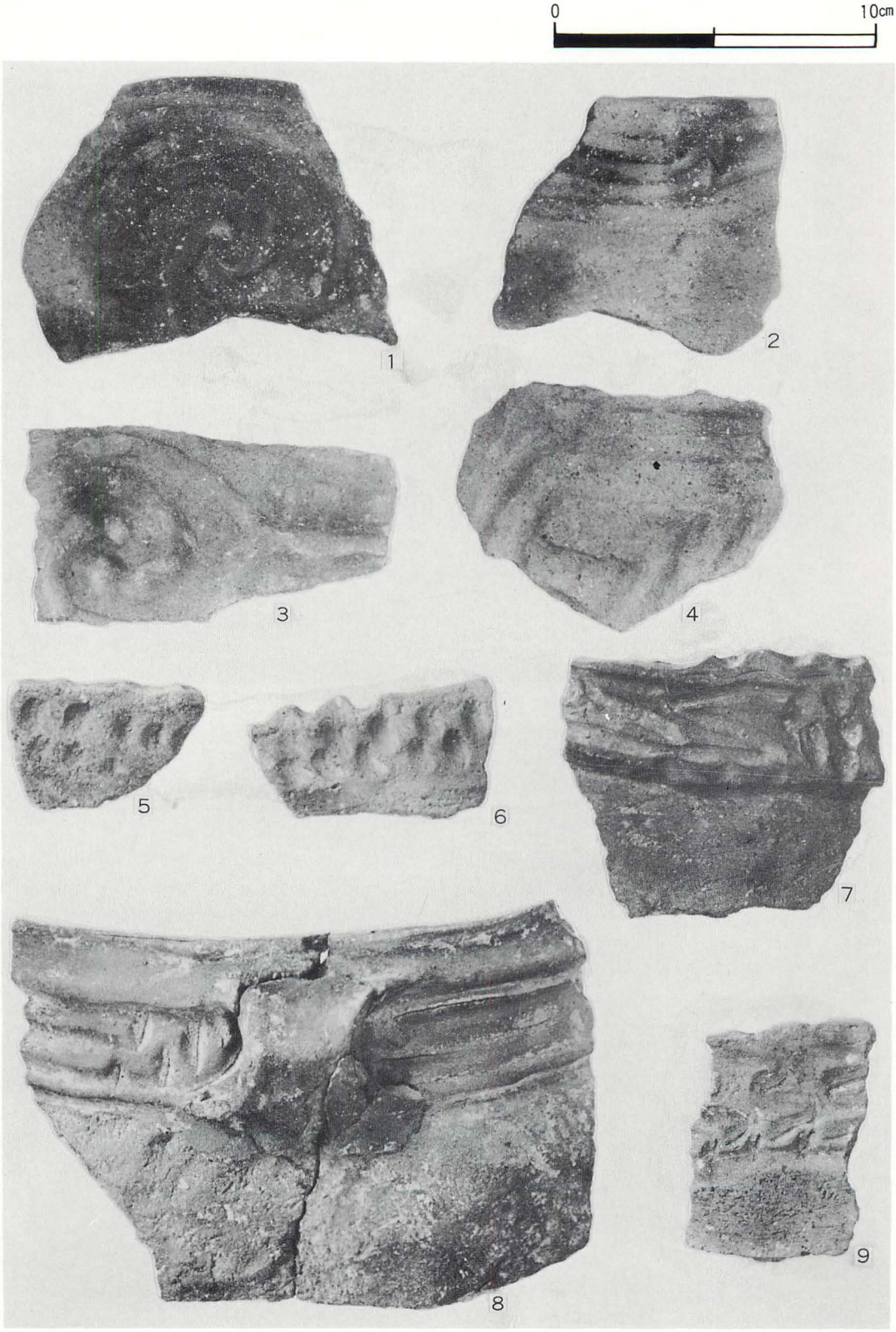
黒 橋 貝 塚（昭和47年７月６日 洪水直後の露出面）



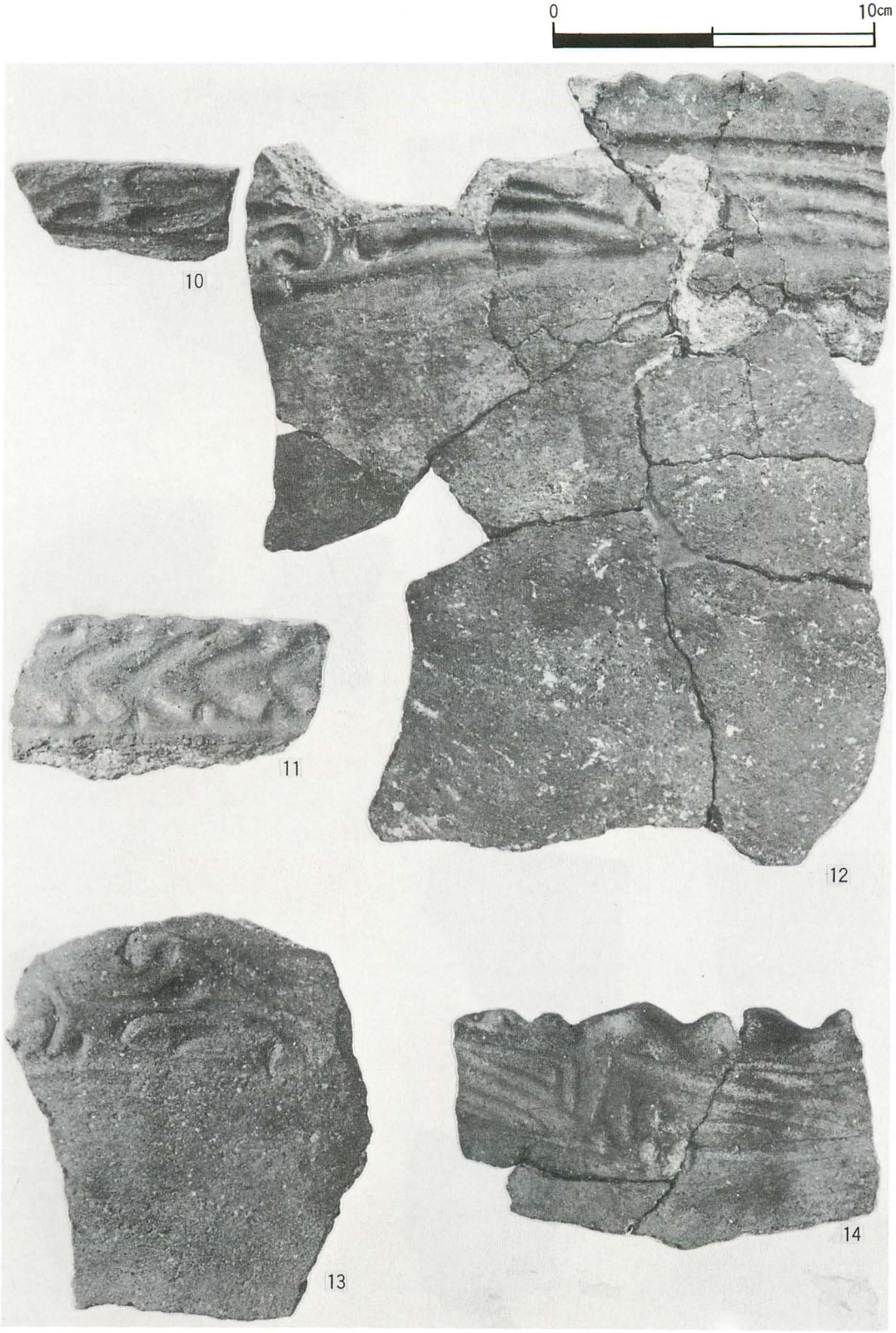
（上）東貝塚全景（東より西を望む）　　（下）東貝塚部分（北より南を望む）



（上）西貝塚全景（西より）　　（下）西貝塚部分

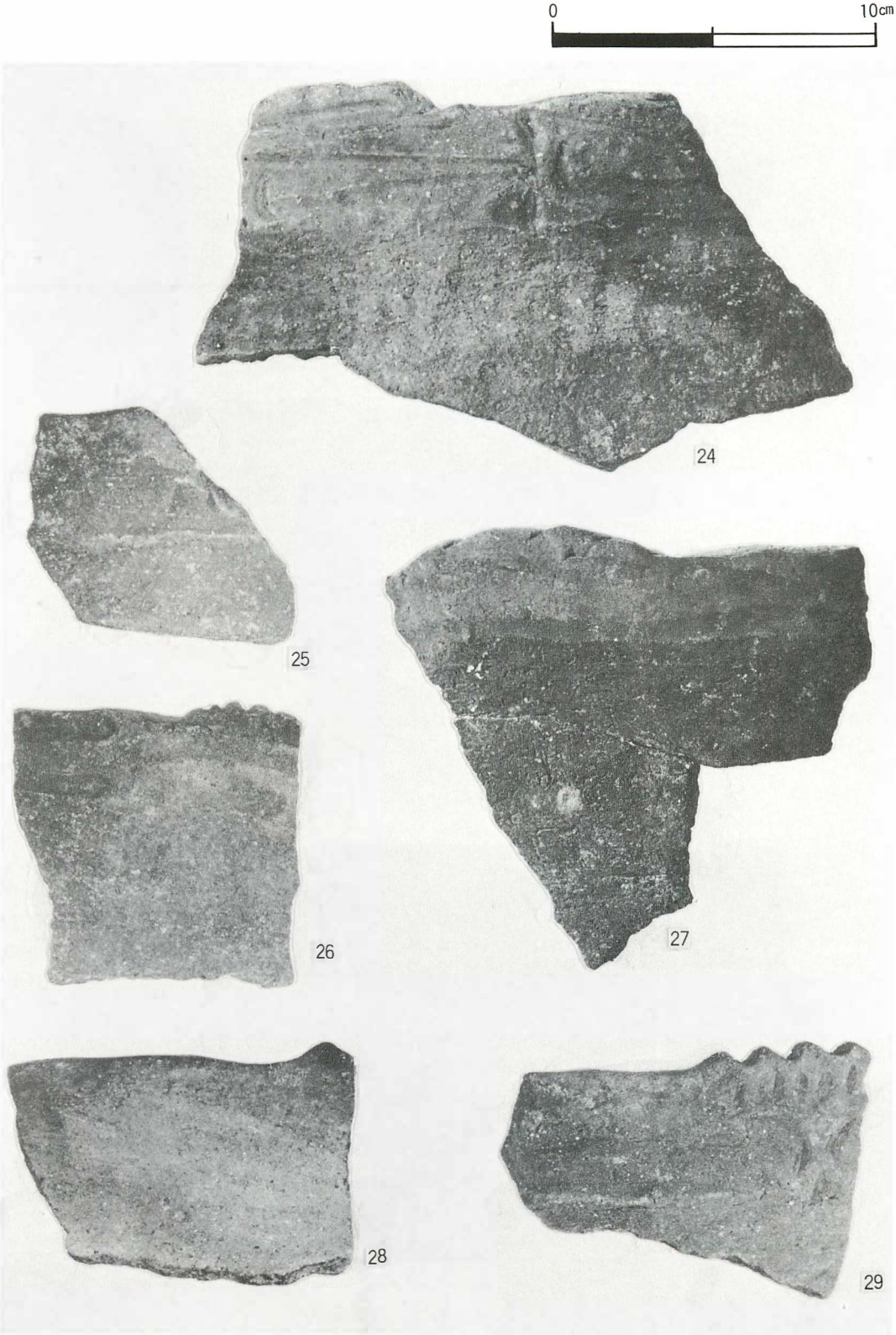


東貝塚採集土器（A形土器１～４．B形５～９）



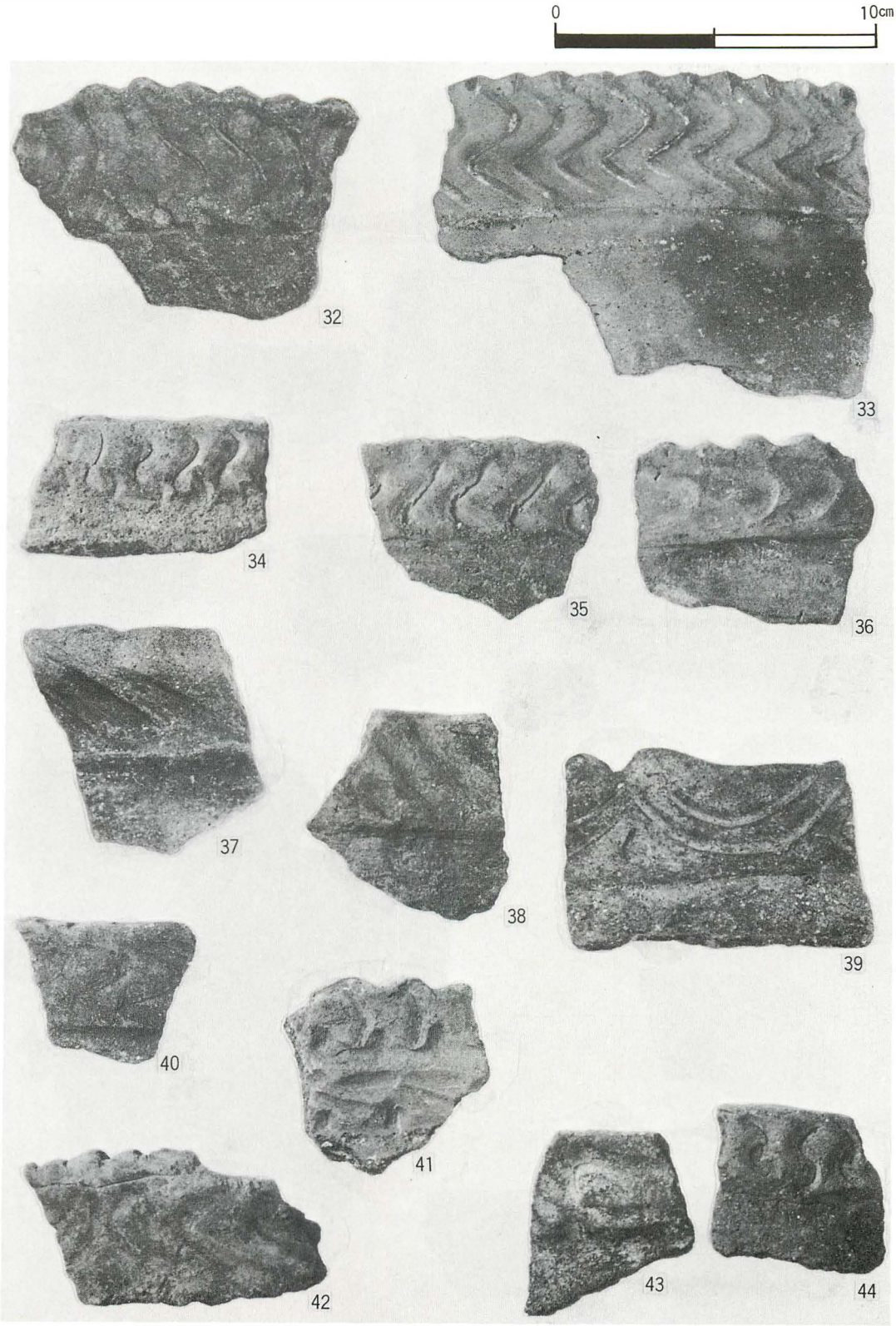
東貝塚採集土器（B形）

東貝塚採集土器（B形）

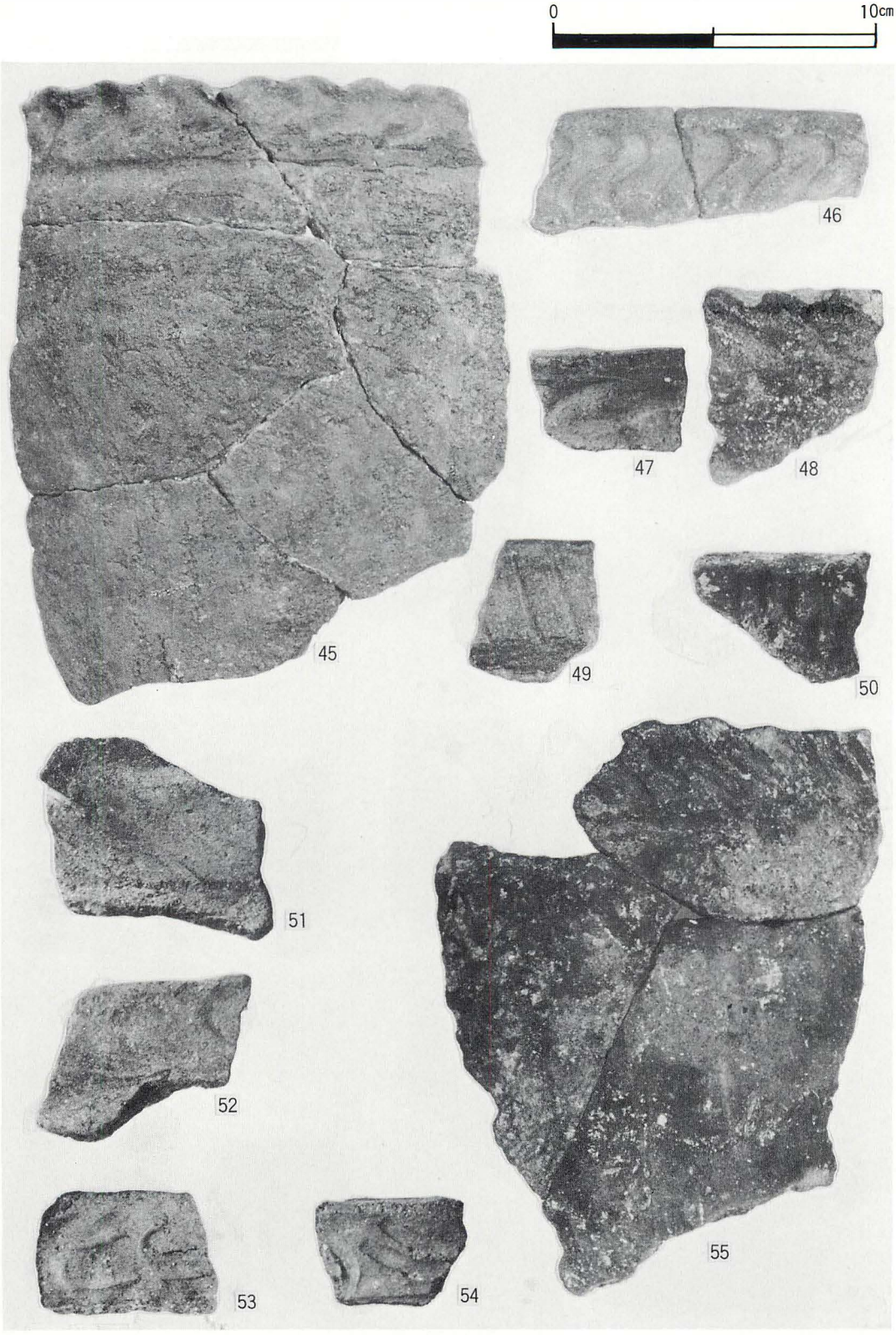


東貝塚採集土器（C 型）

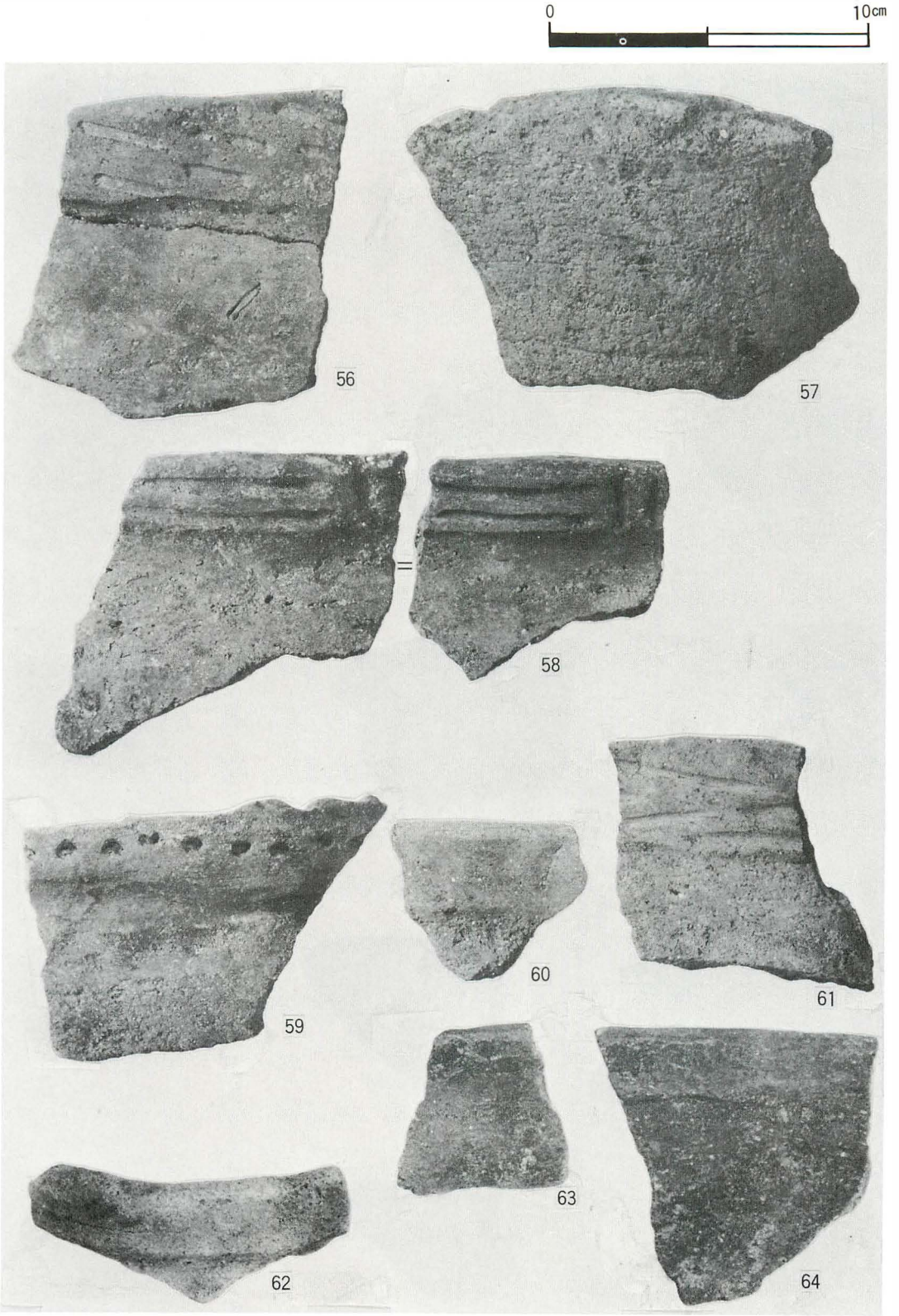
東貝塚採集土器（D形）



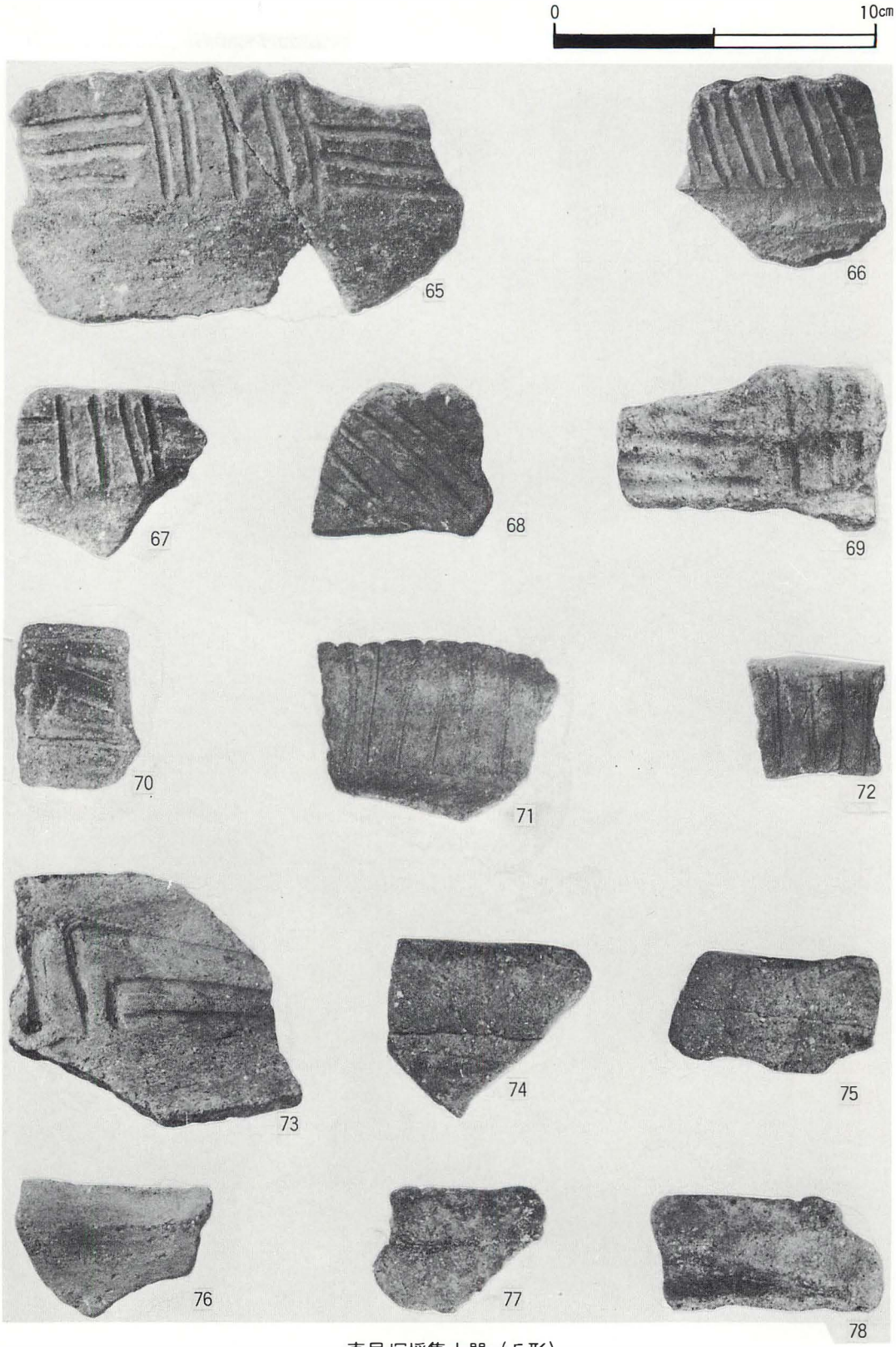
東貝塚採集土器（D形）



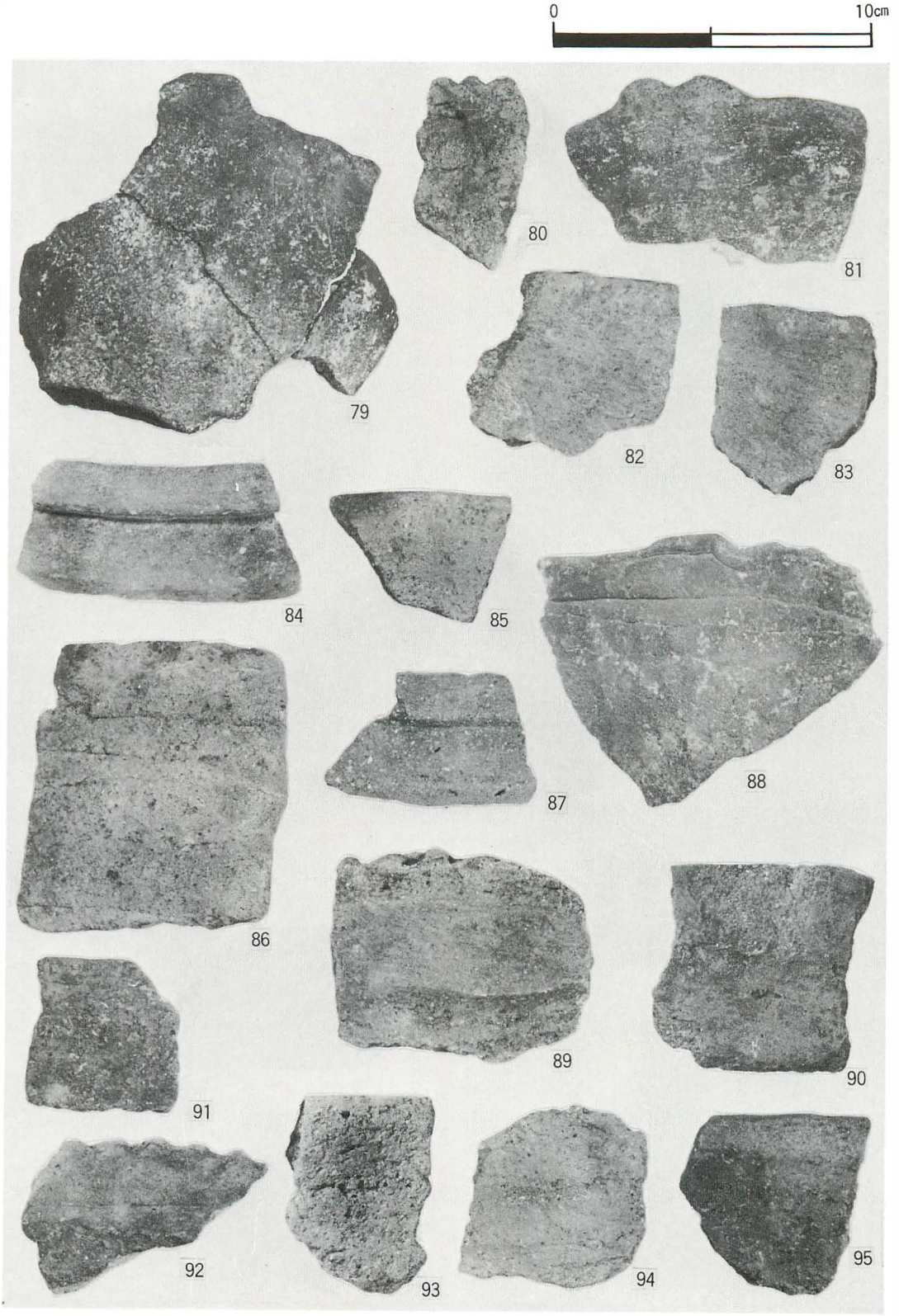
東貝塚採集土器（D形）



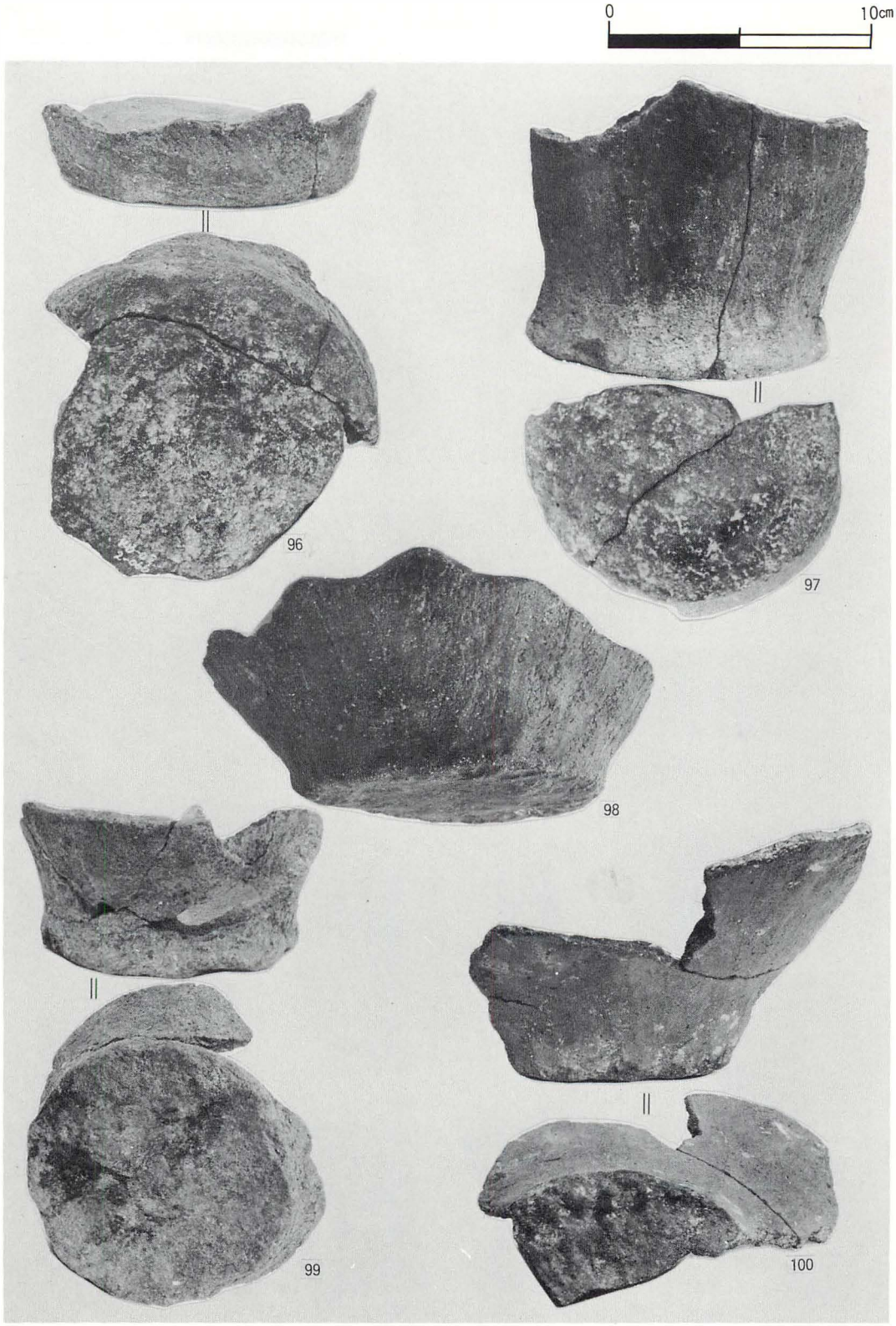
東貝塚採集土器（E形）



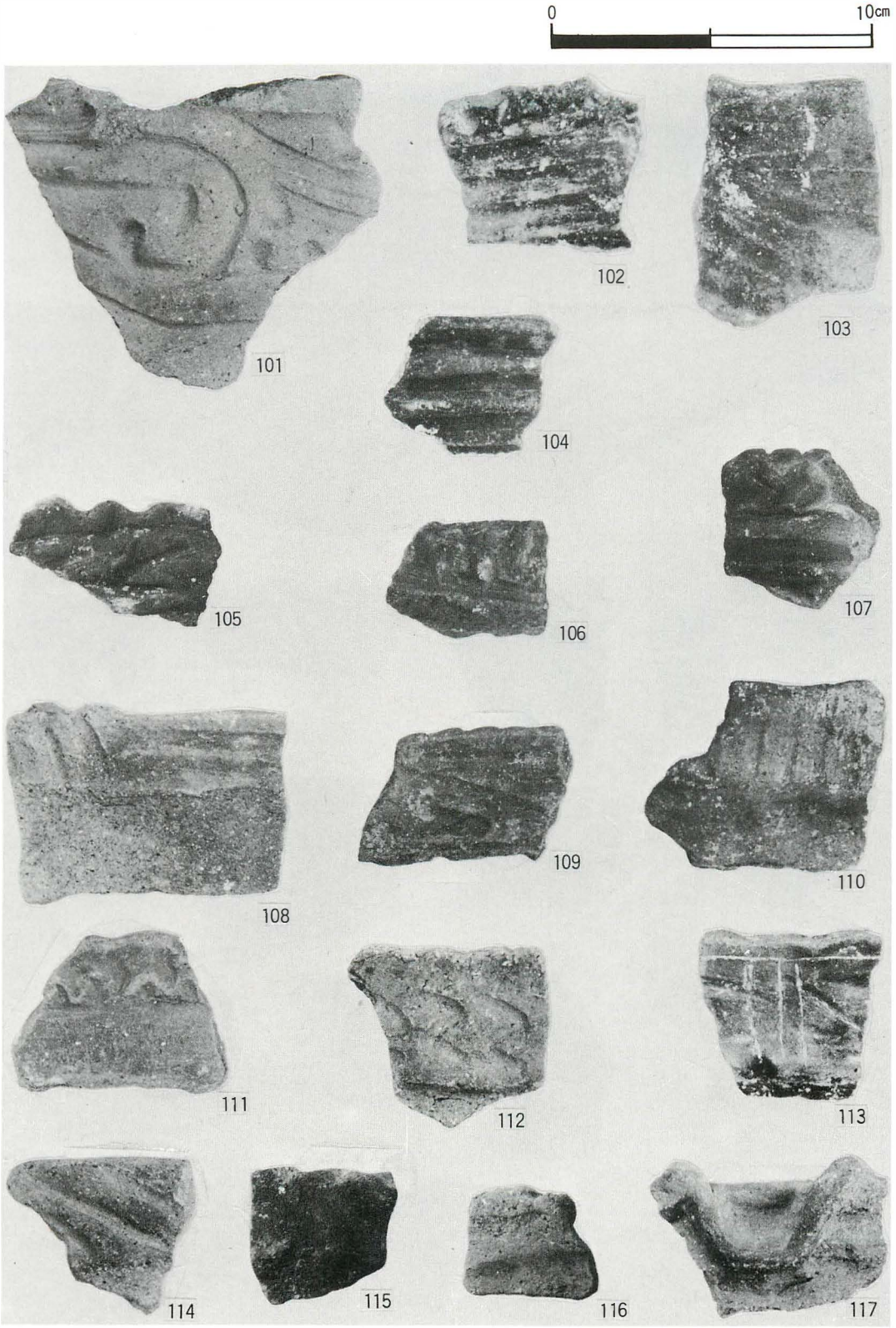
東貝塚採集土器（F形）



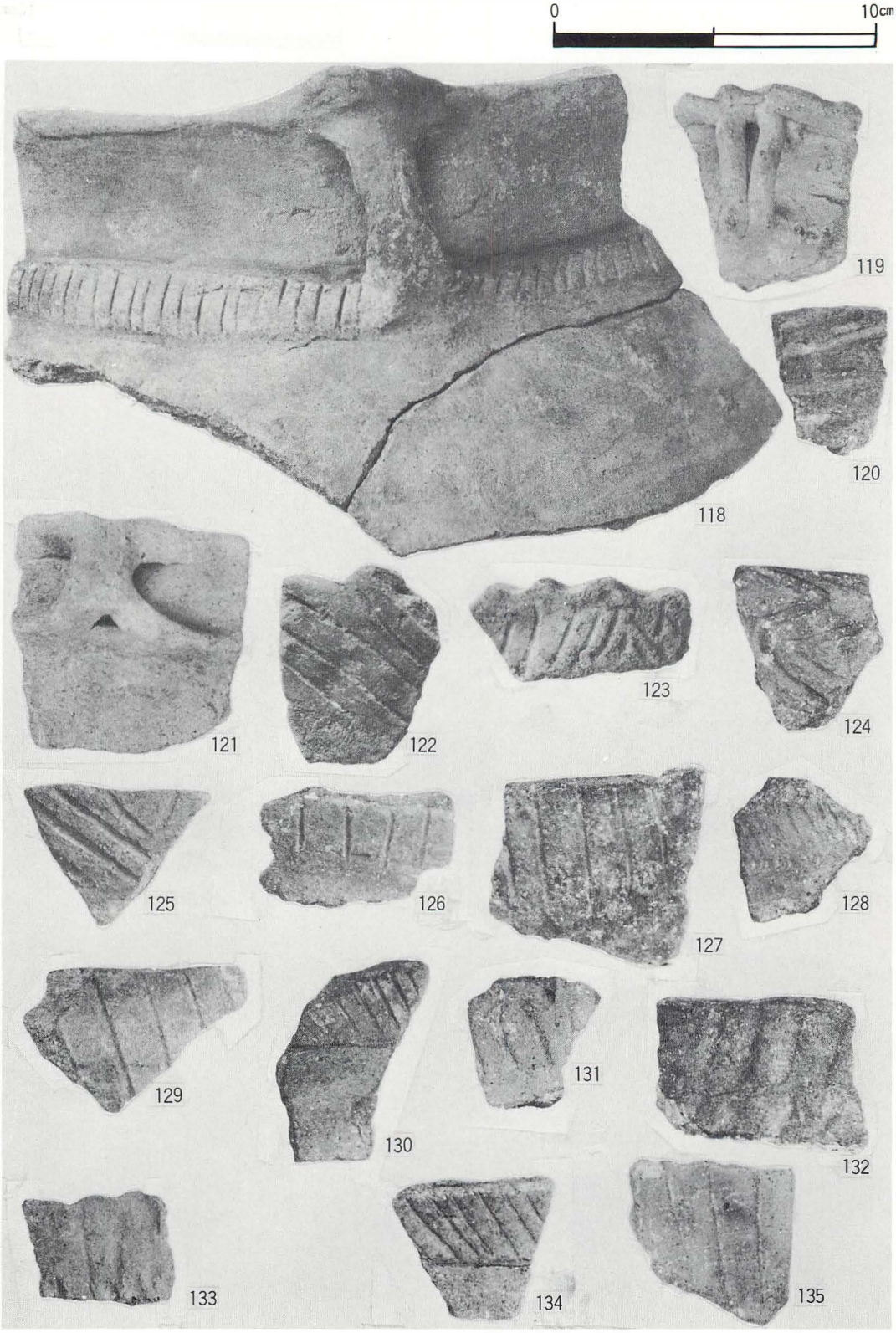
東貝塚採集土器（無文土器）



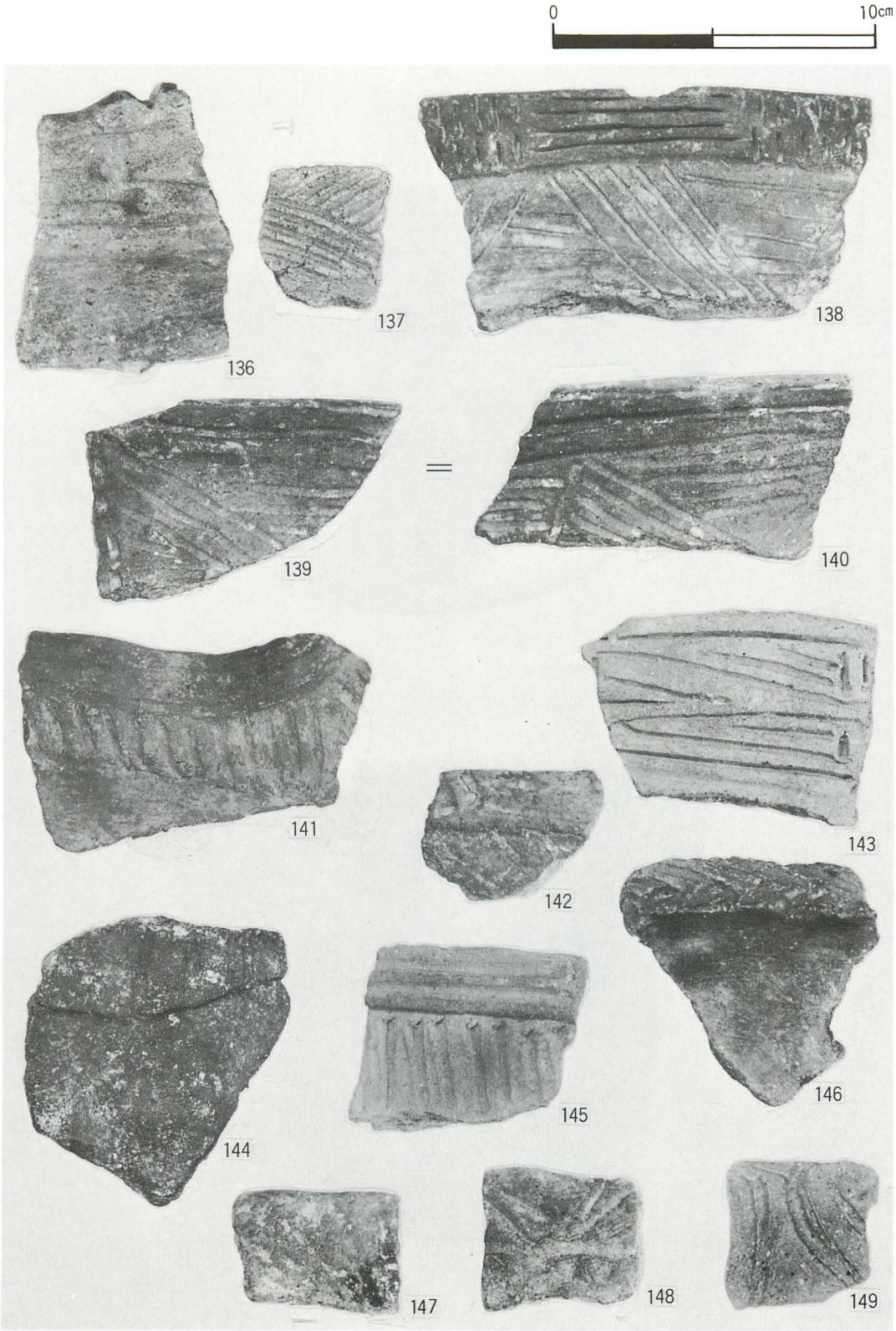
東貝塚採集土器（底部）


0
10cm
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117

西貝塚採集土器（A～D形）

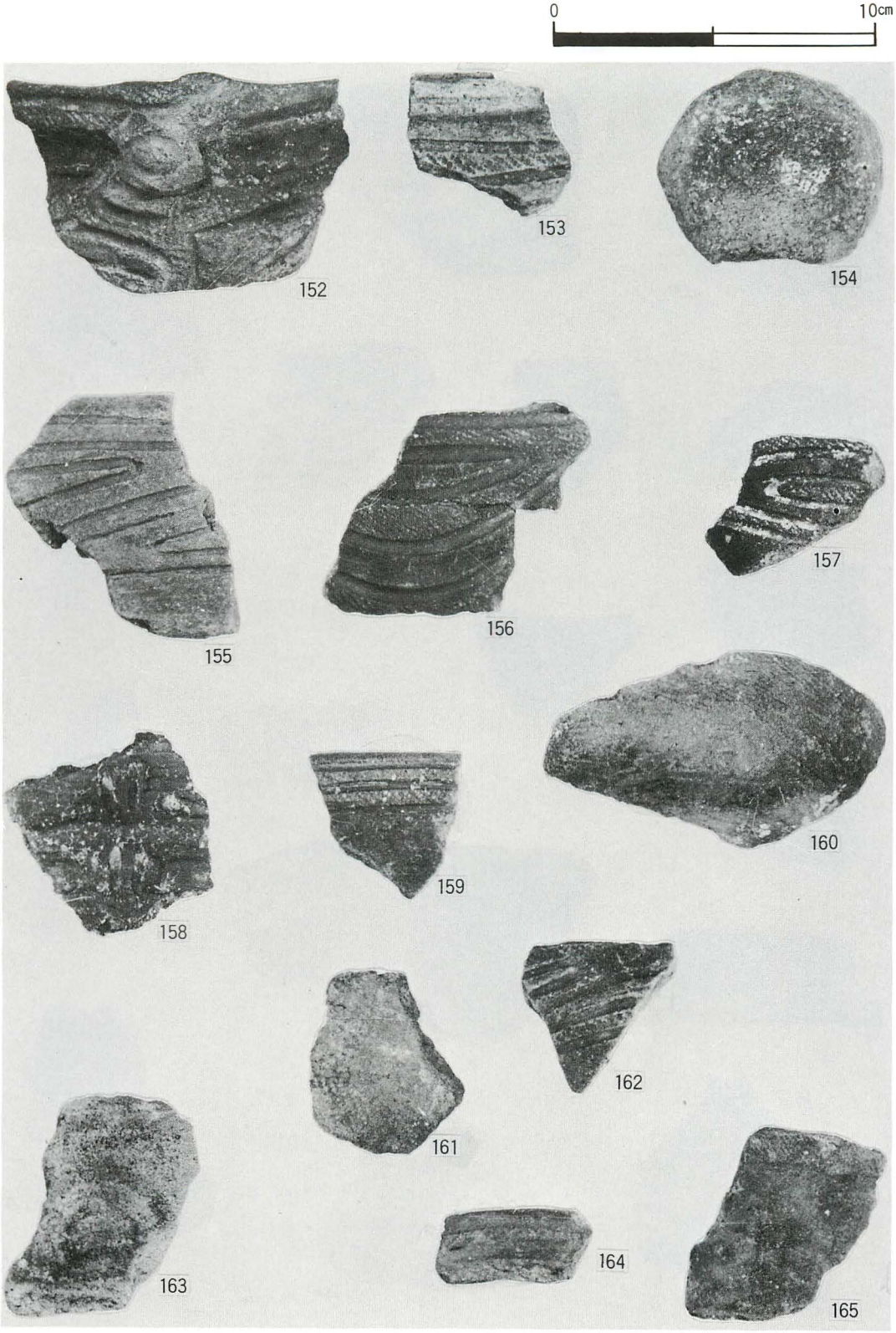

0
10cm
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135

西貝塚採集土器（F形）

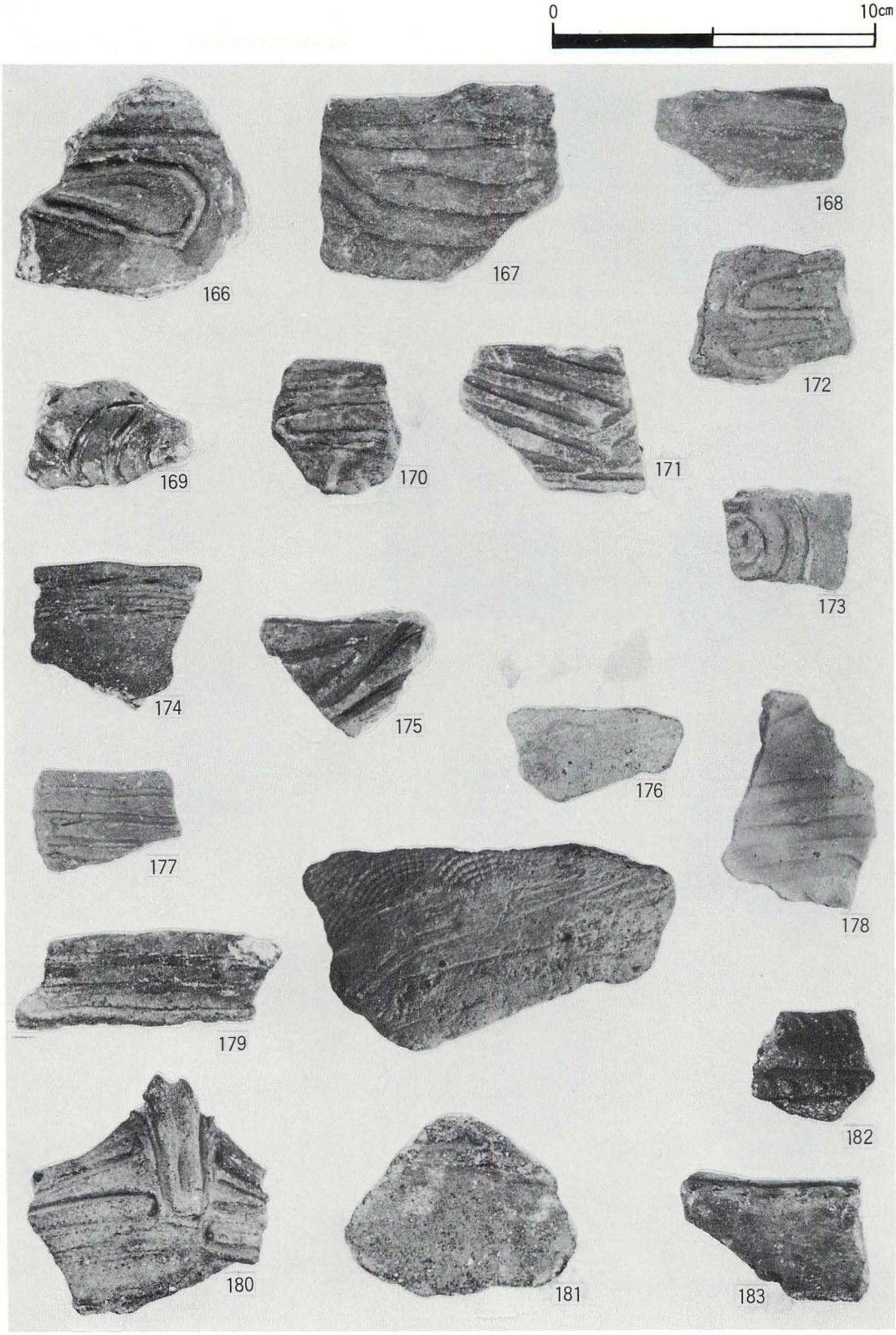


西貝塚採集土器（E形…136　G形．138～141）（G_2形．142～145）

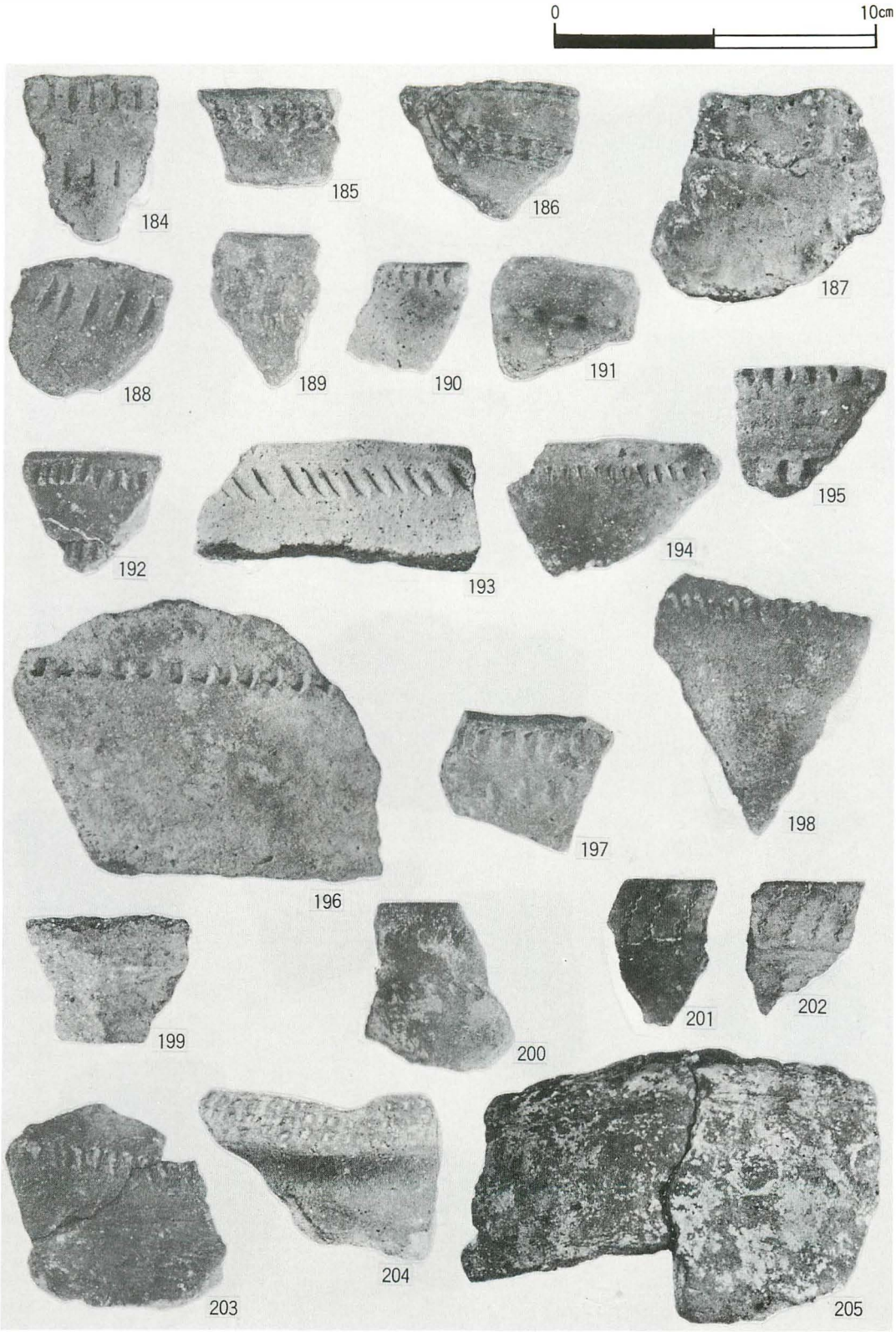
西貝塚採集土器（福田KⅡ式土器(150)．粗製土器(151)）



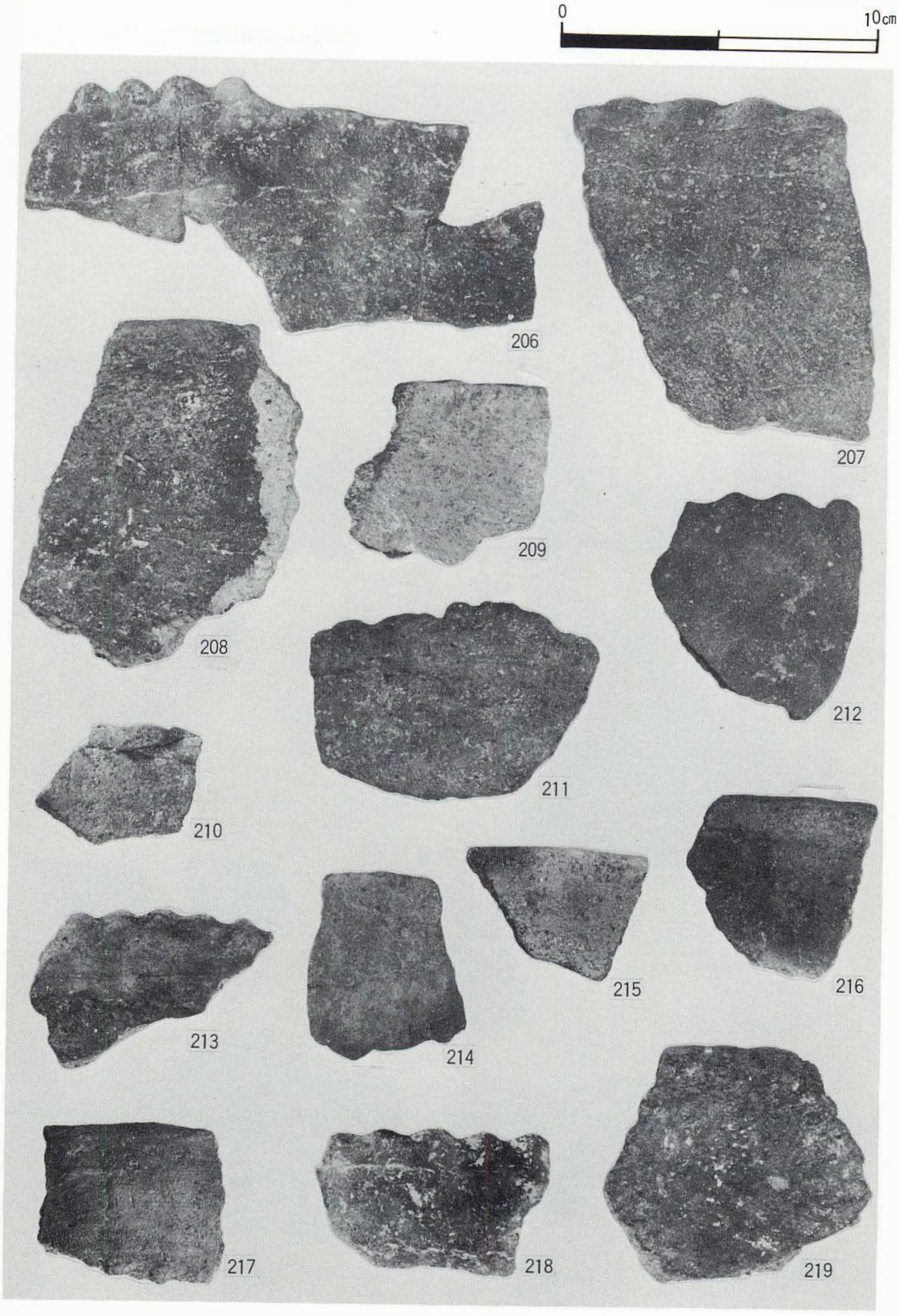
西貝塚採集土器　（縄文系）


0
10cm
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183

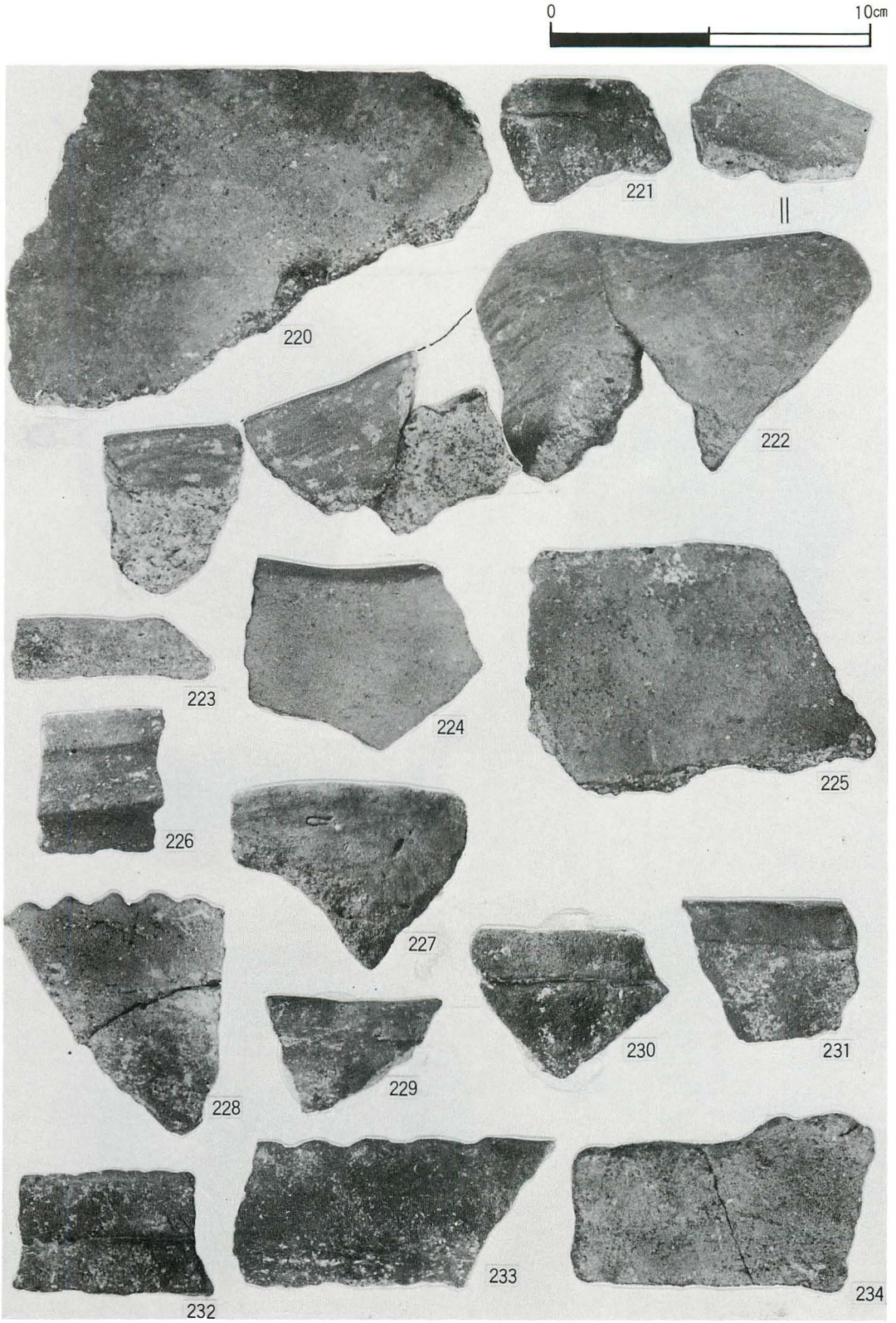
西貝塚採集土器



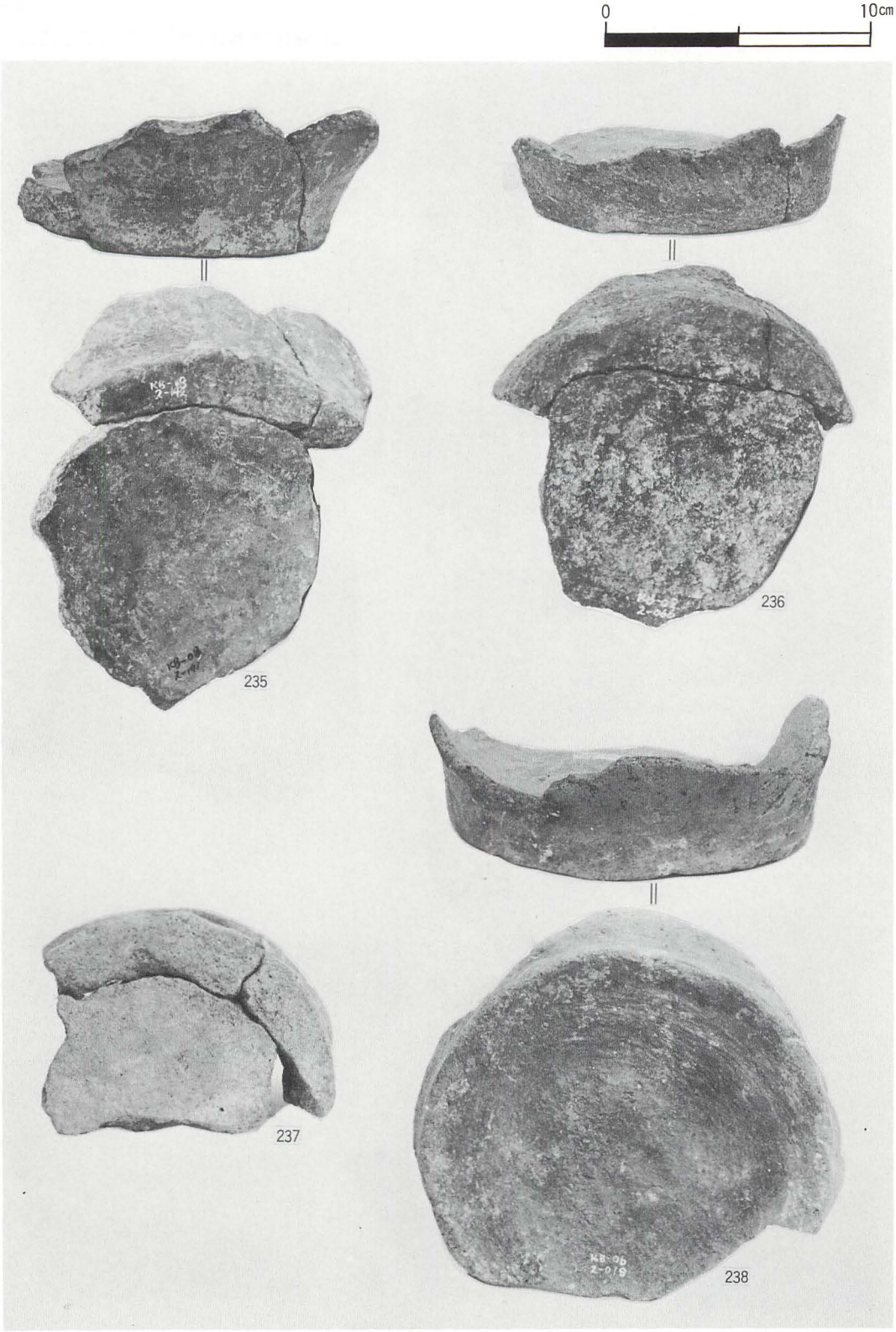
西貝塚採集土器（御手洗A．市来系）



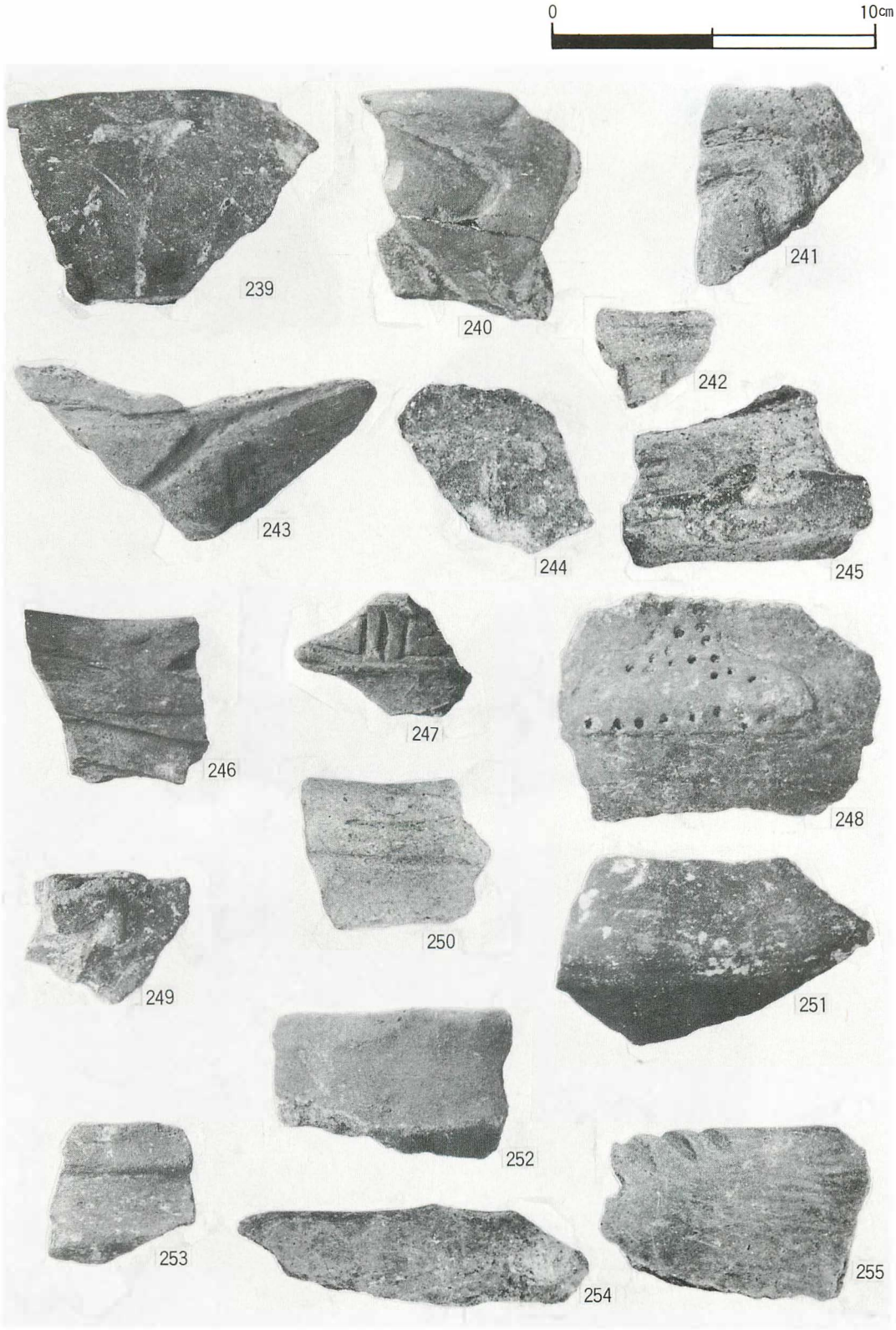
西貝塚採集土器（無文土器）



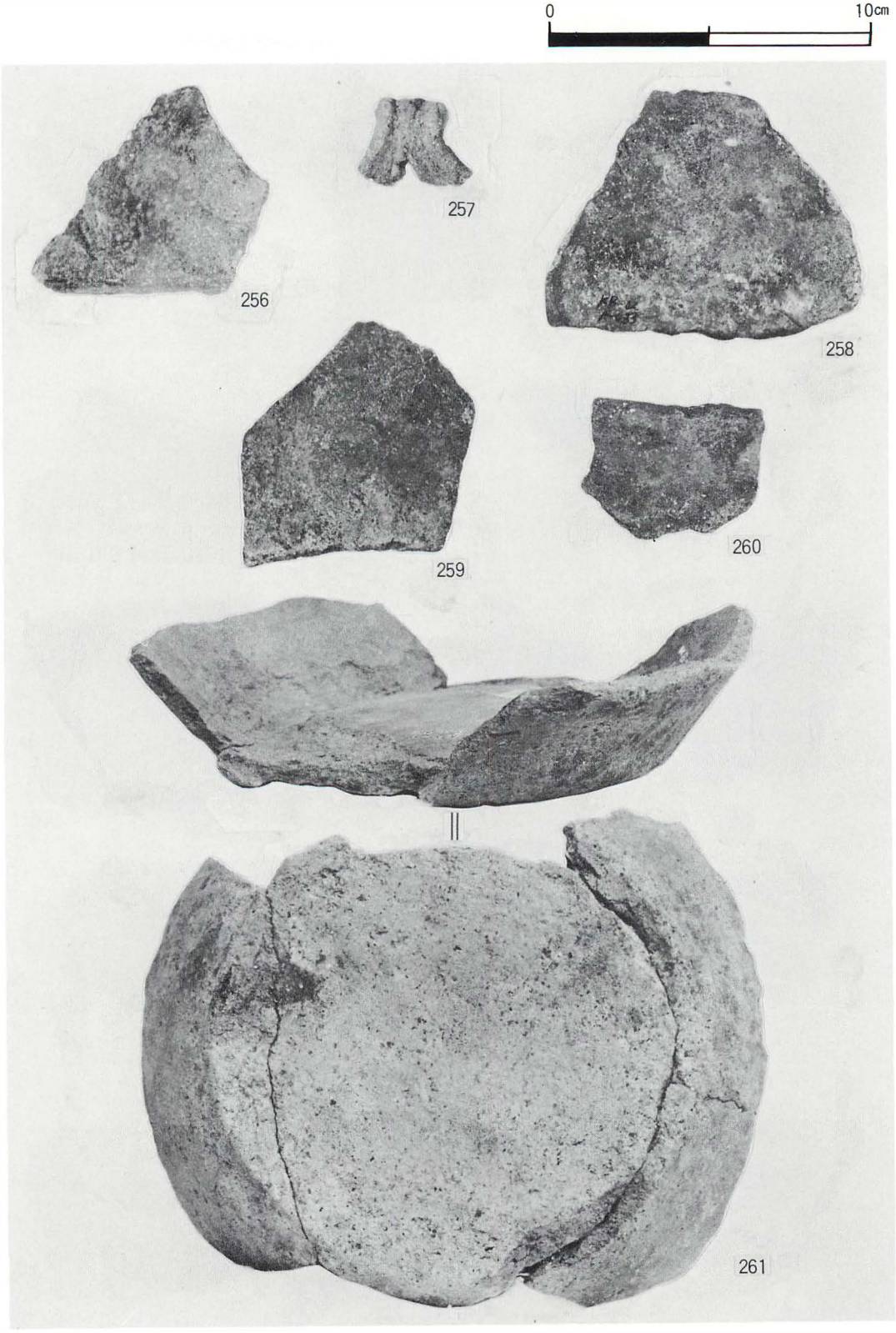
西貝塚採集土器（無文Ｄ線）



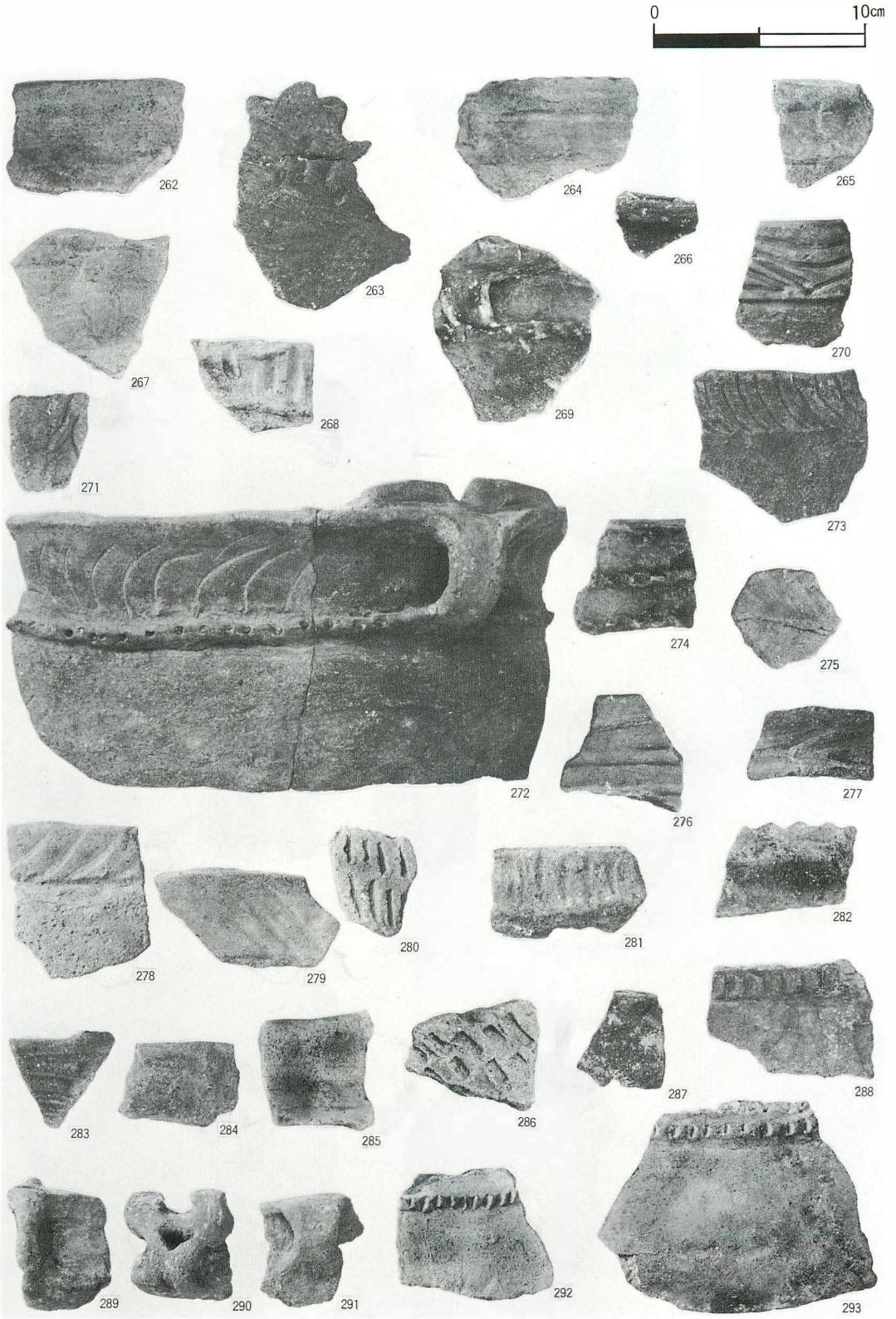
西貝塚採集土器（底部）


0
10cm
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255

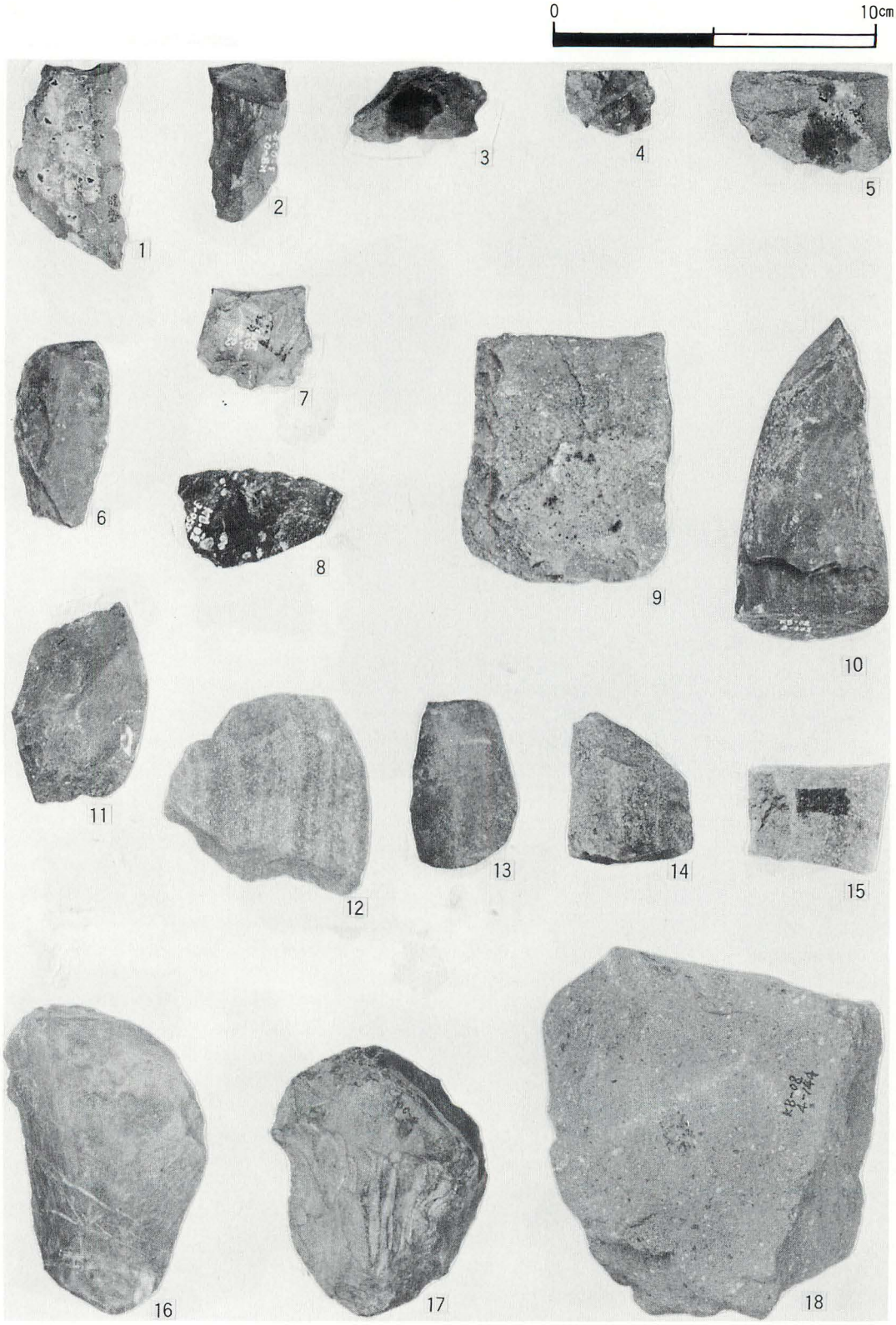
黒橋貝塚採集　　朱塗土器



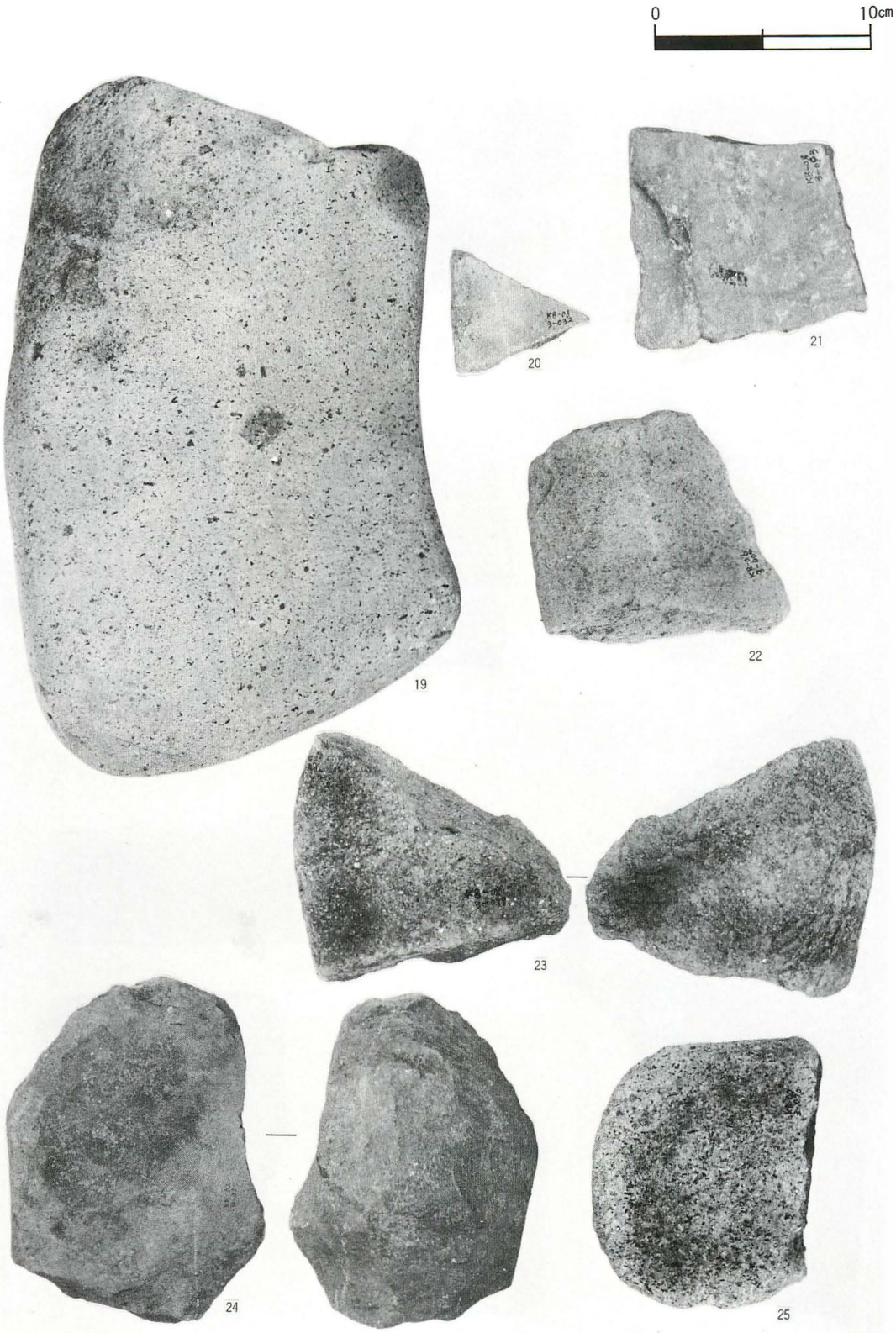
黒橋貝塚採集　　朱塗土器



黒橋貝塚採集　各形式土器

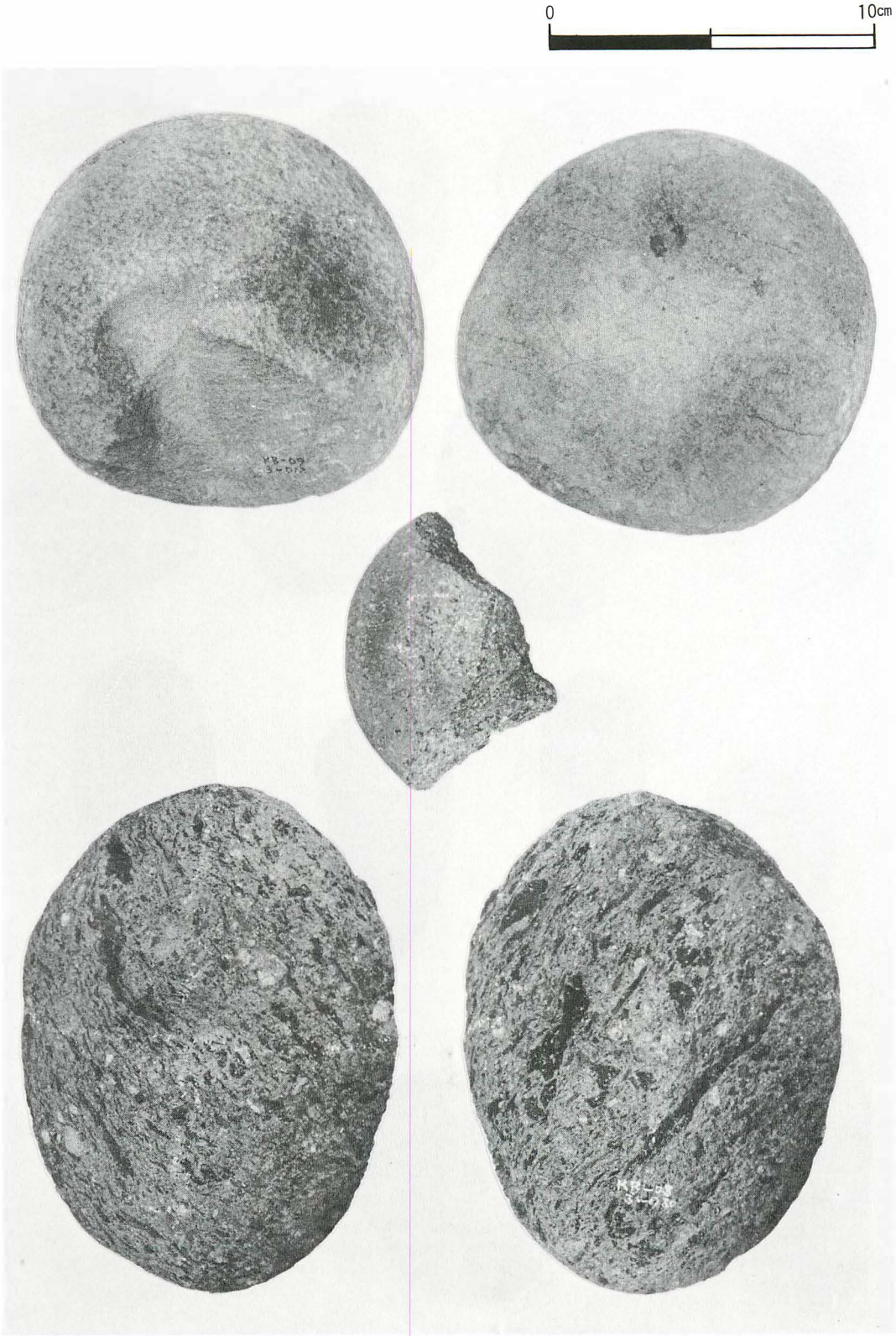


黒橋貝塚採集　石器(刃具と剥片，その他)

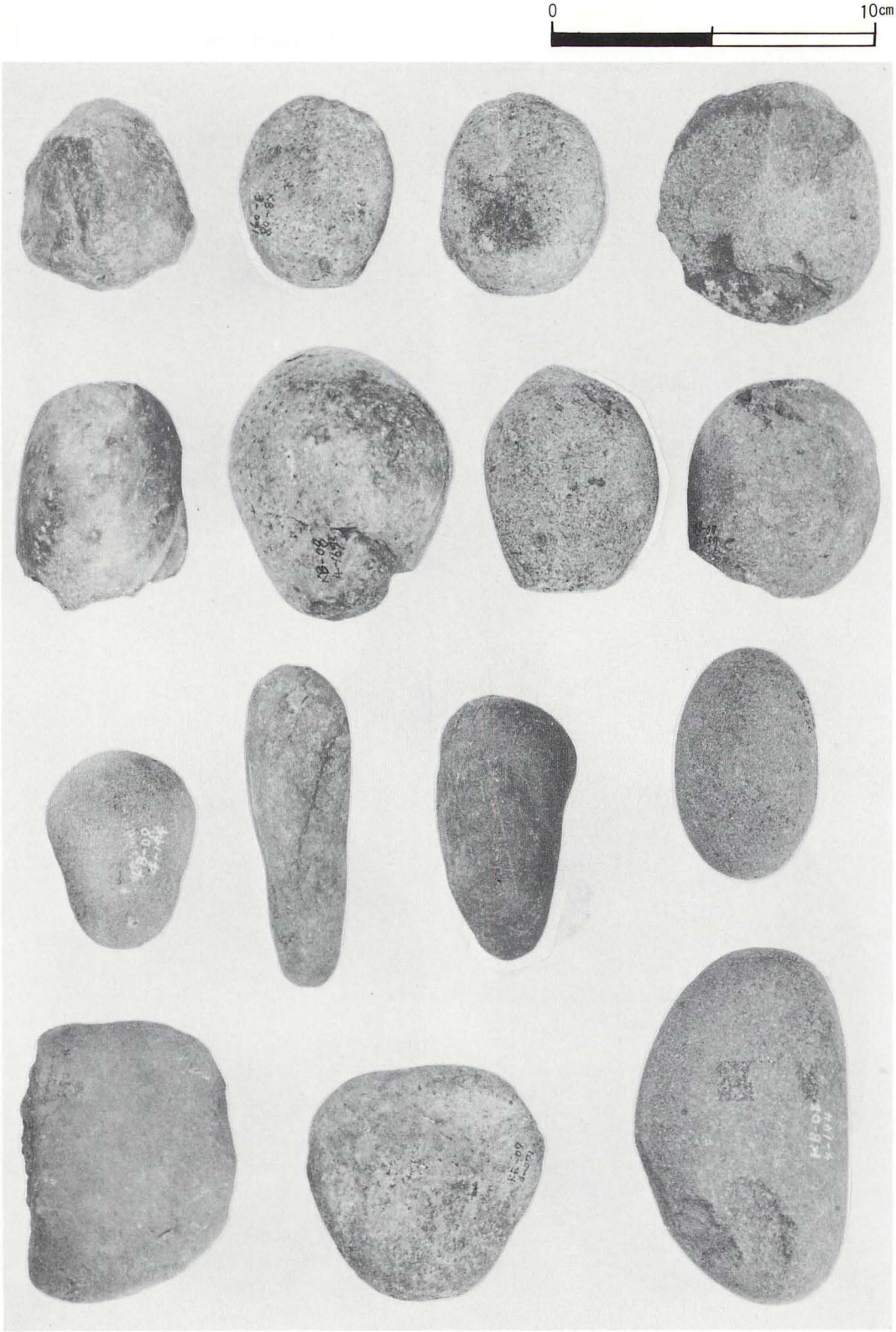


黒橋貝塚採集　石器(皿形)

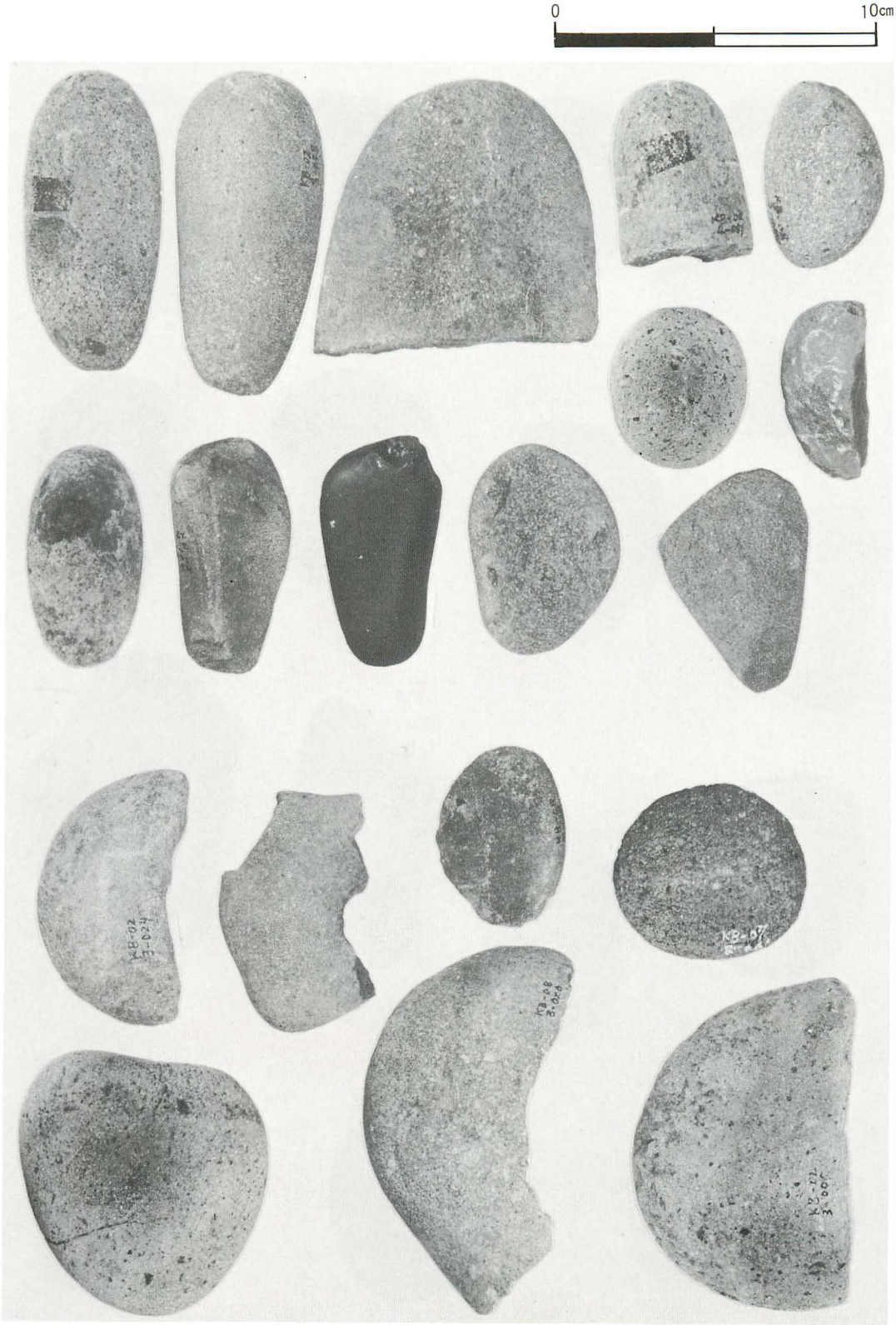
黒橋貝塚採集　石器(砥石形)



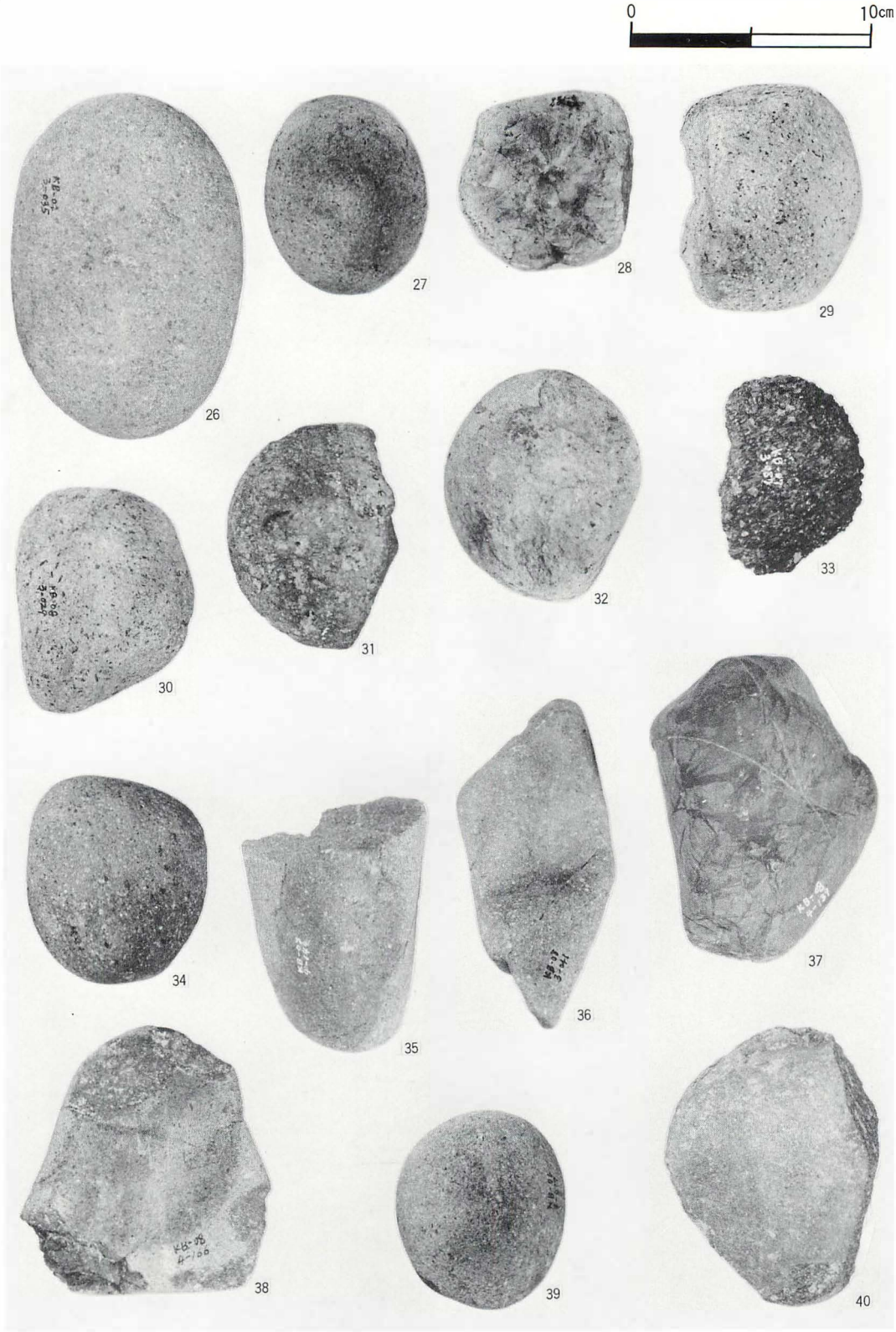
黒橋貝塚採集　石器(敲打具)



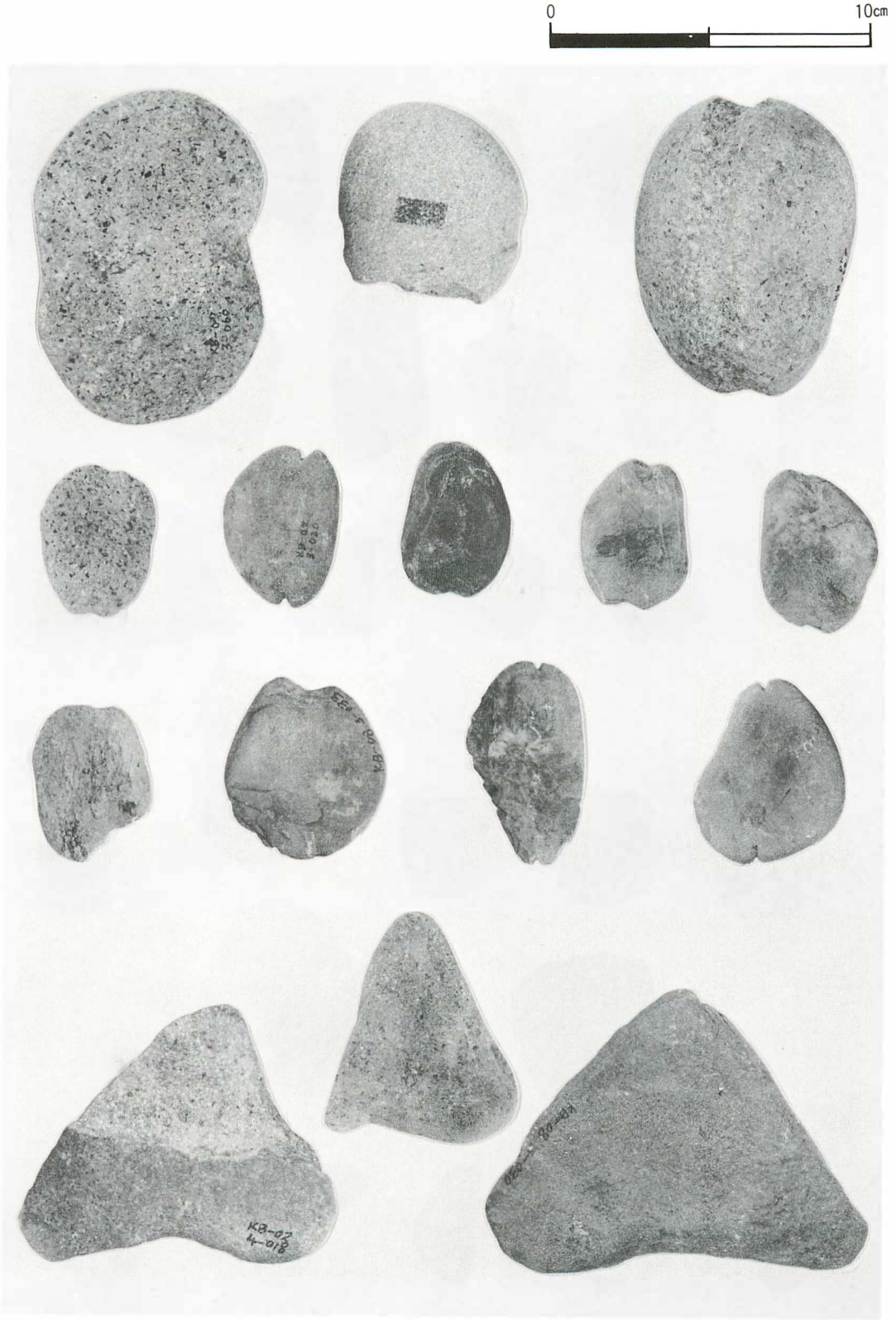
黒橋貝塚採集　石器(敲打具)



黒橋貝塚採集　石器(敲打具)

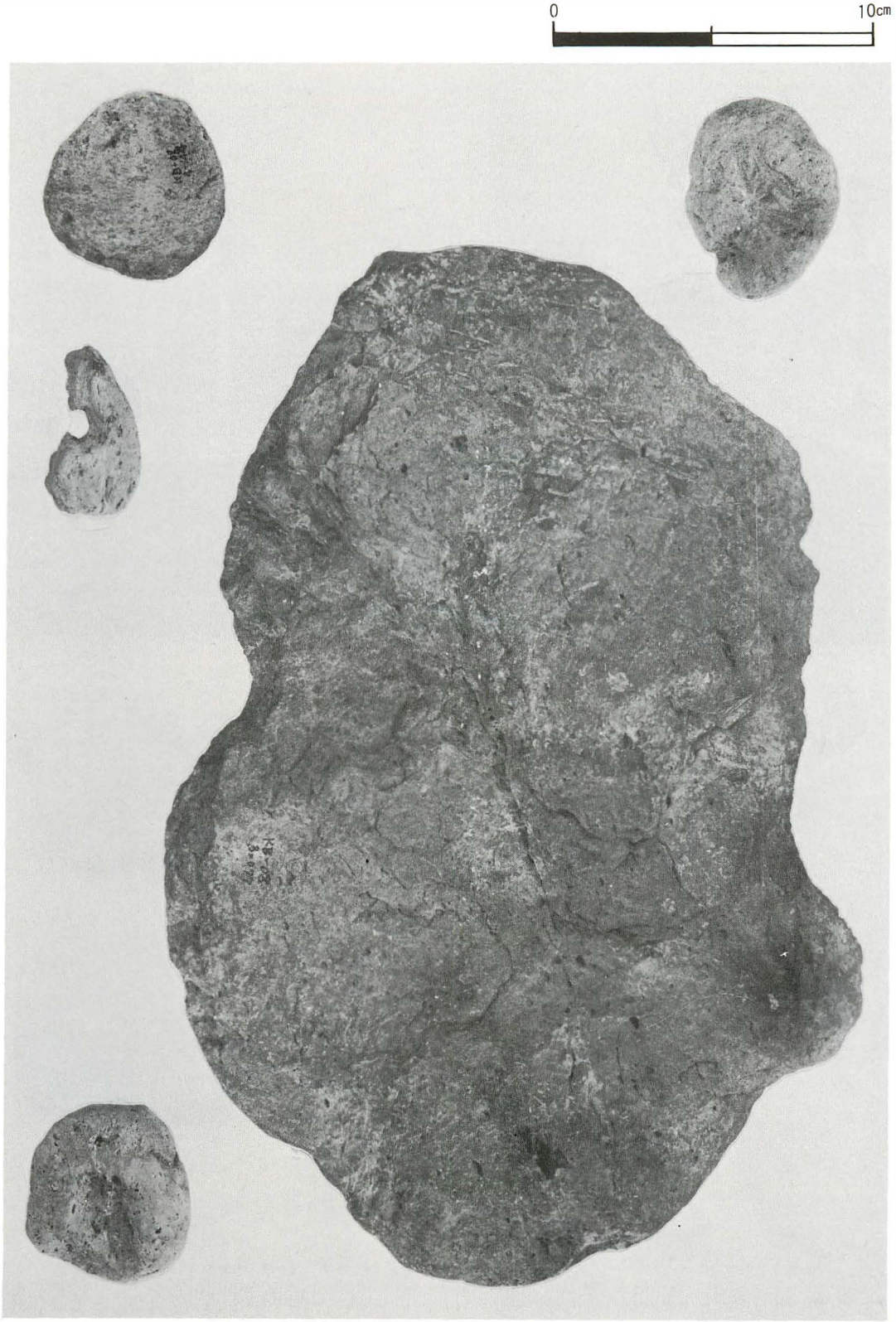


黒橋貝塚採集　石器(敲打具)



黒橋貝塚採集　石器（錘具、敲打器）

黒橋貝塚採集　遺物 ｛ 錘器（土製）
円形土製品
有孔円板



黒橋貝塚採集　遺物（錘具と浮子）

1.2. スズキ　3. サメ　4. ウマ　5〜9. イヌ

（上）　黒橋貝塚周辺の現況図（昭和51年３月）
（下）　黒橋貝塚採集動物遺存体

黒橋貝塚採集動物遺存体　（上）シカ　（下）イノシシ

黒橋貝塚採集　人骨　四肢骨　約$\frac{1}{3}$　　KB－08区採集
下顎骨　約$\frac{1}{2}$

熊本県文化財調査報告第20集

黒　　橋

—熊本県下益城郡城南町黒橋貝塚—

昭和51年3月31日

編集　熊本県教育委員会

発行　熊本市水前寺6丁目18番1号　〒862

印刷　印刷協業組合　サン・カラー

熊本市御領町730

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 20 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：黒橋
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日